
サモチェリ

ぱくどら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サモチエリ

【Nコード】

N9438E

【作者名】

ぱくどら

【あらすじ】

ある日空から妖精が落ちてきた。その衝撃で妖精が怪我をし、血が真一の腕についてしまう。そして、妖精は言った。「責任を取れ！」と。元弓道部・真一と妖精・ヨウ。二人がアラウを駆け巡り、前マスターへと向かう冒険ファンタジー。文字数が多いのでPDFで読まれることをお勧めします 4 / 14 更新。

【序章 旅の始まり】落下物（前書き）

初めまして、作者のばくとらと申します。

拙い文章のため誤字脱字があるかもしれません。感想欄、またメッセージでも構いませんのでご一報をくださいますようお願い申し上げます。

本作品と長くお付き合い下さいましたら嬉しい限りでございます。

【序章 旅の始まり】落下物

出合いは夏の暑い日だった。

真一は弓道部に所属していたが、今年の六月に引退をした。しかし、引退が決まったあとも街の弓道場に通いつけている。

真一は純粹に弓道が好きだった。向かっている弓道場には尊敬する先生がいる。先生は、真一が知り合った中で一番心許せる人間。話しづらいことでも、先生なら自然と話すことができた。というのも、弓道部は生徒の間では『アンパイ部』として有名だったのだ。

必ず部活動に参加しなければならぬ。そんな校則が祟り、弓道部には練習をしない生徒ばかりが集まる。練習をサボる者、ほとんど練習に参加しない者、そんな部員たちの中で真一の熱心ぶりは浮いてしまっていた。馬鹿にされ貶されるのは当たり前。それでも弓道部をやめなかったのは、純粹に好きという気持ちと先生の存在が大きかった。

一人弓を引く真一に対し、先生も熱心に指導した。一人ぽつんといる姿を見れば話し相手にもなった。練習が終わった後の弓道場は、先生との話の場となっている。

いつの間にか、真一にとって弓道場は特別な場所となっていた。

今日も弓道場へ向かっている最中だった。夏の太陽がキラキラと輝き、日光の照り返しの熱気がアスファルトにぶつかり再び湧き上がる。

誰もがだれるような狭い路地を、真一は右手に弓巻きに包まれた弓を持ち、左肩からは風呂敷の入ったトートバックを提げ歩いていた。背中には右肩から提げた矢の入った矢筒を背負っている。狭い路地はいくつもわき道があり、住宅が並ぶ至って普通の道。この道をまっすぐ行けば弓道場はもうすぐだった。

「……ん？」

目の前を車が横切り待っている時、異様な音が聞こえた。何かが落ちてくるような、風船の空気が抜けるような音が聞こえてくる。

その音は徐々に大きくなる。不審に思い見上げた瞬間、何かが落ち左腕にぶつかった。

「うわっ！」

衝撃が左腕に走る。身体がよろけその場にうずくまった。

咄嗟に左腕を押さえたが、さほどの痛みはない。見てみれば、打った様なあとも擦り傷もない。ただ赤い血が一滴、腕に付いていた。

一体何が落ちてきたのか 確認するべく前を見る。

人形のようにだった。が、様子がおかしい。真一は目を擦った上、もう一度じつと見た。

体長三十センチほどしかない人形。よく見ると、顔を歪め痛そうに手で口元を押さえている。そして、金色の髪と赤い瞳。服装は、紺色のゆつたりとしたズボンとシャツという地味な格好。首からは、小さな髑髏が連なるネックレスをしている。

「……いたた。わしは一体、どうしてこんな場所に」

しゃべった。余りのことに驚き、真一は身を引いた。

おまけによく見ると、押さえている口元からは赤い血が出ている。

真一は思わず息を呑み、視線をゆっくりと下げた。付いている血とその人形から出ている赤い血 まさかと思いつつ見比べる。

「ん。……お主、まさか」

人形と目が合う。吸い寄せられるような赤い瞳。まるで生きているかのようだ。

言葉を失う真一に対する一方で、人形は徐々に目を見開き何度も瞬きをしている。

「わしが見えるのか！」

余りの大声に、真一は恐々と頷いた。 夢でも見ているのか、

そんなことを思ったが間違いなく現実である。驚きの余り心臓の鼓動が速くなっていた。

一方で、人形は唇をかみ締め憎むような鋭い目つきで真一を睨んだ。そして、ゆっくりと宙に浮かび始める。

「わしが見えるということとは……どこかに……。ぬ……やはりそうか。わしの血が付いておったか」

口調がじじくさい割に顔は幼い顔をしている。その顔は真一の左腕に付いた一滴の血を凝視していた。顔の目の前まで浮かび上がったその人形をよく見てみると、背中の方からちらちらと白い羽根のようなものが見え隠れしている。

「……な、なんだこれ」

少し後ずさりをしつつ呟いた。が人形に聞こえていたようで、小さくため息を漏らす。

「わしの名はヨウじゃ……。……そうじゃの、こっちの言葉で言うなら妖精じゃ」

「……は？」

ヨウセイ。言葉の咀嚼に苦しむ。啞然とする真一に構うことなく言葉を続けた。

「お主、名はなんと言う？」

すぐに答えられなかった。何かの悪戯か、何かの罫かもしれないと思った。もしかすると、どこかに隠れ反応を楽しんでいるかもしれない。

視線が泳ぐ真一に、ヨウはぐつと近寄り答えるよう促す。むつとする幼い顔が目の前に迫った。

「……は、萩野真一」

呟くように言った真一に、ヨウはふんと鼻息を漏らした。

「その様子は信じていないようじゃの。しかしなシンイチ！ これからはそうは言っておれんぞ！ さっきわしとぶつかったせいでシンイチとわしは……」

一瞬ヨウの視線が逸れた。それを見計らい真一は即座に立ち上がる。そして、手早く荷物を担ぎ直しその場を走り去って行った。

「おい、待たんか！ シンイチ！」

しかし、真一はその声を無視しどんどん背中が遠くなっていく。その小さくなる背中を見つめながら、ヨウは大きいため息を吐いた。「……面倒なことになったわい」

ヨウは頭を何度か掻きながら、小さな羽根を羽ばたかせ真一の背中を追った。

しん、とする空間である。道場は外に向かって大きく開かれていて開放感がある。床は木の板が張られていて、外からは道場に向かって風が吹き込んでいた。その外の先には白と黒が交互に重なり合ったのが五つほど、一定の間隔に並んである。その的の直線上には真一が袴を着て、的と平行に立っている。真一の真正面には、顔に多くの皺が深く刻まれた老人が一人、背筋をすつと伸ばし真一を見据えていた。

真一がゆっくりと足を開く。開き終えると倒していた弓をゆっくりと起こし、弓と十字になるように矢を番える。

番え終えると、弓を左ひざに一旦置く。そして弓を伝つて的を見据え、再び弓に視線を戻す。

右手につけているかけを使い、箆と弦を丁寧にかけにひっかける。そしてそのまま再び的をゆっくりと見据える。視線は真っ直ぐ的に向かう。

邪念などいらぬ。ゆっくりと形が崩れないように弓を持ち上げる。地面と矢が平行になるよう、しっかりと心がける。

頂点に達すると、力を均等にゆっくりと左手は弓を押し、右手は弦を引き、矢が真っ直ぐになるようにゆっくりと、矢が口元までつくまで引き分ける。

無心になる。その状態のまま的を見据える。いつ離すのか、それは自分の心持次第。長くてもいけない。短くてもいけない。

いまだ。そう思った時、自然とかけから弦が離れる。離れた矢は真っ直ぐ、的へ一直線に伸びていく。

”パンツ”

しん、とする空間に的を破る音が響き渡る。心地の良い音。的に刺さった矢を数秒見つめ、ゆっくりと腕を下ろす。

顔を真正面に向きなおし、広げていた足を元に戻した。

「うん、萩野くんは会と離れが綺麗だ。もっと自信を持っても良いだろう」

「ありがとうございます」

腰から折るようにおじぎをした。すると、その老人はにっこりと笑った。

「きつと萩野くんの射なら審査も通るだろう。確か、二段は取っているから受けるとしたら三段だろう？」

「はい。……しかし先生、高校生で三段を取るといのは難しいと聞いたのですが」

「なんだ、自信がないのか。心配しなさんな、萩野くんの射はこの誰に見られても胸を張ることができる。もっと自分に自信を持ちなさい。私はあなたが三段に合格するのを楽しみにしておるよ」

「……ありがとうございます」

再び真一は深々とおじぎをした。すると座っていた老人 真一の弓の先生はゆっくりと立ち上がった。

背は真一の頭一個分低い。胴衣から出ている腕は細くたるんだ腕であった。しかし、袴をきちつと着こなしているためなのか堂々と歩いて何かしらの雰囲気を漂わせている。

「まあ審査の話はまた今度にしよう。……私も弓を引くから、何か聞きたいことがあったら遠慮なく声をかけてきなさい」

「はい。ありがとうございます」

そう言うと、先生は弓具を取りに行くため道場の廊下へと出て行った。

一人道場に残った真一は先生の言葉を何度も繰り返し思い出していた。

『もっと自分に自信を持ちなさい』

真一は気のない息を漏らした。すると、そこに突然先生ではない声が聞こえてきた。

「シンイチ！ こんなところで一体何をしておるんじゃ」

声のする方を見れば、先ほどのヨウが羽根を羽ばたかせながら見下ろしていた。

再び現れたヨウの姿に真一は一瞬驚いたものの、今度は逃げることもしなかった。羽根の具合といい、息遣いといいどう見ても人形とは違っている。

「勝手に行きよって……わしの話はまだおわつとらんぞ。大事な話をまだシンイチに言っておらんだ」

「……」

関わりと面倒そうだ 真一はそう直感し反応しなかった。無視する形で、床においてあった矢を右手に持つと再び弓を引く準備を始めた。

矢を番え、再び弓を持ち上げゆっくりと引き分ける。引き分けた状態で遠くにある的を見据えた。

集中している真一をよそに、ヨウは羽根を動かし真正面にふわふわと移動する。そして、怒ったような口調で叫んだ。

「これは夢ではないぞ！ わしの血が付いたシンイチ！ お主はわしのマスターになったんじゃ！」

引いた弓から勢いよく飛んで行った矢は見事的に命中し、その音を道場に響かせる。

「……うるせえな。知るかよ」

「ふん……そう言うだろうと思ったわ。だから、責任を取れ」「は？」

真一は持っていたもう一本の矢を番えはじめた。

「シンイチに血が付いておらんかったらマスターにはなっておらんし、わしの姿も見ることもなかったんじゃ。わしのマスターになる気がないのなら、責任を取れ！」

ヨウの叫びを無視し、真一は集中を保つたまま鋭い眼光で見

据える。そしてゆっくりと弓矢を引き分けた。

静寂する道場。しかし、ヨウは構うことなく再び声を響かせた。

「わしと一緒にアラウまで来てもらう！　そこで前のわしのマスターにわしを引き渡してもらうぞ！　今、シンイチがわしのマスターであることを変えることはできん。それがお主の責任じゃ！」

真一が弓からかけを離れた。矢が弓から真つ直ぐ飛んでいく。

しかし今度は的には当たらず、的より離れた場所に突き刺さっていた。それを認めたのと同時に、真一は驚いた顔をヨウへと向けた。

「……ちよつと待て、アラウってどこだよ」

「アラウはアラウじゃ。地球ではない」

嘘を言う様子でもなく、ヨウはむっとした表情のまま真一を見ていた。

【序章 旅の始まり】予感

真正面に浮かぶヨウを、怪訝そうに真一は見ていた。

「地球ではないって、じゃあどこなんだよ」

「アラウという国じゃ。別の星にある」

「別の星？ なんだそれ。……もしそうなら、お前どうやってそこから来たんだよ」

「異空間移動というやつじゃ。アラウでは使えるやつがぼちぼちおる。じゃが……なぜ地球に来たのかどうも思い出せん」

「……マジかよ、嘘くせえなあ」

すると、道場の入り口から弓と矢を持った先生が入ってきた。

「萩野くん？ 誰かいるのかな？」

「あ。……あの、こいつは……」

空から落ちてきた妖精です、とは言えなかった。どうしようかと視線を泳がせている真一に対して、先生は不思議そうに首を傾げる。

「はて……どの方のことかな。道場にはあなた以外いないんだが」
「えっ」

その言葉に驚き思わずヨウに顔を向けた。確かに真一の目の前に浮いている。それを確認し再び先生を見た。どちらを何度見ても互いに見える位置にいる。

きよろきよろと頭を振る真一を尻目に、先生はしびれを切らし咳払いをした。

「……虫でもいたかね？ 気になりはするだろうが、集中を切らしてはいかん。一射一射気持ちを入れて弓を引きなさい」

「は、はい」

そう言い終わると、先生は真一より一つ前の的で弓を引き始めた。道場に張り詰める空気。床に弓がつく音と弦を引く音、そして的に射る音のみが響き渡る。先生の沈黙の注意に対して、真一も目の前にいるヨウから気持ちを切り替えるに集中し始めた。

が、ヨウはこの場の雰囲気を読み込むことができなかった。

「おい、シンイチ。なぜ黙る必要があるんじや。わしの話は終わっとらんぞ。あちらの爺の言うことは素直に聞くくせに、わしの言うことは聞けんのか」

真一の耳にはちゃんとした声量でヨウの声が聞こえている。この声量なら前にいる先生にも聞こえているはずだった。しかし、先生は黙々と弓を引いている。

不思議そうに先生を眺める真一に対し、ヨウはため息を漏らした。「……あの爺にはわしの姿は見えん。というより、シンイチにしかわしは見えん。……まあ本当はシンイチにも見えないはずじゃったんじやがの」

虚ろな表情だった。しかし、すぐさま鋭い視線を真一へと送る。

「とにかく責任を取ってもらうぞ。シンイチがわしのマスターになつてしまったのは変えようのない事実じゃ。じゃから、アラウに出かける仕度をせい」

肩幅に足を広げていた真一だったが、足を静かに揃え直す。

「……先生、すみません。トイレに行ってもよろしいですか？」

「ああ、行つて来なさい」

真一は出入り口に向かうと、そのまま道場に向かって一礼をし廊下に出た。ヨウも真一の後をついて行く。廊下にある弓を立てかける台に弓を置くと、そのまま黙つてトイレへと向かった。今道場には先生と真一しかいないので、トイレには当然誰もいない。

入つてドアを閉めるなり、真一はヨウのほうに振り返り叫んだ。

「今から仕度しろだと？ 俺はそれなりに忙しいんだよ！」

眉間に皺を寄せながらなお続ける。

「あの人は俺の弓道の先生なんだ！ こっちが集中してんのに近くでぺちやくちゃしゃべんな！」

頭に血が上っている真一に対し、ヨウは臆することなく涼しい表情だった。

「キユウドウ、というのか。初めて見るの。それはどれぐらいやら

ねばならんことなんじゃ？」

「さつき来たばっかなのに帰れるか。……お前俺が弓引いてる間どつかいとけよ、邪魔なんだよ」

「それはできん。さっさとアラウに行かねばならん。それに……」
そう言つとヨウは考え込むように、難しい表情で地面に視線を落とすとした。

「……それに何だよ」

なかなか言葉を発しないヨウに、真一も勢いを失い言葉の続きが気になった。

その声にヨウは険しい表情で真一を見た。

「悪い予感がするんじゃ」

「は？ 悪い予感？」

「……ともかくそのキュウドウとやらが終わつたあとでもいい、早めに切り上げるんじゃ。わしの予想がもし当たつたならば、おそろくわしだけではなく……」

とヨウが言いかけた時、道場の方から先生の大きな声が聞こえてきた。

「わああああ！」

その声に真一がすぐさまトイレのドアを開けた。

「今の声って先生？ 一体……」

「やはりか」

困惑する真一の横で、真一の左肩にしがみついたヨウが真剣な表情で言つた。

「アラウから来たのはわしだけではなかったんじゃ」

「はあ？ ったくそれを早く言えよ！」

トイレから飛び出た真一は一目散に道場へと走って行つた。

【序章 旅の始まり】巨大カラス

廊下を駆け抜け慌てて道場を見た。目に飛び込んできたものは道場に覆い尽くす黒色の物体だった。

「な、なんだこれ！」

よく見れば羽根のような形をしている。一枚一枚が黒光りをし、その物体は動いているようだった。全体を見て見れば鳥のような足が見え、姿かたちも鳥のように見える。

一瞬その物体に目を奪われた真一だが、すぐさま正気に戻り道場全体を目で追う。

「先生！ 先生どこですか！」

道場に埋め尽くされた黒の中で、先ほどまでいた先生の姿が見当たらない。嫌な予感がした真一は慌てて道場の中へと踏み入れようとした。すると。

「ガアアア！」

聞いたこともない叫び声が道場に響き渡った。思わず耳を塞ぎたくなるような不快な音である。その音と同時に、道場を覆っていた黒色の物体が動き始め真一たちの方を振り返った。

鋭いくちばしに真っ黒の瞳、尖った爪は道場の床をひっかきいくつも傷ができていく。見た目はカラスそのものだった。身体よりも遙かに大きいカラスに圧倒されながら、真一は手に汗を握り締め目だけで道場を見渡す。

「……おい、シンイチ！ あそこじゃ、このカラスの向こうじゃ！」

ヨウは巨大カラスの足元を指差した。見ると、長く尖った爪のすぐ隣にうつぶせの状態で先生が倒れている。しかし、全く動く気配がない。

「先生！」

思わず叫んだ。しかし反応がない。その場へ駆け出そうと道場へ踏み込んだ瞬間。

「ガアアアア！」

カラスが再び叫び声をあげた。見上げる真一に対し、カラスは鋭いくちばしを真つ直ぐ向け、真つ黒な瞳で見下ろしている。

一瞬にして身体が金縛りのようになった。少しでも動けばやられる。そう思うと余計に足が床に張り付く。くちばしの先端は細く光り真一の恐怖心を煽った。それに対し真一も何もすることができず、ただ冷や汗が流れるのを感じるしかなかった。

「こら、シンイチ！　ひとまず逃げるんじゃ！」

一方でヨウは冷静だった。固まる真一の身体を、小さな手で何度も肩を叩く。何度か叩かれたとき、ようやく正気に戻った真一はとっさに身体を動かした。

その直後、カラスが隙を見つけたのように鋭いくちばしを真一へ向けて振り下ろした。

“バキッ”

真一は体勢を崩し尻餅をつきながらも、間髪避けることができた。見れば　黒いくちばしが床を激しく破り突き刺さっている。

「なっ……。こいつ……何なんだよ」

「ひとまず廊下に出るんじゃ！　シンイチは何もするな。このカラスはわしがどうにかする！」

耳元で叫ぶヨウに言われるまま、素早く身体を起こし廊下に出た。すると、ヨウは真一の肩から離れ前に浮かんだ。

一方カラスは突き刺したくちばしをゆっくりと抜くと、真つ黒の瞳で真一たちをじつと見ている。カラスの足元に倒れている先生は、あのまま動いた様子もない。

「どうにかするって……。俺より小さいお前に一体何ができるっつーんだよ！　危ねえから下がれよ！　誰か呼んだほうが絶対にいいって！」

「安心せい。シンイチもあの爺もわしが助ける」

恐怖と焦りで汗びっしょりになっている真一とは対照的に、後ろ姿のヨウの声は落ち着きのある声だった。

ヨウは両手を真つ直ぐ左右に伸ばし、叫んだ。

「インディションサモン！」

叫び終わると同時に、それぞれの手にぐるぐると光が集まり始めた。手が見えないくらいの大玉の大きさになったかと思うと急にはじめ、そこからいきなり鋭い短剣出てきた。

「カラス！ わしが相手じゃ！」

「ガアアアア！」

耳が痛くなるほど叫んだカラスに対し、ヨウは怖気づくことなく真つ直ぐカラスに向かって行く。

一方カラスも、真つ直ぐ向かってくるヨウ目掛け思いつきりくちばしを振り下ろした。が、しかし、ヨウはそれを予想していたかのようにサツと避ける。と同時に、素早くカラスの後ろに回り込み頭に向かって短剣を突き刺そうと突進する。

だが、カラスが素早く身を引き避けた。ヨウは勢いそのままで止まることができず、横を通り過ぎ床に激突した。

「いたた……こやつ素早い！」

「馬鹿！ 気を抜くな！」

「おろ……短剣が動かんぞ」

ヨウが出した二つの短剣が、落ちた勢いのせいで床に見事に突き刺さっている。ヨウは腰に力を入れ思いつきり引つ張った。それでもびくともしない。それを見たカラスがゆっくりとヨウに近づいた。ヨウは急に周りが暗くなつたのをおかしく思い見上げると、鋭いくちばしの先端が頭の真上にある。

「ぬ！」

カラスが頭を振り下ろそうとした瞬間、道場に弦をはじく音が響き渡った。

”ドスツ”

響き渡ったかと思うと、カラスのど元に一本の矢が突き刺さっていた。

「ギアアアア！」

断末魔のような叫び声が道場に響き渡る。カラスは苦しそうに左右に首を激しく振っている。足元はふらふらとして今にも倒れそうだが、大きく見開かれた瞳に生氣は宿っていた。ヨウはカラスの様子をじつと見ながら、突き刺さっている二つの短剣を必死になつて動かした。そして、ふつと軽くなつたかと思えば二つの短剣がようやく床から抜けていた。抜けたのを確認し、すぐさまふらふらとずるカラスに向かい飛び掛つた。

”ドスツ”

カラスの脳天に小さな二つの短剣が突き刺さつた。突き刺したと同時にヨウはすぐさまカラスから離れ、足元にいた先生の袴の裾を握り締め、廊下の方へ引きずり始めた。

「……シンイチ！ 手伝わんか！」

真一は的を射つた後のように、左手に弓を持ち右手にかけをしたまま呆然とカラスを眺めていた。

「え、ああごめん」

正気に戻つた真一は駆け足で先生の元へ行つた。近くにいたカラスは突き刺されたままの状態で固まっている。

「先生！ 大丈夫ですか！」

「とにかく、廊下に出るんじや」

ヨウに言われるがまま真一は先生の両脇に腕を入れ、引きずりながら先生を運んでいく。

「おい！ あのカラスどうしたんだ？ さっきまで大暴れしてたの

に……全然動かねえじゃねえか」

「……見ておれ。今に消滅する」

やつこのことで廊下に出て、ゆっくりと先生を床に下ろした。かすかに寝息が聞こえているので、どうやら気を失っているらしい。

真一はほつと胸をなでおろした。ヨウは再び真一の肩に乗り、真一は戸から半分身を出して道場のカラスの様子をうかがつた。

突き刺さつたまま動かないカラスだったが、突然その短剣からさらさらと砂のように崩れ始めた。真つ黒だったカラスが、黒い砂に

変わっていく。

やがて、カラスは黒い砂と化し、そしてその砂は雪のように道場から消え去ってしまった。道場に残ったものは、カラスの鋭いくちばしによってできた大きな穴と、尖った爪が床に残した、いくつもの大きな鉤跡だけだった。

【序章 旅の始まり】置手紙

先ほどまでの騒ぎが嘘かのように、再び道場に静寂が戻った。外は日差しがさんとさんと照りつき、生ぬるい風が道場に吹き込んでいく。

「どうなったんだ……」

真一は呆然と道場を眺めた。

「だから消滅したんじゃない。召喚されたもんが倒れると、跡形もなく消えるんじゃない。……こうなると地球に長くおるのは危険だよ」

ヨウはそう言い終えるため息を一つ漏らした。しかし、真一はその言葉に首をかしげた。

「召喚？ ……そういえば、さっきお前何か叫んで短剣出してたな。お前一体、何者なんだ」

「その話はアラウに行ってから嫌というほどしてやる。にしてもシンイチの攻撃、助かったわい。すまんのお」

「いや、それはいいけどよ……わけわかんねえことが一気に起きて、整理がつかない。お前何か……」

「シンイチ」

ヨウは真面目な顔をして、真一の前に出てきた。小さな羽根を羽ばたかせ浮いている。

「今言えることは、早くアラウへ行くことじゃ。今のカラスはおそらく何者かがわしを追いかけて召喚させたんじゃない」

「お前を追いかけて召喚？ ……だから、お前何者かって」

「説明すると長くなるし、何よりいつまたあのような魔物が来るかもわからない。何度も言うようじゃが、早くアラウへ行かねばならん」

ヨウはゆっくりと床に降り立つと、小さな歩幅で歩いていき寝ている先生の手首に手を当てた。

「爺は気を失つとるだけじゃ。……正直あのカラスのことは忘れてもらわねばならん。シンイチが今からアラウへ向かうと言うならば

わしの魔力でこの場を元に戻してやる。だが、行かぬというなら……また魔物に備えなければならぬ。シンイチ、理解するのは難しいかもしれないが急ぐことじゃ。わかってくれ」

真一は倒れている先生と道場を交互に見た。自分が慕う場所、人がともに傷ついた。それは事実だった。

「……アラウに行つて、お前の前マスターに会うのにはどれぐらい時間がかかるんだ？」

「さあわからぬ。わしもなぜこのような場所に来たのか覚えとらぬのだ。……もしかすると長くなるかもしれない」

「そうか……」

真一は手に持っていた弓を見つめた。右手につけているかけも弓も丁寧に扱われているためか傷一つない。何か寂しそうな表情で呆然とする真一に、ヨウも申し訳なさそうに顔を俯かせると、ゆっくりと真一の肩に移動した。

「……親しい者と離れるのが寂しいか。すまんの」

「いや、俺に親しい者なんていねえよ」

そう言うつと自嘲した。ヨウは思わず首をかしげ真一を見た。

「……ただ審査で俺に期待してくれた先生に申し訳なくてさ。夏休みが終わるごろに審査があるんだけど……間に合わねえだろうな」

そう言い終えると、真一はひざまずき右手につけていたかけをはずし始めた。

「学校はだるかったし、行けなくても丁度いいな」

はずし終えると綺麗に紐を丸め、かけ袋の中に収めた。そして、弓を手に取ると弦をはずし、その弦をくるくると弓に巻いた。そして足早に自分の荷物の中から弓巻きを手に取り、弓をぐるぐると巻き始める。

「これ以上ここにいて、またあんな奴が道場を壊しに来たら嫌だし、先生を気絶させたくはねえし。……それに早くお前から解放されたいし」

「……シンイチ、じゃあお主……」

綺麗に布に包まれた弓とかけ袋を持ち、にやりと笑いながら肩にしがみついているヨウを軽く叩いた。

「行こうぜ、アラウへ」

先生ははっと目を覚ました。なぜ気を失っていたのかわからない、という風にしばらくぼうつと道場を眺めている。

道場はいつものように静かに、誰かの射るのを待っている。ふと、先ほどまでいたはずの真一がいないことに気がついた。探すべく廊下に出た時、自分の弓が置いてあるその下に小さな紙切れを見つけた。読んでくれとでも言っているかのように、丁寧に二つに折られている。先生は迷わずそれを手に取った。

『先生へ、少しの間遠い場所へ行くことになりました。直接先生に伝えることができず申し訳ありません。先生の弓とかけは見ての通り傷なく無事でした。それと、お願いです。どうか先生が見たものを他の誰にも伝えないください。あんなものはこれから来ることはないですので、他の誰かに言くと大きな騒ぎになります。どうかよろしくお願いいたします。それともう一つ、遠い場所へ行くにあたりいつこちらへ帰るか未定です。心配は無用ですが、審査に間に合うことができるのかわかりません。先生がこんな俺に期待してくださったこと、本当に嬉しかったです。先生は俺にとって、本当に尊敬できる人です。どうかお体に気をつけてください。いつか必ず道場へ顔を出します。その時先生に会えることを楽しみにしています。萩野真一』

丁寧な字だった。先生はしばらくその手紙に目を落としたまま、弱く笑った。そして二つに折りなおし、大事そうに懐へと納めた。誰もいない弓道場。先生しかない道場。それでも先生は再び弓を

引く準備を始めた。

いつもと変わらない風が吹き抜ける。先生は何も言わず、颯爽と道場へと出て行った。

【第一章 イタワ島】南東の孤島（前書き）

これから第一章が始まります。

誤字脱字を発見された場合、ご報告くださいますようお願い致します。

【第一章 イダワ島】南東の孤島

広い部屋の中に大きな机と豪華な椅子、その後方には壁を埋め尽くすほどの本棚がずらりと並んでいる。椅子には金色の竜の装飾が施され、見るからに豪華さを演出していた。その椅子に腰掛ける者が一人、部屋の中にいた。ただ黙々と、赤く輝く宝石をはめ込んだ杖を布で丁寧に拭いている。

静寂する中、一人部屋へ駆け込んで来た。

「……発見しました！」

今走ってきたかのように息を少し切らしている。しかし、部屋の主は驚く様子もなくそのまま杖を拭き続けていた。

しばらくその様子を見ていたが、じれったくなつたのかその者は再び口を開けた。

「……どうされますか、すぐにでも……」

するとようやく手を止めた。

「待て」

一瞬で部屋の中に緊張感が漂う。嫌に通る声は主の風格さえ感じられた。

「そう焦るのではない。場所はどこですか？」

「離島の……イダワです」

少し眉をひそめつつ、引き出しから地図を取り出した。地図には大きな大陸と海、そして島が書かれていた。大陸の中には大きく

アラウ”と書かれている。主は、地図上でイダワの場所を指差した。

イダワ 大陸より南東に位置する小さな島。そこを指差したまま、ゆっくりと対極へ動かし、その先に着いたのは 北西の城だった。

「随分遠い。焦る必要はない。……しかしだ。様子を見て、もし機会があるようならやっておきなさい」

「……かしこまりました」

深くお辞儀をすると、そのまま姿をふっと消した。

主は不思議がる様子もなく椅子からゆっくりと立ち上がると、そのまま窓際まで歩み寄った。

窓から望む風景は、大きな架け橋とそびえ立つ大きな城。白い霧が城全体を覆っていた。

「やはり生きていたか……」

そう呟くと、持っていた杖を強く握り締めた。

「ここはどこだ」

真一たちが降り立った場所は、足場がごつごつとした崖の上だった。下を見れば岩肌には波が激しく打ち、荒れた波を起こしていた。左を見ても右を見てもずっと崖が続いている。空は青く雲が流れ、周りを見ても特別変わった物もなく地球とほぼ似た環境だった。

「本当にアラウへ来たんだらうな。一瞬真つ暗になって、場所が変わっただけじゃねえの？」

疑いの眼で肩にしがみ付いているヨウを見た。が、ヨウは声が聞こえていないのか見向きもせずわなわなと震えていた。

「……おのれええ、なぜイダワなんじゃ！」

そう叫ぶと小さな羽根を使い、ふわあと空中へと上がった。

「おい、イダワって何だよ」

「イダワは町の名前じゃ。ここはアラウ本島から南東にある離島のイダワ島なんじゃよ！……お、あつちに町があるの」

町を発見したらしく、その方向を向いたまま真一の肩へと降りてきた。そしてそのまま指を差した。

「シンイチあつちじゃ。ひとまず町へ行かねば」

「ああ、そうだな。わかった」

真一はヨウが指差す方向へと歩み始めた。

あの後、真一は袴を着たまま肩にはトートバックとかけ袋を付け

た矢筒を提げ、手には弓巻きに包んだ弓を持ちアラウへと異空間移動した。家に帰って仕度をすればいいとヨウは言ったが、真一が急ぐなら早く行った方がいいと言ったので大した準備もなくアラウへとやって来た。

道場の格好と今の違いとえば、足袋しか履けなかった足元に白いスニーカーを履いていることぐらいだ。

「今から行く町にお前の前マスターはいるのかよ」

足元に注意を払いつつ、歩きながら真一がヨウに尋ねた。

「いや……おらん」

むすつとした表情で答えた。さらに続けた。

「前マスターはアラウ本島におる。じゃから、会いに行くためにはまず本島へ向かわねばならん」

「なんだそれ。だったら初めからその場所へ行けよな」

すると、ヨウが睨みつけるように真一を見た。

「わしも行くこうと思っただんじゃ！ シンイチがマスターになったことでわしの魔力がシンイチの魔力に依存してしもうたんじゃ！ おかげで今のわしの魔力は以前の半分以下じゃわい！」

大声を出すので、真一は思わず左耳を手で塞いだ。

「……耳元で叫ぶなよ。なんだよ、俺が悪いみたいな言い方じゃがっつて」

「悪くはない……悪くはないが、愚痴の一つでも言いたくなるわい。アラウでは魔力が全てに影響するからの……」

「魔力？ ……俺、全くないと思うんだけど」

「じゃから、わしの魔力が半分以下になったと言っておるじゃろう！」

思いっきり叫んだせいなのか、はあはあと息切れをしていた。真一は立ち止まり困ったように頭を掻いた。

「……要するにだ、俺がお前の魔力を取ったってことか」

「そうじゃよ」

「そんなこと言われてもなあ……」

思わず自分の手のひらを見てみた。別に変わった様子もない。身体の変調もない。手を使わずに物を取り出せる雰囲気でもなく、手から何かが飛んでいくような雰囲気でもない。魔力を取られたと言われても、本人に魔力が備わったと言う感覚がなかった。そんな真一の様子を察したのか、ヨウが羽根を羽ばたかせ真一の目の前に浮かんだ。

「間違いなくシンイチには魔力が備わっておる。しかし、じゃ。その魔力について説明せんと理解しようにもわからんじやろう。じゃから少しばかり説明してやる。一気に言つとわからんと思うからの。少しずつじゃ」

「そりやどうも」

「まず、魔力の前にこのアラウについて説明せねばならん。アラウはこの離島イダワを含む、大きな国じゃ。本島には砂漠もあれば草原もあり山脈もある。そのアラウ全土を治めとるのがアラウ国王様じゃ。しかし、王様一人だと全てに目が行き届かん。じゃから四大都市と言われるシトモン、トトロイ、ガナオン、オデイの都市にそれぞれ統治者が一人おる。王様の子分みたいな奴らじゃ。そいつらがそれぞれの地域を見守り情勢を安定させるというわけじゃ」

「へえ。で、お前の前マスターはどこにいんだよ」

即答はせず遠い空を見上げた。何か寂しげな横顔だった。

「わしの前マスターは、アラウ城におる」

「は？ アラウ城って……アラウって王様の名前だよな。前マスターってのは……何者なんだ？」

「イツチ姫。アラウ国王様の姫君じゃ」

一瞬、真一は言葉を失った。国王様と言われるからには、このアラウ国においてトップの人間だろう。その国王の姫君、つまり娘。その姫君をマスターとしていたのは、今の目の前で幼い顔をしているこの妖精。真一の顔を不思議そうに首を傾げ見ているこのヨウなのだ。

「お、おま……それすごくないか？」

驚きのあまり声が少しもつた。今更ながらヨウの凄さに気づいたようだった。驚いている真一が嬉しかったのか途端にやにやと笑い始めた。

「ふふ、そうじゃ。凄いいじゃろう。姫はシンイチと同じぐらいの歳ながら、移動魔術に長けておつてのお。何よりあのミニスカから出る美しい足が……」

「移動魔術？」

鼻の下を伸ばし妄想に入ろうとしていたヨウだったが、真一の間いかけに一気に冷めたようで、白けた顔を向けてきた。

「……魔術には四つあるんじゃ。人や物を運ぶことができる移動魔術。物の修復や人の治療ができる回復魔術。攻撃から身を守るための自衛魔術。そして、物を召喚する召喚魔術の四つじゃよ」

「へえ、すつげえなあ！」

一方で魔力や魔術と言った、ゲームの中でしか考えられなかった言葉が出てくるためなのか真一の顔が生き生きとしてきた。そして、再び己の手のひらを見た。

「で、俺はどんな魔術が使えるようになったんだ？」

目を輝かせ頬を緩ませている真一の顔に、思わずヨウはくすつと笑った。

「ふふつ、シンイチは全くゼロの状態じゃったからわしと同じ魔術になったはずじゃよ」

「四つの内どれになったんだ？」

「召喚魔術じゃよ。どれ、わしの血がついた方の腕、出してみい」
素直に出された腕には、未だにヨウの赤い血が一滴付いている。

それを確認したヨウはその一滴の上に指を二本当て、ゆっくりと摩り始めた。

「……何してんだよ」

「まあ見とれ」

円を描くように摩る指に、乾いていた血が潤い始めている。そして指は円を描くのをやめそのまま腕周りを一周した。それぞれの指

の先端に血がついていたため、腕には赤いリングのような赤い線が二本できた。

「よし、これで完成じゃ」

リングを描いたヨウは腕から指を離し血を拭った。

一方でその様子を見ていた真一は不思議そうな顔をした。

「何だこれ。……お前の血乾いてたはずだったんだけど」

「それはな、わしら妖精の血が特別じゃからじゃ。そして、その赤い二つのリングはわしとシンイチとの”マスターと使魔”の関係の証じゃ。これでわしの魔術、召喚魔術がシンイチにも使えるようになったぞ」

「マスターと使魔の証……？ ああ使魔ってお前のことか」

「そうじゃ。ここじゃわしらのことを一般的に使魔と言うんじゃ」

「へえ。その証か……それに召喚魔術。……はは、何か地球っぽくなくなってきたな！」

リングを見て、顔をくしゃっと崩して笑う真一。

「もう地球の常識はここでは通用せんからな。……どれ、町へ行く前にパラッグの木でも探すかの」

「パラッグの木？ 何だそれ」

不思議そうな顔をする真一に対して、ヨウはにやりと笑いながら再び肩にしがみ付いてきた。

「シンイチが魔術に興味があるならと思うてな。まだ明るいし、町は後から行っても間に合うじゃろう。パラッグの木は卵が生る木じゃ」

「卵が生る木？」

「まあ実際見るのが早い。ほれ、あそこの森に行くぞい。運が良ければあるかもしれん」

「へえ。んじゃま、行ってみようぜ」

わくわくと胸を高鳴らせながら、ヨウが指差す森へと歩み始めた。

【第一章 イダワ島】パラツグの木

背が高い木々が日差しを遮って、少し涼しい風が吹きぬけている。幹がぐるぐると巻いた木があつたり、蔓ばかりの木が絡まるように空を覆っていたりと地球とは少し違う森だった。先ほどまで岩場だった足元とは打って変わり、森の中はこげ茶色の地面が一面に広がっている。何もなく平坦な地面をきよろきよろと頭を動かしつつ、歩を進めていた。

「そのパラツグの木って言うのは、どんな木なんだよ」

卵が生る木。どう想像できるだろうか。ひとまず卵がついていないかどうかだけを注意深く見ていた。

「大きな木じゃよ。人三人分ぐらいの幹かの。じゃから……見たらすぐにわかるはずなんじゃ」

「へえ。でかくて太い木ね」

一つ一つの木を注意深く見るために、ゆっくりと進んでいく。しかし、どれも背は高いが幹は細く、人三人分もの太さではなかった。ひよろつとした木々が少し隙間を空けては生え、空けては生え、森を進んでいくには支障はなかった。しかし、歩いても歩いてても何本も木を見ても一向に見つからない。変わらない風景に同じ所をぐるぐると回っているのかと思い始めた。

黙々と探していたが、ついに真一が口を開いた。

「本当にあるのかよ。それに、同じ所歩いてないか？」

「そんなことはない。森は広いから仕方ないんじゃ。イダワ島の半分は森じゃからな」

「……迷ったらどうすんだよ」

「大丈夫じゃ。その時はわしが上空に上がって町がどの方向か教えてやるわい。……お？」

ヨウの目が何かを見つけ、そのまま動かなくなった。そのまま頬が緩んでいき嬉しそうな顔へとなっていく。

「あつた！ あれじゃ！ あれがパラツグの木じゃ！」

バシバシと興奮気味に肩を叩かれた真一も、足早にその方向へと歩を進めていく。細い木々の合間に何か雰囲気の違いが幹が見え隠れしている。卵が生る木とは、一体どんな木なのか。近づくとつれ自然と胸が高鳴り、好奇心がどんどん膨らんでいく。進む足も速くなった。

そして、少し息を切らしながら着いた場所は、少し広い円形の開けた原っぱだった。ここだけ小さな草が生えている。そしてその真ん中に堂々と、見上げるほど太く大きな木が立ち誇っていた。この原っぱに覆いかぶさるように濃い緑の葉っぱを広げ、太い幹は辺りにある木とは比べものにならないくらい頑丈さが見て取れた。近くに寄って幹にそつと手を当てると、ごつごつとした幹から何か温かさを感じたような気がした。

「……本当に大きいな。これがパラツグの木か」

「そうじゃ。……あ、ほれ、あそこ。お、あそこにも。卵がついておるじゃろ」

見上げてみれば、白い卵 サッカーボールほどの大きさの卵があちこちにぶら下がっていた。卵なのか木の実なのか、見上げただけではよくわからなかったが、白いで殻なのだと思った。濃い緑に白い卵は異様なほど目立っている。

「なんか……変だろ。卵つてもつと小さいのかと思つてたのに……なんだあのでかさは」

「まあ卵と言つても、地球で言う木の実と一緒にじゃ。皮は殻のように硬い。……わしが一つ取ってきてやろう」

そう言うつと羽根を飛ばたかせ、どんどん舞い上がっていく。十メートルほど舞い上がった所に卵がある。卵とヨウが並ぶとほぼ同じ大きさだった。そんな大きな卵を一生懸命もぎ取るうとしている。すると、遠い声でヨウが叫んだ。

「ぐろう……！ よし、落とすぞおシンイチ！」

「え。ちょ、ちよつまつ！」

慌てる真一の声も空しく、ヨウはもぎ取った卵を真一目掛けて落とした。卵はブウンと言う音を鳴らしながら落ちてくる。避ける暇もなく、覚悟を決め腕を差し出し卵を受け取った。

”バキッ”

「いつ……いつてえええ！」

嫌な音と同時に真一の顔が歪んだ。そのまま膝から崩れ、痛さを堪えるように体を埋めた。

細かく震える腕からサッカーボールほどの大きさがある卵が転げ落ちた。受け止めたおかげなのか無傷だった。が、受け取った真一は体をうずくまっただま動かない。

ようやく顔だけを上げ、ヨウを睨みつけながら叫んだ。

「ばっ……馬鹿かお前！ そんな高さから硬い卵落としたら危険だつてわかるだろーが！ くそ……いつてえ」

悲痛な表情を浮かべまた顔を俯かせ、痛みを堪えている。そんな様子にヨウは上からゆっくりと降下しながら、誤魔化すように笑った。

「はは……すまんの。重くてとても持てんかったんじゃ」

「だったら取りに行くなよ！」

よほど痛いのか立とうともしない。真一の元へ戻るとそっと腕を見た。

真っ青になっていた。丁度卵の大きさぐらいの青あざが両腕にある。

「うわ……。こ、こりゃ悪いことをしたの」

「つたりまえだろうが！ めちゃくちゃいてえよ！」

するとヨウは、その真っ青になっている両腕にそっと小さな手を当てた。

「大丈夫じゃ。わしが治してやる。……多少痛みは残るかもしれんが」

そう言うとヨウの両手に淡く青い光が帯び始めた。その青い光が真一の腕の部分を包み込む。覆われた腕の部分は少しだけ冷たく感

じた。動かせないほどの激しい痛みだったが、少しずつ痛みが和らいでいく。青い光越しに見える真つ青な打ち身は、どんどんと小さくなっていった。

「……痛みが和らいできた。……動かせる」

ゆっくりと手のひらを握ったり開いたりして見せた。

「……そうか。ならよかった」

そう言うつとヨウは当てていた手を下ろした。すると、青い光もすうと消えていった。ヨウは一息つきながら、おでこの汗を拭った。

「今何したんだよ。ちよつとまだ疼くけど、さつきよりだいぶマシになってんだけど」

「……え？ ああ。回復魔術をしたんじゃないよ。はあしかし、疲れるの。わしは得意じゃないし、魔力も少ない。どつと疲れたわい」

そう言うつとぐったりとした様子で真一の肩にしがみ付いた。

「回復魔術……？ さつきお前、召喚魔術だつて言わなかったか？

魔術つて言うのは四つ全部できるもんなのか？」

「いや、できん。魔術は己の中にある”魔元素”と言われる魔力の成分みたいなものの数によって、どの魔術が扱えるのか決まるんじゃない」

「魔元素？ なんだそれ」

真一は首を傾げた。ヨウは大きく息を吐いてから、咳払いをした。

「……魔元素というのは魔力の源みたいなものじゃ。魔力の強さは、この魔元素をどれほど溜め込むことができるかによって変わる。多ければ多いほどそやつは魔力が強いということじゃ。で、魔元素は炎魔元素、水魔元素、雷魔元素、土魔元素の四つ種類がある。アラウの人間にはどれか一つが多く備わっておる。何が多く備わっておるか、人それぞれで違う。で、先ほど説明した移動魔術、回復魔術、自衛魔術、召喚魔術はそのどの魔元素が多く備わっているかで扱える魔術が変わってくるんじゃない」

「……よくわかんねえな。変わるつて、例えば？」

「炎魔元素を多く備えておるなら自衛魔術が扱える。水魔元素なら

回復魔術。雷魔元素なら移動魔術。土魔元素なら召喚魔術じゃ。シンイチは何もない状態じゃったから、わしの影響を受けて土魔元素を取り入れ召喚魔術を扱うことになったんじゃない」

ヨウの説明に黙って頷いている真一だったが、ぴたりと止まって難しい顔へとなった。

「……待て。それって要するにお前は土魔多く備えてるから召喚魔術なんだよな」

「そうじゃよ」

「じゃあ何で、異空間移動したり道場を元に戻したり、今みたいな治療もできるんだよ。それって移動魔術とか回復魔術じゃねえの？」

「ふふ、よく気がついたの。まあ歩きながらも説明してやる。随分遠くまで来たからの、そろそろ動かねば暗ろうなってしまう」

座っていた真一はその言葉にゆっくりと立ち上がった。と、足元に大きな卵が転がっている。近くで見ると水玉模様の柄が入っていた。白の殻かと思っていたが、近くで見ると水玉模様の柄が入っていた。気のせいか、その水玉模様の部分がほのかに黒い気がした。

「おっと、せつかく見つけて取ったパラッグの卵じゃ。忘れんようにな。ふふ楽しみじゃの」

真一は腰を折りパラッグの卵をゆっくりと手に取った。腕を動かせるようになったが、やはり痛むのか動きが恐々しい。歯を食いしばりながら卵をトートバックの中へと入れた。

「くそ、やっぱしまだいてえ。……これ、何かの役にでも立つのかよ」

「それも後から説明してやる。ほれ、あっちじゃ。行くぞ」

しがみ付いたままヨウは指を差した。その方向には木しか見えなかったが町を指しているらしい。

「……歩くのは俺だけだな」

ヨウを見て思わずため息が漏れた。

真一は右手には弓を持ち、右肩からは卵入りのトートバックと矢筒を提げ、左肩にはヨウがしがみ付いている。ぐっと背筋を伸ばし、

ヨウの指差す方向へと歩き始めた。

【第一章 イダワ島】前途多難

眩しい日差しが木の陰から漏れ、森の道にあちこち光が差し込んでいた。そんな道を少しだけ足早に歩いていく。森のどこにいいのか町はどこにあるのか真一にはわからず、ヨウの言葉だけが頼りだった。自信満々に指差す方向へとひたすら歩く。

「で？　なんでお前召喚魔術以外の魔術使えるんだよ。俺は使えないのか？」

肩から提げた矢筒とトートバックを担ぎ直しながら真一が尋ねた。「シンイチは残念じゃが使えん。元々魔力がないしの。もし、召喚以外の魔術が扱えておったなら、それプラス召喚が扱えておったんじゃない」

「へえ。で、お前は どうしてそれが扱えるんだよ」

「……それはな。わしら、使魔が特別じゃからじゃよ」

何か急に真面目な顔つきになったヨウは指差していた腕を下ろした。

「わしらは、四つの魔元素を元々備えやすい体質じゃから四つの魔術を制限なく扱えることができるんじゃないよ。そして血も特別で、付いたその者に魔力魔術を分け与えることができるんじゃない。それが使魔とマスターの関係じゃ。使魔は通常普通の人間には見えん。じゃから普通は、使魔がその人間を気に入り姿を見せることで関係が成立するんじゃない。それが……最近ひどいもんじゃ……」

なぜか暗い顔をしている。不審に思ったが、もしかしたら自分のことを言っているのかもしれない、そう思うと少し腹が立った。

「おい。ひどいって、お前が勝手に落ちてきてぶつかって、血を俺につけたからこんな状況になってんだろが。文句言つなよ」

黙ったまま顔を上げたヨウの顔はむすっとし、何か言いたげな表情だった。が、反論する様子もなく大きくため息を漏らした。

「……まあ、これがわしが四つの魔術を使える理由じゃよ。回復と

移動魔術はもう魔元素がほとんどないから、しばらく使えんからな。もう怪我をするのではないぞ」

「お前が怪我させたんだろ……」

細い木々を進んでいくうちに、一面こげ茶色だった地面に小さな草がちらほらと生え始めていた。しかしこの小さな草を良く見ると、淡い黄色に染まっている。おまけに、ほのかに光を帯びているようにも見えた。真一は思わず足を止め、近くで見るために屈んだ。

「……なんだこれ。なんか、光ってないか？ 形はどっかに生えてそんな雑草なのに」

触れてみると温かかった。その草自体が熱を帯びているようだった。

「これはフェル草じゃ。一応食べられる草じゃが……」

「へえ。どれ一つ……」

そう言っただけ草をちぎりと取った。手のひらに乗せても熱を帯び黄色が発光しているかのように見える。口に運ぼうとした時、ヨウが慌てた声でそれを止めた。

「待て！ そのまま食べてはいかん！」

「つたくなんだよ」

「それは触媒草と言われるもんなんじゃ。それを触媒にし、食べ物を召喚することで食べることができるんじゃ。それをそのまま食べてしまうと中毒症状を起こしてしまうぞ！」

「……中毒症状？ よくわかんねえけど、やばそうだな」

「まあそのまま食べん限り害はない、むしろ良い品じゃ。持っておいて損はないぞ」

真一は半信半疑で頷きながら、それをトートバックの中へと入れた。そして立ち上がり再び森を歩き始めた。

どれぐらい歩いたのか。歩いてても歩いてても似たような木々ばかりだった。先ほど生えていたフェル草もなく、こげ茶色の地面が続い

ている。ふと見上げていれば日差しが心なしか弱くなっていた。真一は痛む腕をかばいつつ、重い卵の入ったトートバックと矢筒を担ぎ直しながらも黙々と歩いていた。

「……おい、まだ町には着かねえのかよ」

「なあにもうすぐじゃよ」

そう言った後、ヨウの顔が突如緩み始めた。

「おお……家がある。町じゃ！ シンイチ、町へ出たぞ！」

「え、家？ どこ？」

目を凝らし、木々の合間をじっと見てみると家らしき建物が見えた。

「……家だ！」

思わず駆け足へと変わった。息苦しかった呼吸も疲れもすつ飛び、その建物目指し走り出した。

走って飛び出すと、森から出て広い草原が広がっていた。森から出るように草を分けた道なりを見ていくと、家が集まった場所がある。間違いなく町だった。四角い建物がいくつも見られる。呆然とそれを眺めた。

「やっと……やっと着いたか」

そう漏らすと、安心したのかどつと疲れた様子でその場にしゃがみ込んだ。ヨウもほっと息をついた。

「やれやれ……イダワは森の中にある町じゃからな。と言うよりも、むしろアラウへ降りついた場所が悪かったの。その森の外じゃったからなあ。本当は航路があつて、船着場から出ればすぐなんじゃよ」

「船着場……それって本島へ行けるんじゃねえか？」

「そうじゃ。前マスターに会うためにはその船着場へいかんと駄目じゃな。しかし……」

ヨウはそう言つと空を見上げた。太陽は傾き始め、空は紅く染め始めていた。

「今船が出ておるかかわからんの。……シンイチ、疲れておるじゃろ

うがもう一踏ん張りじゃ」

「ああわかつてる」

ぐつと足に力を入れると勢いよく立ち上がった。

道を進んでいくにつれ、町の賑わう声が耳に届いてきた。小さく見えた建物も、その形がどんどんと大きくなる。よく見ればどの建物もレンガ造りのような頑丈そうな造りだった。町の中に道路があるのか、規則正しくブロックごとに建物が密集しているように見えた。中でも、町の真ん中にそびえる大きな矢倉が目を引いた。とんがり屋根で、そのすぐしたには広い空間が見える。そこに人は見えなかったものの、おそらくあそこから眺めれば町中見渡せるだろう。「おそらく船着場は町の奥じゃろうな。このまま町に入って真っ直ぐ行けば着くはずじゃ」

「じゃあひとまず、あの矢倉を目指して歩けばいいな」

真一はそのまま建物が並ぶ町へと歩み始めた。

町の中はブロックごとに分かれ、建物は全てレンガ造りで隙間なく並んでいる。日本の家のように瓦屋根のような家ではなく、四角い高い家が立ち並び、歩きながら上を見上げれば、向かい同士の家で紐を繋ぎそこに干した洗濯物が風で揺れている。風が吹いているだけであつたが、まるで頭上に川が流れるようにゆらゆらと布がなびいていた。

真一がふと何かに気づきその方向を見てみると、じつと様子をつかがっている人がいることに気がついた。しかも、開いている窓全てからだつた。どの人も髪が紫色で、上半身しか見えないがそれぞれゆつたりとした単色の服を着ている。こげ茶色、黒、紺色と様々だ。目を逸らすことなくじつと真一を見ている。

「……すっげえ視線感じるんだけど」

ぼそつとした声で真一がしゃべった。浴びる視線が痛いほど伝わっている。ヨウも感じたようで、窓を見上げきよるきよると頭を動かしていた。

「ぬう、やはりシンイチの格好とその荷物が目立つのかもしれないの。

あと黒髪もいかんかもしれん」

「黒髪で目立つのかよ」

「ひとまずじゃ。ここは走り抜けた方がいいじゃろ。この道をまっすぐ行けば矢倉が目の前に見える。矢倉を通り過ぎてまた真っ直ぐ行けば船着場に出るはずじゃ」

「……わかった」

そうつぶやくと、一気に駆け足となり道を走り抜けていく。道ばたにいる人たちからも視線を送られていたが気にすることなくどんどん進んでいく。肩から矢筒とトートバックがずれていくが、なんとか直しつづ進んで行った。進むたびに両腕に響き、卵で打った打ち身が痛む。それでも齒を食いしぱり進んだ。

すると矢倉が目の前に見えた。矢倉の下にはなにやら入り口があり、その入り口の上には看板が掲げられていた。が、それを読む暇も読むことさえできず、そのまま横を通り過ぎた。中から人が出てきて真一を不審そうに見ていたが、それさえも無視して進んだ。

やがて道が開け、海へと出てきた。そこには大きな船が一隻泊まっていた。その船に列を作り人が次々に船へと乗り込んでいた。真一も迷わずそこへ向かい列の一番後ろへと並んだ。

「ふう、なんとか間に合ったみたいだな」

「そうじゃの。よかったわい」

と、ヨウと会話をしていたが、前に並んでいる人がそつと真一の方を振り返った。怪訝そうな目つきで真一を眺めたあと、すぐさま正面へと向き直った。

「……シンイチ、わしは他のもんには見えんのんじゃ。じゃから独り言のように見えるようじゃ。余計なことはしゃべらんほうがいいかもしれんぞ」

真一は黙って頷いた。

列に並んでいると、やつと真一の番へとなった。船の入り口には警備員らしき人が一人立っている。やはり紫の髪に青いローブを羽織っていた。

「…………乗るのか？」

その男は一目真一を見ると不審そうに眺めてきた。頭の上からつま先までじっくりと見ている。

「ああ。これ、本島に行くんだろ？」

そう言っで一歩踏み出すと、その男が前を立ち塞いだ。

「待て！ ……乗る前に身分を見せる」

「…………身分？」

思わず首を傾げた。ちらりとヨウを見てみると、しまったとでも言いたげに頭を抱えていた。

「身分がないのなら、お前を通すわけにはいかん！ 怪しい奴め！」

男の目つきが鋭くなった。真一は分けが分からないまま呆然とした。すると、ヨウが頭を抱えながら口を開いた。

「…………すっかり忘れとったわい。身分を認めてもらわんと…………船に乗ることができん」

「…………は？ なんだそれ」

思わず出た言葉に、立ち塞いでいる男の目がますます厳しくなっ
てしまった。

【第一章 イタワ島】 雛、解る

呆然と立ち尽くしていると、いつの間にか周りに人だかりができていた。ざわざわと騒がしく、真一を訝しそうに眺めている。どの人も紫色の髪の色をしていて、全身を覆うローブを着ていた。顔は日本人に近い顔つきだ。

「その格好は何だ？ 持っている物は何だ？ 全てが怪しいぞ！どこから来た、答える！」

男は腕を組み真一を見下ろしてきた。

「地球から来たんだよ。……とにかく、船に乗って本島へ行きたいんだ」

「身分がないと乗せられんと言っただろう！ だが、お前の身なりは見るからに怪しすぎる。身分どうここの前に調べてもらう必要があるな」

「は？ 調べる？」

すると、人だかりの後ろから突然声が聞こえた。

「道を開ける！」

青年のような声が響き渡ると、騒がしかった声が一気に静まった。そして人が二手に分かれ道ができ、その向こうから腕に緑色の腕章をつけ真紅のローブを身にまとった三人組が、こちらへと歩み寄って来た。

真一を見るなり、三人組 真ん中に立っていた眼鏡をかけた男は怪訝そうな顔をした。

「騒がしいので来たのですが……先ほど町の真ん中を走っていた男ですね。……なんですか、この身なりは」

「所長さん、わざわざどうも」

警備員はその眼鏡の男を所長と呼ぶと軽く会釈をした。

「この男船に乗りたいたって言うんですが、身分がないわ、こんな格好をしているわで、どうも怪しいと思いまして……」

「なるほど。わかりました。こちらで対応します。貴方はもう船に乗り込みなさい。もう出航時間でしょう」

「あ、そうですね。ではこれにて……」

そう言い残すと、警備員はそのまま船へと乗り込んでいった。真一は思わず「あっ！」と叫ぶとその警備員の姿を追うため走ろうとした。が、所長ら三人組が目の前を立ち塞いだ。

「どけよ、俺も船に乗りたいんだ。別に何もしねえから通せよ」

必死で訴えたが、所長は首を横に振った。

「貴様が何かするのかわからないのか、それはこちらが判断することだ。いいからきたまえ」

「いつて！」

左右にいた男二人がそれぞれ真一の腕をぐっと握ると痛みが走った。するといきなり、その痛みと共に周りが残像を残していくかのように流れた。

一瞬の出来事だった。

いつの間にか矢倉の前に立っている。呆然としている真一を三人組は構わず引っ張った。

「何をしている、さっさと入れ」

無理矢理腕を引っ張られ矢倉の中へと入っていく。すると、ヨウがため息を漏らしながら言った。

「……シンイチ、ここは派遣所と呼ばれる場所じゃ。地球で言うなら……警察署のような場所じゃよ」

その言葉に驚いた様子で目を見開いた。

「なあに、シンイチは何もしとらん。恐れることはない。それでももし、何かあったらわしが助けてやるわい」

矢倉の下の空間は意外に広い。下は土であったが、机と椅子が綺麗に並べており事務所のような場所だった。が、真一が連れて行かれた先は事務所ではなく、椅子が一つと目の前に長机が置かれた寂しい部屋だった。真一の弓具とトートバックは男たちに没収され、

その椅子に座らされた。三人組の男たちは前にある机を前に腰掛けた。

「……貴様は私たちの質問を終えない限り、ここから出ることはできません。それだけ最初に伝えておく」

「別に逃げねえよ」

所長はどこからともなく一冊の本を出現させた。右手で本を受け取ると、そのままページを開きペンを握った。

「まず、名を名乗れ」

「萩野真一」

「どこから来た」

「……地球」

その言葉に男三人が訝しい表情へと変わった。互いに見合わせ首を傾げている。

「そんな地名、アラウには存在しない！ 嘘を言つな！」

弓と矢筒を手に持っている男が怒鳴った。が、真一は臆することなく言い返した。

「嘘じゃねえよ！ 俺は地球の日本から来たんだよ！ だから髪が黒いし、この格好はだって別に变じゃねえんだよ！」

再び三人は顔を見合わせた。小声でしゃべっており、内容までは真一には届かなかった。

「……まあいい。ひとまず資料として書いておこう。本部の者が知っているかもしれない」

開いた本につらつらとペンを走らせている。

「貴様の身分はなんだ」

「身分……ってどういう意味だよ」

その言葉に所長は顔を上げた。

「……身分とは職のこと。それも知らないとは……チキユウと言う土地、よほどのド田舎と見えた」

口の端を釣り上げ、にやりと笑った。三人とも馬鹿にしたように薄笑いを浮かべている。

「職なんてねえよ。言うなら学生ってぐらいか……。もう好きなように書けよ、話になんねえ」

「ガクセイ？ 意味のわからないことばかり……。少し痛めつけた方が……。！」

その時、何かが崩れるような音が響いた。

”パキッ”

その音は明らかに殻が割れる音だった。見ればトートバックががすかに揺れている。驚いた男は持っていたトートバックを覗き込んだ。

「こつこれは！ パラツグの雛！」

「なんだと？」

所長も立ち上がるとすぐに覗き込んだ。じっと見ていたが、徐々に頬を緩めると大きな声で笑い始めた。

「はっはっはっ！ これは……。召喚の雛！ おまけに最弱の雛ではないか！」

途端他の二人も笑い始めた。意味のわからない真一はただただ三人を眺めていた。それに気づいた所長は、バックを持っていた男に何か言い、それを受けた男が真一の前にバックを置いた。

すると、中からサッカーボールぐらいの大きな黄色い雛が顔を出した。怯えた様子できよるきよると頭を動かしている。サイズが大きいのにしろ、その姿形は見覚えのあるものだった。

「……ひよこ？」

黄色い毛がふわつとして、くちばしが少し濃い黄色だった。小さな黒い瞳はまん丸としていて可愛らしげだった。その瞳がじっと真一を見つめた。

「ひよこじゃったか……。やはりシンイチの魔力ではひよこか。半分予想はしておったが……」

ヨウはなぜかため息を漏らし残念な様子だった。が、真一は違った。そのひよこをじっと見つめている。

「こつち来いよ」

真一が椅子から地面に手を伸ばすと、ひよこは短く「ピー」と鳴いた。そして、小さな歩幅を一生懸命動かし近寄るとそのまま手のひらに乗ってきた。手のひらを大きく広げないと持てない大きさだったが重さはほとんどない。黄色いの毛がふわふわとしている。

「……シンイチ」

その声でヨウの顔を見ると、いかにも嫌そうな顔をしている。

「あやつらが馬鹿にしておるのは、ひよこが産まれたからじゃ」

真一は首を傾げた。さらにヨウは続けた。

「ひよこはパラグの雛で最弱、その弱さ故に食用とされとる。自然孵化した雛が出来損ないのひよことして産まれる。それを見つけた人間が取り、食用としておる。それなのにじゃ、シンイチが触ったにも関わらず孵化したのはひよこじゃった。人が触った卵はよほど魔力が低くないと、ひよこは産まれん。じゃから馬鹿にしとるんじゃよ」

見れば男三人は腹を抱えまだ笑っている。それを見計らい真一はぼそつと声を出した。

「……それは別にいいんだけどよ、なんであいつ召喚の雛ってわかつたんだよ」

「それは卵の殻じゃよ。見てみい」

トートバックから見える殻の破片を見ると、黒い水玉模様なものが付いていた。

「あれで何の卵かわかるんじゃよ。もちろん、触った人間に影響して変わる」

すると、いきなり入り口の方から図太い声が聞こえた。

「所長！ 私だ、マイクだ！ 少々尋ねたいことがある！」

笑いながら本に書き込んでいた所長だったが、その声に手を止めた。

「ああマイク様いらっしやいませ。どうぞ、こちらへ……」

本をぱつと消すと、慌てて席を立ち入り口へと向かって行った。

部屋には男二人と真一が残された。ひよこを手に使っていた真一に

対し、荷物を持っていた男がその荷物を真一へと投げつけた。そのせいでひよこが床に転げ落ちた。そして、男が真一に近づくと右の二の腕に黒い布を巻きつけた。

「何すんだよ」

「これは身分の証。……貴様がサモナーしかも最弱だと言うことはわかった。どこへでも行け、警戒した私たちが馬鹿だった」

舌打ちをし、苦々しい表情のままその男二人も部屋から出て行ってしまった。

「……よくわかんねえけど、終わったみたいだな」

呆然としていたが、しばらくして真一は荷物を担ぎ椅子から立ち上がった。

「しかし、木からできた卵から雛が孵るなんて……信じられねえけど本当だったんだな。これを見せるためにパラグの卵をわざわざ取りに行ったのか」

そう言うつと床に転がっていたひよこを拾い上げ、トートバックの中へと納めた。

「いや、まあそれもあるが……シンイチ。まさか……そのひよこ、連れて行くなどと言うのではないじゃろうな」

ひよこは抵抗する気がないのか、暴れる様子もなくトートバックの中でじつとしているようだった。

「当たり前だろ。食用にされてたまるかよ」

「なんじゃと！ 絶対ならん！ 馬鹿にされるだけじゃ！ おまけに役に立たん！ 城へ向かう時の荷物になるだけじゃ！ 置いて行け！」

必死の形相で訴えるヨウを無視し、シンイチは入り口へと向かって行く。

「ただでさえ、シンイチの格好で目立っておるんじゃぞ？ そんなもの持って歩くとなると余計ひどくなるわい！ じゃから……」

「うっせえよ！」

真一の睨み付けるような視線とその声に、ヨウは思わず口を閉ざ

した。一方で、叫んだ後真一は一呼吸を入れた。

「……役に立たねえとか馬鹿にされるとか、こいつには関係ねえだろうが。俺らがこいつを孵したんだ。その責任があるんじゃないかよ」

そうぼそつと言うと俯き加減に歩いていく。ヨウもそれ以上は真一に対し言うことができなかった。

すると、いきなり何かにぶつかった。衝撃で真一が顔を上げると短髪の丸々と太った男の顔があった。

「おおこれだ。よし。買った」

と、真一の顔を見ながら一言言った。満足そうに頷いている。

「ありがとうございます、マイク様。ではこちらに署名をお願い致します」

横には所長がおり、手にはいつの間にか先ほどの本を広げて持っている。そして、そのページに男　マイクが手を当てサインをしている。

意味がわからない真一はその二人の横を通り過ぎようとした。入り口は目の前だった。出ようとしたその時、急に後ろから肩を掴まれた。

「待て！　どこへ行く？」

所長の声に足を止め、振り返った。

「調べは終わったんだろ？　どこへ行こうが俺の勝手じゃねえか」

「馬鹿か貴様。マイク様を買われたのだ、聞こえていただろう」

「は、買われた？　何だよそれ」

真一のその言葉に所長とマイクは互いに顔を見合わせ、笑い始めた。

「はっはっはっ！　やはり、このサモナーは変わっているな！」

「全くその通りです」

所長が笑うのをやめ、咳払いをするとにやりと笑い真一に言った。「貴様の職はサモナーだ。そして、たった今このマイク様に雇われた。……理解できたかな？」

「サモナー？ 雇われた……だと？」

状況を飲み込めない真一の様子を見て、マイクは肉を揺らしながら再び笑った。

【第一章 イタワ島】暗い森の中で（前書き）

作者からご報告とお詫びです。

前話において、真一が持つて帰ったパラグの殻の水玉模様を『赤』としていましたが、『黒』と変更させていただきました。なお、すでに改訂しております。そのことをご報告申し上げると同時に、投稿してしまった話の内容を変更いたしましたことのお詫び申し上げます。

【第一章 イダワ島】暗い森の中で

陽は海へ落ち、真っ暗な暗闇が覆っている。外灯もない森の中、すぐ先も見えない真っ暗な道を真一は用心深く歩いてきた。先ほどまで町にいたのに森へと逆戻りしたのだ。それは真一を雇ったマイクの一言だった。

「私は……珍しい物が好きでね」

柔らかそうなソファに腰掛けているマイクが言った。その前には真一が黙って立っている。

「若い頃は様々な場所を巡ったものだよ。譲り受けた財産もあつたしな。そのおかげか、この島では一番の富豪だ。収集にも疲れたしこのまま隠居する予定だった」

今真一たちがいるマイクの家は、他の家とは比べものにならないほどの大きな家だった。他の家は隣同士と密接しているのにも関わらず、この家は庭までついた広い土地に立っていた。内装も見たこともない植物や像が置いてあり、今の言葉を現しているようだった。「しかしだ。このイダワ島の森にフェル草の実があるという噂を耳にした。どんな物が気になり、どうしても手に入れたいと思った。

……だが、もう歳だ。広大な森を一人歩けそうにもない。……この意味わかるかな、サモナー」

「……その実を見つけたら船に乗せる、そう言う意味だろ」
そう真一が言うと、にやりとマイクが笑った。

「そう言うことだ。もし見つけることができたなら、オーナーである私が乗ることを許可してやる。だが！もし、見つけることができなければ……死ぬまで私の世話するという約束をもらう。それにお前は珍しい格好をしている。置いておくにしろ、十分コレク

シヨンとしての価値はあるからな」

真一の袴と黒髪を見て満足そうに頷いた。

「……見つけりゃいいんだろ」

「ああそうすれば私も文句を言うまい。ところで……」

マイクは前のめりになり、真一の様子を訝しそうに眺めた。

「サモナー、一体何をしているのだ？」

真一はマイクの顔を見ることなく、弓に弦を張り右手にかけをつけ始めた。

「準備だよ。もう陽が傾きかけてるし、このまま森に入ったら真っ暗だろ。何が出てくるかわかんねえし、自衛のためだ」

すると、マイクは怪訝そうな顔をした。

「自衛のため？ サモナーならサモナーらしく何かを召喚すればいいだろう。……あ、そうか。お前は魔力がほとんどないらしいな」

ふんと鼻で笑った。

真一は弓の状態と弦の状態を確かめ、袴の紐を結び直した。かけ袋をトートバックに入れ、中に入るひよこの様子も見た。ひよ

こは窮屈な袋の中でじっとしていて、覗いた真一の目をじっと見た。

そのトートバックを肩から提げ、矢筒をたすきをかけるようにし背中を回した。そして、玄関へと向かって行く。

「おっさん」

扉を開ける前に真一は立ち止まり顔だけ振り向いた。

「俺はサモナーじゃない、萩野真一って言う名前だ」

そう言い残し、家から出て行った。

「はあしかし、シンイチのあの言葉！」

肩に捕まるヨウは、にやにやと笑いながら夜空を見上げていた。

「俺はサモナーじゃない、ハギノシンイチって言う名前だ、かあ！

ふふ、あやつ呆気にとられたような顔しとったぞ」

「うるせえな！ お前もぼつつとする暇があったらフェル草探せよ！」
足元も目を凝らさないと見えないぐらいの暗さだった。真一は地面を用心深く見ながら、頭をきよるきよるとしている。

「フェル草の実のお……。わしも聞いたことはあつたが、実際に見たことはないの。昼に来たフェル草が生えとる場所に行くしかないの」

「お前、場所覚えてないのか？ こんなに暗いと足元見るのがやつとだ」

「うーん……。覚えておらんの。森を歩き回って探すしかないじゃろうな。しかし、灯りでもあればいいんじゃないか」

ヨウが何かを見つけた。視線を落としていた真一も何かの気配を感じ顔を上げた。

見ると木々の間から灯りが揺れている。誰かがいるようだった。

しかし、灯りの動きが激しく、足音が徐々にこちらに近づいている。

「なんじゃろうな……」

「さあ。こつちに来てるのは間違いなさそうだな。……ちょっと近づいてみるか」

灯りを目指し、暗闇の中歩を進めて行く。無音だった森の中に、足音と荒い息遣いが大きくなっていく。

そしてそれは目の前に現れた。

「わっ！」

「きゃっ！」

不意に横からぶつかり、その衝撃で真一は尻餅をついた。見ればそこに女が同じように尻餅をついていた。

暗くよく確認できないが、ローブを着ているようでフードを頭から被っている。そのフードの陰から顔がうつすらと見えた。

「ご、ごめんなさい！ 大丈夫？」

「え、ああ大丈夫。あんたこそ……」

釣り目の目鼻立ちがはつきりとした顔だった。その顔に、思わず

ヨウが感嘆の声を上げた。

「おおかわいい女子じゃ！」

そんなヨウの声を無視し、真一は土を払いのけながら立ち上がった。すると。

「助けてほしいの！ 魔物に追われていて……お願い！」

と、女が必死の形相で言った。そして同時に真一の背中へと回りこむと、周囲を注意深く様子を見ている。

「なぜだかわからない……今までこんなことなかったのに急に魔物が現れたのよ！ きつと今も……こちらの様子を伺っているはず。

このままだと貴方も危険だわ！」

「ちよ、ちよつと！ 魔物？ あんた一体……」

「貴方、身分は何？ 主魔術でもいいわ！ 教えて！」

肩越しに女の顔を見ると、焦っているかのように眉間に皺を寄せ目を見開いていた。

「俺は……サモナーらしい。召喚魔術を……扱えるらしいけど」

しどろもどろで答えた。すると、女はあからさまに落胆の表情を浮かべた。顔に手を当てショックを受けているようだった。

「……そう。それは……そうなの。でも、やるしかないわね……」

このまま町へ戻るのも危険だし……。私が命を張つてでも……」

なにやらつぶつぶと呟いている。真一は理解できず思わず首を傾げた。と、同時に周りに意識を高めた。女の言っていることに嘘はなさそうだった。確かに何かを感じる。見られているような、観察しているかのような、耳を澄ませば何かしらの音が聞こえる。何かがかすめるような音だ。

「シンイチ、この女子の言う通り何かおるぞ。気をつけるんじゃ……」

緊張感が漂つ。何もしていないのに、背中に汗が流れ落ちてく。すると、背中の方から赤い灯りが見えた。思わず振り返ると、女が両手の手のひらで丸いボールのようなものを作っていた。ボールと言っても透明で光そのものように見える。そこへ真後ろからバサ

ツと言う羽ばたく音が聞こえた。

「後ろ！」

女が叫ぶと同時に振り返ると、そこには道場にいたカラスと同じ姿形をしたカラスがいた。気をとられていたせいか、振り返った時には鋭いくちばしを今にも振り下ろさんとしていた。

「あ……」

「シンイチ伏せる！」

勢いよく振り下ろされてくるくちばし。ヨウが叫んだにも関わらず真一の動きが一步遅い。このままでは突き刺さってしまう、そう感じた刹那、真一の目の前が赤い光の壁に覆われた。

”ボツ”

「ギヤアアア！」

その壁にはじかれたように、カラスのくちばしが跳ね返された。同時に触れたためなのか、カラスのくちばしの先端から赤い炎が上がっていた。頭を振りながら再びカラスが森の闇へと消えていく。

真一はその様子を呆然と見ていた。突っ立っていると、後ろにいた女が心配そうに顔を覗きこんできた。

「大丈夫？ …… ああよかった。怪我はなさそうね。ひとまず追っ払うことはできたけど、魔物はすぐに来るはずよ！ 早くこの場から去りましょう」

「ああ……あんた一体……」

すると、女はくすつと笑いこぼした。

「私はダリイ。自衛魔術を主魔術としているわ。さあ行きましょう」

走りながら前を走るダリイの話を聞いていた。ダリイも探し物を見つけるために森へ入ったようだった。

「……魔物が姿を現す前に早く見つけないと。このままじゃ町へ帰れないわ」

足早に森の中を進んで行く。遅れをとらないように真一もその背中を追っていた。

「あんたも探し物があるのか。何探してんの？」

「フェル草よ。あと少して生えているところに着きそうだったのに

……」

「フェル草だった？ 俺もその場所に行きたいんだよ！」

その声にダリイの足が止まった。振り返った顔は少し怪訝そうな顔をしてた。

「貴方も、フェル草がほしいの？ ……それはどういう理由で？」

「俺はフェル草自体じゃなくて、その実がほしいんだ」

「実？」

ダリイは眉をひそめた。そして、そのまま視線をはずすと考えるように口元に手を当てた。

「……そういえば噂は聞いたことあったわ」

「じゃあやっぱりあるんだな。その場所まで連れてってくれないか。邪魔はしねえから」

「……フェル草目当てじゃないのなら……連れて行ってもいいわ。

その代わり、フェル草には手を出さないと約束して」

そう言うと言一の返事を待たずに再び森の中を走り始めた。

「ああ約束する。じゃあよろしく」

荷物を担ぎ直し、その背中を追うように走り始めた。

暗い森の中、ダリイの姿が赤い光によってぼんやりと確認できる。先ほど見せた赤い光を作っているのか、背中からは確認できない。がそのおかげである程度周りの様子が伺えるようになった。昼間と同様に細い木々が生え、その間を闇が隙間なく埋めている。何を目印に走っているのかわからなかったが、ダリイは迷う仕草も見せず黙ったまま走り続けていた。

【第一章 イタワ島】暗い森の中で（後書き）

【第一章 イダワ島】狙う魔物

「こりゃ早く着きそうじゃの。……あの女子、さっきの魔術を見る限り自衛魔術を使うみたいじゃ。多少はカラスに対抗できるじゃろう」

肩にしがみ付くヨウが続けて言った。

「にしても……誰がカラスなんかを召喚しておるんじゃ。またわしらを狙っておると言うことか？ それとも自然発生したのか……ぬうわからん」

「何にせよ……俺らの目的はフェル草の実なんだ。それが取れりや何でもいいんだよ」

すると、前を走っていたダリイの足が止まった。それに釣られ真一もその横で足を止める。

地面一面に金色の淡く輝く草が生えていた。昼間にはなかった数で、それはまるで黄金の草原のようだった。淡い黄色の光が辺りを覆い幻想的な灯りに包まれている。

「ここが……フェル草が生える場所よ」

ダリイは息を切らしながらも足元に生えているフェル草を摘み取った。

「これでなんとか生きていける……。私はここでフェル草を摘み取るわ。貴方は実を探すんでしょ？ 頑張って」

そう冷たく言うのと黙々とフェル草を摘み取り始めた。

「ああ。助かった、ありがとう。じゃ」

更に奥へと行こうとした時、トートバツクが急に暴れ始めた。

「……ん」

中を覗くと、ひよこが小さな羽根を動かし、出せと言っているかのように暴れていた。真一は仕方なくひよこをトートバツクの中から出すと、ひよこは嬉しそうに何度も跳ね「ピーピー」と鳴いた。

ダリイは思わず手を止め、ひよここと真一をじっと見た。

「最弱の雛……。貴方、さっきまで暗くて見えなかつたけど変わった格好してるのね。その道具と着ている物は何？ それに髪の色……。その上サモナーだなんて。派遣所で馬鹿にされなかつたかしら？」

そう言うのと再びフェル草に目を落とし、草を摘み始めた。真一はその言い方と態度が気に入らずむっとなつた。思わず口調がきつくなる。

「俺にとってはこれが普通なんだよ。これは自衛用。……ともかく、邪魔したな」

そう言いひよこを拾い上げトートバックの中へと入れようとしたが、ひよこは暴れ再びフェル草の上に落ちてしまった。するとひよこは小さな歩幅でフェル草の奥へと進んでいく。

「あ、待て！」

何かを指しているかのようにだった。淡く黄色に光る道をただ真っ直ぐ奥へ進んで行く。真一も拾い上げようとはしたが、何かを感じそのままひよこが進むがままにした。

「……何しとんじゃシンイチ。あのひよこ、逃げてしまつぞ」

「いや、あいつ……。実は俺たちが探している物の場所、知ってるんじゃないのかな」

「はあ？ んわけなかるう！ あいつひよこじゃぞ？ 言葉もしゃべらんのに、理解できとるわけないじゃろ」

そんなヨウの言葉を無視しひよこの後ろを歩いて行く。が、急にひよこの進むスピードが速くなつた。一目散に木々の間を進んで行く。その姿を見ながら真一の歩みが止まつた。

「見てみい、ただ歩き回つておるだけじゃ。今に戻つてくるわい」「いや……。見てみるよ。あれ」

そう言い真一は指差した。その方向を見ると なんとパラツグの木があつた。木々の隙間から太く大きな幹が姿を見せていた。

そしてその木の下には、ひよこが真一たちが来るのを待っているかのようにちょこんと座っている。

「なっ……なんでじゃ。昼間あれだけ苦労して見つけたパラッグの木が……」

「やっぱりあのひよこ、何か知ってそうだな」

真一はパラッグの木に向かって走って行った。

昼間と同様パラッグの木の周りは円形で広い空間になっていた。

昼間では気づかなかったが一面の原っぱの間から、淡く黄色に光る草が生えていた。それは間違いなくフェル草だった。そのせいなのか、パラッグの木の周りも淡く光を帯びている。

「気づかなかったな。この草の中にもフェル草があったなんて。…

…ってことはやっぱりフェル草の実はパラッグの木に生ってるんじゃないのか?」

幹に触れると温かい。暗いが卵がたくさんなっていることだけは確認できた。

「いや、パラッグの木にフェル草の実が生るとは考えにくいの。あるとすれば……この周辺の原っぱの中じゃろうの。探すしかあるまい!」

「そうだな」

ヨウも真一の肩から降り、真一も弓と矢筒を地面に置いた時だった。

「ピィ!」

と、ひよこが今までで一番強く鳴いた。その鳴いた方向を見るとパラッグの木より少し横に離れた所でちよこんと座っている。真一と目が合うとまた「ピィ!」と強く鳴いた。真一とヨウは互いに目を合わせた。

「……あいつ何か見つけたのか」

「わからん。ひとまず行って見た方がいいじゃろ」

ひよこの元へ駆け寄ると、草の間から強い光を放っている。手を伸ばしそれを拾い上げた。

胡桃のような形だったが、その実から光が出ている。まともに見れば目が眩むのほどの強さだった。

「これ、フェル草の実……だよな」

「おそらく、そうじゃろう。噂は本当にあつたんじゃな」

「これが実か……すげえな」

真一はその実を大事そうにトートバックの中へと入れた。そして、地面に座っていたひよこの前に手を差し出した。するとひよこは乗り、真一はそのままひよこを自らの頭の上に移動させた。

「……何やつとんじゃシンイチ」

呆れ顔でヨウは頭の上に乗るひよこを見た。そんなヨウも真一の肩へと乗っている。真一は置いていた弓と矢筒を拾い上げ、矢筒をたすきのように肩から提げ背中に回した。頭を普通に下げたがひよこは踏ん張っているのか落ちない。

「いや、見つけてくれたのにバックの中に押し込めるのも悪いなって思ってさ。すごいなあ、ピイ」

「ピ、ピイじゃと？」

驚いた顔をして真一の顔を見た。が、真一は嬉しそうな顔をして頭に乗るひよこを撫でていた。

「名前なかったからな。今日からお前、ピイな。馬鹿にする奴らを一緒に見返してやろうぜ。いいな、ピイ」

「ピイイ」

猫がのどを鳴らすかのように、ピイも撫でられるのが気持ちいいのか目を瞑っている。ある程度撫でて手を下ろした真一はパラッグの木を背にその場から歩き始めた。

「じゃ、さつさと戻っておっさんに実渡そう。お前、上空に上がって町がどの方向にあるのか見てくれよ」

「ぬう……わしにもちゃんとした名前があるんじゃが……」

と、その時だった。暗い森を裂くかの如く、叫び声が響き渡った。「きやああああ！」

はっとしてその方向を見た。それは歩いてきた道、その道には出会ったダリイがいるはずの場所だった。

「シンイチ！ 今の声は……」

ヨウが言うのが早いのか、真一はすぐさまその道へ駆け出して行った。生えているフェル草の上を走って行く。その灯りに照らされた道のずっと向こうに、赤い光が見えた。が、その手前には黒い物体が立ち塞いでいた。

黒く長い尻尾が見える。黒く大きな背と、頭を振りかぶるその度に見える黒いくちばし。

それは紛れもなく、先ほど追っ払ったカラスだった。何かをついついているのか、くちばしを振り下ろすたびに”ボツ”と言う火が燃えさかるような音が聞こえる。

「赤い光といい……この音といい……まさかあのカラスがつついておるのは……」

すると、真一はおもむろに背負っていた矢筒と提げていたトートバックを地面に落とす。何かを察したピイも頭の上から自ら地面へと落ちた。

「矢筒から矢を出せ！」

と、突然叫んだ。驚いたヨウは慌てて地面に落ちた矢筒を開け、中から一本矢を取り出した。一方、真一は集中を高めているかのようには目を瞑りゆっくりと足踏みをした。ヨウから矢を受け取った真一は矢を弓へと番えゆっくりと弓を引く動作に入った。

真つ直ぐカラスの頭を狙う。弓を慎重に打ち起こし、その頂点からゆっくりと弓と矢を引いていく。が、ここで異変が起こった。卵を受け取った際に痛めた腕が疼き始めた。腕に力が入らず歯を食いしばる真一。

「……くそっ！ 弓が……引けねえ」

震える腕でなんとか引こうとする真一に対し、カラスが何かを察したのか急に振り返った。遠くからでも見える漆黒の瞳が真一を捉えた。

「いかん！ シンイチ、カラスがこっちに気がついた！ 逃げるんじゃないー！」

カラスは体の向きを変え、脚力を使い一気に飛び立つと早いスピ

ードで真一に向かって飛んできた。が、真一は逃げる仕草を見せず
どうにかして弓を引こうとしている。逃げても間に合わないと察し
たヨウは、真一の目の前に飛び出てきて宙に浮かんだ。

「なっ！」

「わしが守る！ シンイチはその間に逃げるんじゃ！」

そう叫び両手を真っ直ぐ伸ばした。その両手から赤い光がどんど
んと膨らんでいる。が、ヨウの目の前にはカラスが鋭いくちばしを
向け飛び掛ろうとしていた。

カラスのくちばしの先端がヨウの頭に目の前に来た。カラスはヨ
ウが見えているのか、気のせいか視線がヨウに向けられている。真
一は痛みを堪え、弓を引いた。焦る気持ちを抑えカラスの頭に狙い
を定めた。ヨウにくちばしが突き刺さりそうな瞬間、突如爆発音と
ともにヨウの目の前に炎の壁が出現した。

「くっ！」

ヨウは苦痛に顔を歪めながら両手を前に突き出していた。間一髪
カラスのくちばしを防いだのだ。がその炎の壁を突き破り、カラス
のくちばしの先端が見えている。防いだにも関わらず、カラスは炎
の壁から引くことなく尚ヨウに向かってくちばしを突き刺そうとし
ていた。

「おのれ……こ、ここまでか……」

そう呟くと、ヨウは突き出していた両手をだらりと下げた。する
と、燃えさかっていた炎の壁が見る見るうちに小さくなっていく。
じりじりと大きくなっていったカラスの先端が、一気にヨウに向かっ
て突き刺さろうとした時だった。ヨウの後ろから弦をはじく音が響
いた。

”バシッ”

炎が消え去り、そこから姿を現したのは頭に矢が突き刺さったカ
ラスの姿だった。脳天に矢が突き刺さり目を見開いた状態で固まっ
ている。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

真一は残心の状態で荒く息をしていた。カラスが動くのではないのか、そんな不安を感じているのか目を見開きカラスの動きに集中していた。

「が、その時だった。」

「えっ」

目の前にいたヨウが、ぐらりと体を傾けるとそのまま地面へと落ちていく。

そして、音もなくフェル草の上に落ちるとそのまま動く気配がなくなってしまうた。

【第一章 イタワ島】見せない気遣い（前書き）

今まで『！』や『？』の後に空白を入れておりませんでした。それが文法上間違いだと最近知りました。

ですので、改訂しております。

もし、まだ発見されましたらご一報をくださいますよう、お願い申し上げます。

【第一章 イダワ島】見せない気遣い

真一はその場に弓を置くと、すぐさまヨウに駆け寄った。仰向けに倒れているヨウの顔を見ると、目を閉じ意識がない。その小さな顔に軽く指で叩いた。

「しっかりしろ！ どうしたんだよ！」

すると、目の前にいたカラスが突き刺さった矢の元から黒い砂と化していった。さらさらと音を鳴らしながら体全て砂になると、そのまま崩れ落ち、風がその黒い砂を消し去っていった。まるで何もなかったかのように、再び静かな森へと変わった。が、真一はそうではなかった。

「目、覚ませよ！ おい！」

何度も何度もヨウの頬を指で叩いた。が、一向に目覚める気配がない。カラスが消え去ったことにさえ気づかずひたすらヨウの頬を叩いていた。すると、そこへゆっくりとした歩調でダリイがやって来た。

「魔物は……。まさか、貴方が魔物を？」

見れば腕の袖口が焼かれたようにボロボロになっている。腕を力なく前にだらりと下げ、左手で右の腕の痛みに堪えていた。ダリイの声にはっとして顔を上げた真一だったが、怪訝そうな表情でダリイを見た。

「……何で急に意味わかんねえ言葉しゃべってんだよ」

すると、真一の言葉を聞いたダリイも驚いた顔をした。

「何？ 何を言っているの？」

必死に訴えているダリイだったが、真一には意味が伝わらず首を傾げた。先ほどまで通じていた日本語が急に通じなくなり、ダリイのしゃべっていた言葉が理解できなくなってしまったのだ。

「貴方が魔物を倒したんでしょう？ だったら私はお礼をしたい。貴方の名前は何と言うの？」

そうダリイは真一に訴えていたが、真一は理解できず首を大きく横に振った。

「何言ってるのかわかんねえよ！ あんたに構ってる暇ないんだ！……おい、目覚ませよ！」

再び真一はヨウの頬を叩き始めた。が、ダリイには真一が一人空中を指で横に振っているようにしか見えなかった。そんな真一をじつと見ていたダリイだったが、何かに気がつき驚いた表情で言った。「貴方……その左腕についている赤い二つのリング！ それは使魔との契約の証じゃない！」

「ん、使魔だつて？」

ダリイの発せられた言葉の中にはつきりとシマと言つ言葉が聞こえた。思わず真一は手を止め、ダリイに向け言った。

「あんたこいつ……使魔が見えるのか」

「使魔を扱っているなんて……貴方一体何者なの？ 貴方の言葉が通じなくなつたのも、きつと使魔の魔力が少なくなつて気を失っているためだわ。ちよつと待ってて。近くにパラグの木があるなら、何とかなるかもしれないわ」

「……使魔とパラグしか聞き取れねえよ」

ダリイは待てとも言っているかのように、両手の手のひらを見せている。真一はただ困惑するしかなかった。

が、近くにいたパイは理解できたのかダリイの足元へ寄って行く。「パイ」と鳴いた。

「最弱の雛？」

「パイ、お前言葉がわかるのか」

そう真一が言つと再びパイは「パイ」と鳴いた。そして、再びフェル草の上を飛び跳ねながらどんどんと進んで行く。それを啞然として見ているダリイだったが、真一が声をかけた。

「あんた、パラグがどうのここの言つてたけどあのひよこが知ってるぜ。行きたいならついて行けよ」

そう言つと、再びヨウの頬を叩き始めた。

「……よくわからないけど、あの難についていけばいいのかしら。貴方はここで待っていて、すぐ戻るから」

右腕の痛みで顔を歪めつつも、先に行くピイの姿を追いかけた。行った。

フェル草が淡く真一を照らしている。その淡い黄色の灯りでヨウの金色の髪の毛が輝いて見えた。が、いくら叩いてもヨウは目覚めることなく目を閉じたままだった。

「……くそっ！」

思わず、かけをつけている手でフェル草を叩いた。何度も叩いた。ばさばさと、草が揺れる音が激しく鳴ったがそれでもヨウは目を開けようとはしない。苛立つ真一の頭に、突然何かが乗る感覚があった。はっとして顔を上げると、頭の上から「ピイ」と言う鳴き声が聞こえた。

「ピイ。戻ったのか」

すると、ダリイも走ってきてそのまま真一の横へと跪いた。急いできたのか息を切らしている。その手には手のひらに収まるほどの濃い緑の葉を一枚持っていた。

「これを……使魔に与えて」

そう言って葉を真一へと差し出した。真一には何を言っているのかわからなかったが、シマと言う単語と葉を受け取ったので大体予測がついた。受け取った葉は見た目以上に重く、薄荷のような匂いがした。

「鉄みたいに重いな。……これを食べさせればいいのか？」

葉をヨウの口の上に掲げ手を上下させた。それを見たダリイも、ヨウは見えないが行動の意図が見えたので頷いて見せた。

「わかった」

真一は葉の先をヨウの唇の間へと押し込んでいく。口が開いているのか葉は簡単に口の中へと入っていった。そして、全ての葉が口へ入るとヨウがもぐもぐと口を動かす始め、それを飲み込んだ。飲

み込んだ途端、ヨウの体に絡みつくように黒い光がぐるぐると集まってきた。その光はヨウの体ごと浮かせると少しずつ上昇していく。そして、はじけるように光が四方に飛んでいくと、その中からヨウが呆然と空中に浮かんでいた。

「ヨウ！」

真一の声にはつと意識を回復させた。そして上空から真一の目の前まで降りてきた。

「シンイチ！ 無事じゃったか！ ……わし、カラスの攻撃を防いだ後から記憶がないんじゃが……カラスはどうなったんじゃ？」

「もういねえよ、馬鹿」

真一は体の力が一気に抜けたのか、背筋を曲げ首をもたれ、大きく息を吐いた。

「ねえ私の言葉わかる？」

隣に正座をしていたダリイが真一の肩を叩いてきた。

ヨウもその時ようやくダリイの存在に気がついたようで、目を生き生きと輝かせながら真一の肩にしがみ付いてきた。

「おい、シンイチ。えらく親しげにしとるようじゃが、何かあったんか？」

そう言ったヨウの頭を思わず叩いた。

そして、すぐさまダリイに顔を向け答えた。

「ああ。わかるぜ。俺の名前は萩野真一。……まあシンイチでいいよ。あんたのおかげで、こいつが助かったし。ありがとう」

「シンイチ……ね。パラグの葉は魔元素を多く含んでいるから、魔力を使いすぎてしまった時にはよく効くのよ。でも……貴方が使魔との契約者^{マスター}だなんて」

その言葉にヨウがびくつと反応し、すぐさま真一の肩から離れた。上空に浮かび上がり睨みつけるようにダリイを見下ろしている。

「シンイチ。なぜ、この娘はシンイチがマスターと知っておるんじや？ 赤いリングの証は一部の人間にしか知らぬはずじゃ」

先ほどと打って変わってのただならぬ雰囲気。真一は首を傾げた。

すぐダリイへと視線を戻すと、努めて冷静にしゃべった。

「ダリイ……さんだっけ。あんた、なんで俺に使魔がいるってわかつたんだ？」

「ああ、それは貴方の左腕を見ればわかることだわ」

そう言いながら指差したのは赤い二つのリングだった。

「それは使魔との契約者の証。軍に属したことのある者なら誰でも知っていることよ」

「軍？ ……なんだそれは。あんた何者なんだ？」

警戒する真一に気遣ったのか、ダリイは笑みを見せ立ち上がった。「安心して。私は軍をやめた者よ。……どこにいるかわからないけど、使魔、貴方を捕まえようって言うわけじゃないのよ。ただ私は、シンイチに助けもらった。それに対してお礼がしたいだけ。それだけよ」

ダリイは何もない空に向かってしゃべりかけた。ヨウが見えないせいなのだろう、頭を左に右にと動かしている。真一も立ち上がりヨウを見上げた。ヨウは黙ったままダリイをじっと見ていた。

「あんた元軍人なのか。軍に属しているのといないのとじゃ、何が違うんだ？ それに、使魔を捕まえるって言うのとどういう関係があるんだ」

「……貴方、格好と言い知識のなさと言い……アラウの人間じゃないのかしら」

「ああ、俺は地球の日本ってところから来たただの凡人。だから、あんたがちゃんと説明してくれなきゃあいつが警戒しっぱなしなんだよ」

そう言い再びヨウを見上げた。釣られてダリイもその方向に顔を向けた。ヨウは眉間に皺を寄せ困ったような表情をしていた。

「わかったわ。ちゃんと話をするから、ひとまず私の家に案内する。こんな所で話すのもあれだし、家で私の帰りを待つてる子もいるから。付いて来て、森には慣れてるから迷わずすぐ行けるわ」

そう言うと真一に背中を向け歩き始めた。真一も弓や矢筒、トー

トバックを担ぎ直しその背中を追うように歩き始めた。が、すぐに足を止め振り返った。

「おい！ いつまでそこにいるつもりなんだよ！」

その真一の声にヨウは驚いたように体をびくつとさせた。が、すぐに真一の元へ戻ろうとせず視線を避けた。ただ浮いている。

「つたく！ お前は俺の使魔なんだろうが！ さつさとこつち来いよ！」

その真一の言葉に、驚いているかのように真顔になっている。が、徐々に頬を緩ませていくと嬉しそうに笑った。そして、すぐさま真一の肩へとしがみ付いた。

「ふふ」

「……なんだその顔」

ヨウに呆れながらも先を歩くダリイを見失わないように歩き始めた。

すると、ヨウがぱつと笑顔をやめ、深刻な表情で真一の顔を覗きこんできた。

「シンイチ……まさか男の趣味ではないじゃろうの」

と言う言葉に真一はヨウを睨みつけた。一方でそれに気づかないヨウはため息を漏らしつつなお続けた。

「残念じゃが、わしは女子にしか興味がないんじゃよ。すま……」

ヨウが言い終わる前に真一が左手でヨウの頬を思いつきり抓った。なぜか、頭の上に乗るパイもヨウの頭を突付けていた。

「いたたたつ！ 何すんじやい！」

ヨウは払いのけ、真一を睨むのではなく頭の上に乗るパイを睨みつけた。が、パイも負けじと唸りながらヨウを見ている。

「男に興味あるわけねえだろうが。ただ、お前がいなくなるとこの世界の言葉がわからねえからな」

「……わかつとるわい！ だからかつただけなのにお……ってそれ知っておるんか」

驚いた様子でヨウが言った。真一は遠くを歩くダリイから目を離

さないまま、歩きながら口を開いた。

「さっきお前が気絶してる間苦労したんだよ。もう気絶なんかするんじゃないぞ、こっちが迷惑だからな」

「……なんじゃ、それだけのことか。初めてシンイチがわしを気にかけてくれたの思ったのにお。……あれ、そういえばわし、シンイチに名前呼ばれたような気がするんじゃないが……」

それ以上真一は口を開くことなく、ダリィからはぐれないよう早足で森の中を歩いて行った。

【第一章 イダワ島】サモナーについて

町よりも森の近くにその家はあった。町ではレンガ造りの縦長の住居ばかりだったが、目の前に建っている家は日本家屋のような木材でできており、屋根には様々な葉っぱが積まれている。窓と思われるものにガラスなどなく、そのまま家の中の様子が丸見えだった。そんな窓から赤い灯りが漏れ、暗闇の中怪しげな雰囲気を醸し出していた。

「ちよつと汚いけど、これが私の実家。さ、入って」

照れ笑いを浮かべながら、ダリイが木の戸に手をかけた。

戸を開けた途端、小さな子どもが一人飛び出てきてダリイに抱きついた。

「お姉ちゃんお帰り！」

「ただいま、サキ」

サキと呼ばれた少女はダリイに頭を撫でられ嬉しそうに笑っている。黒いローブを着て、紫色の髪を肩まで伸ばしていた。サキは、ダリイの後ろに立っている真一に気がつく、すぐさまダリイの後ろへと隠れてしまった。

「サキ、この人は私を助けてくれた人よ。挨拶して」

「サキです。……初めまして」

照れているのか頭だけ出してぺこつとお辞儀だけすると、すぐさま家の中へと入ってしまった。真一はどうしていいのかわからず立ち尽くしていたが、ダリイに勧められ家の中へとお邪魔した。

お世辞にも綺麗とは言えないものだった。部屋は一室のみで、床は土の上に大量の草が敷かれているだけだった。部屋の中には囲炉裏らしい、土を掘った穴とその中心には木の枝が炭になりかけで置かれたままだった。囲炉裏の上には金属の皿が天井からぶら下がり、そこには木の枝が燃えていて灯りの役割をしている。

「はい、サキ。これで三日持たせるんだよ」

そうダリイがポケットから取り出したのは、両手いっぱいフェル草だった。それを受け取ったサキは嬉しそうに笑った。

「ありがとうお姉ちゃん！……食べていい？」

「駄目。大事に布にでも包んでいなさい」

そう言われたサキはしぶしぶ返事をする、布が敷かれてある部屋奥へと行った。

「おい、フェル草って中毒症状があるんじゃないのかよ」

「あるぞ……なんで小娘に。しかも、食べていい、じゃと？」

囲炉裏の前に座っている真一は嬉しそうに丁寧にフェル草を包んでいるサキを見つめていた。そこへ、ダリイがやって来て囲炉裏の前に座った。座ると同時に囲炉裏の中にあつた木の枝に向かって手を掲げ、そこから赤い光の玉のようなものを出すと木の枝に火がついた。

「あの子は誤ってフェル草を食べてしまったのよ。だから、フェル草は必要不可欠なの」

そう言ったダリイはフードを取った。出てきたのは紫色のくるくると跳ねている髪の毛だった。見える顔は少し痩せこけている。

「両親が亡くなってから、私が実家に帰るまであの子は一人だったのよ。だから食べる物なんてなかった。サモナーを雇う余裕なんてないし、生きていくためには仕方ないことだったわ。だから私は軍をやめて、こつやってあの子のためにフェル草を摘み、お金を稼いでいるの」

そう言い終わるとため息を漏らした。

「だからフェル草に手を出さなくて言ったのか。でも、それとサモナーを雇うってのはどう関係あるんだよ」

「何も知らないのね。アラウ国王がサモナー政策を打ち出して以降、サモナーは召使……いいえ、道具同然と扱われるようになったのよ」
「道具同然だと？」

真一の言葉にダリイは頷いた。

「……アラウ国は魔術で成り立っている。国の防衛から民の生活まで……それは全ての人に魔元素と言われる魔力の元を備えているから。そして主魔術に対し、管理するためそれぞれ身分と言うものを一人一人に与えることになった。移動魔術を主魔術にしている者は”テイレナー”と呼ばれ、腕に黄色い布を巻きつけてる。回復魔術を主魔術にしている者は”イシャイナー”と呼ばれ腕に青い布を巻きつけてる。そして……」

そう言うとダリイは右腕のローブをたくし上げ、細い腕を真一に見せ付けた。その二の腕には赤い布が巻かれている。

「自衛魔術を主魔術としている者は”ファイイナー”と呼ばれ、赤い布を巻いているの」

そう言い終えると再びローブを下ろした。

「……じゃあサモナーって言うのは召喚魔術を扱う者のことを差すんだな。これがその証だったのか」

改めて見ると確かに黒い布を巻かれていた。

「だけど、それがどう関係あるんだよ。なんでその中でサモナーだけが道具同然の扱いされなきゃいけないんだよ」

「最初に言った通り、この国は魔術に頼った生活を送っているわ。食べる物でさえ……ね。四つの魔術の内、直接生活に関わる主魔術は召喚魔術だった。道具や食べ物も召喚で簡単に手に入れられるから。だから、召喚魔術を持った人が居れば生活は楽に送れる。だけど、扱う人の数も限られているわ。全ての家に一人扱える者がいるとは限らない。……だから王は決断したのよ」

真一はふと肩に乗るヨウ見ると、頭に手を当てているのが見えた。

「サモナー政策　浮浪者、貧困者に対し使魔の血を飲ませ、無理矢理召喚魔術を扱えるようにする政策」

が、その言葉にすぐさま視線をダリイへと戻した。

「使魔の血だと？」

「血と言っても薄めたもの、ほとんど水に近い液体よ。使魔は別名”魔元素の源”と言われていて四つの魔術を扱えるの。……そのこ

とは貴方自身知っているんじゃないかしら」

「あ、ああ……。そんな別名は知らなかったけどな」

またヨウを見れば頭を抱えていた。

「使魔はそれぞれ得意な魔術があるらしいけど、召喚魔術はどの使魔も特別使えた。その血を飲んだ者は例え薄くても、簡単に土魔元素を体に蓄えるようになり、少しの召喚だったらできるようなった。それを使って、生活の苦しい浮浪者や貧困者に対し派遣所が無理矢理サモナーとして仕立て上げた」

「……そんな簡単になるもんなのかよ」

「ええ。サモナーは触媒があつて魔力があれば簡単にできるのよ。特別な詠唱語もないらしいけど……詳しいことはわからないわ」

すると、サキが部屋の奥からダリイに駆け寄ってきてその隣に座った。

じつと真一の頭の上を見つめている。真一はその視線が気になったが、ダリイは話を続けた。

「それからよ。サモナーの存在がどんどん軽視されていったわ。食べ物や道具を召喚するだけのサモナー。派遣所にお金を払えば誰でも雇うことのできる身分。それに一度派遣所でサモナーと認められてしまうと、一生サモナーとしての仕事をしなくてはいけなかったの。それもサモナー政策に含まれていたから。……その結果、次第に巷ではサモナーと名乗る者に対して、浮浪者や貧困者だと言う認識が広まっていったわ。もっとも被害を被ったのは、浮浪者や貧困者ではない元々のサモナー達よ。そんな人たちでさえ世間から冷たい目で見られるようになってしまった。……実際私も貴方のことを見くびっていた。そうなってしまった経緯を知ってたのに……ごめんなさい」

ダリイは申し訳なさそうに顔を俯かせた。

「いや仕方ないだろ。いきなりでっかいカラスが襲ってきたら誰だって混乱するさ」

「……カラス？ お兄ちゃん、カラスって何？」

興味津々の様子でサキが真一に言った。サキは立ち上がると真一のそばまでやってきて、頭の上に乗るピイに手を伸ばした。

「カラスって最弱の雛のこと？ それにお兄ちゃんはどうして最弱の雛を頭に乗せているの？ 非常食？」

「こら、サキ！ こつちに来て座りなさい」

その声に驚いたサキはすぐさま元の位置に戻り座った。が、相変わらず視線はピイに向けている。

「こいつは非常食じゃない。ペットみたいなもんだよ。それにカラスは黒い鳥だ。見たことあるだろ？」

「ペット？ なあにそれ。黒い鳥なんて見たことないし、鳥は最弱の雛しか知らない。ね、お姉ちゃん」

同意を求めするようにダリイの顔を覗きこんでいる。ダリイも頷いて見せ、訝しそうに真一を見てきた。

「……カラスって魔物のことかしら。アラウには、人以外で動いているものはパラグの雛と使魔ぐらいしかいないのよ。それ以外は魔物とされているわ。なぜ魔物が発生するのか、私は知らないけどシンイチがいたチキュウと言う土地は、不思議な場所なのね」

その言葉に驚いてしまいすぐに言葉が出てこなかった。

「……マジかよ。動物がいないって……。俺からすりゃここが不思議な土地なだけだ」

「ふふ。私からすればシンイチ自体不思議だわ。格好と言い、最弱の雛を大事にしていることと言い……何より契約者だと言うことが一番の不思議ね」

「使魔のことか？」

そう言ってヨウに視線を移すと、うつろな表情のまま呆然としていた。

先ほどからのヨウの様子に、真一はたまらず声をかけた。

「おい、頭でも痛いのかよ」

「……え。いや、なんでもない。わしのことには気にするでない」

無理矢理笑顔を作っているような、引きつった顔している。

と、ダリイ達を見れば首を傾げ不思議そうに真一を見ていた。

「あ、悪い。今、使魔に話しかけたんだ」

「……そこに使魔がいるのね。使魔と会話している人を余り見たことないから、少し驚いたわ」

「使魔とマスターの関係のやつは少ないのか？」

答えようと口を開けたダリイだったが、何か躊躇うと真一から視線をはずし申し訳なさそうに俯いた。

「昔は多くいたそうよ。だけど……軍のせいだ……」

言葉を濁し、少し間を開けたがダリイは続けて言った。

「サモナーも政策で被害を被ったとさつき言ったけど……実は使魔たちの方がもっとひどい目に合っているのよ」

続きを聞きたいと思いい口を開いた真一だったが、視界に顔を強張らせているヨウの姿が目に入った。

「……そうか」

真一は言葉を飲み込むように口を閉ざし、一息ついた。

「そろそろおっさんの家に帰るか……早く本島に行つて城に行かないかな」

城、と真一が言った途端、ダリイはぱつと顔を上げ驚いた表情を浮かべた。

「貴方……アラウ城へ行くの？ どうして？」

立ち上がった真一を驚いた表情でダリイが見つめている。真一は弓や矢筒、トートバックを持ちながら話した。

「……今は俺がマスターになつてるけど、こいつ……使魔の前マスターがその城にいるんだよ。俺はただ返しに行くだけ」

「待つて。そもそも、貴方チキユウと言う土地にいたんでしょ？」

それがどうしてアラウにしかない使魔と契約しているの？」

「急にこいつが落ちて、運悪く血が付いたんだ」

ダリイは何か考え込むように、囲炉裏の火を見つめるとゆっくりと口を開いた。

「なぜそうなったのか、理由はわからないけど……城へ行くのなら、

四人の統治者たちの証が必要よ」

その言葉に真一よりもヨウが驚いたようで、耳元で「なんじゃと？」と声を出した。

「城は警備が厳しくて、軍に関わっていない一般人が入るためには、統治者たちから証をもらわなければいけないのよ。そのまま行つたとしても、追い返されるか自衛魔術に阻まれるわ」

肩に乗るヨウが小さく唸る声が聞こえた。

「じゃあ四大都市を回って統治者に会わなきゃ駄目ってことか」

「そうよ。とても長い……道のりになるでしょうね」

そう言い終えるとダリイは立ち上がり、ポケットの中からフェル草を五枚ほど取り出した。どれも黄色に淡く光っている。それを真一の前に突き出した。

「これ、本当は町で売ろうと思っていたんだけど……貴方にあげるわ」

「え？」

「いいのよ。サモナーならこれを触媒に食べ物を召喚できるはずだから。貴方には助けてもらった、そのお礼だから受け取って」

ダリイは真一の腕を掴み、手のひらにフェル草を置いた。フェル草の温かさが手のひらに広がっていく。そのフェル草を見つめながら真一は言った。

「ありがとう。大事に使わせもらう……って俺が召喚なんてできたらの話だけだな」

「できないの？ ……でもいづれきつとできるわよ。自信を持って。貴方なら城にだって行けるわ。応援してるから」

それから、優しく微笑むダリイに背を向け、真一はダリイの家から出て行つた。

窓からダリイとサキは並んで、真一の後ろ姿が見えなくなるまで眺めていた。

「お姉ちゃん」

「何？」

「変わったお兄ちゃんだったね。見たことない道具と服を着て、それに頭に最弱の雛が乗ってたよ」

「……そうね。でも、あの人が魔物をやっつけてくれたのよ」

「信じられないなあ」

そう言つたとサキは部屋の奥へと行つてしまった。一方、ダリイは見えなくなった真一をまだ見つめていた。

「サモナーなのに、召喚ができないなんて……本当に変わった人」
ダリイは思わずくすつと笑つてしまった。

真夜中の町。誰一人として出歩いていない。マイク邸に行くときだ家の明かりがついていた。玄関を叩けばマイク本人が出迎えた。

「随分遅い帰りだな」

「色々あつて……」

そのままリビングへ通されるとマイクはソファに腰掛け、手のひらを出してきた。

「当然持つて帰つてきたのだろうな？」

「ああ、もちろん」

真一はトートバックの中から輝く実を取り出した。その輝きにマイクも感嘆の声を上げ、受け取るとまじまじとその実を眺め始めた。
「素晴らしい！これがフェル草の実か！よくやった！」

「……約束は守るんだろうな」

立ったままマイクを見下ろしていた真一に対し、マイクはにやりと笑つて見せた。

「当然だ。船には乗せてやる。……しかしよくやった。すっかりお前を気に入ったよ。サモナーにしては上出来だ」

「そりゃどうも」

そう言つて、真一が部屋から立ち去ろうと背中を向けるとマイクが叫んだ。

「待て！ ……シンイチ」

その声に思わず足を止めた。

「今日は泊まっていけ。明日から……お前に休暇を出す、どこへでも行けばいい」

振り返って見ると、マイクは口の端を持ち上げにやりと笑っていた。じつと考えていた真一だったが、少し笑うと答えた。

「じゃあお言葉に甘えさせてもらうよ。……マイクさん」

アラウ城にて

山の上に建っているせいもあるのだろう、城の天候は変わりやすい。ここ最近はずっと雨が降り続けている。窓の向こうから絶え間なく雨音が聞こえ、アラウ国王にとってその音は少しばかり気の治まる音となっていた。

国王は窓越しから雨を眺めながら、呆然と思いに耽っていく。

意見する者が多すぎた。民を一番に考えるべき、と思っけていても周りの大臣たちは、国を第一にすべきだと意見する。

国が栄えてこそ民は幸せ 何度その言葉を聞いただろう。

己の中に、その意見を認める自分と、自分の意思を貫こうとする自分、がいるのだ。

とても疲れている 何もかも放り投げてしまつて、ふらりと旅にでも出たい。

だがそれはできない。国王としての責任から逃れることなど無理なのだ。

さらに、自ら打ち出した政策のせいで民の間で格差が起こり始めている。苦渋の決断だった。

疲れていた それを言ったところで終わるものではない。言い訳にもならない。

だが、他に政策を考えることはできなかった。

『全ての民を幸せにするために、多少の犠牲を伴うことは仕方のないこと』

そう誰かが言っていた。あの時はその言葉を素直に聞き入れることができた、しかし。

” トントン ”

後ろの扉から音が聞こえた。滴り落ちる雨を呆然と眺めていた国王だったが、その音で無理矢理現実へと引き戻された。

「誰だ？」

城の中と言っても、ここは国王の私室だった。私室まで来るものは親しい者しかいない。

「私です。イツチです」

「……入りなさい」

重い木の扉から入ってきたのはアラウ国王の娘、イツチ姫だった。王族特有の黄色の髪色で、後ろで一つに束ねている。白いマントを身に着け、鎖帷子のような動きやすい胴衣を着ている。姫は動きやすさを重視しているのか、短いスカートを身に着けるのが姫独特のスタイルだった。

「国王様、お身体はいかがですか？」

「ああ、大丈夫だ。心配ない」

その言葉とは対照的に、顔色は悪い。蓄えている口髭も、痩せてしまっている頬のせいか貧相に見えた。目元は窪み淀んだ目をしている。

「……何の用事で来たのだ？」

「私の使魔についてです」

直立不動のまま姫は王を真っ直ぐ見つめた。

国王は使魔と姫との様子を知っていた。それを思うと不憫になり、姫に近寄るとその肩に手を置いた。

「……悲しかろう。お前と使魔は良い関係だったからな」

「その使魔がまだ生きていけると言う噂を聞いたのです」

と、姫は冷淡に言った。

「なんと！ 一体それはどこからの情報なのだ？」

「……国王様の友人です」

「ほう、あやつか。ならば信用ある情報なのだろう。しかし……お前は余り嬉しそうではないな」

姫の瞳に生気を感じられない。どこか虚ろな表情で、淡々としゃ

べった。

「生きている……そう聞いただけで虫唾が走っております」

「……何？」

「いいえ、使魔の存在自体が私を苛立たせております。……国王様、失礼ながら意見させていただきます」

そう言うと姫は国王の前に膝をつけ、頭を下げた。

「民の生活は一向によくなってはおりません。おそらく、サモナーの数が足りておらぬためです。……国王様、いっそのこと使魔を全て狩るべきではないでしょうか」

「な、なんだと？ 姫、お前は正気で……！」

「全ては民のためです！」

国王の言葉を遮って姫は叫んだ。国王は姫の言葉にたじろいでしまい、そのまま言葉を失ってしまった。

姫はすつと立ち上がると、国王に対し深くおじぎをした。

「皆が幸せになるためには、多少の犠牲は必要です。……お考えになつてください」

そう言い残すと部屋から出て行ってしまった。

『多少の犠牲』

再び国王の中でこの言葉が引つかかった。

前にも聞いた言葉だったと、国王は思った。一体誰が言ったのかはわからない。

国王は再び胸が苦しくなり、思わず胸座を掴んだ。

疲れている 身も心も。

窓からは雨が落ちる音が絶え間なく聞こえてくる。

ああ私は と国王は再び思いに耽る。

私は一体どこにたどり着くのか。

雨は地に落ちてても、水蒸気となり、再び地に降り立つ。繰り返し、恵みを与える。

私は 落ちていくばかりなのだ、たどり着く地などないのかも
しれない。

国王は軽い眩暈を覚え、再びベッドへと身を預けた。

【第二章 港町シトモン】白いローブと白い仮面（前書き）

第二章の始まりです。どうかお付き合いください。

【第二章 港町シトモン】 白いロープと白い仮面

船上で、陽が七度海へ沈んだのを見た。ゆっくりと進む船からようやくアラウ本島が見えたのは、八度目の日の出を見たあとだった。船のスピードは変わることなく、ゆっくりと進んで行く。穏やかな波で激しく揺れることもなかった。もう目の前には大きな大陸が見えている。

「そんなにイダワ島とアラウ本島は遠いのかよ。七日ぐらいたっただろ」

船上で本島を望みながら真一が言った。起きたばかりなのか、あくびをしている。

「遠くないんじゃないが、船が遅いんじゃないよ。大体、移動魔術があるんじゃないぞ？ それらを使えんものための船じゃない。余り文句を言うでない」

それからしばらくすると、船が減速して行きやがて止まった。

船から降り立った場所は浜辺だった。船に乗っていた人々が次々と浜へと降りて行く。真一もその列の中に入り、本島へと上陸した。「はあ、これが港町シトモンか」

左右を見れば砂浜が湾曲するように続いていた。浜から陸を見ると、イダワ島にあったような建物が立ち並んでいる。その建物を縫うように続く道は、丘になっているためなのだろう坂道となっていた。四角い建物が隙間なく丘に立ち並んでいるが、その一番上、頂上付近に大きな城のような建物が建っている。浜から見上げれば一際目立った建物だった。

「……あれが統治者のいる場所か」

「じゃろうな。……しかし、シンイチ。なかなかロープ姿も似おうとるぞ」

「そりゃどつも」

ため息交じりに真一は言った。

マイク邸から出る時、マイクが真一にフードのついた黒いローブを着させたのだった。おかげで、今真一は真つ黒のローブが全身を覆い、足元はスニーカーを履いているもののフードを被っているため髪の色まで見えなくなっている。が、弓と矢筒までは隠し切ることができなかった。弓は弓巻きに包んでから手に持ち、矢筒はたすきをかけるように肩に提げ背中に背負っている。

「ったく、なんでものおっさんが俺の格好を気にしないといけねえんだよ」

「そりゃシンイチがまだマイクに雇われておるからじゃ。何かあったらマイクにも影響あるんじゃないや。……にしても、その頭の上のひよこはどうにかならんのか。せつかく隠しても目立っておるぞ」
呆れた目つきで真一の頭の上に乗るピイを睨みつけた。ピイもじろりとヨウを睨み返した。

「しゃーないだろ。トートバックの中は畳んだ袴が入ったし、手はいっぱいだし、頭の上しかねえんだよ」

「やれやれ……」

統治者に会うべく浜を歩いて行く。真つ直ぐ行くと足元にあった砂はなくなり、堅い土となった。

その土になると同時に、道は坂道となった。少し先の坂道の両脇を見れば、縦長の四角い建物が立ち並んでいる。そんな坂道を少し上った時だった。

「おっと」

周りをきよろきよろと見ていたせいだろう、坂道を走って下ってきた人とぶつかってしまった。真一は倒れなかったものの、ぶつかってきた白いローブを身にまとった人はその場に尻餅をついてしまっている。

「ごめん、前を見てなかった。大丈夫か？」

膝をおり、フードですっぽりと頭を覆っている顔を覗き込んだ。

「わ、私の方こそごめんなさい」

少し高い女の声だった。色白の肌で目を閉じ、不安そうに眉を八の字にしている。

真一はその女の前に手のひらを差し伸べた。

「ほら、掴まれよ」

「あ、ありがとう」

女は手を伸ばすと、すぐに真一の手には振れず少し彷徨うように手を動かした。まるで見えていないかのようである。その様子に、真一は待っていた手のひらで女の手首を掴んだ。そして、ゆっくりと女を立ち上がらせた。

「あんた、もしかして目が見えないのか？」

「……はい。あの、少しお願いがあるんですけど」

「ん、何？」

女は手首を掴んでいた真一の手に触れると、真一の手を両手で包んだ。それには真一も驚いた。肩に乗っているヨウはにやにやと頬を緩ませている。

「浜辺へ行きたいんです。私を浜辺まで連れてってくれませんか？」

「あ……ああそんなことか。じゃ、手離すなよ」

女に左手を握らせたまま、真一は浜辺へと戻って行く。真一が少し前を歩き、すぐ後ろでは真一の手を両手で包む白いローブの女が歩いている。

少し照れている真一をからかう様に、ヨウがにやにやと頬を緩ませていた。真一はヨウを睨みつけたが、やめる気配がない。

が、ピイが代わりにヨウの頭を突付いた。それに驚いたヨウがピイを睨みつけたが、ピイも負けじと見下ろしている。両者が睨み合いをしている間に浜辺へと出た。

海に近づくとつれ、潮の香りが漂ってくる。女もその香りで気づいたのか、歓声を挙げた。

「わあこの香りは、海ですね！　すごい……それになんて綺麗な音」
女は真一の手を離すと、ふらふらとした足取りで波の近くまで行った。そしてしゃがむと、恐る恐る手を伸ばし波が手に触れた。

「冷たい……。なんて気持ちいい」

白いローブの裾が波によって少し濡れている。が女はそれに気づいていないようで、ずっとしゃがんだままだった。

「じゃ、俺はこれで。そこに座ってたら危ねえから気をつけるよ。じゃあな」

真一はそのまま女に背を向け、再び坂道を登ろうと引き返して行った。背中の方から女の小さな声が聞こえた。

「……ありがとう」

真一は顔だけ振り返って見た。

女は目を瞑っていないながらも、嬉しそうに微笑んでいた。

坂道を登りながら町の様子を見て行った。歩く人々は個性豊かな色のローブを着て、髪は相変わらず紫色だった。イダワ島の時よりは視線を集めることはなく、やはりローブとフードを着ているせいだろうと、真一は思った。それでも手に持つ弓や矢筒、頭の上のピィのこともあってやはり訝しそうに眺められる。

「……シンイチ」

力のないヨウの声だった。

「お腹すいとらんか？ わし……よく考えたら何も食べておらん」
タイミングよく真一のお腹の虫が鳴いた。ヨウにそう言われたかどうかはわからないが、急にお腹がすいてきた。

おまけにいい匂いまで漂っている。その匂いに釣られるように、再び真一のお腹が鳴いた。

「ここ、市場みたいなんじゃ。何か食べる物買わんか？ お金は確かマイクからもらったじゃろう」

ローブのポケットを探ると、金貨が二枚ほどあった。どうやらマイクが真一にローブを渡す際に入れていたらしい。

おせっかいなおっさんだ、と真一は思いつつも周りの店を見渡した。

建物の一階が店になっているらしく、どれも入り口の上には看板

が掲げられている。が、真一はそれを読むことはできなかった。蛇のような字が書かれているようにしか見えなかった。真一はおいしそうな匂いを頼りに、一つ店を選んだ。窓から出る匂いに釣られて見てみると、なにやら肉まんのような丸く白いものが置かれている。「いらっしやい」

中から髭を生やした中年の男が顔を覗かせてきた。

「それを二つくれ」

「はいよっ。その前にちよいと確認だ」

そう言つと男は突然、真一の右腕を掴みローブを捲し上げた。

「おい、何すんだよ！」

「……黒い布。あんたサモナーか」

巻かれた布を見るや否や、男の態度が一変した。舌打ちをし手を払うような仕草をした。

「別の場所を当たってくれ。この店にサモナーに買われるようなものは売ってないんだ。どこかへ行きな、商売の邪魔だ」

「な、なんじゃと！ このおやじめ！ わしらは客じゃぞ！」

ヨウは身を乗り出し男に文句を言っている。が、見えないので当然男の反応はなかった。真一も唇を噛み締め男を睨みつけたが、男はさつさと店の奥へと消えてしまった。それでも真一は店の前で立っていると、後ろから突然若い男の声がした。

「おっさん、それ三つくれ」

その声の主が真一の隣にやって来た。その姿に真一は少し驚いた。一番目を引いたのは、顔につけている仮面だった。真一のいる側、顔の左半分には白い仮面を被っている。目の位置に小さな丸い穴があり、口のところは切れ目が入っている。それ以外はただ真っ白で、少し気味悪ささえ感じた。髪の毛は紫色で、短いせいなのか逆立っている。格好がローブではなく、ヨウと同じようなゆつたりとしたズボンと長袖で、それぞれ水色のものを着ている。足元は短いブーツのようなものを履いている。右腕には青色の布が巻かれていた。「……イシャイナーか。ちょっと待ってくれよ」

店の男は布の色を確認するとにこつと笑い、置かれていた肉まんのようなものを袋に三つ入れた。

「はい、おまち！ また来てくれよ」

袋からおいしそうな匂いが漂っている。隣に立ったままだった真一の鼻にもその匂いが届いた。買うことを諦め、真一はため息を漏らしつつその男から離れ坂道を登ろうとした。その時だった。

「ちよつと待ってくれ」

突如後ろから声をかけられた。振り返ると男は一つ肉まんらしきものを口へ頬張り、残りの二つが入った袋を前に掲げている。

「これ、あんたのだ。腹減ってるんだろ？」

「え……俺？」

立ち止まっていた真一の元へ男が近寄り、袋を真一に渡した。

「あんたの腹の音。こつちに聞こえてたんだ」

「あ、はは、そうか。わりいな。じゃ、これ……」

笑いながら真一はポケットの中から、金貨二枚とも男に差し出した。男は金貨を受け取ると、にこつと笑った。顔の左半分が隠れているが、出ている目と口が笑っている。

「じゃあ、またな」

男は手を挙げ別れを言うと、そのまま横道へと入って行った。

「……変わった男じゃの」

「まあいいんじゃないね。さ、これ食べながらさつさと坂上ろうぜ」

真一は一つをヨウへ渡し、残った一つを半分に割るとピイの口の中へ投げ入れた。そして、その半分を頬張りながら坂道を再び上り始めた。

「……肉まんだな。……肉？ まさか、この肉ひよこなのか」

「当たり前じゃ」

それに思わずピイと真一の口が止まったが、どちらも空腹には勝てず食べきってしまった。

坂を上りきるとそこに大きな四角いお屋敷のような城が建ってい

た。周りには木々が植えられ、細い幹ながらも葉が生い茂っている。振り返れば海と港町シトモンの様子が一望でき、立地の良さを伺わせた。

「これが統治者の城か。ま、入ろうぜ」

「素直に証をくれればいいんじゃないが……」

城の扉の前に真紅のローブを着ている男が二人、真一の前に立ちふさがった。その腕には緑の腕章がつけられている。

「待て、貴様の身分は何だ？」

「統治者様に何の用件だ？」

それぞれ背の高い男たちは訝しそうに真一を見下ろした。目が行くのはやはりピィと弓と矢筒のようだった。

「……俺の身分はサモナー。証をもらいにやって来た」

そう真一が言うのと男たちは一瞬眉をひそめ嫌な顔をした。そして、互いの顔を見合いため息交じりに頷き合った。

「……入れ。中に統治者、シトモン様がいらっしゃる」

「失礼のないようにな」

そう言うとおっさり扉を開いた。追い返されるのではないかと一瞬思った真一は、拍子抜けしてしまった。

「どうも」

首だけでおじぎをして、さっさと横を通り過ぎ城の中へと入って行った。

【第二章 港町シトモン】責任

通された部屋は至って普通の書斎だった。部屋に入って一番に目に入ったのは、真正面にある大きな窓だった。その窓の前には大きな机が置かれ、窓につけられているカーテンが風でなびいている。右手にはクローゼットらしい棚が置かれ、左手奥には本棚が二つ並んでいた。

「名は何だ？」

部屋の主は入ってきた真一に顔を向けず、ずっと窓から外の様子を眺めている。

「萩野真一」

真一は直ぐその主を見た。真一は統治者と言う肩書きがあるからには、それ相応の服装をしていると予想していた。が、城の入り口にいた男たちと同じように真紅のローブを着ている。ただ違っていたのは黄色の短髪で、頭に細い紐のようなものを巻き、その紐には一つ水色の宝石がついていてそれが丁度おでこにあった。ローブを着ていてもわかる、がっしりとした肩と頬張った顔。勇ましい男の横顔だった。

が、真一が名乗っても男はただ呆然と外を眺めているだけだった。何かを話そうと言う素振りも見せない。待っていた真一だったが、しびれを切らし口を開いた。

「証がほしいんですけど」

「え……ああすまない」

ため息を漏らしつつ、その主は真一を見た。真一が持っている弓に驚いたのか、それとも頭の上のピイに驚いたのかしばらくじつと真一を見つめた。が、主は咳払いをしただけだった。

「……私は港町シトモンの統治者、シトモンだ。この名は代々受け継がれている。まあ私のことは良いとして……証についてだが……」
シトモンが話そうとした時、後ろからドアのノック音が響いた。

シトモンは話すのをやめ、ドアに注目した。真一も思わず振り返った。

そこには真紅のローブを着た男と見覚えのある仮面を被った男がいる。

「シトモン様、この者も証を求めて来た者です」

「わかった。下がれ」

真紅のローブの男は一礼すると、ドアから立ち退いた。残った仮面の男は部屋へ入ってくると、真一の横に立ち並んだ。

「……名はマスク。証をいただきたく伺った」

マスクと名乗った男は間違いないく、肉まんを真一に渡した男だった。真一と同じ背の高さで、見える仮面は無表情で、薄気味悪さを感じる。マスクは真一には目もくれずシトモンをじっと見ている。声をかけようかと思っただ真一だったが、かけるのをやめ同じようにシトモンを見た。

一方シトモンは、マスクの仮面に驚いているのか言葉が出てこないようであった。口を開いているが声が出ていない。目線はずし大きく深呼吸をしたあと、ようやく言葉を出した。

「すまないな……少し驚いた。私の名はシトモン、港町シトモンの統治者だ」

「ご丁寧にも。この仮面を見て、驚かれるのはよくあること。

……前に大怪我をしてしまって、その傷跡が残ってしまったのです。だからこうして仮面をつけている次第」

「なるほど」

頷いたシトモンは、咳払いをして真一とマスクの両者を見た。

「お二方、証を求めここに来たようだが……その前に頼みたいことがあるのだ。それを聞いてくれるのであれば、証を渡そう」

「頼みたいこと？」

真一が聞き返すと、シトモンは深く頷いた。そして考え込むように顔を俯かせたまま、再び窓の外へと視線を移した。

「……私には一人娘がいる。その子は病魔に冒され、視力が落ちて

いき今では目が見えない状態になってしまったのだ」

その言葉を聞いた時、真一はふと坂道でぶつかった女を思い出した。

「私は心配で、この屋敷にいるように言っておるのだがどうも不満のようで……よく外へ出て行ってしまふのだ。警備の者に頼みすぐに連れ戻しているのだが、最近は逃げるのがうまくなったのか、なかなか見つからない。そこでだ」

シトモンはマスクと真一を真つ直ぐと見据えた。

「娘を屋敷にいるように説得してもらいたいのだ。娘が納得して、私の目の前で約束を交わすことができたなら証を渡そう。今も娘はどこかへ行ってしまったているから、まず娘を探してもらおうのが先なのだがね。……以上が頼みなのだが、受けてくれるかな？」

真一とマスクは間を開けず同時に答えた。

「やります」

「やります」

二人の答えに、シトモンは安心した表情で頷いた。

真一はマスクと一緒に城を出た。城内では会話を交わさなかったのだが、城内を出るとすぐにマスクが明るい表情で話しかけてきた。「あんたも証を求めて来たのか！ 部屋で見た時驚いたよ」

部屋の中とは違う雰囲気、真一は一瞬戸惑った。それを感じたのかマスクは咳払いをしてにこつと表情を和らげた。

「俺の名前はマスク。身分はイシャイナー。あんたは？」

「え、ああ。俺は萩野真一。さっきはどうも。助かったよ。身分はサモナー……」

サモナーと名乗ることに対し、少し抵抗を覚え始めた。サモナーとわかった途端、皆目の色が変わる。心地の良いものではなかったが、マスクは表情を和らげたまま何度か軽く頷いただけだった。

「そうかそうか。……あれ、それよりハギノ。ここ怪我しているだろ。少し腫れてるぞ」

じつと真一の腕を見たあと、マスクは腕を乱暴に掴んだ。

「え……。あ、いつて」

掴まれた腕に痛みが走る。見た目は何ともなっていないが、完治していなかったようだった。思わず真一の顔が歪む。

すると、マスクは真一の両腕を両手で覆いかぶせ、手のひらから青い光が帯び始めると両腕を包み込んだ。前にヨウがやった時よりも濃い青で、氷が乗っているかのような冷たさを感じる。冷たさで感覚が麻痺しそうな時、青い光がゆっくりと消え失せた。

「よし、これで治った。痛くないだろ？」

「あ、ああ。押さえても握っても痛くない」

それぞれ腕を握り締めてみても痛みを感じられない。どうやら本当に治ったらしかった。それには見ていたヨウも感嘆の声を上げた。

「ほお、さすが本職イシャイナーじゃな。手早く完璧じゃ」

「マスク、あんたは……俺がサモナーだって聞いて何とも思わねえのか？」

真面目な表情で真一が尋ねた。が、マスクはきよとんとした顔をした。じつと真一がマスクを見ていると、ふつと笑った。

「……何言つてんだ。そんなの関係ないじゃないか。俺はそれより頭の上に乗っている最弱の雛と、ハギノが持っている物に驚いたね。なんだい、それは」

「え、ああ。これは弓って言うんだ。背中にあるのは矢筒。こいつはピィ」

「ユミ？　へえ、隣国のエルモ国ならあるかもしれないが、アラウで持っている和不審者だな。この国にはそんな武器染みしたものないからな」

「そうだったのか」

すると、マスクは笑顔で握手を求めてきた。

「ま、自己紹介はこの辺りにして、証を互いにもらうために協力しようじゃないか」

差し出された右手は綺麗な手だった。指は長く、一見女のような

手にも見える。

真一は、初めて自分を偏見なく見るマスクに対し、警戒心がすっかりなくなってしまった。真一も手を出し、握手に応じた。

「ああ。よろしくなマスク」

真一が握手をすると、ぎゅっと握り締めにくやかにマスクが笑った。

「こちらこそよろしく、ハギノ。……まあまず、娘さんを見つけないことには説得もしようがないな」

手を離すとマスクは考え込むように腕組みをした。

「どこにいるんだか」

「いや、俺それらしい女にさっき会ったんだ」

「何、本当か」

坂道を登ろうとした時ぶつかつた女。目の見えない女。真一はある程度の確信を持って歩み始めた。

「遅いかもしれねえけど、いるとしたら浜辺だ。行こう」

駆け足で一気に坂を下り、浜辺へと出た。浜辺にはすでに船はなく、静かな海が広がっている。少しだけ息を切らしながら真一は浜辺を見渡した。

「シンイチおつたぞ。あそこじゃ」

そう言いながらヨウが指差す方向には、白いローブの女がいた。女は波から少し離れ浜に座っている。呆然と海を眺めているように見えた。

一緒に来たマスクも真一が何かを見つけたのを察し、その方向を見た。

「……あれが娘さんか？」

「ああ。……一応確認した方がいいだろうな」

二人はその女へと歩み寄って行った。

女は気配を感じたのか、二人の方に顔を向けた。色白の顔は目を

閉じ、どこか不安そうに顔を強張らせている。

「だ、誰ですか」

声を震わせながら少し後ずさりをした。真一は不安を取り除こうと、膝を付き女と同じ目線にした。

「俺は萩野真一。さっき会ったんだけど……声でわかる？」

「あ。わ、わかります。ああ驚いた……先ほどはありがとうございました」

頬を緩ませて笑った。

「あの、何か御用でしょうか？」

「聞きたいことがあってさ。……あなた、シトモンさんの娘さん？」
すると、女は驚いたようですぐには返答をしなかった。口を真一文字に閉じている。

真一は答えるのを待っていたが、後ろで見ていたマスクはしびれを切らしたのか、真一の隣に屈み口を開いた。

「失礼。私、マスクと言います。先ほどシトモン様に証を貰い受けたく城へ伺いました。ですが、貴方を説得しなければ証を渡さないという条件を出され伺った次第です。なぜ、ハギノの質問に答えないのか疑問ですが……髪の色を見ればわかります。失礼」

早口に言つと間髪入れず、女のフードを取ってしまった。女が小さく「あっ」と言つたが遅かった。

フードの出てきたのは黄色の髪をしたおかつぱ頭だった。

「貴方は、シトモン様の娘、ライト様ですね？」

抑揚のないマスクの声に、白いローブの女　ライトはゆっくりと頷いた。

「ひとまず城へ戻りましょう。シトモン様が心配されています」

そう言つてマスクはライトの手を取った。がしかし、ライトはそれを振り払い自ら立ち上がった。眉をしかめている。

「一人で歩けます」

はつきりと言つと、おぼつかない足取りで坂道の方へと歩み出した。そんな背中を見ながらマスクはため息を漏らし、真一に耳打ち

をした。

「……説得するのは難しいかもしれないな」

返事をすることなく女の後ろ姿を見ていた。白いローブに黄色の髪色は、目立つ存在だった。ゆっくりと慎重に、手を無造作に動かしながら進んでいる。見ていると不安で仕方がない。

「確かにそうかもしれないけど、やるしかねえだろ」

見かねた真一がライトの所へ駆け寄ろうとした時だった。

突然、どこからともなく大柄の男が三人ほど、ライトの前に立ち塞がってきた。黒いローブで、どれも坊主頭で目つきの悪い男たちばかりだ。ライトが進んでいるのにも関わらず男たちは立ち退こうとはしない。そのためか、ライトは仁王立ちする男とぶつかってしまった。

「ご、ごめんなさい。大丈夫ですか？」

「……黄色の髪色。あんた、シトモンの娘だな」

「えっ」

男がにやりと笑った瞬間だった。

男はライトの頭を殴りつけ、その衝撃でライトは倒れてしまった。そのままぴくりとも動かない。

「なっ！ お前ら何やってんだよ！」

真一は叫びながらライトの元へ走って行く。がそんな姿に三人はにやりと余裕の笑みを見せた。

「邪魔はいけねえな」

ライトを殴った真ん中の男が言うと、左右の二人の男が同時に真一に向かって手のひらを見せた。

「シント」

そう同時に言うと、その手のひらから空間が歪んでいくのが見えた。その歪みは空気の波となりそのまま真一へとぶつかっていく。

ぶつかった瞬間、受けたこともないような衝撃が真一を襲った。

何かとぶつかったように目にも止まらぬ速さで後ろへと吹き飛ばされ、後ろから様子を見ていたマスクも巻き添えになってしまった。

しかし、結果マスクが壁代わりとなり二人重なるように倒れこんだ。

「ぬう……大丈夫か、シンイチ！」

「……い、今、あいつら何したんだよ」

腰を摩りながら立ち上がる。特に外傷はなく、ヨウはひとまず胸をなでおろした。マスクも怪我はなかった。仮面に手を当てずれを直している。直し終わると浜に手を着き、ゆっくりと立ち上がった。

「今のは移動魔術のシントと言う詠唱だ。……チツ」

マスクは男たちを睨みつけている。男たちは気を失っているライトを抱え、不敵に笑みをこぼした。

「じゃあな、あばよ」

そう言い残し、男たちとライトはふっと消えてしまった。残ったのは浜に刻まれたライトと男たちの足跡だけだった。

わけのわからない真一は、男たちがいた場所へ駆け寄り周りを見渡した。

「あ、あいつらどこへ行ったんだ？ 何でいきなり消えるんだよ！ 女は？ どこだよ！」

そこに冷静なマスクの声が真一の動きを止めた。

「落ち着けハギノ。ライト様はさらわれたのだ」

「さ、さらわれた？」

戸惑いの色を隠せない真一に対し、ヨウが言った。

「シンイチ。うろたえても仕方ないぞ。男どもが使ったのは、移動魔術じゃ。シントと言う詠唱語も移動魔術の一つなんじゃ。移動魔術は一度行った場所であつたなら、一瞬で行くことのできる魔術で、おそらく消えた男どもは自分たちのアジトでも戻っておるんじゃないやろ。うろたえる暇があるなら、シトモンにこのことを報告した方がええんじゃないのか？」

ヨウの言葉に多少は落ち着きを取り戻したのか、真一は目を閉じ大きく深呼吸をした。そして、目を開けるとすぐさま城へ向かうべく坂道を上ろうと走り始めた。が、しかし。

「待てハギノ！ 一体どこへ行くつもりだ！」

後ろからの声に思わず足を止め振り返った。

「シトモンにこのことを伝えるんだよ！」

「駄目だ！」

真一よりも大きく強い声でマスクが叫んだ。なお続けた。

「言ったところでどうなる？ 失敗と見なされて証がもらえなくなつたらどうするのだ」

「でも、あいつここの偉い奴なんだから？ おまけに女のおやじじゃねえか！ 伝えるのが筋じゃねえのかよ！」

「関係ない！ 目の前でさらわれたのに自分には責任がないと言うのか？ 他人に責任を押し付けるのか！」

その言葉に真一は、はっとした表情を見せた。早く坂を上ろうという気持ちの熱が冷めていく。

一方で、ヨウは驚いたように目を見開きマスクの言葉を聞いた。

「あやつは何を言っておるんじゃ……。ん、どうしたシンイチ？」

真一の様子の異変に気がつき、思わず顔を覗きこんだ。呆然としていて足は完全に止まってしまっている。

マスクも真一の様子が変わったことに気づいたのか、ゆっくりと歩み寄ってきた。

「……俺はあの男たちを知っているんだ。前にも人をさらったやつらでね、顔に見覚えがある。奴らのアジトも知っている。早く行ってライト様を助けた方が良くに決まっているだろう？ みすみす目の前でさらわれてしまったんだ……その責任は当然俺たちにある」

「シンイチならん！ お主がまともに戦えるならまだしも、全然戦えんではないか！ ましてやアジトなど、何がおるのかわからんだぞ？ はよう、シトモンの所へ行くべきじゃ！」

ヨウは必死の形相で叫んだ。

真一は迷っているのか、地面をじつと見つめ考えている様子だった。目の前でさらわれた、責任は自分 その言葉がぐるぐると真一の頭の中を巡った。しかし、ヨウは構わず叫んだ。

「シンイチ！ わしはお主を心配し……！」

その時何かぞくりとする殺気を感じて、思わずヨウは口をつぐんだ。咄嗟に周りを見渡してみたがそれらしい人影は見当たらない。すると、タイミングよくマスクが口を開いた。

「ハギノ、行こう。……責任を果たそう」

真一はその言葉にゆっくりと顔を上げた。そして、振り返りマスクを真っ直ぐと見た。

「ああ。それに、早く女を助けないとな」

頷くマスク。真一の横顔は真剣そのもので、弓を握る手に力が入っている。

それを見て、ヨウはそれ以上反論できなくなってしまった。

【第二章 港町シトモン】責任（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

少し用語が多くなってまいりました。

これからこの後書きを使ってまとめて説明するかもしれません。

今回のお話で出てきた用語の説明をします。

【サモナー】召喚魔術を主魔術とする者の身分のこと。

【イシャイナー】回復魔術を主魔術とする者の身分のこと。

【移動魔術】四つの魔術のうちの一つ。ちなみに、移動魔術を主魔術とする者の身分は【ティレナー】。

【シント】移動魔術の詠唱語。相手を吹き飛ばす。

以上です。

後のお話でも説明するかもしれませんが、できるだけわかりやすいよう執筆していきます。

これからもサモチエリをよろしく願います。

【第二章 港町シトモン】 思惑

マスクを先頭に浜辺を東へと歩き進んで行く。その結果港町シトモンからは離れることになり、振り返ると小さく見える程度までになった。砂浜はずっと先の岬まで続いている。浜を上った所の陸も、沿うように丈の低い原っぱが続いていた。ずっと岬を追って見ていくとだんだんと原っぱはなくなり岬辺りではごつごつとした岩肌となっている。そして、そこには大きな岩があり、まるで隆起しているように見えた。

「あの岩は空洞となっていて、そこがアジトになっているのだ」
目を凝らすと確かに穴らしき黒い影が見えた。ほど遠い位置を歩いているので、そこに人がいるのかどうかはわからない。

あそこに、自分を吹き飛ばした奴らがいる。そう思うと真一は嫌でも受けた衝撃を思い出してしまい、背中に嫌な汗をかいた。自然と弓を持つ手に力が入り、震え出しそうになる。それを誤魔化のようにトートバックを担ぎ直した。

黙り込む真一を不審に思ったのか、マスクは顔だけ向けるとふつと鼻で笑いながら話しかけてきた。

「……怖いのか？」

口の端を持ち上げにやりと笑っている。その表情に思わずむっとしたが、すぐには否定できなかつた。緊張の余り声が震えそうだった。

「素直に怖いと言って、引き返すべきじゃ」

その声に真一は視線をちらつと横に移しヨウを見た。馬鹿にしているのかと思つたが、顔を見ると大真面目な顔をしている。

「ええか、シンイチ。わたらの目的は前マスターに会うことじゃ。そのために証が必要で、わたしが港町シトモンに来たのはその証をもらうためじゃぞ？ あの娘が目の前でさらわれ、自分を責める気持ちもわかる。じゃがな、下手に深追いをして己の命が落ちては何

の意味もなかるう。……シンイチ自身は隠しておるつもりじゃろ
うが、顔色が悪いぞ」

ヨウの言葉に、真一は思わず頬に手を当てた。真一自身でもわか
るほど強張っている。何とか顔を力を抜き、一つ深呼吸をしてから
マスクの顔を見た。

「怖くないって言ったら嘘になる。けど、やっぱり……ほっとけね
えよ」

無表情にマスクが見つめる。

「それに俺一人じゃないしな。マスクもいるし……たぶんなんとか
なるだろ」

マスクは表情を崩し、ふっと笑みをこぼした。

「随分頼りにされているな。でも、俺はイシャイナーなんだ。攻撃
できるような手段はほとんどない。むしろ、ハギノ、お前の召喚魔
術に掛かってるぞ」

そう言われ、思わず真一は視線を逸らした。

召喚魔術と言うものがどんな術なのか、どうやればできるのか、
そもそも自分に魔力と言うものが備わっているのか。そう考え
ると、サモナーと名乗ったがサモナーではない気がしてきた。弓道
していたただの高校生だ。

返事をせず黙っていたが、マスクは返事を待たずに前へ向き直し
た。

「とにかく急ごう。ライト様が心配だ」

そう言うつと駆け足になり、浜には大きな歩幅の足跡が残されてい
く。真一もその足跡に習い、駆け足でマスクの後ろを追いかけて行
った。

岬に近づくとつれ、海からの風がより強く冷たく感じる。浜辺に
沿って走っていたが、途中から少し内陸を走り、砂浜よりも堅い草
の上へと移動した。始めは浜辺と段差はなかったが、進むにつれそ
の差はどんどん広がる。少し坂になっている地面はやがてこつこつ

とした岩のようなものとなり、走りながら下を覗けば海が遠くに見えた。

やがて、前を走っていたマスクの足が止まった。見れば前に道はなく海が広がっている。どうやら岬にたどり着いたようだった。強く冷たい風が海から届く。

「……あれがアジトだ」

マスクが指差したのは海より内陸にある大きな岩だった。目視できる範囲だったので、ごつごつした表面が見えた。先ほど見えた穴は確認できなかつたため、おそらく横に来たのだろうと真一は思った。が、いくら大きな岩だからと言って中が広そうには見えなかつた。遠目からではあるが、正面から見たときは穴がほとんどを占めていたので、おそらく横幅もそこまで広くはない。

「大きい岩だけだよ、中の広さなんてたかが知れてるだろ。本当にアジトなのか？」

海が崖に打つ音と風が吹きつける音しか聞こえない。人の気配など全く感じられなかつた。

「間違いない。これは断言しよう」

真つ直ぐ真一を見るマスクの顔に疑いの余地はなかつた。さらにマスクは続けた。

「しかしだ。どれぐらいの人数がいるのか、俺は知らない。もしかするとあの三人だけかもしれないし、入ればもつといるかもしれない。さらに言えばアジトの構造がどうなっているのかわからん」

「どうするんだよ」

マスクは顔色一つ変えずに言った。

「二人で入るのは危険だ。二人とも捕まってしまうえば何もできん。よって、どちらか一人がアジトへ侵入、もう一人は出入り口で敵が来ないか見張る。……この作戦で行く」

「ひ、一人でアジトへ侵入……だと？」

真一は自分でも血の気が引いていくことがわかつた。頭の上のピイもかすかに震え、ヨウもしがみ付いている手に力を入れたままあ

んぐりと口を開いている。

「ちよ、ちよ待て。……どっちが侵入するんだよ」

「結論から言えば、ハギノ。お前だ」

その言葉に固まる真一。マスクはそんな様子に構うことなく、アジトである岩へと慎重に歩を進めていく。周りの様子を伺いながら姿勢を低くし、足音を立てずに歩いている。真一は訴えたい言葉がいくつも思い浮かんだが、下手に騒げない状況だった。マスクの見よう見まねで進む。

「……俺はさつきも言ったようにイシャイナーだ。もし、敵の奴らと遭遇しても対処できん。だが、ハギノならその手段がある」

「だけど、俺は召喚魔術なんて……」

真一が俯き加減にそう呟くと、進んでいたマスクの足が止まった。すると、ゆっくりと振り返り仮面をつけた半面だけを向けてきた。

「お前には他の手段があるだろう」

ひどく冷たい言い方だった。何か射抜かれたような鋭い視線を感じ、一瞬にして真一の中に恐怖心が芽生えた。思わず息を呑み、言葉を失う。

その様子にマスクははつとし、すぐさま真正面に向き直った。

「あ、いや……俺が言いたいののは、その手に持っている物だ。それが武器になるんじゃないのか？ ハギノなら大丈夫さ」

はは、と笑うと再び前に向き直し歩いて行く。

「何じゃ……今の顔は」

しがみ付いているヨウもその殺気を感じたようで、怪訝そうな表情を浮かべた。真一も驚くばかりで、ただただ首を傾げるしかなかった。

岩のすぐそばまでやって来た。近くに来てもやはり人の気配は感じられない。岩の周りには隠れるような場所もなく、ごつごつした岩場と見渡す限りの海しかない。目の前に立ち塞がる岩は高さが真一の何倍もあり、上どうなっているのか見えないほどだ。球体らし

く、丸み帯びている。

マスクは岩にぴったり背中をつけると、口元に指を立てる。真一もすぐさま岩に背中をつけ、じっと動かずマスクを見守る。ピーが鳴くのではないかと不安に思ったが、察しているのか静かだった。マスクはじりじりと進んで行き、岩の正面へと移動して行く。一緒に追うとしたが、手で制せられそのまま待つことにした。

真一の位置からマスクの姿が消え、しばらくするとマスクが普通に歩いて戻って来た。

「どうだった、誰かいたか？」

戻ってくるマスクにすぐさま真一が尋ねた。マスクは首を横に振ると口を開いた。

「いないようだ。岩の中がアジトになっていたかと思ったが、どうやら地下になっているらしい」

「地下？」

「ああ。こつちへ来て見る」

先ほどより緊張感を感じなかったので、真一も少し安心しつつその後姿をついて行く。

大きな岩肌を回ると正面へと出た。岩に大きな穴が空いている。そして、その穴には階段が掘られていた。階段の壁には火が灯り、暗闇を照らしている。先がどうなっているのか、少し覗いてみたものの螺旋になっているのか奥までは見えなかった。

「この下がアジトのようだ。……どうだ、心の準備はできたか？」

真一はじつと階段を見つめた。この先何がどうなるのか、考えれば考えるほど躊躇してしまう気がした。ちらっとヨウを見れば険しい顔をしている。その口は今にも引き止めるような言葉が出てきそう。その言葉が出る前に真一は大きく息を吐いて、頷いた。

「ああ。大丈夫だ」

そして弓巻きを取りトートバックに収めると、弓のつるを真っ直ぐ伸ばし岩の壁を使い、弓に張った。その行動をマスクは訝しそうに眺めた。

「……何をしているんだ。行かないのか？」

「準備だよ。すぐできる」

矢筒に取り付けていたかけ袋をはずし、その中からかけを取り出した。かけ袋をトートバックに入れ、跪いた。そして取り出したかけを右手につけ始める。その様子を見ながらヨウが口を開いた。

「無理するでないぞ。もちろん助けるが、どうなっておるのかわからんのじゃからな。ここまで来たなら、ひとまず娘を探して一緒にここから出るんじゃ。敵に見つからんようにな」

無言ながら真一は頷いて答えた。

そして、かけをつけ終わると立ち上がった。ピイはその丸い体をふっとジャンプさせると、その間に真一は被っていたフードを脱ぎ去った。フードから現した黒色の短い髪が風で揺れている。ローブの腕を捲くり準備を整えるが、余計なことを考えると体全体が震えそうだった。真一は再び大きく息を吐いた。

「……じゃ、行ってくる。マスクも気をつけるよ」

「ハギノも、な」

そして、真一たちは薄暗い階段を下り始めた。

「……黒髪か。珍しい色だな」

降りていった階段を見つめながら、マスクは思わず頬が緩んだ。

長い棒が武器だと思っていたが、違っていた。糸を棒に張っていたが何かを投げるものなのだろうか、とマスクは少し考え込んだ。

「あれでやと言う棒を飛ばすんだ。エルモ国で言う、チェリンダーと考えていいだろう」

と、子どものような高い声が突然話しかけてきた。が、周りには誰もいない。その声は白い仮面から聞こえているようだった。マスクはその声に驚くことなく、質問を続けた。

「チェリンダー？ ……確か殺傷能力の低い、紐を使って物を投げる兵士のことだったが……まさかあの契約者はエルモ国の兵士だと

言うのか？」

「違う。あれはチキユウと言う星から来た異星人だ。アラウと敵対しているエルモ国の兵士が、のうのうとアラウにいるわけないだろう」

「わかつている、言ってみただけだ。……チキユウ、ね。えらく魔術に自信がないと見えたが、トグ、お前はどうか見えた」

そう言うともマスクは左半面になっている白い仮面を取り外した。

が、そこのあるべき目や頬などはなく、大きな穴があるのみだった。そしてその黒い穴から何かが出てくるとマスクの前に降りてきた。

「俺もお前と同意見だ。あいつがついているはずなのに、魔力がほとんど身につけていないな」

そう言うともふつと鼻で笑って見せた。マスクにトグと呼ばれたのは、ヨウと姿形がほとんど変わらない使魔だった。ただ違う点は、背中についている羽が漆黒だった。

そしてトグは両手を合わせ力を込めた。すると手の合わさっている所が黒く光り始め、ゆっくりと両手を離していくと黒い光の玉が出来上がっていく。

「何か召喚するために俺を出したんだろう。さっさとやれ」

「相変わらずせっかちな。久しぶりに対面した使魔について何も思わないのか」

そう言いながらポケットを探り、小さな瓶を取り出した。栓を開け出したのは黒粒だった。手のひらにそれを五つほど出すと、再びポケットにしまい込んだ。

「俺から言わせればさっさと始末してしまえばいいのだ。なぜ様子を見る必要がある」

「俺に文句を言うな。……それともそれはあの方へ対する愚弄か？ それなら貴様だろうが手にかけるぞ」

無表情な目つきでトグを睨む。トグも表情を崩さずマスクを見ている。しばらく睨み合いが続いたが、マスクがふつと笑いをこぼし

た。

「……まあいい。今はお前と争うのは無駄だ。先にやるべきことをやるっ」

「同意見だ」

マスクは黒粒をぎゅっと握り締めると、トグが作り上げた黒い玉の中へと放り投げた。

すると、薄かった黒い光の玉は一気に濃さを増していく。やがて鉄の玉のような、どす黒い玉へとなるとどんどんと膨らみ始め上昇し始めた。

「素早く小さな、的を絞りにくい魔物を召喚しろ」

「わかった」

短くトグが答えると、自ら飛んで黒い玉に近づきそっと手を触れた。

【第二章 港町シトモン】 罫

螺旋状の階段を一步ずつ慎重に降りて行く。一定の間隔で灯りが灯っているが、薄暗いことには変わりなかった。一人がやっと通れる狭い階段で、真一自身の足音だけが響いている。弓を真つ直ぐ前に突き出し天井に当たらないよう気をつけ、矢筒の矢も音が出ないよう慎重に身体を動かした。

もし、下から誰かが上ってきたなら立ち往生してしまうだろう。こんな狭いところでは弓も引けない。上から誰かやって来て挟み撃ちにされてしまったてはそれこそ終わりだ。真一は進みながらそんなことを考えていた。地下に降りていけば行くほどひんやりとした空気を感ず、緊張の余り流れる汗で身体が少し冷えていた。

「……もう上は見えんの。いつまで階段があるんじやろつか」
少し振り返ってヨウがため息交じりに言った。ヨウは対照的に涼しげな表情だった。恐れている様子もなく、肩にしがみ付いている。「肩に力が入っておるの。……やっぱり怖いんじやろ」
「うっせえ」

と、言い返したが声に覇気がない。そんな返事にヨウはため息を漏らしながら言った。

「心配するでない。わしがおる。シンイチは一人ではないんじやから」
「ピ」

頭の上に乗るピイも短く鳴いた。まるで自分もいるんだと誇示しているようだった。

ヨウはそんなピイを疑いの目で睨みつけるが、ピイも負けじとヨウを見下す。

「……どうもこのひよことは合わんの」
「ピッ」

それから階段を数段降りると、急に広い場所へと出た。天井も少

し高く、弓を立ててもぎりぎり当たらない高さだった。円形の広場で壁には数個灯りが灯り、岩でできているのか、天井も床も壁もごつごつとしている。

階段を降りて真正面を見ると木の扉が三つあった。他に道はないのかと、床を丹念に見回ったがそれ以上降りる階段はなかった。

「……どれかを開けるしかあるまい」

三つの扉をそれぞれじっと見つめた後、真一はゆっくりと手を伸ばした。がすぐに手を下ろしてしまう。そしてまた手を伸ばすが、迷っているのか手をそれぞれの扉に向けている。が、またすぐに下ろしてしまった。それを何度も繰り返ししている。

黙ってみていたヨウだったがイライラが限界に達した。

「さっさと選ばんかい！」

「うっせえ！ 開けていきなり見つかったらどうすんだよ！」

その時だった。

扉の向こうからカランという物音が聞こえてきた。そして、人がうめくような声も聞こえた。真一は思わず耳を扉に近づけ、それぞれの扉に耳をすませた。

そのうめき声は真ん中の扉から聞こえている。

「……誰がいるのか」

小声で扉の向こうに尋ねた。が、返事は返っては来ない。少しの間返事を待っていた真一だったが、大きく深呼吸をした。

最悪の想定ばかりが頭を巡る。

複数いたらどうするか、武器を持っていたらどうするか、襲われたらどうするか。そんな悪い考えばかりが浮かぶ。それらの考えを振り払うように頭を振ると、深呼吸をした。

真一は、目を閉じ肺にいっぱい空気を吸い込むと、目をカッと見開き勢いよく扉のノブを掴んだ。そして、一気に引き開いた。

中は小さな丸い部屋だった。天井の中心部に灯りが一つ灯っているだけで薄暗い。扉付近にはぼろ衣が散乱し、部屋全体が少しかび臭い。真正面にはおぼんらしき物とその上には食器が一つ置かれ倒

れていた。

そして、そのすぐ横に人が一人倒れている。

薄暗い中でも分かる黄色のおかつぱ頭。そして白いロープ。敵がないことに少し胸を撫で下ろしつつも、すぐさま真一は駆け寄った。

「助けに来たぞ、大丈夫か？」

華奢な肩に手をかけ起こしてやった。見ると、口を布で塞がれ苦しそうに眉を八の字にしている。手首には細い紐が結ばれ自由が効かなくなっていた。すぐさまその布と紐を取り外すと、途端ライトが手を乱暴に動かし離れようと暴れ始めた。暴れるライトの冷たい手をなんとか掴むと、真一は握り締めた。

「落ち着け！ 俺は萩野真一。あんたを助けに来たんだ」

すると、ライトはびたつと止まり、握る真一の手を恐る恐る握り返してきた。

「ハギノ……シンイチ、さん？ ……その声と、この感触は」

真一の手を両手で優しく包み込んだ。つるんとした綺麗な手だった。

「あ、ありがとうございます」

肩を小さく震わせながら、少しだけ頬を緩ませ微笑んだ。

真一はひとまず倒れていたライトを壁にもたらせる様に座らせた。ロープを見れば白かったロープは所々黒く汚れている。が、身体や顔に怪我はなく、ほっとした。

「とにかく早くここから出よう。ここはあんたをさらった奴らのアジトなんだ」

その言葉にライトは眉をぴくつと動かし、驚いたように言った。

「アジト、ですか？ どうして？」

「あんたさらわれたんだよ。いいから早く立って……」

「わ、罨だわ！ シンイチさん、早くここから出てください！」

急にライトが眉間に力を入れ強い口調で叫んだ。

「は？ あんた、何を言ってる……」

と、その時だった。いきなり後ろから足音が響き渡った。

「やっと来たか、待ちくたびれたぜ」

その低い声に真一はすぐさま弓を握り、立ち上がると同時に振り返った。

そこには部屋の出入り口を塞ぐように三人の坊主頭の男が立っていた。口の端を釣り上げにやにやと笑っている。

「ばれていないとでも思ったのか、馬鹿が」

「お前がここに来ることは計算済みなんだよ」

三人とも真一よりも背が高く見下すような形になっている。それでも、真一は咄嗟にライトを自分の身体の後ろに隠し、臆することなく言い返した。

「だ、だったら何なんだよ！ 俺が一人で来たと思ってるのか？」
心臓が暴れている。身体中が波打つほど緊張していたが、真一の中に一つ考えがあつた。

アジトの入り口にはマスクがいる。ここで大声で叫びマスクを呼び寄せれば挟み撃ちとなり一網打尽だと、そう考えていた。狭い部屋に高くはない天井。弓を引こうと、弓を持ち上げれば天井が邪魔になり、引くには難しい場所だった。この部屋から出ることができる出入り口は、目の前に立ち塞がれてしまっている。

そんな危機的状況の中でも、マスクの存在だけが希望の光となっていた。

しかし、男たちは真一を鼻で笑った。

「ふん、勝手に虚勢を張っておくんだな。お前が何を考えているのかわらんが、もう遅い。俺たちはさっさとここからおさらばだ。…

…おい、行くぞ」

そう真ん中の男が言うと、左右の男たちが頷いた。そして、三人とも真一たちに背を見せそのまま階段を上ろうとしている。

「は？ てめえらふざけてんのか！」

余裕とばかりに背中を見せる男たちに、さすがの真一もむかっとし叫んだ。が、男たちは真一に構うことなく、列を成しさっさと階

段を上ろうとしていた。

「ふざけやがって……なめんじゃねえよ！」

「ばっ馬鹿もん！ あのままどこかへやればいいではないか！」

追いかけてよとする真一をヨウは止めようと叫んだが無駄だった。頭に血が上っている真一は、あるうことが部屋に弓を投げ捨て素手で男たちに殴りかかろうとした。

走りながら、かけをつけている右手の拳を掲げる真一。が、それに気づいた一番後ろの男がまた鼻で笑うと、手のひらを向けた。

「馬鹿が。……シント」

歪む空間が真一の胸にぶつかる。そして、前と同じように後ろへと吹き飛んでいってしまった。

あっという間に元いた部屋まで吹き飛び、壁に背中と頭を強打した。そのせいなのか、真一は痛みで顔を歪めうめき声を出した。

「……シンイチさん、どうしたんですか？ 何があっただんですか？」

「シンイチ！ 大丈夫か？」

返事はしないものの、打った頭に手を当て痛みを耐えている。そこへ、真一を吹き飛ばした男が引き返し部屋の扉の前までやって来た。真一の様子を見るなり再び笑った。

「ふん。……これなら俺たちの手でも始末できそうなんだが。まあいい。ここでおとなしくしてろ！」

そう叫ぶと男は勢いよく部屋の扉を閉めた。そして、扉の向こうからは何か物を引きずるような音が聞こえ、それが扉の前で止まった。遠のいていく足音。

ライトはその音に嫌なものを感じ、壁を支えにし立ち上がると、壁伝いに進んで行き扉に手をかけた。

開かない。押しても引いても全く動かない。

「シンイチさんたち……どうしよう！ 扉が……扉が」

必死に扉を動かそうとしながら、ライトは叫んだ。扉の向こうからは声さえ聞こえない。男たちは階段を上っていつてしまったようだった。真一は歯を食いしばりつつ痛みを耐え、どうにか立ち上が

り扉の近くに進んで行った。

「どうしたんだよ。扉がどうかしたのか」

薄目を開けている真一に、ライトは叫んだ。

「開かないんです！ 私たち閉じ込められてしまったんです」

「……なんだって？」

その言葉に真一は意識をはっきりと回復させ、自ら扉を押ししてみた。

びくともしない。もしかしたらと思い、引いてもみだが動かない。そこで真一は扉に向かって体当たりを何度かしてみたが、それでも扉は頑なに開放を拒んだ。

「どういうことだよ……あいつら何が目的なんだ」

ヨウはじっとライトの顔を見つめた。目を閉じている顔は呆然と扉に顔を向けている。

「わからん……。それもそうじゃが……わしはさっきの小娘の言葉が気になる」

ヨウがそうしゃべった瞬間、ライトがヨウがいる方向へと顔を向け口を開いた。

「……小娘ではなく、名前はライトと言います。貴方のお名前は何ですか？ シンイチさんのお連れ様ですか？」

その言葉に真一とヨウは驚いた表情のまま、互いの顔を見合わせた。

【第二章 港町シトモン】 見える者

ライトは返事を待っているかのように、じっとヨウがいる方へ顔を向けている。真一は驚きの余り声を出せないでいた。一方で、ヨウは一つ咳払いをすると口を開いた。

「わしは、使魔のヨウじゃ」

その声にライトは微笑んで応えた。

今までヨウの声を聞いた者はいない。真一が見てきた限りではそうだった。イダワ島で会った元軍人のダリイでさえ、使魔の存在は知っていたもののその姿と声までは見えていない。それなのになぜ、盲目の女にヨウの声が届くのか。真一はライトの顔をじっと見ながら、ようやく声を出した。

「なあ、あんたは……こいつの声が聞こえるのか？」

「え。は、はい。私、目は悪くても耳は悪くないんですよ」

「いや、そうじゃなくて……」

くすくすと笑うライトに、問いただすことができなくなってしまった。すると、真一の頭の上から紹介しろと言わんばかりに「パイ！」と言う鳴き声が響いた。笑っていたライトだったがそれを聞いた途端、びくつとし顔を強張らせた。鳴き声が出た方へ、恐る恐る手を伸ばしている。

「い、今の鳴き声は……な、何ですか？」

真一はふらふらと彷徨っているライトの腕を掴むと、自ら膝を折り曲げパイの元へと導いた。

「ひよこ……じゃなくて、最弱の雛だよ。パイって言うんだ」

「うわあふわふわ。よろしくね、パイさん」

ライトは優しくパイを撫で、パイも気持ちいいのかうつとりしている。少し撫でさせた後、真一はゆっくりと立ち上がった。

痛む背中と頭を気にしつつも再び扉に手をかけた。が、やはり扉はびくともしない。

「困ったの。……上におけるマスクとやらが気がつくまで、じつとしておるしかあるまい」

「だな。……奴ら階段上がって行ったみたいだけど、あいつ大丈夫かな」

真一は開けることを諦め、壁にもたれそのまま座り込んだ。弓を壁に立て掛け、矢筒もトートバックも下ろした。ふとライトを見れば扉に背中をもたれ立ったままだった。

「あんたも座れよ。こんな状況じゃどうもできねえよ」

「え、ええ。……早く気づけばこんなことには。本当にすみませんでした」

「ん、なんで謝るんだよ？」

申し訳なさそうに顔を俯かせている。壁伝いに歩いて行き、真一の真正面辺りでライトはゆっくりと地べたに座った。

男たちは足早に階段を駆け上がっていた。狭い階段を一行に並び、交わす言葉もなく急いでいた。男たちの荒い息と足音だけが響いている。

急ぐのには理由があった。上には男たちを雇った、雇い主がいるためだった。

ほとんどのアラウの者が回復魔術を主とし、イシャイナーの身分を与えられている。が大半は形だけだった。確かに素質はある。しかし、魔力が低いがために小さな傷や簡単な修理しかできなかった。魔術を仕事としてやっていくのは難儀なことだった。

それでも、生きていく道はそれしかない。皆、自分のできる範囲の仕事をやり合い助け合いながら少しずつお金を貯める。そして、サモナーを雇う。サモナーさえいれば何でもできた。食事から暮らすのことまで全て楽をして生きていける。大半の者はそう考えつつ、

毎日を送っている。

が、男たちは違っていた。誰にも頼らず自分たちの魔術だけを頼りに生きていた。と言うのも男たちの身分は移動魔術を主魔術とする、テイレナーだった。テイレナーと認められると派遣所などの事務職か、人や物を移動させる運搬などの仕事に務められることが可能になる。魔力がさほど高くなくとも務まる上に、稼ぎもある仕事だった。しかし、男たちはその仕事を嫌った。そもそも、人のために働くなどという考えがなかった。さらに男たちはテイレナー独自の魔術も習得していた。相手を吹き飛ばすことができる”シント”、相手の動きを止めることができる”アビシヤス”、その二つの魔術を自由に扱えた。完璧に扱えるとはまではいかなかったが、その魔術を使って楽に生きていける方法を見つけたのだ。

それが人さらいだった。さらって金を要求する。実に簡単だった。何もサモナーなど雇わずとも、食料や金が簡単に手に入る。男たちは結託して何度も人さらいを繰り返していた。

しかし、そんな中、一人の男がアジトに出向いてきた。普段なら魔術を使って返り討ちに行っている。が、その男は違った。

見た瞬間、男たちの中にある野生の勘、もしくは本能が警笛を鳴らしたのだ。絶対に逆らってはいけない、と。

階段を駆け上がると、そこには仁王立ちした雇い主がいた。駆け上がってくる男たちを無表情に眺めている。その表情に駆け上がってくる男たち皆が一気に顔を強張らせた。雇われて日はそれほど経ってはいない。が、雇い主の異常さは見ずとも直接肌を感じるものであった。

そして雇い主を見た瞬間、本能で理解した。この男は今、機嫌を損ねている。

「随分遅いな。一体何をしていた？」

汗をだらだらと流し固まっている男たちに向け、雇い主は冷淡に言い放った。表情一切変えず見据えている。その言葉に男たちは慌

てて口を開いた。

「あ、あの男が下りるのを待っていたんだ」

「俺たちが時間をかけたんじゃない」

「それにちゃんとあんたの言う通り、部屋に閉じ込めた」

ばらばらと発言するが、雇い主はそれぞれ目で確認し黙って見ている。見つめられると思わず視線を避けたくなってしまふ。薄気味悪ささえ感じる雇い主の顔、しかし避ければ当然なにか罰を与えられるに違いない。そう思うと、男たちは恐怖心と戦い雇い主の視線に耐えるしかなかった。

「ならばいい。あとはこちらでやる。……今日で契約は終わりだ。今までご苦労だった」

ふっと笑いながら雇い主は契約解消を男たちに言い渡した。その言葉に安堵の表情を浮かべる男たち。

「そ、そうかい。じゃあもうもんだけもらって、後はあんたが好きなようにやってくれ」

ゆっくりと三人が元雇い主へ近寄って行く。

三人は雇い主の前に立ち並び、真ん中の男が両手を合わせ手のひらをおわんのように作った。それを見てにつこりと笑う元雇い主は、ズボンのポケットに手を入れ何かを取り出そうとしている。その行動に三人の男は頬を緩ませた。

「お前たちはほぼ俺の指示通りに動いてくれた。それは感謝している。……しかし一点、気に食わないことがあった」

「えっ」

雇い主がポケットから出したものは小さな小瓶三つだった。それを呆然と眺める男たち。その表情を満足そうに見つめ、ふっと笑みをこぼした。

「……俺はイシャイナー。ほぼ攻撃手段がないという、世間の見方だがそれは違う。これに限らず、固定観念と言うものを持ってしまふと変化が生じた時に人はそれをなかなか受け入れることができない。先入観をなかなか取り払えないのと一緒にだ。それを例えるなら

ば、今がそうだ。俺が何かを取り出そうとしているのを見て、お前たちは嬉しそうな顔をした。……一体なぜだ」

突然の問いかけに思わず三人は困惑の表情を浮かべ、顔を見合わせた。

なんと答えるべきなのか、少しの間沈黙が流れたが真ん中の男がゆっくりと口を開いた。

「そ、そりゃ報酬をもらえと思って……」

「だろうな。そうじゃなければ、この間に遠くへ逃げている」

「え？」

すると、雇い主は小瓶をそれぞれ男の前に置いた。その小瓶はすでに栓が開けられている。男たちはそれを不思議そうに眺めた。

「イシャイナーは修理をしたり怪我を治したりするだけができる範囲ではない。もっとも、世間の大半の者はそうである。だが、俺は違う。人の命を奪いそれを保存する魔術を習得しているのだ。……

……お前たち、見たことはあるか？」

「なっ、何を……！」

雇い主は両手を真っ直ぐ横に伸ばし、握りこぶしを作っている。

すると、その両方の握りこぶしが青白い光を帯び始め拳全体を覆った。それを見た男たちはようやくやく悟った。

殺される。

がたがたと身体全体が震え始め、崩れそうな腰をなんとか踏ん張り逃げ出そうと一歩踏み出した。が、見えない何かがそこにあつた。

「な、何だこれは！」

「どうなってるんだ！」

「ここから出せ！」

何も見えないはずの空中を手で叩くと、何か壁のようなものが目の前にある。その壁は男たちの後ろ横前にあるらしく身動きが取れなくなってしまうていた。必死に見えない壁を叩くが壊れそうもない。空気を空しく叩く、パントマイムのような動きだった。

そんな男たちの姿を見て、また雇い主はくすつと笑った。

「滑稽だ。……俺に土をつけた罰だ。命をとられてもなお、それが活かされることに感謝しろ」

必死の形相で雇い主に訴えるが、もはや声さえ届いてはいなかった。

ライトは俯き加減にゆっくりと口を開いた。

「私……アジトだとは思わず、ずっと浜で寝かされているものばかりだと思っていました。人の気配はしなかつたです。でも、臭いなあと思ったり、都合よく食べ物があるなあとは思ってました」
そう言うため息を漏らした。狭い部屋の薄明かりに黄色の髪がえらく目立って見える。

「浜で寝かされていたとしても、家には戻りたくありませんでした。どうせ見つかるまでだと思ってずっとそのまま動かずにいました」
「……あんた変わってるな」

閉じ込められ、部屋の外からは音が全くしていない。

「それで時々遠くから話し声が聞こえていたんです。名前までは聞き取れませんでしたけど、あれを餌に来るのを待っているのか、と」
「ふうん。で、俺が餌に釣られたってわけね。にしても、あいつら初めから俺たちが来るって思ってたんだな。もし俺がシトモンに言ったらどうするつもりだったんだろうな」

「ぬう。あやつらの思惑にまんまとはまったわけじゃな。……にしても、都合よくいきすぎておるの」

唸り声を上げているヨウに、くすくすとライトが笑った。

「ヨウさんって喋り方が変わっていらっしやるんですね」

口に軽く手を当て、上品に笑っている。

そんな様子のライトを見て再び真一は疑問に思った。どうしてヨウの声が聞こえるのか、そっとヨウに尋ねた。

「なんで女にお前の声が聞こえてるんだよ」

「ああそりゃ簡単じゃ。ライトもマスターなんじゃよ」

思わずライトの腕を見た。が、ローブで隠されているため確認できない。

「なあ、左腕か右腕、見せてくれないか？」

「え、あ、私ですか。いいですよ。……でも私ライトって名前があるんです。次からちゃんと名前前で呼んでくださいね」

「はいはい……」

ライトは右腕左腕両方のローブの袖を捲し上げた。華奢な細い腕が露わになる。その左腕の上腕部に赤いリングが二つ描かれていた。「証だ」

「え、証？」

そう言いつつライトは袖を元に戻した。真一はすぐさま部屋を見回した。しかし、ライトと契約しているはずの使魔の姿は見えなかった。

「あんだ……じゃなかった、ライトの使魔はどこにいるんだよ」
しかし、ライトは首を傾げた。

「あの、私、使魔と言う言葉は知っていますが契約などしていません。どうしてそのようなことを？」

「え？ いやいや、あんだの腕。使魔とのマスターの証があるって」
ライトはそう言われ思わず腕に手を当てた。が、当然描かれているものなので手触りだけではわからなかった。

「ほ、本当ですか？ で、でも私そんなことをした覚えは……」

「おそらく、その使魔が自らライトと契約を結んだんじゃない。血でそのリングを描けば契約成立じゃ。何か腕にされた覚えはないか？」

「……あるような気がします。そういうえば、それから城を抜け出してもすぐには見つからなくなったような気がします」

統治者の娘。王族独特の黄色の髪。それだけで、町を歩けば目に付いてしまう。ライトは毎日のように城から抜け出していた。城の中においても変化のない時間だけが過ぎていた。窓から景色を眺める

こともできない。時間の移り変わりさえその目で見ることができなかった。

「いつものように抜け出した時に、温かい手が私の腕を掴んだんです。それからその人は『見守ってあげる』とおっしゃって……名前を尋ねたんですけどすでにどこかへ行かれたようでした。それからです。何か運がよくなった感じがしたんです」

「運？」

「ええ。城から抜け出して町を通る時、人にぶつからなくなっていました。あと転ぶこともなくなりました。町を抜け出して森へ行ったときも、迷うことなく行けました。……誰かが声をかけてくれたような感じで、足が自然と進んでいたんです」

微笑ながらライトは話した。

しかし、その話を聞いた真一は少し疑問に思ったことがあった。

それを聞こうとしたとき、先にヨウが口を開いた。

「それで、使魔がおらんくなってしてもうて人にぶつかっておったのか。……そうか、おらんくなってしてもうたか」

寂しそうにつぶやいた。横顔もどことなく暗い。呆然としていて、ため息を漏らしている。

「……俺と会ったときぶつかってたよな。使魔がいなくなったのか？」

「わかりません。でも確かに最近よく人にぶつかるようになりました」

「おい、どういふことなんだよ」

そう肩にしがみ付いているヨウへと問うた。虚ろな表情のままだった。

「おそらくじゃが……その使魔はこの世におらんくなっただんじゃ。

ライトをかばったのか、それとも誰かに捕らわれたのか。……残念じゃ」

ぎゅっと真一のローブを握った。震える拳は怒りなのか悲しみなのか。

真一は使魔と言うものをよく理解できていなかった。時折見せるヨウの表情が、その疑問を問うことを躊躇させていた。イダワ島で見せた警戒する顔と強張らせた顔。どちらも使魔に関する話の時だった。一体何がそうさせるのか。使魔とは何なのか。その問いを今のヨウに投げかけることは、真一にはできなかった。

その時だった。

急にドアが激しく音を立てて揺れ始めた。

「な、何だ！」

「何の音ですか？」

激しくドアを叩く音だった。一人だけで出せる音ではない。いくつも手があるように、ドンドンと言う音が絶え間なく響いていた。木の扉が壊れるのではないかと思わせるほどの威力を感じた。

真一はライトの手を取り、すぐさま扉と対面する壁へと移動させた。激しく動く扉を見ると一気に恐怖心が芽生えた。異常な音で、ライトもそれを感じているのか少し震えている。

「……なんだこれは」

「わからん。ひとまず、身構えた方がええぞ」

しかし、矢を引ける高さがない。仕方ないので真一は立て掛けていた弓を持ち、構えた。激しく木が割れるような音が響く。

威力は衰えることなく、より一層扉を強く叩いている。

壊れてしまうのでは、と真一が思った時だった。とうとう扉の真ん中に小さな穴が開いてしまった。

【第二章 港町シトモン】襲撃

扉の中央が壊され扉を叩く音が鳴り止んだ。遠目から穴を覗けば、向こうには薄暗い広場が見えている。が、人の姿が見えなかった。

鳴り止んだのを安心したのか、真一はゆっくりとその穴に近づいた。そして、顔を近づけていく。

「シンイチ、引くんじゃ！」

ところが、突然ヨウが大きな声を出した。それに驚き、真一はすぐさま穴から身を引いた。

そのすぐ後だった。いきなり穴から尖った黒いものが突き出てきた。しかし、それはすぐに引つ込んだ。いきなりということで息を呑んだ真一は戸惑いを隠せない表情だった。

「なっなんだよ……今のは」

そう言ったや否や、またその穴から今度は鳥のような頭が黒いくちばしを突き出てきた。

小さいながらも先鋭のくちばし。そして、頭の上に少し赤みかかり、くちばしより下の部分が少し白い。見たことのある頭だった。

その特色のある頭にすぐさまある鳥が思い浮かんだ。

「ツバメか？　なんでこんな所に……」

「ピイイイ！　ピイイイ！」

口を大きく開け甲高い鳴き声をあげた。しかし、すぐまた頭を抜き姿を消してしまった。

「い、今の音は……な、何ですか？　あんな音、私、聞いたことありません」

真一の後ろにいるライトは、真一のローブの裾を掴むと震え始めた。見れば顔を俯かせ、怖さを我慢しているのか唇を噛み締めている。

「ツバメだよ……ああ、魔物だ。心配すんな、入ってこれねえみたいだから」

と言ったものの、嫌に静かな扉に不気味ささえ感じる。が真一は、落ち着いていた。怖がるライトを見たせいなのかもしれない。それに、女と一緒に怯える男と言うのも格好が悪い。強がるつもりはないものの、パニックになるほどの焦りは感じなかった。

ツバメがいるとわかったにしろ、数がどれぐらいいるのかわからなかった。激しく扉を叩いたのは一匹や二匹ではできないだろう。三匹なのか、それとももっと多いのか。そう真一は考えていたが、急に何かを思い出したように目を見開くと慌てた様子で矢筒の中を確認し始めた。

「どうしたんじゃ？」

「……矢が後四本しかねえ」

「なんじゃと？」

ヨウも矢筒の中を覗き込んだ。確かに矢が四本しか入っていないかった。真一は矢筒から全ての矢を取り出し、矢筒を逆さまにしたが、当然それ以上矢は出てこない。

元々矢を購入した時、六本セットとなっている。内、一本は最初に道場でカラスが襲撃した時に放ち、もう一本はダリイを助ける際に放っていた。よく考えれば、カラスが消滅した際矢も一緒に砂へと化していた。今更ながら気づいた真一は、悔しそうに頭を掻いた。「ああくそ！……でもまあ、どうせこんな部屋じゃ弓は引けねえか。とにかく、ここから出た方がいいんじゃないかねえのか？ 音しなくなっただし」

ヨウもじつと扉を睨みつけた。どこへ行ったのか、ツバメの鳴き声さえしない。

「そう……じゃの。早く地上へ出てマスクに協力してもらったほうがええ」

そして、真一は振り返りライトの手を握った。まだ少し震えている。ライトは眉を八の字にし、顔を上げた。

「で、出るんですか？ 大丈夫なんですか？」

「ああ。大丈夫だから心配すんな」

「は、はい」

真一はぐつとライトを引つ張り上げた。ふらつきながらライトは立ち上がり、すぐさまびつたりと真一の腕に絡みついた。腕をぎゅつと握り締め、身体までも左腕に寄り添っている。

「あの……さ。別に腕を持つのはいいんだけど、動きづらい」

「あ、す、すいません」

すぐさま左腕から身体を離れた。それを見たヨウは真一の肩から離れ、ライトの前に浮かぶとその左手を握った。小さな手がライトの指を握り締めている。

「心配するな、わしがそばにおろう。わしも、男にしがみつくより、女子手を握る方がええしのお」

「は、はあ」

真一は矢を矢筒の中に戻した後、そのまま肩から提げ背中に背負った。トートバックも肩に提げる。置いていた弓と拾いながら、真一は上機嫌に笑うヨウを呆れた目つきで見た。ニコニコと嬉しそうに笑っている。そんなヨウから目を離し、恐る恐る扉に近づいて行った。

また穴からくちばしが出てくるかもしれない　そう思うとやはり怖い。遠くから穴から見える範囲を確認し、安全と分かったところで扉を思いつき蹴った。扉を壊せば置かれている荷物を退かせることが出来るかもしれない。

何度か蹴っているうちに、木がメキメキという割れるような音が鳴り出しどんと破片が床へと落ち始めた。どうやら穴が空いたせいか、もろくなっている。何度も蹴っていると、とうとう一枚の板が外れた。ずり落ちて見えたものは、大きな木の箱のようなものだった。

「こいつを退ければ扉が開くな」

「じゃの。がんばれ、シンイチ」

真一は空いた隙間に手を入れ、もう一枚板を取り払った。そして、空いた空間からその木の箱を押しした。なかなか重く、手だけで押し

ただけではびくともしない。考えた真一は再び弓を壁に立てかけた。そして、気合を入れるように手をこすり合わせ中腰になると、一気に箱を押した。大きな音を出しながら少し前へ動く木の箱。後ろではヨウが心配そうに眺めていた。

どうにか動かし終えた真一は息を切らし荒く呼吸をしている。

「こ、これで……扉が少し開くはずだ」

顔を赤く染めた真一が汗を拭う。隙間から見ると、確かに少しだけ扉と木の箱の間に隙間ができています。

一息ついた後、真一は再び扉に手をかけた。そして、唸り声を出しながら必死に扉を押した。

「くそっ、お、重い！ 動け！」

足をつっぱり必死に押している、が扉はなかなか動かない。すると、後ろで立っていたライトがおぼつかない足取りで真一の横へとやって来た。そして一緒にたまって扉を押し始めた。

「わ、私も手伝います！ 全然意味ないかもしれませんが」

「いや、助かる！ いくぞ！ ……おい、お前も手伝え！」

じっと見ていたヨウだったが、ため息を漏らすと真一の隣へと飛んできた。

「わし、腕力なんてない」

「うっせえよ！ たまには動け！」

白けた顔をしたまま、ヨウも扉に手をかけた。

「じゃあ行くぞ！ せーの！」

息を合わせ三人同時に扉を押しした。それぞれ歯を食いしばったり筋を立てながら扉を押ししていく。すると、少しずつではあったが扉が開いていった。開く隙間から見える広場の灯り。

そして、一人一人分の隙間が開き終わり三人は疲れたようにその場に座り込んだ。三人とも息を切らしている。

「あ、開いた……開いたぞ」

「ほ、本当ですか？ よかった、です」

「な、なぜ……わしまで」

なんとか息を整えた真一は弓を手に取り、ライトの手を握って立ち上がらせた。ヨウもすぐさまライトの元へ行き、また指を握り締めた。

「あんまりゆっくりしてたら、またツバメ……じゃなかった魔物が帰ってくるかもしれない。俺が先に進むから、後ろ頼んだぞ」

「わかった。……まあ階段上るだけだし。ちゃっちゃと行けるじやろ」

弓を握り締め、扉の隙間からゆっくりと身体を出した。広場は見たとときと変わってはいない。周りには何かいるような気配さえ感じなかった。安全だと思った真一はすぐに隙間から手招きをした。

それを見たヨウはゆっくりと飛んで行き、ライトの手をその隙間に当てた。ライトはその隙間の幅を確認するとゆっくりと進んだ。そして、何事もなく部屋から脱出することに成功した。

「よし。じゃ、階段を上がろう。狭いから気をつけるよ」
「はい」

と、階段へ向かおうとした時だった。

何か無数の鳥が羽ばたく音が上から聞こえてきた。かすかに聞こえる程度の小さな音だ。

「……なんだこの音」

思わず足を止めた真一。すると、頭の上のピィが激しく鳴き始めた。頭の上で暴れ小さな羽根をばたつかせている。

「ピィ、どうしたんだ？ ……ん、何だ」

小さい音と想っていたが、徐々に音が大きくなっている。

階段を下りてきているのか階段からその音が響いていた。どんどんと近づいてきている。危険だと察した真一はすぐさま振り返り叫んだ。

「どつちかの扉に逃げろ！ ツバメが戻ってきた！」

「何？ ……なっ！ シンイチ！ 後ろじゃ！」

その声に真一はすぐさま振り返った。頭上には黒く小さな身体のツバメが五匹、尖ったくちばしを真一へと向けていた。驚きの余り

声を出せず啞然としていた真一に対し、ツバメたちは容赦なくそのくちばしを真一目掛け突進させてきた。

「うわっ！」

咄嗟に後ろへと転がり、なんとか避ける。しかし、行き着く間もなくすぐ次のツバメが真一に鋭いくちばしを向けた。

「早く行け！」

「わかつとるわい！ ライト、こっちじゃ！」

ヨウは右の扉を引いてみた。すると少し開いた。すぐさまライトの手を隙間に入れ、開けるように促した。察したライトはすぐさま扉を開け中へと入った。

一方真一はぎりぎりのところでツバメの攻撃を避け続けていた。と言うのも、パイが攻撃が来る一瞬の前に鳴くため、避ける判断が早くなっていた。広場の中央で、まるで踊っているかのように避け続けている真一。目を見開きツバメそれぞれに集中していた。

くちばしが刺されればただではすまない、そう思いながら弓を握り締めている。

「シンイチ！ こっちじゃ！ 道がある。早く来い！」

その声にすぐさまその扉へと身をねじ込ませた。すぐ扉を閉めたが物凄い音を立てながら扉が揺れている。大方ツバメたちがくちばしで扉を壊そうとしているのだろう。その音に恐怖を抱きながらも前を見た。人一人分の通路が真っ直ぐと続き、点々と灯りが灯っている。

「とにかく、ツバメから離れるんだ。あんた、先行け！」

「で、でも！」

一瞬強張るライト。しかし、ヨウが指をぎゅっと握り締め笑いながら言った。

「なあに怖がることはない。ライトの使魔がまだおったなら、同じように必死になって守ろうとしたはずじゃ。わしも同じじゃ。その使魔の分もわしが守ってやる」

「……はい」

「よし、笑ろつたの。じゃ、行くぞ！」
ヨウを先頭に、真一たちは薄暗い通路を進んで行く。

【第二章 港町シトモン】先生の言葉

ひたすら薄暗い通路を走る。ヨウを先頭に、ライトの指を握り先導していた。目の見えないライトは指を引つ張られるまま走っている。一方、最後尾の真一は後ろを気にしつつ走っていた。扉からは離れたものの、扉を叩く凄まじい音は扉が見えなくなっただけから聞こえた。扉を突き破り追ってくるのも時間の問題だった。

「これどこに繋がってんだよ！」

走りながら前に行くヨウへ話しかけた。ヨウは前を見据えたまま口を開いた。

「わしが知るわけなからう！ とにかく行くしかないんじゃない。もし行き止まりじゃったら、わしがどうにかしてやる」

「また気失うだけなんじゃねえのか」

その言葉にヨウは黙り込んでしまった。どうせ無茶をするんだろう。そう真一は思った。どうして必死に守ろうとするのかは知らないが、貸しを作っているようで嫌だった。だったら自分がどうにかしなければいけない。そうは思っても身体が付いてこないのが実情だった。

一本道の通路を走っていると、急に広い洞窟のような場所に出てきた。鍾乳洞のような切り立った岩が上からも下からも伸びている。どこからともなく水滴の音がこだまし、まるで別世界へと来たような感覚となった。走ってきた通路は普通の岩肌だったが、この洞窟は足場も安定しないまさに洞窟だった。見上げれば天井は高く、左右の壁はなくなり広い洞窟が奥まで続いている。

「な、なんでいきなり洞窟なんだよ」

「……そういえば」

息を整えながらライトが言った。

「前、森を歩いていると足元から冷たい空気が流れてくるのを感じました。今思えば、その流れていた空気の根源はここかもしれませ

ん

「どういうことじゃ？」

「幼い頃、まだ視力がある時森へ来たことがあるんです。記憶が薄れているんですが、洞窟らしき入り口を見た覚えがあつて……です
から、たぶん……」

自信がないのか語尾を小さく消えるような声で言った。見かねた
ヨウが咳払いをした。

「要するにじゃ。ライトの記憶が正しければ、最近感じた冷たい空
気は洞窟からだ。そしてどこかに出口があると。そういうことじ
やな」

「は、はい」

それ以上問いただすことなく、真一とヨウはじつと上を見上げた。
が、暗くて光などなかった。足元にはさらった奴らが利用していた
のか、灯りがところどころ灯っている。がその光が天井まで届くは
ずがない。じつと洞窟の奥を見ていると 光が見えた。

灯りの揺らめきではなく、はつきりとした光が差し込んでいた。
思わずヨウは指差した。

「シンイチ、あの奥じゃ。あそこがきつと出口じゃ」

「……何か光が差し込んでるようにも見えるな。さつさと行こう」
そう言つて一歩踏み出した。が、突然通路からバサバサと静かに
羽ばたく羽根音が迫ってきた。

その音に三人とも振り返り通路を凝視した。

通路から飛び出たのはツバメ五匹だった。真一たちを見るなり五
匹とも甲高い声で鳴いた。その鳴き声が洞窟内に響き渡り、思わず
耳を塞いだ。

「くそ！ とにかくお前は女を連れて走れ！」

「じゃがシンイチは……」

「俺はいいんだよ！ 女が怪我でもしたら本当に証がもらえねえか
もしれねえだろ！ わかつたならさつさと行け！」

今までにない真一の気迫に、ヨウは言葉を飲み込み込みライトの指を

引いた。

「シンイチさん？ どうして、一緒に行きましよう？ きつと三人で行っても先ほどのように逃げ切れます」

「それが無理そうじゃからシンイチがあのように言っただんじゃ。お主は見ておらんからわからんじゃろうが、あの魔物ども素早いんじゃない」

「だったらなおのことです！ わ、私だってイシャイナーなんです。お役に立てることだってあります！」

すると、真一が黙ったままライトに近づいた。そして、ライトの手を取るとトートバックを手渡した。

「はつきり言って、いても邪魔なんだ。俺は平気だから行ってくれ。あと、これ。弓引くのに邪魔だから持っけてくれ」

「で、でも……！」

「ええから行くんじゃ！」

半ば無理矢理ライトを引っ張って行った。不安定な足場に転びそうになりながらも、ヨウは懸命に誘導をする。

「外に出たら戻るからの！ 絶対無事でおるんじゃぞ！」

真一は手を挙げて応え、頭上に浮かぶツバメたちに集中した。

全部で五匹。矢筒の中にある矢は四本。仮に全て当てたとしても、一匹残ってしまう。そもそも、あんなに小さく素早いツバメに矢なんて当たることができのたろうか。一人見上げる真一は急に不安に襲われた。薄暗い洞窟内だというのに、ツバメたちのくちばしは光って見える。あれに刺されてしまったら 思わず身震いしてしまった。

ひとまず準備はしなければいけない。開けている背中の矢筒の中から一本矢を取り出した。矢筒の中は残り三本。取り出した矢を見ながらそんなことを考えていた。が、ツバメは構うことなく五匹の内一匹が鋭いくちばしを向け、真一へと急降下してきた。

その殺気に気づきすぐさま横へと転がった。しかし先ほどの広場とは違い、ごつごつとした岩肌で背中が痛んだ。

「くそ、転がって避けるのはやめよ……って！」
手を付き起き上がるうとする真一に、また別のツバメが急降下してきたのだ。

今度は後ろへジャンプして避ける真一。急降下してきたツバメは岩に激突することなく、すぐさま浮上し真一を見下ろしていた。するとまた、残った三匹が一斉に真一目掛け飛んできた。それには思わず背を向け、咄嗟に大きな岩陰へと身を隠した。するとツバメは再び浮上し、探しているかのようにまた甲高い鳴き声をあげた。

「なんだって俺がこんな目に合わなきゃなんねえんだよ。……ああくそ！ あんな高校生活でも恋しいぜ、全く！」

覚悟を決めたかのようにそう叫ぶと、すぐさま弓に矢を番え弓を打ち起こした状態で岩陰から出た。

ツバメが二匹近くにいた。内、一匹はすぐに真一に気がつき、鋭いくちばしを向け飛び掛ってきた。

真一はなんとか自身を落ち着かせ、飛び掛っているツバメに狙いを定めた。

当てなければいけない、当てなかったら 無意識でもそう考え
てしまい手に力が入る。当てたい、当てなければ。

引き分けるとその状態を維持することなくすぐさま矢を放った。
弓から放たれた矢は真っ直ぐ飛んでいく。

が、無常にもツバメの横を通り過ぎた。

矢が岩に当たる音と、ツバメのくちばしが目の前にやって来たのがほぼ同時だった。

真一は咄嗟に左に身体の重心を移動させ倒れるように避けた。ツバメのくちばしが頬をかすめ、長い切り傷を負った。それでもなんととかツバメを避けることができた。しかし倒れた場所が悪かった。丁度岩が隆起しており、そこに頭を強くぶつけてしまった。その衝撃で真一の意識は遠のいていく。

「当てようと思っちゃんかん。当てよう当てようと思ひながら引く射では、絶対的に的には当たらん」

いつかの先生の言葉だった。試合前だったと思う。個人戦の結果でみんなを見返してやるうと必死になって弓を引いていた。が、先生はそんな俺を叱った。

「何事も基本が大事だ。そんな雑な射では駄目だ。試合だろうと、普段通りの射でやればいい。そうすれば自ずと結果は付いてくる」

「じゃあ先生、試合中の射は何を思いながら引けばいいんですか？ 負けたくないって思いながら弓を引けばいいんですか？」

「それも違う」

先生は遠くにある的を眺めた。

「萩野くん。射法八節しゃほうはっせつと言う言葉はもちろん知っているだろ？」

「はい。弓を引く動作のことで、足踏み、胴造り、弓構えゆがまえ、打ち起こし、引き分け、会かい、離れざんしん、残心の八つの動作です」

「その通り。それら全て大事なこと。一つでも怠ればそれは正しい射ではない。弓道は正しい動作で行えば、必ず的に当たるようになってる。あとは、弓の重さによって矢先の高さを調節すればいい」

「……はい」

高さが違っているのか。しかし、放った矢は的とは全然違う所へ突き刺さっている。高さだけのせいではないような気がした。

「試合中も練習時と同様、射法八節の動作一つ一つを確認しながら引けばいい。そうすれば当たるさ。萩野くんは良い射なんだ。焦る必要なんて全くない」

「はい……ありがとうございました」

「さあもう一度。見てあげるから引いてみなさい」

はっとして起き上がった。見上げればツバメたちが真一を見下ろ

していた。どうやら気を失っていたのは一瞬だったらしい。痛む頭に手を当てれば血がついた。思わずぎよっとしたが、それどころではない。すぐさま立ち上がりツバメたちを睨みつけた。と、足元に何かが転がった。視線を落とすと、そこにはパイがいた。

「パイ！ お前ずっと頭の上に乗ってたのか？ っってお前も怪我してるじゃねえか！」

ふわふわの黄色い毛に赤い血がつき、固まっている。抱え上げようと持ち上げるが、パイは自ら地面に落ちた。

「ピッ！」

怒っているかのように真一に向かい鳴き声をあげた。そして何を思ったのか、ツバメたちに向かって威嚇するように再び鳴き声をあげた。

「パイイ！ パイイ！」

すると、その鳴き声に反応して五匹ともがパイを見下ろした。パイの鳴き声が聞こえないほどの甲高い鳴き声を上げる。あまりのうるささにまた真一は耳を塞いだ。

「パイ何やってんだ！ いいからお前もさっさと洞窟から出る！」
「ピッ」

逃げるどころか、パイ自ら五匹に向かってちょこちょこ走り出した。五匹の真下に行くとも再び鳴いた。まるで挑発しているかのように見える。すると、ツバメたちは一気に急降下をし、パイに向かってくちばしを向けた。

「馬鹿！」

が、なんとかパイは避けている。

それでもかすめているのか、毛に血が染み渡っている。しかし、ツバメは構うことなく次から次へと急降下しパイに攻撃をしていた。パイは丸い体を活かし転がるように避けているが、あれではくちばしに刺さってしまうのも時間の問題だった。

パイの奮闘ぶりを見ているうちに、はっと気づいた。パイは的になっているのではないかと。だったらそれを無駄にすること

はできない。

真一は比較的平たい岩の上に移動し、足踏みをした。

『射法八節の動作一つ一つを確認しながら引けばいい。そうすれば当たるさ』

短い夢の中の先生がそう言った。確かに先ほどは焦りがあった。

真一は自嘲げみに笑った。

三年間弓道ばかりをやって来た。『糞真面目の萩野』。そんな言葉が同級生の間に広がった。それでも一人弓道に明け暮れた。自分でもいつから弓道に対し真剣になったのかわからない。ただ、馬鹿にする奴らを見返してやりたかった。自分は真面目ではない、ただ弓を引きたかった。それがいつの間にか真剣に弓道と向き合うようになっていただけだった。が、同級生たちはそれを糞真面目だと言う。誉めているのではない、馬鹿にしているのだ。適当に部活を流す同級生。そんな奴らと同じ場所で弓を引く自分にも腹が立った。腹が立った。そんな奴らと同じ場所で弓を引く自分にも腹が立った。そして、自分一人ではどうすることもできない無力さに腹が立った。

真剣に取り組むことを貶される。貶されるなら群れなければいい。いつの間にかそんな考えが出来上がっていた。弓道は幸いにも個人種目だった。その結果で見返せばいいと思った。俺とお前らは違つと。

その中でも先生だけは最後まで自分を信じてくれた。自分の意見を真剣に受け止めてくれ、それに応えてくれる。そんな先生の期待だけは絶対に裏切りたくない。

先生の言葉が頭の中で反芻する。

胴造り。背筋を伸ばし腕を少し湾曲させる。弓の上から視線を下ろしていき矢を通じて的を見据える。 的となるツバメは、一匹上空におり、他の四匹がピィを攻撃する様子を眺めていた。

弓構え。弦にかけを引つ掛ける。軽く握る。力んではいけない。そして、再び視線をツバメへと移動し集中を高めていく。

打ち起こし。ゆつくりと弓が倒れないように、真つ直ぐと。矢は地面と平行に。頭の斜め上ぐらいまで弓を持ち上げる。

引き分け。弓を持つ左手は押すように、弦を引く右手は力まないように。ひじが後ろに引つ張られるイメージで弦を引いていく。

会。無心に。短くても長くてもいけない。離そうと思ってもいけない。徐々にかかけの中の親指の力を抜いていく。

離れ。離す瞬間に、右手が弦に負けて戻ってはいけない。中から割って開くようなイメージで、離す。

”バシッ”

弓から矢が真つ直ぐ放たれた。狙い通りに真つ直ぐ飛んでいく矢は逸れることなくツバメへと飛んでいく。そして、ツバメが気づくことなく矢は命中した。

それを見届けた真一は最後の動作、残心をする。伸ばしていた両腕をゆつくりと腰へと戻した。

「よし」

ツバメたちの動きが一瞬にして止まった。落とされたツバメはそのまま動かなくなり、前と同様に黒い砂へと化していった。突き刺さっている矢も巻き込まれるように消えてしまった。ツバメたちの注意が一気に真一へと注がれる。それでも真一は焦ることなく、次の矢を取り出し、番えている。

ツバメは再び甲高く鳴くと、今にも真一へと突進する構えを見せた。が、しかし。

「ピ、ピィー！」

血まみれのピィが思いつきり鳴き、一瞬注意が逸れた。それを真一は見逃さなかった。

再び射法八節の動作を注意しながら弓を引く。そして、先ほどと同様無心で矢を放った。

”バシッ”

矢が見事に命中し、音もなく落ちるツバメ。それを確認すると、すぐさま次の矢を矢筒から取り出す。残ったツバメ三匹は、一気に真一の元へと突進をしてきた。ピイが再び鳴いたが今度は通用しなかった。真っ直ぐ真一だけに向かっている。

が、真一は逃げることはなかった。狙い定めたツバメだけに集中し、動作を速めるわけでもなくいつもどおりに弓を引く。大丈夫だ、そう自分に言い聞かせた。

”バシッ”

向かってくる一匹のツバメに矢が命中し、そのままツバメは崩れ落ちていった。が、残った二匹は構うことなく真一に鋭いくちばしを向け飛んできた。

真一は咄嗟に動き、くちばしが刺さることはなかった。が、くちばしが左わき腹と右肩をかすめ、その部分のローブが切り裂かれた。「……くそっ！」

思わず屈みこみ傷口を押さえると血で濡れた。破れたローブは傷口から赤く染まっていく。傷口がズキズキと痛み握っていた弓が手から落ちる。立ち上がるのでさえ困難なほどだった。

そこへゆっくりとした歩調でピイがやって来た。ピイも全身血だらけで、痛々しい姿だった。それでも真一の姿を見るなり、身体に自分をこすり付け心配しているかのように弱々しく鳴いた。そんなピイの頭にポンツと手を置いた。

「大丈夫だ。でも、もう弓は……。痛くて手に力は入らねえし、矢筒の中ももう空っぽだ。それより、ピイの怪我の方がやばいな」

真一はピイを大事そうに抱える。両腕の中にいるピイが温かく、思わずほっとした。そして、歯を食いしばりながらもゆっくりと立ち上がった。頭上では残り二匹のツバメがじつと様子を伺うかのように見下ろしている。

「あいつが戻ってくるまで逃げるしかねえ。動くなよ、ピイ」
「ピイ……」

力なく鳴くピイ。そして、真一は地面を蹴り上げると光が漏れて

いる方を目指し一気に走り始めた。

このまま足場の悪い洞窟内にいるのは危険だと判断した。少しでも出口に近づいて早く出なければ。しかし、ツバメたちはそれを阻止するかのように真一の行く手の頭上に飛んでいくと、真正面から急降下してきた。

横へ避ける間もなく、真一は屈んだ。が、背中をくちばしがかすめ、背負っていた矢筒の紐が切れてしまった。

「ぐっ……く、くそ！ 邪魔すんじゃねえよ！」

そんな真一の叫びもツバメたちは無表情に見下ろすだけだった。

【第二章 港町シトモン】 思いもよらぬ進化

ヨウはやつとのこととで洞窟から出ることができた。洞窟から出た場所は、ライトの言う通り森の中だった。細い木々が立ち並び、その隙間から見渡せば海が見えた。海の方角をよく見ると、岩肌が見えアジトの入り口らしき大きな岩も見えた。一方、指を持たれ誘導されるがまま走ったライトは息を切らしている。苦しそくに何度も咳き込んだ。

「すまんのライト。無理をさせてしもうたの」

「い、いえ。これぐらい平気です。それより……早くシンイチさんの所へ」

「ああすまん。ここでじつとしておるんじゃぞ」

ライトが頷いたのを確認したヨウはすぐさま羽根を忙しく動かし、洞窟の中へと戻っていった。

ヨウには真一を守らなければいけない理由があった。使魔とマスターの関係は、単なるものではない。もつとも、このことは真一にとっては何の関係もないことだった。ただ使魔にとってマスターとの関係は重要な意味があった。

マスターが死ねば使魔も死んでしまうのだ。

契約をすれば自動的にそうなってしまう。ただし、逆はない。使魔が死んでもマスターの身には何の変化もない。

それ故ヨウは真一のことを守ろうとしている。

とにかく早くシンイチの元へ。

ヨウは必死に羽根を動かし暗い洞窟を飛んでいった。

前方を立ち塞ぐように頭上から見下ろす二匹のツバメを前に、真一は地面に膝をつけたまま立てずにいた。

切り傷が痛み血が流れる。手元には弓も矢もなく、丸腰の状態。

洞窟の出入り口となつてゐる差し込む光ははるか遠くに見えた。何もできない悔しさにツバメたちを睨みつけた。

「なんで俺を狙うんだよ！俺はツバメなんかいじめた覚えはねえぞ！てめえらの仲間のことだつたら、そっちが先に手出してきたんだろっが！」

叫ぶもののツバメたちは怯む様子もなく見下ろしている。

「くそ……。ツバメに言つても意味ねえよな。パイ、俺が的になるからお前だけでも出口に行け。……いいな」

「パイ、パイ……」

パイは首を横に振つたように見えた。まるで嫌だと言つてゐるようだった。しかし、真一はそんな行動に構うことなく、そつと自分の腕から離れた。そして、パイの背中を軽く押した。

「行け」

振り返るパイの黒い瞳が潤んでいる。真一の言葉にも従わず、ただ真一を見つめていた。

真一はそのパイの視線から逸らし、ぐつと足に力を入れ立ち上がった。少しだけ足元がふらついたが、視線はしっかりとツバメたちに向いていた。

「来いよ。ツバメのくちばしなんて怖くねえよ。たかが鳥に、人間の俺を倒せると思つてんのか。ほら……早く来いよ！」

その叫び声と同時に、一気にツバメたちが真一に向かって急降下をしてきた。先鋭のくちばしは真一に向いている。

真一はそのくちばしに集中した。

避ける、避けなきゃいけない。死んでたまるか。

飛んでくるツバメたちの攻撃を見て咄嗟に右へと転がった。ごつごつとした岩肌が傷む傷口に触れるが、気にしている暇などなかった。すぐ寝転がった状態から膝を付きツバメたちを見た。ツバメたちはすぐまた頭上へ浮上し、真一に襲い掛からんとしていた。と、その時だった。

「インディションサモン！」

突然、出口の方からヨウの声が聞こえた。はっとしてその方を見れば、険しい顔をしたヨウが両手に短剣を持ち目にも止まらぬ速さでツバメに向かっていた。

ツバメもその速さに逃げることができず、気づき振り向いた時にはヨウが目の前で短剣を振りかざしていた。

そして、ヨウは短剣を躊躇うことなく振り下ろした。

音もなく突き刺さる短剣。刺されたツバメは、木の葉が落ちるかのように真一の目の前に落下した。そして、黒い砂へと化しさらさらと消えていった。再び視線を上に向けると、最後のツバメがヨウに襲い掛かっていた。が、ヨウも鈍くはない。上へ右へ左へ下へ。ツバメの攻撃をひらりとかわしている。

「シンイチ！ 早くこの場から去るんじゃ！ わしがどうにかする！」

しかし、シンイチは出口に向かうどころか、ふらつく足取りで洞窟の奥へと進んで行っていた。

「ば、馬鹿もん！ 逆じゃ！ 何やっとんじゃシンイチ！」

その行動にヨウは思わず動きを止めた。しかし真一は足を止めることもヨウを見ることもなく、奥へ奥へと進んでいる。

一方で、ツバメは止まったヨウに構うことなく先鋭のくちばしを向けた。殺気に、はっとして気づいたヨウはすぐ身体を翻し避けるが、避ける間にツバメの身体に当たり衝撃で吹き飛んだ。吹き飛んだ先に、上から伸びていた岩がありそこへ正面からぶつかってしまった。

「いたた……。危うく顔に傷が付くところじゃったわい。おのれえ……馬鹿シンイチめえ。わしの働きを無駄にしよって」

ちらつと真一が向かった方向を見た。すると、真一は手に弓とはずし落ちていた矢を持っていた。そしてヨウのところへ向かっている。

思わずじっと見てしまい、ヨウの気が逸れてしまった。がツバメの殺気を感じずぐさま避けた。ツバメは攻撃の手を緩めることなく

ヨウに攻撃を繰り返している。

「おい！ お前、ツバメの動きを止める！」

その声にヨウは下を見た。見れば、真一が傷ついた腕や身体で弓を引こうと矢を番えている。よく見れば痛みで顔が歪んでいる。

「無理言っな！ じゃから、ここはわしが何とかする！ 早く出てライトに治してもらっくんじゃ！」

「うっせえ！ こんなもんなんともねえよ」

真一は足踏みをし、動作を始めた。逃げる気がない、そう感じたヨウはため息を漏らした。そして、攻撃を繰り返すツバメを睨んだ。「ぬう仕方ない。魔力が減っておるからどれぐらい持つかわからんが……やるしかあるまい」

ヨウは一旦ツバメとの距離をとり、両手を真っ直ぐ伸ばした。手を三角にし、その中に丁度ツバメが入るようにした。

「アビシヤス」

その言葉と同時に、ヨウが手で作った三角の空間から透明な空間の歪みがツバメ目掛け飛んでいく。それを見たツバメは避けようと上へ飛んでいくが、その歪みは追尾しツバメの飛ぶ速度よりも速くツバメに追いついた。そして、その歪みに飲み込まれたツバメはその飛んでいる格好のまま固まった。

「今じゃシンイチ！ やれ！」

真一は黙ったまま弓を打起こした。そして引き分けようとしたその時だった。大きな切り傷を負った、左わき腹と右肩に鋭い痛みが走った。思わず顔を歪め、一気に力が抜けてしまった。しかし、真一は諦めずもう一度引き分けようと試みた。がやはり鋭い痛みが真一を邪魔した。どうしても引けない。引けたとしても、会を維持できる自信がない。会を維持しなければ、頭上にいるツバメに届くとは思えなかった。

「くそっ……弓が引けねえ」

「なにい？」

浮かんでいたヨウが真一の元へ降り、そのまま左肩へとしがみ付

いた。真一の肩をぺしぺしと叩きながら、少し大きな声で言った。
「なんともないんじやなかったのかの！　じゃからさっさと洞窟から出ると言ったじゃろうが！」

「引けると思っただからしょうがねえだろうが！」

と、固まっていたツバメがくちばしをかすかに動かした。小さく鳴き声も聞こえる。

思わず二人とも頭上を見上げた。見れば羽根も動き始め、ツバメがぎこちなく首を動かし真一たちを睨みつけた。

「ぬ……もう魔術が解けるか。はよう出口に行くんじや」

「ああ」

互いに叫ぶのをやめ、真一は傷口を気にしつつも出口へと走って行く。

真一が跪いていた場所に戻ってみるとまだパイがいた。すぐ横には紐が切れた矢筒が置かれている。矢筒と寄り添うように座っているパイは、真一の顔を見るや否や元氣よく「パイ」と鳴いた。

「パイなんで逃げてないんだ。ったく、どいつもこいつも……自分で動こうという気にはならねえのか」

そう言いつつパイを頭の上に乗せ、矢筒を拾い上げようと腰を曲げた。矢筒を手に取り、腰を伸ばそうとした時だった。

後ろから甲高いツバメの声が響き渡ってきたのだ。その声は一匹の鳴き声とは思えないほどの音量で、洞窟の壁に跳ね返っているためなのかあちこちからその鳴き声が聞こえてくる。その鳴き声と同時にパイがもがいていた。何か危険を察しているのか、羽根をばたつかせていた。一方で真一とヨウはその鳴き声に驚き、一瞬行動が止まってしまっていた。

鳴き声がする方へ振り返る。

が、ツバメは鳴き終えた一瞬の間に真一の目の前まで飛んできていた。先鋭のくちばしは、真一の脳天を指し今にも飛び掛らんとしている。

真一もヨウもそれは確認できたが行動を移す暇もない。声も出さ

こともできない。一瞬のことで脳からの伝達を身体全体が待っている状態だった。

もう駄目だ、と真一もヨウも思った。

まさにその瞬間だった。

パイが真一の頭から落下してきたのだ。落ちるタイミングは最悪だった。狙っていたのか、真一の盾になるかのようにくちばしの先端と真一の頭の間に落ちる。

真一の目の前を黄色い毛が覆う。その毛は少し血の臭いがした。

何が起こっているのかわからない状態で、真一は口を開けたまま声が出せなかった。

「……！」

急に目の前が真っ白になった。

眩い光が途端目の前を覆う。真っ白で何も見えず、パイがどうなったのかツバメはどうなったのか何もわからない。

「なんじゃこれは！」

真一の耳元でヨウの叫び声が聞こえた。何がどうなっているのかわからぬまま、その光が徐々に収まっていく。

そして真一の目の前に現れたのは褐色の鳥だった。羽根をばさばさと揺らしながら真一に背中を向けている。広げた羽根の大きさは真一が両手を広げたぐらいとほぼ同じだった。斑点模様のように黒い羽根が混じり、少し光沢のある身体は美しいと思った。ちらりと前を覗き込めば、黄色の目にくちばしは短く先が尖り少し下に曲がっている。胸の部分も白い羽根に所々黒い羽根が混じっている。足元を見れば鋭い爪をむき出しにしている。

その鳥から目線を移し、少し先を見てみるとツバメが倒れ砂へと化している最中だった。いつの間にか倒したらしい。

再び鳥を覗き込みじっと見つめっていると、ふとある鳥が浮かんだ。

「……鷹か？」

そう言ってみたものの、実際に間近で見たことはない。どこことなく鷹に似ているような感じだった。

急にはつとした真一は頭をきよろきよろと動かした。先ほどまで見えたピイの姿が見えない。

「あのひよこどこ行つたんじゃ？ おらんぞ」

ヨウもそう言つて視線を泳がした。しかし、どこにも見当たらない。すると、目の前にいた鳥が大きく羽ばたいて、真一たちと対面に向き直つた。翼を畳み黄色い目をぱつちりと開け真一を見つめてくる。

真一も視線をはずさずじつと鷹らしき鳥を見た。見当たらないピイ、急に現れた鳥。

「ま、まさかの。ひよこが……進化するはずは……」

浮かんだ考えを先にヨウが口に出した。顔を引きつらせ半分笑っている。真一が眉をひそめじつと見ている時だった。

「そうですよヨウ。私はピイ。文句ある？」
しゃべつた。

口は開いていない。だが、その声が確かに聞こえた。低くも高くもないその声は真一とヨウの耳に届いた。その言葉に固まってしまった。鳥　ピイは悪びれる様子もなく、とことこと歩いて近づいてくると真一の足に擦り寄つた。

「やつと話せるようになりました。真一さん、私ピイです。とにかくここを出しましょう。ああ矢筒は私が持ちます。ローブ全体が破れていて見るからに痛そうです」

そう言つとピイは真一が持っていた矢筒に鉤爪で掴んだ。呆然としている真一の手から力なくすっぽりと抜けると、ピイは矢筒を持つたまま空中に浮かんだ。

「さあ出しましょう。足元に気をつけてくださいね。きっとライト様
が心配されています」

「あ……ああ」

一言だけ返事をする、ピイの後ろをついて歩いた。ヨウも呆然とピイの後ろ姿を眺め、目を丸くしている。

「パ、パラッグの雛が……進化じゃと？ わしは聞いたことがない」

そう呟いたが、真一はこの鷹がひよこのパイだとはにわかには信じがたかった。

「ひよこは成長したら鶏だろうが……鷹になるなんて聞いたことねえぞ」

【第二章 港町シトモン】パイの進化

パイを先頭にようやく洞窟から出ることができた。青空だった空は赤く染まり、太陽は海に落ち始めている。出口は人一人がやっと通れるほどの幅で、頭を下げ身体を捻りながらようやく脱出した。出口を出て少し離れた岩を見ると、ライトが腰を下ろし不安そうに身を縮こめている。ヨウはすぐさまライトのそばへと飛んで行った。「ライト！ 待たせたの」

「ヨウさん！ シンイチさんは……だ、大丈夫ですか？」

ヨウの声にすぐさま立ち上がり、不安そうに眉を八の字にしている。

「あんまり良くないんじや。全身血だらけでの……」

「ええ！ は、早く治療を……治療をします！」

ヨウはライトの指を握り、焦らないよう真一の元へ誘導して行った。

その真一は洞窟を出てすぐに座り込んでいた。顔を歪め、痛さに耐えている。左わき腹と右肩の切り傷はもちろん、背中や太もも辺りのローブまでもが引き裂かれていた。その破れたローブからは血がシミとなり、黒いローブを暗い朱色へと染め上げている。

「真一さん、大丈夫ですか？」

パイは持っていた矢筒を真一のそばに置き、地面に降り立った。首を下げ心配そうに覗き込む。真一は視線に気がつき、瞑っていた目を薄っすらと開けた。

勇ましい顔つき、鋭い鉤のくちばし、黄色の目 どう見ても鷹にしか見えなかった。どうしてひよこのパイが鷹に変化したのか。真一はパイの問いには答えず、疑問を口に出した。

「パイ、お前はひよこじゃなかったのか？ なんていきなり鷹になつたんだよ」

「え？ ああ。ひよこの姿は第一段階の姿です。魔力もなければし

やべることできない。自然に孵化した雛はこの姿です。……私の場合真一さんの魔力がなくてあの姿だったんですけどね。それで……」

すると、近づいてきたライトがその声に驚き足を止めた。

「い、今の声は……一体どなたですか？」

「ライト様、パイです。それより早く真一さんの治療をお願いします」

「あ。は、はい！」

驚いているライトの指をヨウは右肩のすぐ上まで誘導させた。ライトがそつと手を下ろすと丁度真一の傷口に触れてしまった。真一は歯を食いしばり険しい顔となったが、声を押し殺し痛みに耐える。ライトも突然触れた冷たい液体に驚き、すぐさま手を引つ込めた。

「す、すいません！」

「……大丈夫。気にすんな。わりいけど、早く治してくれねえかな」
ライトは黙ったまま頷いて答えた。

ライトは両手をその右肩の怪我の上にかざした。眉間に皺を寄せ、何かを念じるかのように集中している。すると、手のひらに青白い光ができ始めた。その光が真一の怪我に触れるまで大きくなると、その触れた部分からゆっくりと赤く染まり始めた。血を吸い上げているように見える。一方真一は、それが痒いとも痛いとも感じなかった。むしろ温かいと思った。マスクに腕の治療をもらった時のような、冷たく麻痺するような感覚ではない。怪我を和らげその痛みを吸い取っている、そんな感覚だった。

ズキズキと痛んでいた右肩から痛みが消えた。
「痛くない。すっげえな、もう大丈夫だ」

その真一の言葉にライトは手を下ろした。光がなくなった右肩を見れば、破れていたローブまで元通りとなっている。そのローブには血の跡もない。真一は右肩を回し、異常がないことを確認した。
「よかったです。……次はどこをすればいいでしょうか？」

そんな調子でライトは一つ一つ丁寧に回復魔術を施した。どれも

怪我を治すとともに、破れたローブまでも元通りとなった。便利な魔術だな、真一はそう思いながらライトの様子を眺めた。そして全ての怪我の治療を終えた後、真一は切れた矢筒の紐の修理を頼んだ。ライトは手渡された矢筒を持ち、その切れた紐の部分を確認した。切れた部分に手当て、同じように青白い光を発光させた。切れた部分に青白い光が包まれる。そしてまもなく光は消えた。

「どうでしょうか、直っていますか？」

ライトは矢筒を真一に差し出した。受け取り確認すると、元通りつながれた状態になっている。

「すっげえ。便利だなあ回復魔術ってやつは。ありがとな」

「い、いえ。そ、そんな」

真一はいつものように矢筒を肩から斜めに提げた。弓を支えにようやく立ち上がる。黒いローブは綺麗に修繕され、まるで新品同然となった。

と、弓と一緒に持っている矢が視界に入った。

最後の矢。真一は、はずれてよかったのかもしれない、と思った。自衛手段はこの一本の矢のみ。アラウという世界に矢なんてものがあるとは思えなかった。

矢を眺めていると、買った時のことを思い出した。練習用の黒いシャフトに黒い羽とは違い、銀色のシャフトに白と青の混じった羽。弓具店から届いた時は声こそ出さなかったものの、飛び上がるほどの嬉しさを覚えている。自分だけの矢だと思えた。しかしそれも、もうこの一本しかない。ぎゅっと握り締めながら、ため息を漏らした。

「なんでため息をつくんじゃない？」

「……別に。それよりも、俺はパイがなんでいきなり変化したのか知りてえよ」

いつの間にか肩にしがみ付いていたヨウとともに、パイを凝視した。ライトも胸に手を当て緊張しているようだった。静まり返る場に、パイは全員を眺めた後落ち着きのある声でしゃべった。

「ヨウが言っていた通り、私は進化したんです。普通はありえないことですが、全て真一さんのおかげです」

相変わらず口は開いていないが、そう聞こえた。ライトにも届いたのだろう、びくつとし驚いている。なおピイは続けた。

「通常、人に触れられたパラグの卵は、二段階目の状態で孵ります。なのに真一さんが触れて孵ったのが、一段階目の姿、最弱の雛の私でした。だからイダワ島の派遣所で馬鹿にされたんです。覚えてます?」

「え? ああ、あつたなそんなことも」

「一度生まれた場合、その姿を変えることはありません。なぜなら、影響する触れた人の魔力が急激に変化することがないからです。ですが、真一さんの場合違いました」

ヨウが疑いの目で真一の顔を覗きこんだ。じろじろと見ている。

ヨウの無言の訴えに、真一は舌打ちで返す。ピイはそんな二人の様子に構うことなく、話を続けた。

「真一さんはアラウの人間ではありません。魔力は確かにゼロですが、成長することができません。決められていない魔力だからこそできることだと思います。先ほどもずっと見ていましたが、真一さんは諦めなかった。冷静に矢を放っていました。きつとその気持ちに魔力にも影響しているんですよ。だから私が二段階目の姿に生まれ変わることができたんです」

視線をしっかりと真一に向けるピイの言葉に、偽りがないように思えた。ヨウもそれを感じたらしく、納得したのか一人唸っていた。「成長……ね。そんな気は全然ないけどな」

真一自身はただ必死だった。

実際、弓道をやっていてあれほどプレッシャーのある場で引いたことはない。ましてや身の危険を感じながらの射など一度もない。今思えば、あれほど冷静に引けた自分が信じられないほどだった。そんな状況が魔力にも影響したのかと、少し疑問に思った。実際、身体の変調は全くない。相変わらず召喚魔術をどうやるのかわから

ないし、そもそも魔力と言う言葉自体が胡散臭い。ゲームでよく見かける言葉だが、自分にできるようになったと言われてもどうも信じがたい。魔力うんぬんの言葉は余り考えないことにした。

ひとまず知りたいのは、パイのことだった。

「一段階目がひよこで……二段階目が鷹……それより成長できんのか？」

「もう一段階あります。それは……」

「一角の竜じゃよ。わしもそればかりは見たことない」

パイの言葉を遮るようにヨウが言った。それにパイがむっとしたのか、睨みつけるようにヨウを見ている。そんな視線をもろともせずヨウはなお続けた。

「召喚の雛に限らず、それぞれのパラツグの雛の二段階目は比較的
よう見る姿じゃ。だいたいのアラウの人間にはそれなりの魔力が備
わつておるからの。ただ、竜は別じゃ。王族か魔天族か……その辺
りもんが卵に触れんと孵らんじゃろうな」

「いいえ、きつと真一さんは私を竜まで進化させてくれますよ」

間髪入れずにパイが言った。それに今度はヨウがむっとした。真
一の肩から離れパイの目の前まで飛んでいった。

「ふん、えらくお主はシンイチを買っておるの。だいたいの、さっ
きから気になつておつたんじゃが、なぜわしだけ呼び捨てなんじゃ」

「ヨウがヨウだから、という理由じゃ不満なんですか？　さん、や
ら、様をつけるなんて……私を馬鹿にした奴なんかにつけたくない
ですね」

「なんじゃと、このひよこめ！　誰かに似て失礼なやつじゃな！」

「ヨウに言われたくないですね！　それにひよこではなく、パイで
す！」

互いに睨み合い、今にも喧嘩が始まりそうだった。が、真一が頭
を乱暴に掻きながら大声を出した。

「ああ！　うつせえよ！」

ライトを含めその場にいた全員がびくっとした。一気に静まる場

真一は大きく息を吐いた後、口を開いた。

「……あのな、俺はこの人間じゃねえんだ。いきなりわけの分からん単語が出てきたらそこで理解不能なんだよ。……なんだよ、魔天族って」

ヨウが答えようとしたが、それより先にパイがしゃべった。

「魔天族とは王族に出資している貴族のことですよ。貴族は貴族なんですけど、王族との繋がりがあると言う意味で魔天族と言う名称があるんです」

「へえ。……まあ聞いてもすぐに忘れそうだな。俺には関係ないっぽいし」

真一は手早くかけをはずし、かけ袋の中に入れた。持っていた矢を矢筒の中にしまい、そして近くにあった木を使って弓の弦をはずした。そして手早く弓に巻きつけると、ライトが持っていたトートバックを返してもらった。

「これ、ありがとな。中に大事なもんが入ってるから助かった」

「は、はい……」

そして、トートバックの中から弓巻きを取り出すと丁寧に弓に包み始めた。

「とにかく、説明はもういい。一気に聞いても理解できねえよ。それより、マスクが心配だ。さらった奴らがアジトから出たのは間違いないねえんだ」

そう言っている間に、弓は綺麗に弓巻きに包まれ一本の棒のようになつた。すると、パイが羽根を広げて宙に浮かび上がった。今にも飛びそうな雰囲気にも真一は首を傾げた。

「ずっと思っていたんですが、私がそばにいると真一さんが否応なく目立ってしまったています。ですので、これからは上空から真一さんを見守ることにしますね」

パイは冷たい視線でヨウを見た。

「ヨウ、召喚本は持っていませんですか？」

また出たわからない単語に、真一はますます首を傾げた。一方、

呆然としていたライトがその言葉に反応し、ローブのポケットに手
を突っ込み何やら探し始めた。

「持っておらん。前マスターに渡しておるからの」

「……役に立たない使魔です」

その言葉にヨウはむかつとしたのか、頬を膨らませパイを睨んだ。

「あ、あの、私持っています」

と、背後から急にライトが口を開いた。

見ればライトの手のひらに、小さな分厚い本が乗っている。丁度
手のひらに収まる大きさで、表紙は真っ黒で特に何も書かれていな
い。

それを持ったまま、ライトはおぼつかない足取りでパイの方へ歩
いて行く。パイは羽ばたいてゆっくりと近づき、翼で軽くライトの
手に触れた。ライトは一瞬驚いたように身を引いたが、すぐにパイ
だとわかったのか頬を緩めた。

「あ、パイさんですね。これ……私と契約した使魔さんがくれたも
のなんです。必要でしたら使ってください。私にはもう意味がない
ものです」

「ライト様ありがとうございます。すいませんが、一枚ページをめ
くってくれませんか？」

ライトは言われたとおり本をページ開いた。中は真っ白で何も
描かれていない。そこにパイが自ら足をくちばしで突付き、血を出
した。その血が爪を伝ってそのページに一滴落ちた。すると、本が
一瞬ふつと光った。

「ありがとうございます。それを真一さんへ渡してください」

本を閉じ、手を無造作に動かしながらゆっくりと真一の声がした
方へ歩んで行く。真一は見かねて自らライトのそばへ寄ると、手を
取った。

「で、なんだよその本は」

「え、あ、こ、これは使魔と契約している人だけが使える本なんで
す。召喚本という文字通り、血を記憶した者の召喚をすることが可

能になるんです。はい、どうぞ」

そう言われ受け取ったが、意味がわからない。真一は怪訝そうにその本を眺めた。 どう見ても普通の小さな本にしか見えない。 そんな様子の真一を見て、ヨウがだるそうに答えた。

「要するにじゃ。あのひよこは、用事があるときはその本を使って呼べと言っておるんじゃよ。ちゃんと説明せんからシンイチが困っておるんじゃ」

「……そもそも事前にヨウが説明するのが道理だと思えますけどね」
再び睨みあう両者。

真一はそんな両者に構うことなく、本を眺めていた。 そんなことできるのかと疑問に思えた。 が、今は試す暇はない。 さらった男たちが階段を上っていったのだ。 だとすれば、マスクの身に何かあったのかも知れない。

それをポケットにしまうと遠くに見えるアジトの入り口に目を向けた。

「……ひとまず、マスクとこ行くぞ」

森を出ると、そこは岬だった。 殺風景な岩肌と見渡す限りの海が広がっている。 潮の匂いが風に乗って吹き付けていた。 その岩肌を見るとひときわ目立つ大きな岩が見えた。 あれこそがアジトの入り口の大岩だった。 真一を先頭に、ライトを気遣いながらゆっくりと歩んでいく。 ヨウはライトの指を握り締め先導している。 ピイは空高く舞い上がり、大きな翼を広げ真一の上を悠然と飛んでいた。 下から見れば小さな黒い点にしか見えない。

真一は視線を再び地表へ戻し、入り口へと向かって歩き進んだ。

マスクはずっとアジトの入り口に立っていた。 気配を感じない階段をひたすら見つめている。 白い仮面を身につけ、ただ無表情に眺めていた。

「マスク」

その声にはつとしてマスクが振り向いた。目を見開き驚いている。「よかった、無事だったんだな。さらった奴らが階段上ったと思っただけ、マスクが倒したのか？ ん……どうしたんだ？」

目を一杯に見開いている顔は明らかに動揺している。視線を泳がし、真一の顔を見直そうとはしなかった。そのまま視線をはずし、目を伏せながら頬を緩ませた。

「あ、ああ。別に何でもない。男たちはどこかへ行った。それより、ライト様も無事だったか。よかったな」

そう言つとそのままアジトを離れ、一人町へ向かって歩き始めた。そして、振り向くことなく言った。

「悪い、俺は先に町へ戻っているぞ。少し用事ができた」

そう言つて足早にその場を去っていく。

「……なんだあいつ？ 怒ってんのか」

「さあ……。それよりシンイチ。わしがライトの手を握って歩くと不自然じゃ。お主がライトを誘導してやれ」

確かに今から町へ戻り、ライトが一人で不自由なく歩く姿は違和感がある。ヨウが見えるなら別だが、見えないのだ。意見に納得した真一はライトの手を握った。すると、ライトが驚いたようにびくつとした。

「なんだ、俺だと嫌なのか？」

「そ、そんなことありません。……温かいなあ、と思っただけです」
消え入りそうな声でライトは呟いた。が、真一は気にすることなく歩み始めた。

「ま、行こうぜ。歩きながらでもしゃべれるしな」

【第二章 港町シトモン】別れと約束（前書き）

この話で第二章は終わりです。

【第二章 港町シトモン】 別れと約束

真一はライトの手を取り、歩幅を合わせる様にゆっくりと歩いて行った。浜から見える夕焼けは美しかった。赤い太陽の光が放射線状に伸び、それが海に反射してきらきらと光っている。地球でも見られる光景に真一はほっとしていた。地球から離れていても、どことなく同じ匂いのする光景を見れば、心休まるものがあった。

「……綺麗だな、夕日は」

思わず言葉が漏れた。普段なら絶対口にしない。夕日なんていつでも見れるものだった。しかし、今は違う。この先どうなるのかわからない現状。前マスターに会えばいいだけという、安易な考えがあった。しかしそれがどうだろう。カラスにツバメ、わけの分らない魔術、疲労が溜まる身体。

この先が思いやられ、思わずため息が漏れてしまう。

「ど、どうされたんですか？」

ため息をした途端、ライトが足を止めた。眉を八の字にし不安そうな表情を浮かべている。

「いや、何でもねえよ。ほら、早く行こうぜ」

「わ……私のせいですか？」

「は？」

顔を俯かせ、声も消え入りそうなほど小さい。

「わ、私がさらわなければシンイチさんたちにも迷惑をかけていませんでしたよね。それに、目が見えないから今だって迷惑かけっぱなしです……本当に……」

思わず真一は再びため息を漏らした。

一方ヨウは優しい笑みを浮かべながら、真一の肩から離れるとライトの肩へと移った。

「ライト、わしらは迷惑だったとは思ってはおらんぞ。もっと胸を張れ。お主は王族じゃろ？ いづれ港町シトモンの統治者になるか

もしれんのんじゃ。そのような態度では務まるもんも務まらんぞ」
ヨウの言葉にますます顔を俯かせた。立ち止まったまま下を向いている。

真一は頭を掻いたあと、無理矢理引つ張った。驚くライトは、びっくりしたように顔を上げ再び歩み始めた。

「ったく、堂々としねえからなめられるんだよ。あんたにとって、目が見えねえのが負い目なのかもしれないけど、関係ねえよ。迷惑だと思ったなら、初めからあんたに会いに行つてない」

「ずんずんと前を見て進む真一の姿を見て、ヨウはそうかもしれないと思った。

「俺はこのアラウの人間じゃねえんだ。さっきも、あんた聞いてただろ」

「は、はい」

「この世界のことはさっぱりわかんねえ。身分やらなんやら意味がわからんねえし、魔術？ そんなもん知るかつつの。だいたいな、俺はそいつを前マスターに返すためだけに来たんだ。それがなんでこんなめんどくせえことになってんだ。……おい、全部お前のせいだぞ」

足を止め振り返り、ヨウに向かって指を刺しながら叫んだ。苛立っているのか、眉間に皺を寄せている。

「全部わしじゃと？ シンイチが落ちてきたわしとぶつかったのがいけんのんじゃろう！ わしだつてな、魔力のほとんどないマスターなんぞと組とうなかつたわ！」

「は？ 俺だつて同じだよ！ じじくせえしゃべりの、妖精もどきみたいなやつと一緒に旅なんかしたくねえよ」

互いに顔を近寄せ、睨み合いをしている。ライトにはその状況は見えなかったが、声の具合からして本気の喧嘩ではないと感づいた。そう思う、真一とヨウがじゃれ合っているような会話に聞こえ、思わず笑い声漏れた。

ふふ、と笑うライトの声にはっとし、二人ともライトの顔を見た。

夕日を浴びるライトの黄色の髪は光り、色白の頬は赤く染まっている。上品に口に手を当て笑っているライトは、先ほど見せた暗い顔はどこかへ行ってしまったようだった。

「お二人とも仲がいいんですね。羨ましいです」

そんなライトの言葉に、二人が一斉に声を出した。

「仲よくねえよ」

「仲よくないわい」

微妙なハモリに再びライトは微笑んだ。

再び浜辺を歩み始めた。海からの風が心地よく、潮の匂いを運んでいる。少しずつだが町の建物も近づいていた。ヨウはライトの肩にしがみ付いている。ぼうっと手を繋いで前を歩く真一の後ろ姿を眺めた。

気遣いができない男だなあと考えた。それとも恥ずかしいのか。

ライトが盲目なのだから、隣で寄り添って歩けばいいのに、前をすたすたと歩いている。何か会話をするわけでもない、黙ったままだった。ライトもそれに対し文句を言うわけでもなく、手を握り締め歩いていた。

「……あの、シンイチさんの主魔術は何なんですか？」

真一はちらりと軽く顔を向けてた。

「傷だらけになって、魔物をやつつけたんですよね。それに素早い魔物なんて……一体どうやって倒したかと少し疑問に思ってます……」

真一はじつとライトの顔を見た後、再び前を向いた。そして、そのまま口を開いた。

「俺は魔術なんかで倒してねえよ。……まあ一応召喚魔術が使えるらしいけど」

「召喚魔術……ということとはサモナーなんですね」

真一は様子を伺うように再び顔を向けてきた。じつとライトの様子を見ている。一方でライトは軽く頷き別段嫌そうな顔もしていない。すると、いきなり首を傾げた。

「……魔術で倒していない？　じゃ、じゃあ一体何で倒したんですか？」

今までサモナーと言うと嫌な顔をされた。ダリイからサモナーに関する話を聞いて大体の事情は掴めた。格差があるのだ。貧しい人々　サモナー。そんな凶式が出来上がっている。ライトがどんな反応を示すのか、真一は少し興味があった。再び馬鹿にされるのか、それともマスクのように笑って終わるのか。

が、ライトはサモナーと言った真一に対しあまり興味を示していない。魔術以外で倒したという言葉の方に釣られた。

「……俺は地球、日本って国で弓道っていうクラブに入ってたんだ。それで倒したんだ。……本当は倒すためにやってきたんじゃないだけだ」

「よ、よくわかりませんが、すごいですね。サモナーという身分の上にそんな技まで使えるなんて……本当にすごいです」

嫌味な言い方などではなく、感嘆のため息を漏らしにつこりと微笑んだ。

この女も違うのかもしれない。そう真一は思った。

「……サモナーは関係ねえんじゃないの？　アラウじゃ嫌われてるんだろ、サモナーは」

「え？　ああ……確かに政策によっていろんな方たちがサモナーになっっていると、話は伺っています」

ライトは少しだけ顔を下向きにしながら、なお続けた。

「ですが、それだけサモナーの皆さんは特別なのではないでしょうか。テイレナーにしるファイティナーにしる、私のようなイシャイナーにしる、無の状態から何かを生み出すなんて普通はできません。それができるサモナーの方々は素晴らしいと思います。……それに」

ライトは片手だけで握っていた真一の手を、大事そうに両手で包み込んだ。

「私は目が見えません。私にとって身分なんて関係ないんです。話をしたり肌で感じたり、そうするだけでどんな人かわかります。……」

…シンイチさんが素晴らしい人だと言うこともわかります」

口の端を上げにつこりと、笑った。夕日のせいなのか、それとも照れているのか、ほのかにライトの頬は染まっている。

「ば……馬鹿。いきなり変なこと言うんじゃないよ……」

「す、すいません」

再び前を向いた真一はずかずかと歩き始めた。握られている手を握りなおし、ぐっと引つ張って歩いていく。その勢いでライトの両手は離れ再び片手となった。

ヨウはライトの肩から離れ、真一の肩にしがみつく。そつと真一の顔を覗き込んだ。見えるその横顔は、これまた夕日で染まっているのか赤くなっている。

「……照れておるんかの？」

「うつせえ」

それ以上言葉を交わすことなく、すたすたと町へと歩いて帰った。

町へ着いた時にはすっかり陽は落ち、暗闇が町を支配していた。

地球のような街灯などなく、家灯りだけが道をぼんやりと照らしている。出回っている人の数も少なく、賑やかだった市場もすっかり静まり返っていた。そんな坂道を黙々と上っていき、ようやく城へ到着した。

二人の門番はライトの姿を見るや否や、慌てた様子で駆け寄り声をかけた。

やはりシトモンは心配していたらしい。門番二人は声こそ荒げないものの、言葉の端々からライトの行動を非難する考えが伝わってくる。「毎回、どれだけの人が心配していると思っっているのですか？」「仮にも王族だということを忘れないでください」など、口々にライトを責める。なかなか扉を開けないので、真一が早く入れるよう言つとはつとしたように黙り込み、すぐ扉を開けた。

「……あんた大変だな」

入るなりそう声をかけると、ライトは反省しているのかしゅんと

顔を俯かせていた。

再び書斎へと案内された。部屋に入ると、シトモンは目を見開き驚いた表情で出迎えた。その視線は真つ直ぐライトだけを見ている。そして、真紅のローブを揺らめかせながらずかずかとライトに歩み寄ると、いきなりライトに平手打ちをした。ペシツという乾いた音が短く響く。

「……一体こんな暗くなるまでどこをふらつき歩いていたのだ」

ライトは赤く染まった頬を手で抑えながら、声のする方を見上げた。隣で見ている真一は、入る隙がなくなっただ見守るしかなかった。

「……申し訳ありません。父上」

「それは答えになってはいない。……ライト、私を含めどれだけの人間が心配していたと思っっているのだ？ お前は女なのだぞ。それに目が見えぬという障害もある。いつ、危険な目に合うのかわからんのだぞ？ ……一体何をしていたのだ」

ライトは唇を噛み締めたあと、ゆっくりと口を開き消え入りそうな声で答えた。

「実は……さらわれていたのです」

「何だと？ ……貴様、どういうことだ」

怒鳴り声を上げながら、隣にいた真一を睨みつけた。眼光が鋭く光り、眉間に皺を寄せ今にも殴られそうな雰囲気がある。真一は思わずびくつとしたものの、目を逸らさず答えた。

「……最初は浜辺にいたんです。それが、目の前で三人の男にさらわれてしまった……。でも、娘さんに怪我はないですよ」

「なぜ、私に報告しなかったのだ？ 何かやましいことがあったのではないか？ ……それとも全て貴様の狂言ではないのか。そうだ、証がほしいがために計画したのだろう。え、どうなんだ？」

「は？ なんてそんなことを……」

「そう言えば貴様はサモナーだったな。なんと卑しい……」

と、シトモンの言葉を遮るようにライトが思いつきりシトモンの

頬に平手打ちをした。

ライトは唇を噛み締め、うつすらと目には光るものがある。興奮していたシトモンだったが、目が覚めたように啞然とした表情でライトを見た。真一も呆然とその様子を見た。

「失礼です！ シンイチさんは私を助けてくださったんですよ？ どうしてそのようなことを口にするのですか」

「あ、ああ……す、すまない。少し……興奮してしまった」

顔に手を当て、少し頭を振った。おでこについている青い宝石が揺れている。そして、そのまま真一たちに背を向け窓へと歩いていった。興奮している身体を冷やすためなのか、少しの間風に当たっている。真紅のローブが揺れ、シトモンは呆然と夜空を眺めていた。ライトはゆっくりとした足取りで、物を伝いながら窓へと近づいていく。やはり自分の家だからなのか、足取りに迷いはない。

「父上、証をください。シンイチさんは私の命の恩人です。証を差し上げる理由で、これ以上のものではありません」

「……そうだな」

手を広げて待つライトに、シトモンは机の中から青色のバツチのようなものを取り出した。手のひらに収まるほど小さなバツチをライトへと手渡した。シトモンはため息を漏らしながら、再び窓へ顔を向けた。呆然と眺め、見える横顔は疲労の色が見えた。

証を受け取ったライトは再び真一への元へ歩み寄ってきた。手を無造作に動かしながら、真一がいる位置を確かめようとしている。

真一はその手を握った。

「あ……。こ、これが証です。どうぞ受け取ってください」

握っていた真一の手を確かめると、手のひらに証を乗せた。

証は青くボタンのように円形だった。布につけることができるよう、後ろには小さな出っ張りがある。どこかで見た色だと思つと、それはシトモンがおでこにつけている宝石と同じ色だった。何か意味があるのか、証を見つめていると肩に乗るヨウが口を開いた。

「港町シトモンの統治者は代タイシャイナーなんじゃ。おでこにつ

いておる宝石は水魔元素の塊。おそらく、証の色具合から見て、宝石と同じじゃろうな。なくすんじゃないぞ」

頷いて答え、それをトートバックの中へと放り込んだ。この中に入れておけばなくすことはない。

「ありがとうございます。では、失礼します」

一礼し、シトモンに別れを告げた。ここに残る理由はない。部屋を出ようとした時だった、ライトが真一の腕を咄嗟に掴んだ。

振り向くと眉を八の字にしたライトの顔があった。

「お、送ります……」

「ああ……悪いな」

視線を感じ、窓を見るとシトモンがこちらを向いていた。何か寂しそうに微笑んでいた。すると、深々と頭を下げた。その姿にぎよつとした真一だったが、すぐさま頭を軽く下げた。その様子に、シトモンはふつと笑みをこぼす。そして再び窓の外へと顔を向けた。

よく見ると少し頬が痩せこけているのが伺えた。ライトが盲目だということが一番負い目を感じているのはシトモンかもしれない。イシャイナーは治療の魔術だ。それを持ってしても治せないのだから。会った時の呆然とする姿と、今見る思いに耽る姿を見る限り、シトモンも思い悩んでいるのかもしれない。自分がイシャイナーだと言つのに治せないもどかしさ、それ故ライトを城に閉じ込めたいと思っているのか。

子どもを心配する親。統治者、王族、そんな肩書きは関係ないのだ。

ただ親の責任を果たそうとするだけ、真一の目にはそう映った。

「シンイチさん。召喚本を出してください」

城から離れ、坂道を下ろうとする手前までライトは見送りに来た。周りには誰もいない。門番も遠くライトの後ろに見え、会話は聞こえていないだろう。

真一はいきなりのライトの申し出に、疑問を抱きながらもポケッ

トの中から小さな召喚本を取り出した。

「何すんだ？」

受け取ったライトは二ページ目を開くと、自分の指を思いつきり噛んだ。すると、指からは少量の鮮血が流れていく。

「お、おい。何やってんだ」

ライトは真一の声に気にすることなく、指をそのページの上に掲げた。すると、一滴、真つ白なページへと落ちていった。落ちた瞬間に光る召喚本。

「ライト！ お主……それがどういう意味かわかっておるのか？」

「はい。これでいつでもシンイチさんに会えますね」

にこやかな笑顔をヨウに向け、召喚本を閉じた。そしてそれをシンイチへと手渡した。一方で意味のわからない真一はヨウを睨みつけた。

「……説明しろ。どういう意味だ」

「んなもん、あのひよこと一緒じゃ。……いつでもライトを召喚できる、そういうことじゃ」

「……は？」

驚く真一の声にクスクスとライトは笑った。そして、真一の手を取ると、それを大事そうに両手で包み込んだ。

「もし、シンイチさんがまた傷ついてしまったら、いつでも呼んでください。……今回で私は出歩くことは控えます。ですが、シンイチさんの役に立ちたいんです。お願いします」

「で、でも。俺、召喚なんてできねえよ」

「いいえ、パイさんが進化されたんですよ。でしたら、きっとシンイチさんの魔力は上がっているはずですよ。……ヨウさん、お願いしますね」

ふふ、と笑うライトは真一に魔力が身についたと信じているようだった。

「まあ……わしもライトに会いたいしのお。そろそろ、本格的にわしがシンイチを鍛えやってもええの。まっとなれよ、ライト」

「はい、いつでもお待ちしております」

笑い合う二人に、見えないプレッシャーを感じた。

思わず顔を背け、ばれないように小さくため息を漏らしていると、ある人物のことをふと思い出した。

「なあ、マスク見てないよな。……あいつどこいったんだ」

「そういやそうじゃの。あやつも証が目的だったろうに……どうしたんかの」

と、ライトの顔が急に曇り顔が俯き加減となった。それを不思議に思い声かけようとした時、ライトが口を開いた。

「マスクという方は……何か隠しているような感じがします。……シンイチさんのお友達ですか？」

珍しくはつきりと物を言うライトにますます不思議に思った。首をかしげながらも真一は答えた。

「友達……じゃねえけど、知り合いかな？　なんでそう思うんだ？」

「冷たかったんです。言葉も感じた感覚も。……ああ私の直感です。で、あ、あまり気になさらないでくださいね」

「ああ……そう」

真一は持っている荷物を持ち直し、ライトの手を逆に両手で包んだ。ライトは驚くとともに、恥ずかしいのか顔をますます俯かせた。「じゃあな、ライト。もし、召喚できるようになったらいずれ呼ぶから、待ってるよ」

「……はい！」

顔をぱつと上げにつこりと微笑んだ。少し頬を赤く染めているのが、城から溢れる灯りがかすかに見えた。

真一はそのまま暗い坂道を下って行った。

「ふふ、名前で呼ばれちゃった」

軽くスキップをしながら、上機嫌でライトは城へと戻って行った。

潜む影

町の影に身を潜める者がいる。ひっそりと静まり返る暗闇の中、半面の白い仮面だけがうつすらと浮かび上がっていた。

坂を下る黒いローブの男をじっと見張る。

息を殺した。相手は自分を探しているかもしれない。しかし、男は気づかぬまま横を通り過ぎて行った。見れば肩に乗る使魔に何か小言を言っている。が、その内容が耳に届くことはなかった。使魔を見れば、安心しきった様子で笑みを浮かべている。

「あいつは……異空間へ飛ばされる直前のことは忘れていらしいな」

建物の影から姿を現したマスクは、坂を下っていく真一たちを見下ろした。

長い棒を持ち肩からかばんを提げ、背中には何か背負っている。フードを被っているものの、その姿はやはり異常な格好であった。マスクは腕組みをしたまま、じっと真一について思索した。

五匹も魔物を召喚した。が、再び目の前に現れた姿は別れた時のままだった。イシャイナーであるシトモンの娘が、回復魔術を施したのかもしれない。しかし、それを考慮しても腑に落ちない点がいくつかある。

まず、どうやって魔物を倒したのか。五匹もいれば多少なり苦戦する。当初は、自分に助けを求めに来た所を狙い仕留めようと思っていた。

が、失敗だった。別の出入り口があったことも原因の一つではあるが、やはり魔物を全て倒されたことだろう。手元に帰ってきた魔物は一匹もない。

もう一つ疑問に思うのは、パラッグの雛の不在だった。

間違はなく頭の上にあった。見る限り、慣れている様子だった。そんなパラッグの雛を手放すとは考えにくい。非常食にもなる最弱の

雛だ、殺したなら殺したで死体を売りさばれば金になる。となると、考えられることは一つ。雛の進化だった。

しかし、マスクはそれがどうしても信じられなかった。

「どうするんだ、あのまま行かせるのか？」

白い仮面の奥から幼い声が問いかける。思案を中断し、その問いかけに答えた。

「行き先は知らないが……大方予想はつく。が、確信はない。それを調べた上で、ダック様への報告が先だ」

そう言つと真一たちに背を向け、城の方向へと歩み始めた。

シトモンは真一が去った後も、ずっと窓から町を見下ろしていた。家々から灯りが漏れ、ほのかな灯りが町全体を覆っている。静かなことは町が平和である証拠。そのことにふつと息を漏らし胸を撫で下ろした。

ライトもこれからは心配させないと約束した。悩むことも少しは減るだろう。そう思いシトモンは窓を閉じようと手を伸ばした。

「夜分遅くに失礼、シトモン統治者殿」

と、部屋の中央から突然声がした。驚きすぐさま振り返ると、見たことのある片面の仮面を被った男が立っている。目を細め顔は笑っているように見えるが、仮面のせいかな気味さを感じた。

「……どうやって入ってきた」

それでも落ち着きを払い問いかける。ドアが開く音など聞こえなかった。何よりこの部屋へ来るのなら、誰か必ず警備の者がついている。しかし、ドアは開いた様子もなければ警備の姿も見えない。ただ手段があるとすれば。

「移動魔術、と、言わなくても大方予想はつきましよう」

笑顔を崩さぬまま、その男は言った。しかしおかしい。男の腕に巻きついている布は青い。その布は男がイシャイナーであることを示している。

「ああ……これですか。確かにイシャイナーです。ですが、私には

使魔がいるのです」

「し、使魔だと？」

驚いた表情のまま、シトモンは慌てた様子でその男に駆け寄った。と、言うのも、最近新たな政策が発表されたのだ。じつと男の顔を見るが、男は冷めた様子でシトモンを見ているだけだった。

「……そなた、証を貰い受けに来たマスクと言う者だろう」

「おっしやる通り」

にこやかな顔を向けているが、見つめられるだけで背中に悪寒が走るようだった。その視線から逃げるように、マスクの頭や肩を注意深く見た。が、やはり使魔の姿は見えない。

「どこにいるかは知らぬが、使魔は掃討作戦が近々実行される。そなたの使魔も気をつけられよ。契約者関係なく使魔は……」

「知っております」

言葉を遮った声ははつきりとしていた。驚き身を引いたシトモンとは対照的に、マスクはふっと笑みをこぼした。

「私はダック公爵の部下です……王族であるシトモン様もご存知でしょう」

「ダ、ダック公爵……の部下、だと？ そなたがか！」

ダック公爵。貴族中の貴族で、魔天族の頂点に君臨する。

貴族は王族に対し資金援助をしていることが多い。王族と言えど、町を統治する上で経費は出てくる。税を民から徴収していても、厳しい財政に陥ってしまうことがあるのだ。それを防ぐために、貴族が王族の後ろ盾をしている。

四大都市を治める王族には、それぞれ資金援助をしている貴族たちがいる。表立っては公表しないものの、町への貢献度は高い。その一方で、見返りとしてそのような貴族たちには、特別な身分が与えられていた。

それが魔天族と言う肩書きだった。王族に直接関わっている証。資金援助をする代わりに、王族たちの相談役になっている。どの都市も王族と協力し、それぞれの町の発展に貢献をしていた。シトモ

ンも例外ではなく、援助を貰っている魔天族がいる。

しかし、ダック公爵はそれをも超える立場だった。

ダック公爵が資金援助をしている相手はアラウ国王だった。そのためか、ダック公爵自身がアラウ国王と肩を並べる存在になっていた。四大都市の統治者たちでさえ頭が上がない。しかし、実際に姿を見た者は少ない。シトモンも直接ダック公爵を見たことはなかった。ただ一言、ダック公爵に関する情報は耳に入っていた。

影の国王だと言う、噂を。

「……私が伺ったのは、そのようなことを言いに来たのではないのです。少々お尋ねしたいことがありますね」

すつとマスクの顔から笑みが消えた。

「一緒に証を貰い受けに来た、ハギノシンイチ、と言う男についてです」

「……彼か。一体彼がどうしたと……？」

意外な人物の名に、シトモンは少々気が抜けた。部下直々に来ること自体が減多にない。ましてや身分を隠して近づいてきたのだ。否応なく緊張してしまう。

「彼は、証を貰い受けた後どちらへ向かわれたかご存知か？」

無駄口を叩かせない無表情な面構えに、冷や汗が出てきてしまった。白い仮面がそれを助長させているのか。シトモンは唾をぐくんと飲み込んだ後、慎重に言葉を選びながら答えた。

「……娘の話では、何かを返すため、とか申ししていたが……それ以上のことは知らぬ」

「そう、ですか。それだけで十分です」

再びマスクは目を細め笑みを浮かべた。そして、満足したのかそのまま窓へと歩み寄って行った。

「……どこへ行く？」

その後ろ姿にシトモンは思わず話し掛けた。一体何の目的でやって来たのか理解できなかった。

すると、顔だけ振り向かせ白い仮面をシトモンへ向けた。のっぺ

らの白い仮面は、暗闇に浮かび上がって見える。

「ダック様の元へ帰るのです。少々事情がありましてね。シトモン統治者殿には関係のないことです。ご安心なさってください」

そう言つと顔を元に戻した。が、シトモンはまだ食い下がった。

「ま、待て。彼が何かやったのか？ どうして彼の行く先を聞くのだ」

「……彼、自体には問題はないのです。彼にまわり付いている使魔に、少々用事があるのです」

「な……か、彼にも使魔がいたと申すのか……！」

すると、マスクは戻していた顔を再びシトモンへと向けた。が仮面の下から覗く目から殺気を感じた。シトモンは思わず口を閉じ、息を呑んだ。これ以上何か言つと身の危険がある、本能がそう悟った。

「……もうよろしいか？」

酷く低い声の問いかけに、シトモンは声を出すのがやっとだった。

「あ、ああ……すまない」

「では、失礼する」

すると、窓にいたマスクはふつと姿を消した。残像さえ残すことなく、一瞬にして消えてしまった。窓には、いつもの夜空と町の風景が広がっている。

シトモンは一気に身体の力が抜け、その場に跪いた。今更ながら足の震えが止まらなくなってしまうていた。

「なんと……恐ろしい男。目的は一体何だったのだ」

知らないうちに頬を伝っていた汗が、床に落ちていく。シトモンはその汗を拭いながら、マスクがいた窓を呆然と眺めた。

【第三章 潤いの町トトロイ】新たな使魔と召喚魔術（前書き）

用事が一応片付きました。長らくお待たせしてしまい申し訳ございませんでした。

第三章の始まりです。どうかお付き合いください。

【第三章 潤いの町トトロイ】新たな使魔と召喚魔術

真一たちは北に向け、ひたすら森の中を歩いていった。

ヨウ曰く、港町シトモンから一番近い四大都市は、潤いの町トトロイだった。

アラウ国は横長の国土であり、その中央を山脈が両断している。

その東側の南東部に、真一たちがいた港町シトモン。港町シトモンより北には潤いの町トトロイ。

そして山脈を挟み西側には、山岳の町ガナオン。南西部に城下町オデイがある。

真一たちが目指しているアラウ城は、西側の北西部、山の頂上付近に建っていた。

そんな風にヨウがアラウの地理の説明をするが、真一は聞きながら軽い眩暈を覚えた。想像以上に広大な土地過ぎた。

港町シトモンを眺めている時、乗り物らしきものは船しか見当たらなかった。自動車や自転車、バスや電車、ましてや飛行機などない。移動手段は徒歩か移動魔術しかなかった。移動魔術に頼ればいいのかもしいないが、使えるのはヨウだった。しかし本人曰く、魔力が低い上に得意ではないのでどこへ行くかわからない、らしい。その言葉にますます気が重くなった。

四大都市を全て徒歩で歩かなければいけない。前マスターに会う前に倒れて死ぬのではないかと真一は思った。

と、ようやく森を抜けた。しかし目の前に広がっていたのは。

「さ、砂漠かよ……」

「じゃの。さあこれからが正念場じゃ」

がっくりと肩を落とす真一とは対照的に、ヨウは生き生きとした顔をしていた。

前方には途方もない砂漠が広がっている。建物も何もない。見るからに強い日差しが照りつけ、砂から湧き上がる熱気が層気楼のように揺れているのが見えた。砂漠の砂と真つ青の空がくつきりと地平線を作っている。

「……どれぐらい距離あるんだ」

「わしを知るわけなからう。姫とおった頃は金があつたし、運搬屋に頼んでひとつとびだったからの。じゃが歩いていくというのも、なかなか楽しいかもしれんのお」

真一の気持ちを知ってか知らずか陽気に笑っている。ふざけている様子でもなく、本気で楽しみにしている様子で目が輝いていた。が、歩く真一はたまつたものではない。おもむろにトートバックを肩から落とすと、中から風呂敷を取り出した。中には袴が入っている。

「まさか着替えるのか？」

「つたり前だろうが！ こんな糞暑い日差しの中、全身真つ黒の口―ブで歩けるか。どうせ、誰もいねえよ」

真一はさつさと袴に着替えた。白い半そでの胴衣が涼しい。

着替え終え、いざ砂漠へ踏み出そうとするも躊躇してしまつた。途方もなく続く砂漠から人の気配など感じない。踏み入れると永遠に彷徨つてしまつのではないか、と思つた。真一が砂漠を呆然と眺めている。その時だつた。

「変わった人間だなあ。黒髪にその格好。……珍しいマスターだね」

突然聞き覚えのない声が聞こえた。周りを見渡してもその姿が見えない。きよろきよろと頭を動かしている真一に、その声が再び話しかけてきた。

「こつちだよ」

真正面の砂漠から聞こえた。ゆっくりと見上げると、ヨウと同じ格好をした使魔がいた。金色の髪にゆつたりとした紺色のズボンとシャツ。ただ羽根が赤い。垂れ目の幼い顔は真一をじつと見た後、

視線をヨウへと移した。

「久しぶりに仲間を見た気がするよ。嬉しいなあ」

「おお」

呆然と見上げる真一と対照的に、ヨウは目を見開き嬉しそうな顔をしながら浮かび上がった。

「わしもじゃ！　こんなところで仲間に出会えるとは……嬉しいのお」
よく見ると目が潤んでいた。そんなヨウを見ながら、赤羽の使魔はにっこりと笑った。

「ふふ。……で、何をしているの？」

ちらりと真一を見た。不思議そうに首を傾げている。

「と……トトロイに」

いつからいたのか。何者なのか。無意識に警戒してしまい、自然と言葉が詰まってしまった。

が、ヨウは全く警戒心がないようで、肩に戻ってくると嬉しそうに笑っていた。

赤羽の使魔は微笑みながら言った。

「だったら案内してあげるよ。ついておいで」

そう言うつと赤い羽根がついた背中を見せ、砂漠へと飛んで行った。

いくら半そでの袴姿になったからといって、暑さから逃れることはできなかった。汗が全身から出て、口の中は乾ききっている。少しでも体温を下げようと必死に呼吸をするが、生暖かい空気しか入ってこない。いつの間にか口も半開きのままになっていた。

「……君たち、だらしないねえ。これぐらい慣れないと」

少し前の頭上を浮く使魔は涼しそうな表情で、真一たちに笑みを見せた。暑さを屁とも思っていないようで、すいすいと進んで行く。一方、同じ使魔であるはずのヨウはぐったりとして真一の肩に掴まっていた。

「慣れるわけなかるう……」

ヨウも真一と同様に口を半開きにし、苦しそうに呼吸をしている。

浮かんでいる使魔とは大違いだった。と突然、肩に預けていた身体を起こし目を見開いた。

「そうじゃー！」

何か思い出した様子でヨウは叫んだ。

「シンイチ、ひよこじゃ！ ひよこを召喚して、水がある場所を探させるんじゃ」

「パイを……召喚？」

真一は立ち止まった。頭上に浮いている使魔も振り返りじっと見ている。

「でも、どうやるんだよ。……そういやお前、まだ召喚魔術教えてくれてねえよな」

召喚魔術という言葉に、赤羽の使魔は屈託のない笑顔を見せた。そして、そのまま真一の目の前に降りてくる。

「へえ、君のマスターは召喚魔術を扱うのかい。僕もお腹が空いたから、何か食べ物を召喚してほしいな」

お腹を摩りながら言った。すると、今度はヨウが口を開いた。

「教える機会がなかっただけじゃよ。シンイチは魔力がないと、パラグの卵に触れた時点で明らかだったしの。時間がかかると思っ
て教えんかったんじゃ。……まあひよこが進化したのは、わしも驚いたし……おそらく魔力は増えておるんじやろ。それを試すいい機会じゃの」

「へえ！ 君のマスターはパラグの雛まで所有しているのかい？
ますます期待が持てるねえ」

無邪気な顔を見せる使魔に、真一は思わず苦笑いを浮かべた。

その様子にヨウは慌てて口を開いた。

「これ、余り期待をするでない。そう言えば……お主、名は何じゃ？
わしはヨウじゃ」

「マスターからはトトって呼ばれてるんだ」
顔を少し傾けて、にっこりと笑っている。

一方、ヨウは顎に手を当てその話に頷いていた。

「ふむ……トトか。お主、マスターから離れてもいいのか？」

「うん。見回りしていたから。後で紹介するよ。それより、早く召喚魔術を教えてあげようよ」

「そうじゃの。じゃ、シンイチ、まず先に召喚本を出してくれ」

真一は、ポケットの中から召喚本を取り出した。思えば、この使い方も知らない。

魔術をどう扱うのか、全くわからなかった。そう思うと、何か損をしたような気がしてきた。

魔術が使えると聞かされた時には心躍ったはずなのに、いつの間にか自分には扱えないものとして受け入れていた。

散々サモナーだと馬鹿にされたせいかなのか、と真一は思った。

しかし考えてみると、物や人を召喚できる召喚魔術は便利であるように思った。所持金はなく、このまま町へ着いても何もできない。

しかし、食べ物やら寝る場所まで召喚してしまえば　そう思うと自然と頬が緩んだ。

とにかく今は、ヨウの言葉をしっかりと聞くことにした。

「確か……一ページ目にひよこの血が記憶されておるの。そのページに、証がついとる方の手を乗せるんじゃ」

使魔とマスターとの証、赤い二つのリング。真一の左腕にそれはある。真一は一ページ目を開き、一滴の血の上に左手を置いた。

「よし。それで『プレサモン』と詠唱すれば、ひよこが召喚されるんじゃ」

「……プレサモン」

そう言葉にした瞬間、本が眩い光を放った。強い光に、真一は思わず目を閉じた。白い光は一瞬辺りを包んだが、すぐに消えてしまった。

瞼越しに光が収まったのを感じた真一は、薄っすらと目を開けた。すると、目の前にパイがちょこんと立っている。いきなりの出現に、目をこすりパイを凝視した。

パイもいきなりのことに驚いているのか、頭を左右に動かしてい

る。

「あ、あれ……どうして私はここに？ あ、真一さんが私を喚んでくださったんですね」

「そ、そうなるのか……？」

「そうじゃよ」

信じていない様子の真一を見かねてヨウが口を開いた。驚いた様子もなく、平然としていた。

「で、どうして私を？」

嬉しそうに小さな歩幅で真一の足元までやって来た。見つめてくる黄色の瞳は、期待しているのか輝いていた。

「ああ……俺たち、この暑さで喉がカラカラでさ。近くに水がないかどうか、探してもらおうかと思ったんだ」

「なるほど、お安い御用です！ 探してきますので、少し待っていてくださいね」

舞い上がると、大きな翼を使って羽ばたき、すぐさま遠くへ飛んで行ってしまった。

見上げながらその様子を見てみると、トトが口を開いた。

「あれは召喚の雛だねえ……第二段階かあ。……マスターのパラツグの雛もあれぐらいならいいのに」

「なんじゃ、トトのマスターもパラツグの雛を持っておるんか」

ヨウの問いかけに、顔をこちらに向きなおした。そして、頭を掻きながら照れ笑いを浮かべた。

「そうなんだあ。……なかなか勝てなくて結構馬鹿にされてるんだよ。ま、それは置いておいて……」

期待するような視線を送りながら、トトは真一にしゃべりかけた。「プレサモンはマスターなら誰でもできる召喚魔術なんだよ。だからこれは腕試し。これからが本当の召喚魔術だよ……ね、ヨウさん」

トトの視線を受けてヨウは深く頷いた。

「そうじゃ。プレサモンはマスターなら誰でもできる召喚魔術じゃ。どうじゃ、少しは召喚魔術が身についておると実感できたかの？」

「うーん」

唸りながら、真一はじつと召喚本と左手を交互に見た。

異常はない。本が破れたような痕跡もないし、置いた左手に怪我もない。

本当にどこからともなくパイが出てきた。さっきまでいなかったのだから、真一自身がプレサモンという詠唱で喚んだのは間違いなかった。真一は召喚本をポケットにしまい、手を合わせて感触を確認した。間違いなく自分の手だった。暑さで少し汗ばんでいる。「少し……な。まだちよつと信じられねえけど」

「まあ最初はそんなもんじゃ。よし、じゃあ……フェル草を出せ」「フェル草……？ あああの草か」

イダワ島でもらった金色に光る草。そのまま食べると中毒症状を引き起こすが、本来は触媒用の草。

真一はトートバックの中から、六枚ある内の一枚を取り出した。

手のひらに乗せると、少し熱を帯びているのか温かい。「これをどうするんだよ。……まさか、食べ物に変える、とか言うんじゃないだろうな」

肩に乗るヨウに半分冗談のつもりで投げ掛けた。しかし、ヨウはその発言に満足そうに頷いた。

「そうじゃよ」

「……マジか」

「味も形も魔力次第じゃから、食えるか食えんかはシンイチにかかってくるからの」

草が食べ物に変化する。疑いの目でフェル草をじつと見た。これが何かに変わるなんて想像がつかなかった。

「食べ物の詠唱は『インディションサモン』じゃ。道具やらを召喚する時もこの言葉じゃからな。それを言えば召喚される。じゃが、ただ言うだけではダメじゃぞ。具体的な味や形を想像しながら言うんじゃ」

フェル草を見つめながら、耳だけヨウの言葉に傾けていた。何を

召喚しようかと考えた。

「液体はダメじゃからの。固形の食べ物のみじゃ」

真一は食べたいものを決め、ゆっくりと目を閉じた。

赤い球体。ほのかに香る甘い匂い。口に入れば広がる甘酸っぱい果汁。

「……インディションサモン」

言った瞬間、フェル草が乗っていた右手が急に重みを感じた。

「……！」

見た瞬間驚きの余り、言葉が出なかった。

手のひらに乗っていたのは、真っ赤なりんごだった。鼻に近づけ匂ってみれば、想像通りの甘い匂いがした。ヨウも驚いているのか嬉しいのか、口を開いたまま感嘆の声を出していた。

「おお……やったのシンイチ！ 見た目は合格じゃぞ。問題は味じやが……」

「それなら僕にまかせて」
と言う声とともに、トトがりんごの元に飛んでくるとそのまま一口食べてしまった。

無表情のまま口を動かし、何も言わずにごくんと飲み込んだ。考え込んでいるのか、首を傾げてじっと真一を見た。

「……なんだか渋いよ？」

「え？」

その言葉に、思わず真一はりんごにかぶりついた。が、すぐに口の動きが止まった。

口の中が縮むような渋みが一気に広がる。これ以上噛むことができず、すぐさま吐き出した。

「うえ……まずい」

「どれ、わしにも」

ヨウもりんごにかぶりついたが、同様に入れた瞬間にすぐ吐き出してしまった。

「……し、失敗じゃの。見た目は十分だったんじゃが、味が悪かつ

たか。……召喚できたんじゃから練習すればどうにかなるじゃろ
「魔術もすぐにできるってわけじゃねえのか。……まあそうだよな
あ」

と、日差しに大きな影ができた。それに釣られ顔を上げてみると、
広げた翼が見える。ゆっくりと降下しながら、音もなく着地をした。
降りてきたのは水を探しに行ったパイだった。

【第三章 潤いの町トトロイ】赤髪の負傷者

ピイは翼を畳むとさっそく言葉を発した。

「真一さん戻りました」

「おつかれ。水はあつたか？」

ピイは一つ頷いた。

「ここから少し行った場所に、綺麗な水が湧き出ている場所がありました。ですがそこに少し気になる人が……」

「気になる人？」

すると、ピイは背を向け再び翼を広げた。

「人がいたんですが、身動き一つしないんです。すぐに案内します」
「わかった、頼む」

真一は渋いリンゴを手に持ったまま、ピイの後を追った。

ピイは迷うことなく進んで行った。真一は砂に足を捕らわれながらも、急ぎ足で進んで行く。

やがて、日光を反射しているような地面が見えた。反射する光に、目を眩ませながらも近づいて見ると、そこに小さな水溜りがあった。淵は大きな岩が囲み、中の水は透き通っていて、底の砂まで鮮明にはつきりと見える。底から小さな泡がいくつか浮き上がっており、どうやら水が湧き出ているらしかった。

と、その水溜りの反対側に人が倒れていることに気がついた。うつ伏せの状態で、薄茶色のローブにフードを被り動く気配がない。

真一はすぐさま駆け寄った。

「おい！ 大丈夫か？」

持っていた荷物を砂の上に置き、その人物の肩を持ち仰向けにした。

見えた顔は目が閉じられ、凜々しい太い眉に口は半開きの状態だった。頬には火傷らしき生々しい傷もある。

と、仰向けにしたせいなのか被っていたフードが取れた。そこから出てきたのは 赤髪の団子頭だった。

「なっ……赤髪じゃと！」

見た瞬間、真一も珍しいと思ったが、ヨウは目を見開き驚いていた。トトも険しい表情で地上へと降り、男の口元に手をやった。

「……息があるよ。まだ死んでない」

男は全身火傷を負っているようだった。薄茶色のローブは所々黒く焦げている。顔はもちろん腕やふともも、特に背中がひどかった。ローブを焼き裂き、見える肌は赤くただれ、中心部は黒く焦げていた。生きているのが不思議なほどだった。

「どうしてエルモ国の人間がアラウにおるんじゃ？ 警備に穴でもあるのか！」

険しい表情でヨウは男を見下ろした。歯を食いしばり、力が入っている。

「エルモ国？ ……そう言えば、マスクがそんなこと言っていたよ。でもそれがどうしたんだよ」

「アラウの民は紫色の髪が特徴じゃ。そして、エルモ国は赤髪が特徴……。こやつは紛れもなく、エルモの者じゃ」

「ああだから赤髪か。……なんでお前そこまで警戒してんだよ」

ヨウもトトも、怪我人を見守る目ではなかった。人ではなく物を見下ろしているようだった。心配するような素振りもない。倒れている男に対する憎しみのような感情が、その態度から見て取れた。

「エルモ国はトトロイから東にある大きな国じゃ。アラウ国とエルモ国との国境は長い川なんじゃが、それぞれ対岸に軍の者があると聞く。常に睨み合いが続いておるんじゃ。……意味がわかるかの？」

「……戦争でもしてんのか？」

ヨウは目を閉じ、俯き加減に首を横に振った。

「今は……しておらん。アラウ国王は、争いをもっとも嫌う人じゃからな……。じゃが対立はしておる」

神妙な面持ちで呆然と地面を見つめていた。しばらく沈黙が流れ

だが、トトが大きく息を吐いた。

「……で、このエルモ人どうしようか？ 気を失っているし、このまま引きずってトトロイの派遣所にも届けようか」

そう言うのと火傷をしている腕をおもむろに握り締めた。赤い皮膚に小さな手が握り締めている。

男は気を失っているため何の反応も示さなかったが、見ている真一が顔を歪めた。

「おい、そこ火傷してんだぞ。……引きずるどころの前に治療が先だろ。こんだけ火傷してんだ、早く手当てしてやらないと」

ゆつくりと頭を下げていき、砂の上に仰向けに寝かせた。男は口を半開きのままびくともしない。

一方、トトは握り締めている腕を離すことなく、怪訝な顔をしていた。

「ヨウさんのマスターは正気かい？ 敵を治療する、なんて言った人間は初めてだよ」

「シンイチは事情を知らんからな……」

ヨウも目を伏せがちに呟いた。肩にしがみ付いたまま降りる素振りも見せず、ただ男を見下ろしている。

男がいつから倒れているのかわからなかったが、早く手当てをしなければ命に関わることは明らかだった。男の唇はひび割れ、手の甲にも火傷を負っている。

無表情のまま見下ろす二人の使魔の前に、真一は大きいため息を吐いた。そして、トトバックの中からハンカチを取り出した。

「シンイチ、何をするつもりじゃ？」

水溜りの淵へ行き、ハンカチを水の中に入れた。水分を十分に含ませた上で弱く絞る。薄い青だったハンカチは、水により濃い青へと変化した。それを手に男の元へ駆け寄り跪いた。そして、男の頬にある火傷の上にハンカチをそつと置いた。

「手当てに決まってるんだろ。お前らが治療する気がないなら、俺がやる」

トトは火傷した所を握り締めていたが、真一はそれ見て無理矢理離した。トトは小さく「あっ」と言ったが、真一は無視した。ハンカチを取り、その腕の火傷に当てる。ハンカチは照りつける日差しと火傷のせいで、すでに温まっていた。

「そんなこと、やっても無駄だよ？」

真一は黙ったまま、水溜りと男の間を歩き来した。火傷の箇所は冷たいハンカチを当て、冷たくなければ水に浸し、また火傷に当てる。

ヨウは、真一の真剣な横顔を複雑そうな表情で眺めていた。トトも、やめようとしなない真一にため息を漏らした。

「……くそっ」

何度か往復した後、真一は思わず舌打ちをした。

冷たいはずのハンカチを当てても男は反応しない。顔を歪めることも、うめき声を出すこともない。真一の行為を黙って受けているだけだった。

地球にいるなら、携帯で救急車を呼んでそれで終わりだった。しかし、今携帯は持っていないし、あったとしても電話など繋がるはずもない。では応急手当をすればいいと思ってても、やり方など知らなかった。知っていることは、火傷は冷やせばいいという風説だけだった。その通りにやってみたものの、余りに頼りない行為だった。自分の情けなさに思わず手が止まる。火傷は赤いままで、治まった気配もない。

アラウ国とエルモ国が対立しているようだが、真一には関係のないことだった。あくまで、真一の目的はヨウを前マスターに返すことである。アラウ人だろうがエルモ人だろうが、目の前にいるのは同じ人間だった。

エルモ人だから治療をしない。真一はそんな考えが信じられなかった。意地でも自分一人で治してやろうと思った。

しかし　ここまでが限界だった。このまま冷たいハンカチを当て続けても、命が救えるとは思えなかった。あくまで、その場での

処置でしかない。

真一は苛立ちを隠すように俯き、拳を振るわせた。

「もついいシンイチ」

その声にはっとして顔を上げた。見れば、大きく息を吐きながら頭を振るヨウがいた。

「シンイチは十分やった。後はわしにまかせろ。……回復魔術を施す」

「お前……」

ヨウは肩から降りた。そして男の元へ近づくと、身体の上に腕を伸ばし手を広げた。しかし、これを見たトトがすぐさま叫んだ。

「ヨウさん！ どうして？ これはエルモ人なんだよ！ 僕らの、アラウの敵なんだよ。回復魔術を施して、逆に襲われたらどうするの！」

「その時はその時じゃ。むしろ三人でやれば、縛り上げることぐらいできるじゃろ」

「そんな無駄なこと……。このまま町へ持っていけばいいじゃないか。敵なんだ、生きようが死のうが関係ないね」

トトは腕組みをし、顔を背けた。頬をいっばいに膨らませ、気に食わないようだった。

「その様子じゃ、トトは回復魔術を手伝ってくれそうにはないの……」

「当たり前じゃないか」

ヨウは大きくため息をついた後、再び真剣な表情となった。仰向けに倒れている男を見据え、掌に力を入れる。

すると、ゆっくりと青い光が掌から膨れてくる。それぞれ片手に膨らんでいた青い光は、合わさり一つとなった。合わさった後もどんと膨らんでいく。そして、その膨らみが男に触れたとき、ゆっくりと青い光が身体全体に広がっていった。腹部からそれぞれ頭と足先に向かって、ゆっくりゆっくりと流れていく。

ヨウは眉間に皺を寄せ、伸ばしている腕は細かく震えていた。

そして、青い光が男の身体全体を包み込んだ。

「ぬう……」

ヨウは唸り声を出しつつ、なお掌に力を入れる。そのためか震えが大きくなった。顔も力み歪んでいる。

男を見れば、腕や太もも、顔などの火傷が徐々にはあるが薄くなつていった。所々あつた黒く焦げた肌はすでない。あとは赤みを消すだけ。真一がそう思った矢先、青い光が引き始めた。引く早さはあつという間で、すぐさま男の身体から消えうせてしまった。「も、もうだめじゃ！」

そう叫ぶと、ヨウは後ろへと倒れこんだ。顔には汗が流れ、ぜえぜえと呼吸をしながら息を整えていた。

「これぐらいの怪我を完治できないなんて……どうしたの？」

トトが首を傾げヨウを見下ろした。ヨウは薄っすらを目を開け、呼吸が落ち着いたところで口を開いた。

「……ま、魔力がの……少ないんじゃない。これでも、増えた方じゃ」「ふーん。でも、ヨウさん苦しそうだね。水魔元素使い果たしちゃった？」

トトは倒れるヨウを見ても、手伝う気にはならないようだった。その場に座り込み、服の袖でヨウの汗を拭っている。

「しばらく動けん。シンイチ、悪いが今日はここで野宿じゃ。……これぐらいは許してくれるかの？」

男を見ればやはり意識は戻っていない。このまま放置するのも中途半端のように思えた。

倒れているヨウもヨウだった。今でも荒い息をしていて、小さな身体が膨らんだり萎んだりしていた。身体にこれ以上の負担をかけると、また気を失うかもしれない。

「無理することねえよ……それより」

「……ん」

真一は視線落としたまま、つぶやくように言った。

「結局お前の魔術に頼っちゃった」

すると、ヨウはふっと笑みを見せた。

「何を言っておる。使魔は、マスターと一心同体じゃ、よ。悪いが

……寝る、ぞ」

そう言い終えると、すぐに寝息が聞こえ始めた。ヨウは寝てしまったらしい。そんな姿を見て、真一は思わず頬を緩ませた。

【第三章 潤いの町トトロイ】トトの話

水溜りのそばで座り込んでいるうちに、太陽は沈み夜となった。暑かった砂漠が嘘かのように冷え込んでいる。夜空は雲一つなく、空一杯の星が輝いていた。

ヨウと男は相変わらず寝ている。真一は、ヨウには風呂敷を掛け、男には黒いローブを掛けてやった。真一自身の身体も冷えていたが、健康上何の問題もない。腕を組み身体を丸め、寒さにひたすら耐えていた。

「寒い」

と、同じく空中で丸くなっていたトトが突然口を開いた。それまで真一とトトの間に会話はなかった。トトに対する疑念をまだ持っていたし、それを持ったまま自分の話をするなどできなかった。向こうから何か情報をくれればよかったのだが、トトは真一と会話をしようとはしなかった。

「これでも食ってる」

そう言って持っていた渋いりんごを投げた。受け取ったトトは顔をしかめ、あからさまに嫌な顔をした。

「いやだよ。これ、おいしくないもん」

「じゃあ我慢しろ」

トトは口の先を尖らし、頬を膨らませた。すると、りんごを真一の前に投げ落とした。そしてトトもそのりんごの元へと降りてきた。「こいつを燃やして火を起こすよ。我慢なんてできないもん」

トトはそう言うと、置かれたままのりんごを掴んだ。そのままぐっと握り締める。すると、小さな爆発音とともに、突如りんごから炎が上がった。

真一は思わず身を引いた。

「なっ何でいきなりりんごが燃えるんだよ」

「へえ、これってリンゴって言うのかい。ふーん……。ああ、赤い

から炎魔元素を含んでいるのかと思つて、炎魔元素を使って炎を起こしたんだよ。……それが何？」

「い、いや」

赤い炎に恐る恐る手をかざした。冷たくなつた手にじんわりと熱気が届く。

二人はしばらくの間、暖を取つた。張り詰めていた緊張までもが、暖によつて和らいでいく。すると、トトが炎を見つめたまま突然口を開いた。

「……君つてチキユウから来たんでしょ？」

「え？」

久しぶりに聞いた地球という言葉に、真一は思わずドキツとした。その様子をちらつと見たトトが頬を緩ませた。

「ふふ、どうして知つているんだつていう顔をしているね。僕ら使魔は、異空間移動ができるから時々異星に行くことがあるんだ。疲れるから頻繁には行かないけどね」

トトは再び炎へと視線を戻した。

「君は異星人だから、アラウのことを知らないんでしょ。アラウの人間だつたら、エルモ人なんて助けない。君はさっきの僕を見て、ひどい奴、なんて思つたんじゃないの？」

真一は黙つたまま炎を見つめた。否定はしなかった。

トトはそれを肯定と受け取つたのか、ふふつと弱く笑つて見せた。「そう思われても仕方ないね。だけど、ヨウさんはエルモ人を助けた。きつと君の意思を汲み取つたんだよ。ヨウさんに感謝しなきゃね」

ヨウは小さな寝息を立て、穏やかな表情で眠っている。

「そうだな」

「きつと、エルモ人は近いうちに目を覚ますよ。警備をしている口の防衛を突破したんだ、それなりにできる奴だと思つ」

「ロイ？」

「ああ、僕のマスターのパラッグの難さ。国境で一匹、警備をして

いるんだよ」

「へえ……」

雛と聞いてパイの姿を思い浮かんだ。いくら鷹になったからといって、国境を一人で守れるものなのかと疑問に思った。

と、パイの姿がいつの間にか消えていることに気がついた。真一は思わずきよるきよると頭を動かし、パイを探した。

それを見ていたトトは、何を探しているのか悟ったのか口を開いた。

「召喚した者は一定の時間しか居られないんだよ。そうだね……チキユウでいう時刻なら、一時間ぐらいかな？」

「へえ、一時間か」

「それより」

そう言うとトトは身体を真一の方へと向けた。見上げる眼差しは真っ直ぐ真一を見つめる。

「君は僕らのことを知らなさ過ぎる。使魔にエルモ人の治療をさせるなんて、狂ってる奴が行うことだよ」

狂っているという言葉にかちんときた。

治療をしようとしただけだった。真一は眉をしかめ、見上げるトトの目を睨みつけた。

「知るわけねえだろうが。悪いが、俺は怪我人を粗末に扱う人間じゃないんだよ。俺に言わせればそういう奴ほど狂ってると思うけどな」

トトも目を逸らすことなく、真一を見透かすかのように見つめてくる。

「だったら僕が教えてあげるよ。アラウ人とエルモ人、そして僕らのことをね」

そう言うと、トトは再び炎に身体を向けた。その横顔から見える目は虚ろで、それはいつか見たヨウの顔に似ていた。

りんごを種に燃えている炎は、暗闇の中ゆらゆらと揺れている。

その炎を見つめながら、トトはゆつくりと語り始めた。

「昔の使魔は、一人きりで暮らしていたんだ。魔術が自由に扱えるから生活に不自由はなかったんだ。一人で生き抜く、それが使魔だったんだ」

炎の灯りで見えるトトの横顔は、遠くを見つめ、どこか虚ろだった。

「だけど、時が経つと使魔たちの考えも変わっていったんだ。少しずつ人間に関わろうとする使魔が増え始めたんだ。僕もその内の人さ。最初は人間は不自由な生き物だな、って思ってた。けど、一人じゃどうにもできないから群れるでしょ。それで助け合って励まし合って……僕らにはそういうのがなかったから、すごく新鮮に見えたんだ。その内人間と契約する使魔が増え始めていって、人間との関係も友好になり始めたよ。僕も今のマスターと出会えてよかったと思ってるよ」

ふふ、と頬を緩ませた。しかし、すぐにその表情は消えてしまった。

「だけど、全てがそうではなかったんだ」

絶望したような顔つきだった。感情を忘れ、ただ無表情に炎を見つめている。

ただ事ではないと感じた真一は、少し間を開け尋ねた。

「……どういう意味だ？」

「僕らを利用しようとする人間が現れ始めたんだ」

それを聞いた瞬間、真一の身体を震えが止まった。ただならぬ予感がした。真一は息を呑み、トトの言葉を待った。

トトは思い出すかのように、しばらく炎を見つめた。

そして、怒りで声を震わすことも悲しみに声詰まらすこともなく、淡々と語り始めた。

「使魔と契約した人間は、他の使魔の姿が見えるようになる。そいつらが、僕らを乱獲し始めたんだ。僕らを捕らえて、貴族たちに僕らを商品として売ってお金を儲ける。買い取った貴族たちは無理矢

理契約する者もいたし、さらに高い値段をつけて軍なんか売る奴もいたよ。そのおかげで、僕らの意思に関係なく契約させられるようになったっていったんだ」

真一はそれを聞いて『それが……最近ひどいもんじゃ……』と、呟いていたヨウの顔を思い出した。

あの時真一は、自分自身のことを言っているものばかりだと思っていた。しかし、あれは今までの使魔たちのことを言っていたのだ。何も知らなかった自分の軽率な発言を恥じた。そして何より、奴隷のような扱いを受けた使魔たちを思うと、真一は心が痛んだ。直接関係はしていないものの、同じ人間だと思つと申し訳なく思った。どのような面を向けていいのかわからず、そつとトトから顔を背けた。

「今でも、軍は戦力の底上げをするために僕らを確保しようとしているよ。契約し終わっている僕やヨウさんには関係のない話だけだね……。だけど、仲間が捕らわれるって言うのはあまり気分のいいことじゃないね」

その言葉に真一は自然と証を見つめた。一部の人間にしか知らないはずの赤いリング。使魔とマスターの証。

これがほしいがために、一体いくらの使魔が犠牲になってしまったのだろう。

「契約するとね、マスターの死と僕らの死が一緒になるんだ」
「一緒？」

胸騒ぎがした。初めから単なる証だとは思っていなかった。

再びトトに視線を戻し言葉を待つ。トトは半面を炎の灯りに照らされ、どこか暗い表情に見えた。そして、その胸騒ぎは的中した。

「うん。つまり、君が死ぬとヨウさんも死ぬ。そういうこと」
今までの、ヨウが必死に真一を守る姿が一気に思い起こされる。身を挺して守っていた理由 やつと理解できた。

そう分かった途端、真一はなぜか苛立ちを覚えた。今までヨウに

救われたことは何度かあった。それ自体は感謝している。今でも気持ちは変わらない。

しかし逆に、真一自身の危険は自らの危険だと知っていたから守ってきたのではないか。

結局は何の頼りにもされていない。ヨウにとって、自分は命の危険を広げるただのお荷物だったのだ。マスターだから助けたのではない、自分の命が危ないから助けた。真一の中で薄っすらと感じ始めていた、ヨウに対する友情に似た信頼が一気に崩れていく。

命が危ないから助けるのは当たり前前、そう頭では理解できてもなぜか悲しかった。真一は静かに唇を噛み締め、拳をぎゅっと握った。「契約させられた相手は、ほとんど軍人だったらいいんだ。僕らの力を借り、魔力が上がった軍を見て、国の幹部たちがエルモ国に戦争を吹っつけた。使魔もその戦争に同行した者も多くいたよ。けどね、いくら使魔がいて魔力が上がったって言っても、やっぱりそれまでなんだ。力に驕れるようじゃ意味が無い。元々、アラウ国の人間は魔術に頼りすぎてる。それを助長させたただだったんだ。結果、多くのアラウ人が殺されたよ。それと一緒に使魔も、ね」

トトは目を閉じ、大きく息を吐いた。
力に驕れること。きつと誰でもあることだろうと、真一は思った。自分でさえ、魔術が使えると分かった時の喜びは相当なものだった。何か武器になるものを手にすれば、強くなったように感じる。おそらく、その武器がアラウ国にとっては使魔だったのだ。真一は表情を崩さず淡々としゃべるトトに同情した。

しかし、どんな顔をしていればいいのかわからず、再び顔を背けた。

「だから、エルモ人は許せない。あいつらのせいで多くの使魔が消えた。それに……本当は軍の奴らも許せないんだ。だけど軍のことは、マスターの手前大きな声で言えないけどね」

トトは炎から視線をはずし、真一の方を向いた。

「お話はおしまいだよ。アラウ人とエルモ人と僕ら……わかってく

れた？」

見上げる垂れ目は至って穏やかだった。頬を緩ませている。

真一はトトを見ずに視線を伏せたまま答えた。

「ああ、だいたいな」

「そりゃよかった。……じゃあ僕らも寝よう。町までもう少し歩かなきゃいけないから。遅れたら置いていっちゃうからね」

会ったときのような、にこっと笑う顔を見せた。そして、そのままその場に横になりすぐさま寝息を立て始めた。

わざと明るく振舞っているのか、それとも、もう何も感じないのか。

と、タイミングよく急に元の暗闇へと覆われた。見れば、炎の種となったりんごが燃え尽きていた。灯りがなくなった後も、真一はトトを眺めたが真意はわからなかった。どちらにしる、辛い過去を知ることができたのだ。大きく息を吐き、真一は身体を横たえた。

何も聞こえない暗い砂漠。冷たい風は、真一の身体を冷やすと同時に、心細さまで与えているようだった。

ゆっくりと目を閉じる。

どれほどの使魔が犠牲になったのか、人間を憎んでいるのか。寒さに震えながら、そんな考えが頭を巡る。力に驕れたために死んだ

真一は自分自身に言い聞かす。

魔術に驕ることはない、今までのやってきたことを信じるだけ。使魔の荷物なんかになるもんか。

そんな風に念じ続けていると、いつの間にか眠ってしまった。

じりじりと、肌を感じる熱気に思わず真一は唸った。暑い。寝返りをし、仰向けへとなった。睨越しからは容赦なく強い日差しが照りつける。

それを避けるかのように目元に腕を重ねた。意識がはっきりしない状態でも、身体はどうか工夫をするらしい。

「起きろ」

と、聞き覚えの無い男声が遠くから聞こえた。夢心地のまま、唸って返事をする。

「おい、起きろ」

目元に乗せている腕に、何か冷たいものを押し付けられた。鋭いのか、一点だけに集中している。

一体誰の仕業なのか、ヨウカトトか。そんなことを考えながら、真一は不機嫌そうに返事をした。

「ああ！ うっせえな……起きりゃいんだろ」

押し当てられていたものがはずされ、真一は一気に身体を起こした。身体は起こしたものの、目はなかなか開けられない。日差しが異常に眩しく感じた。

「お前、何者だ」

今度のはつきりと聞こえた。低い男の声。ヨウでもトトの声でもない。目をこすりその声のする方を見上げた。

見えたものは、昨日倒れていた赤髪の男が槍の先端を真一に向けてる姿だった。

【第三章 潤いの町トトロイ】リオという男

槍の先端は真一の頭に向けられ、鋭い刃先は簡単に貫くことができそうなほど眩い光を放っていた。その刃先は拳一つ分ぐらいしか離れておらず、見るだけで縛られたように動けなくなった。

恐怖心をなんとか抑え込み、真一は動かせる目だけで構える男をゆっくりと見上げた。

男は至って冷静に見えた。槍こそ真一に向けているものの、思ったほどの殺気を感じない。男は首を傾げ、真一の格好を訝しそうに眺めていた。

「お前、変わった格好してんな。名前は」

一通り見たのか、真一の顔をまじまじと見ている。

男は赤髪の団子頭に、頬に少しだけ火傷の跡が残っている。凛々しい少し太い眉に瞳が赤い。男らしい顔立ちだった。

「……萩野真一だ。何もしねえから、これ、下ろせ」

「ふーん。変わった名前だな。長いからシンでいいな」

一人、納得したように頷いている。が、槍は下ろさずそのままの状態だった。

「で、シン。確か俺は、エルモ国からこっちに来る時に、おかしな生き物に酷い火傷を負わされたんだよ。それで命さながらこの水溜りにたどり着いた……はずなんだ。それが今じゃ身体が治ったみたいに楽なんだよ。お前が治療してくれたのか？」

「……だったらどうするんだ」

下手に刺激をしては危ないと思っっているものの、相手のペースに巻き込まれるのも癪だった。様子を伺いながらも、真一はちらりと男の背後を見た。

男の横で寝ていたはずのヨウの姿がない。同じくトトの姿もない。視界全てを見回したが、どこにも見えなかった。

やられてしまったのか、そんな焦りを感じ始めたときだった。視

界から槍の先端が消えた。見れば男は微笑み、槍を下ろしている。

「いやあシンなら槍なんか向けたら罰が当たるね！ え、シンなん
だろ？ シン以外にここにいないしさ」

「え。ああ、まあ……そうだけど」

真一は視線を泳がせながら返事を返した。実際に治したのはヨウ
だった。説明が面倒だった。

すると、男は真一の目の前に屈み、分厚い手のひらを差し伸べて
きた。槍は砂の上に置かれている。

「俺はリオ。火傷を負ったときは死ぬ覚悟をしたんだ。エルモから
は追い出されたし、アラウは敵国だったしね。ありがとう、感謝す
るよ」

「え、ああ……」

訳の分からぬまま、真一は手を出そうとした。リオの屈託のない
笑顔とさばさばとした口調に、緊張の糸がほぐれてきた。

悪い人ではないかもしれない。そう思った矢先だった。

「な、なんだ！」

突然リオの身体に太い縄がぐるぐると巻き始めた。驚き慌てて立
ち上がったものの、バランスを崩しそのまま倒れこんだ。縄はリオ
を締め上げ、腕は身体にぴったりとくっつきびくともしない。と、
倒れたリオの背中に見えたものは。

「案外あつけなかつたね」

「そうじゃの。姿が見えんというのにはやはり有利じゃのお」

それぞれの手に太い縄を持っているヨウとトトだった。してやっ
たりとでも言うように、互いの顔を見合いにやにやと笑っていた。

「お前ら、何やってんだ！」

真一はすぐさま近寄り、それぞれ手に持っている縄を奪った。

しかし、二人はすぐに真一の手から縄を奪い返した。

「こればかりは譲れないね。さっきだって君に槍を向けたんだよ
？ 町に着くまでは縛り上げていたほうが身のためだよ」

「わしもシンイチの安全を考えると、トトの意見に賛同するの」

縄をぎゅつと握り締めている二人を目の前に、真一は黙り込んだ。確かに、素性がわからないこの男を野放しにするのも危険だった。「シン！ 誰と話してるんだ？ てか、誰だ、縛っている奴は！」リオは必死に背後を見ようとしているが、首だけでは見る事ができないようだった。

「使魔だよ。警戒してるんだ。悪いけど、そのままの状態で歩けるか？」

「シマ？ なんだそりゃ……。まあ、エルモ人だと聞いてすぐに安心する奴なんていないな。別にいいぜ。その代わり、槍、こっちへよこしてくれないか」

顎を使って槍を示した。縄から少しだけ見える指を必死に動かし、ここに持って来いとでも言っているようだった。

真一はリオの隣に置かれていた槍を手にとった。銀色の槍は見た目以上に軽く、一定間隔に継ぎ目が見える。槍を眺めながら、リオの手元へ槍を近づけていく。すると、トトが眉をひそめ叫んだ。「君！ どうしてこいつの言うことを素直に従うんだい！ それで襲われたらどうするの？」

その言葉に、真一の動きが金縛りにあったかのように止まった。一方でリオは、いきなり動きが止まった真一を不審そうに見上げた。真一はその視線に気づくことなく、頭の中で思考した。

渡せばどうなるか、そんなことは少し考えれば予測できることだった。いきなり縛り上げられたわけだから、相手も警戒しているに違いない。何より、一度刃先を向けられた相手である。動けないしろ、危険なことには変わりはない。

しかし、真一の中からリオの感謝の言葉と笑顔が消えなかった。あれだけは、どうしても嘘であるとは思えなかった。

真一は深く息を吐くと、そのまま槍をリオの手元へと導いた。

「これ。だけど、もう向けないでくれよ」

「ありがとう。もう向けないさ。……にしてもシン、ちょっと危ない人だな」

受け取るとふんと鼻で笑った。

リオは槍の柄の部分にあった小さなボタンを押した。すると槍は一気に収縮し、あっという間に手のひらほどの長さの棒へと変化してしまった。驚き唾然としていた真一だったが、リオは気にする様子もなく、うつ伏せだった状態から膝を立てると一気に起き上がった。

「じゃ、行くか。どうせ町に行く途中だったんだろ？ 丁度いいじゃないか」

「あ、ああ。……なんで俺が危ない人なんだ？」

「いや悪い意味じゃないさ。そんなことより案内をしてくれ。俺も早く解放されたいんでね」

言葉とは裏腹に表情は険しい物ではなく、いたずらっぽく笑って見せている。真一はその表情に戸惑いながらも、苦笑いを浮かべた。やはり悪い人には見えなかった。

すると、リオを縛っていた縄の両端が前に移動し、そのまま真一の隣までやって来た。その両先端にはヨウとトトがいるのだが、リオには当然見えない。リオは一人その様子を見て「おお、縄が浮いてる！」などと驚きの声を上げている。

「はいこれ。じゃ、案内しようか。僕の後を付いてきてね」

トトは縄を真一に手渡した後、頭上に浮かび上がり少し前を飛び始めた。ヨウも縄を真一に手渡すとそのまま肩にしがみ付いた。

そして真一も、トトに遅れないよう歩み始める。

「わしが寝た後、トトと何か会話したんか？」

「……ああしたよ」

少し歩くとヨウが口を開いた。顔色を伺えば悪くはない。ぐっすり休んだせいなのか体調はよくなったようだった。

「何を話したんじゃ？」

真一はヨウから視線をはずし、前を見据えた。

マスターが死ねば使魔も死ぬ、その事実を知ることができた。が、どうしてもヨウに対する疑念を取り払えない。

真一とヨウは、前マスターへ行くと同じ目的を持った者同士で、それ以外の目的はない。つまり友情など特に必要ないのだ。助けたのも自分の命を守るため、それが理由であろうと文句を言う資格はない。それに対して疑問投げかけるなど、真一には勇気も気力もなかった。

「……プレサモンで召喚したもんは、約一時間しかいらねえこと。あとはお前らのことやら、アラウのことなんかだよ」

「ほう、そうか。あやつも見た目以上にしゃべるんじゃないの？」

ヨウはちらりとトトを見上げた。

そんな横顔を見た真一は思わずため息を漏らした。

「なんじゃ？」

「別に」

考えても仕方ない。そうは思っても心に引っかけた。しかし今の真一には聞くことはできなかった。

どうせ前マスターへ届けるまでの関係だ。

そう思い、この疑念はなんとかして忘れようと心がけることにした。それがお互いのためだと思った。

「……シン、お前本当に危ない人か？」

後ろから黙って様子を眺めていたリオが心配そうに声をかけた。

リオには使魔が見えなかった。

【第三章 潤いの町トトロイ】トトロイの統治者

生温い乾いた風が吹き付けている。太陽は昨日と同様、容赦ない日光を照らしつけ、その熱気は砂漠から反射して下からも沸き上がっていた。

どれぐらいの時間を歩いたのかわからない。無駄な体力を消耗しないために一行は黙々と歩いてきた。水溜まりから幾分か遠くへ来たはずだったが、一向に景色に変化はない。

途方もなく続く砂漠。はつきりと分かれた地平線。真一はどこか違う星へ来てしまったのではないかと、思い始めていた。次第に足取りも重くなっていく。慣れない砂場と照り付ける日差し。流れる汗は暑さゆえにすぐに蒸発していった。ヨウはぐったりと肩に身体を預けたまま動かさず、苦しそうな呼吸だけが聞こえている。

どこまで続くのかと思っていた矢先だった。

遠くにうつすらと建物らしき残像が見えた。暑さのためなのか、ゆらゆらと塵気楼のようなものの向こうに浮かんでいる。

「あ、あれか？ あれが町か？」

真一は乾ききっている口をなんとか動かし、声を絞り出した。

「あああれだけど、もう少しあるよ。ま、頑張つてね。もう野宿は嫌だから休まないからね」

トトは振り返り、涼しそうな顔を真一たちに向けると、再び前へと進み始めた。

真一はうなだれたため息を漏らした。もう少し、という言葉が一体どれほどなのか考えただけでも嫌気が差す。身体全体がだるく、一度座ってしまったば当分の間動けなくなるだろう。挫けそうになる気持ちを堪え、顔を上げ遠くに見える町を見つめた。

遠くだが確かに町は存在する、そう自分に言い聞かせ、重い足を再び前へと歩み始めた。

暑い日差しに耐えてひたすら歩んだ結果、やっとのことで町の手前まで来ることができた。

しかしここに来て砂嵐が起こり、ほとんど目が開けられない。風で舞い上がる砂を手で遮りながら、真一は町を眺めた。

白く低い建物がぎっしりと並んでいるように見える。その奥に、一番大きな建物が見えた。手前の建物が小さく見えるために異常に目立っている。

「あれがトトロイか」

「うん。あの大きな建物の中に僕のマスターがいるよ。紹介してあげるから、会いなよ。どうせ証目的なんでしょ？」

ぐったりとしていたヨウだったが、そのトトの言葉に突如むくくと身体を起こした。

「トトお主……マスターというのは、もしかして」

「会えばわかるよ。そいつも一緒に連れて行こう」

トトは後ろのリオをちらりと見ると、町へと飛び始めた。しきりに砂を気にしている様子から、早く戻りたいらしい。

真一とヨウは互いの顔を見合った。

「まさか、あいつのマスターってのは」

「……そうじゃの」

トトを見直すとかなり前にいた。真一は慌てて駆け寄り、早く進むトトの背中を追っていく。

町が近づくと、溜まっている疲労が緊張感に代わっていくのを感じた。ヨウも同じなのか、いつもどおり肩にしがみ付き顔は生気を取り戻している。

トトのマスター　真一とヨウはなんとなく勘付き始めた。

「おい、シン。俺をどこへ連れて行くつもりだ？」

舞う砂を防ぐことができないリオは、目を瞑りしきりに唾を吐いていた。そんなリオの声さえ届かないほど、真一の緊張は高まっていた。

町へ入った、といつても特に仕切りなどはなく、目の前に建物が隙間なく並んでいた。先ほど見たとおり白い土壁のような低い建物。その間を一本の道が真っ直ぐと続き、奥の大きな建物へと導いている。真一は目を手で覆いながら、その一本道の奥にある建物をじっと見つめた。

「あれが、マスターの家か」

「そうだよ。早く行こう。これ以上砂を被りたくないよ」

服についた砂を払い終わると、トトは真一を見下ろした。

「僕、先に行つてマスターに事情を説明してくれるから。そいつ、逃がさないようにね」

そう言つた後トトは一本道を少し飛んでいったのだが、思い出したかのように振り向いた。

「……あ、それと、リングゴだっけ。あれを用意しててね！」

トトはそう言つと、大きな建物を目指し背中を小さくしていった。真一は両端に並ぶ低い建物を見ながら、ゆっくりと道を進んで行く。どの家も戸はなく、入り口には布がかけられ扉代わりとなっていた。砂嵐がひどいためなのか、人は出歩いてはおらず寂しく建物が並んでいるだけだった。

「ひどい砂嵐じゃの！ 口の中に砂が入ってくるわい」

口を手で覆いながら、ヨウも建物を見上げていた。

殺風景な町、という印象だった。白い建物はほとんどで、その中にいくつか土壁に色が付いた家が所々ある。何か意味があるのかはわからなかったが、看板がないところを見ると何か特別な家なのかと真一は考えた。しかしながら、行って確かめて見ようなどと思うことはなく、早く砂嵐から逃げたい気持ちで勝っていた。

ふと後ろを振り返れば、リオは口も目も閉じられた状態でただひたすら砂の攻撃から耐えている。こんな状態のリオを気の毒に思い、真一は観光もそこそこに、足早に奥の建物へと歩を進めた。

吹き荒れる砂嵐の中を懸命に進み、やっとこのことで奥の建物の

前までやって来た。真一は手のひらで砂を避けながら、立ちはだかる扉を見上げた。

重そうな石の扉である。隙間なく閉められており、見るからに頑丈そうであった。

真一はひとまず扉に近寄ると、手のひらで数回石の扉を叩いてみた。ぺしっという軽い音が鳴るが、それは砂嵐の風の音によつてすぐさまかき消されていく。

「……すみません！ 開けてもらえませんか！」

冷たい扉に向かって叫ぶものの、本当に届いているのか不安に思った。そもそも人の気配を感じない。

まさか砂嵐が収まるまでこのまま外に放置されるのではないか。だとすれば、たまったものではない。頭を掻けば手に砂の感触があり、口の中はじゃりっという砂の音がする。目は砂でほとんど開けられない状態で、服の中も砂が侵入していた。

このまま外にいれば埋もれてしまう、そう思った真一は何度も何度も扉に向かって叫んだ。叫ぶたびに口の中に砂が入ってきたが、そのつど唾を吐き出した。

「なんだあ、この家に入るつもりなのか」

声が出たので振り返ってみれば、顔をしかめたりオが歩み寄ってきた。

リオは真一の横に立ち並ぶと、

「開ける！ 捕まったエルモの者だ！ 通せ！」

と思わず耳を塞ぎたくなってしまふような大声を出した。驚いた真一は思わず周りを見回した。

幸いなことに、家から出てくる様子はない。その時だった。

目の前の石の扉がゆっくりと左右に開き始めたのだ。

地面の砂を押し分けながら、ゆっくりと開いていくとそこにはトトが浮いていた。頬を緩めてにつこりと笑って手招きをしている。

「ほら、早くこっちへ。砂が入っちゃうから」

その言葉に慌てて真一は建物の敷地内へと入り込んだ。途端、後

るで開いていた石の扉は大きな音を立てて閉まった。

その音に驚き、三人は振り返った。石の扉は堅く閉ざされ、ふと気づけば砂嵐もない。そのまま見上げてみれば天井がある。手を伸ばしても届きそうもない高さだった。

「……なんだこの家は」

見上げたまま真一が言葉を漏らすと、トトがふふつと笑う声が出た。

「マスターの家だよ。完全に砂を防御してるんだ。トトロイはほとんど砂嵐だからね」

周りを見渡せば、家壁も石のような堅い壁だった。灰色の壁が並び、外と内を完璧に遮断していた。あれだけひどかった風の音さえも聞こえてこない。足元こそ砂であったが、なんの支障もなかった。それよりも驚いたのは、中にまた家が建っていることだった。外に並んでいたと同じような家の形をした赤い建物。大きさは外に立っていた家よりも二回りほど大きい。横幅が狭かった外の家に比べれば断然こちらの家の方が大きく、なにより外壁が美しく赤く輝いている。窓がいくつも見受けられ、どうやら二階建てのようだった。

その内二階の窓が一つ開いている。あそこに統治者がいるのか。そう思いながら真一が見上げていると、呼びかけるトトの声がした。見れば赤い家の入り口まで進んでいて、真一たちが来るのを待っていた。

「早く来てよ。マスターが待ってるから」

中は至って質素だった。リビングのような部屋が一部屋あり、そこから階段を上った。階段を上って廊下を進むが、ドアがいくかあっただけで立派な飾りも何もない。また、シトモンの館にいた警備もおらず、人が本当にいるのかと疑ってしまうほどの静けさであった。

「さ、ここだよ。マスターに知らせてくるから、少しここで待って」

トト止まった部屋はドアが開けられていた。が、ドアよりも手前で止められたため中の様子は伺えなかった。トトはそのまま部屋の中へ入っていく。

その間三人の間に会話はなく、緊張感だけが高まっていった。一体どんな人物なのか。そして、捕らわれたリオはどうなってしまったのか。

「入れ」

と、緊張する雰囲気をぶち壊したのは低い男の声だった。何か耳に残るような重い低音。驚いた真一はすぐさまドアを全開に開き、急いで部屋の前へと移動した。

見えたものは真つ赤な部屋だった。何もかもが赤い。床、壁、机、椅子全てが赤い。部屋の真ん中には四角い机があり、真正面にはシトモンの部屋と同じように大きな窓があった。窓の手前には少し大きな机が置かれている。が肝心の声の主の姿が見えない。

「何をしている、入らないのか」

「は、はい！」

見えない声の主に驚き、真一は慌てて部屋へと入った。

と、そこで声の主　トトロイの統治者を見ることができた。部屋の右手にあるガラス戸のようなものの前に立っている。が、中を見ているのかそれは後姿であった。

「トトから聞いた話によると、お前は赤い……リンゴという物を召喚できるそうだな」

「……は？」

挨拶もなく突然の話に真一は困惑の表情を浮かべた。

いきなりりんごという単語。意味がわからず、開いた口が塞がらなかつた。すると、統治者はようやく振り返った。

無精ひげを生やした男。ターバンのような赤い布を頭に巻きつけ髪が完全に隠れている。おでこには細い紐を巻き、その真ん中には赤い宝石が輝いていた。ローブのような赤い服を着ているが袖はなく、逞しい二の腕が露わとなっている。下半身も同じで、ローブは

膝から下が切り裂かれ短くなっていた。腰には白い帯のようなものを巻きつけ、骨盤辺りに小さな袋が付いていた。

「出せるのか出せないのか。どっちなんだ」

「いや、まあ……出せることには出せるけど」

「だったら、ほらっ、今すぐ出せ」

そう言っつて男は手のひらを差し出してきた。

真一は理解できないまま、ひとまずりんごを召喚することにした。とにかく機嫌を損ねることは避けたい。そう思った真一は、トバツクの中から素早くフェル草を出すと、手のひらに乗せた。視線が集まっているのを感じながら、集中を高めていく。

ゆっくりと目を閉じてひたすらりんごを想像する。赤い球体に、口の中に広がる甘い果汁。

そして。

「インデーションサモン！」

勢いよく目を見開き叫ぶと、手のひらのフェル草が一瞬光り、一気にりんごへと変化していた。真一は胸を撫で下ろしほっと息をついた。

ただ、前回のこともあり気が抜けなかった。見るだけではわからず、真一はせめてもと思い、りんごを鼻に近づけ匂いをかいだ。

甘い匂いがする。

「おお、本当に赤いな！ 気に入った！」

男は真一に近寄ると、りんごを奪ってしまった。手に取りりんごを掲げると、下から見たり上から見たりと物珍しそうな視線を送っている。頬は緩み嬉しそうな顔だった。

「よし、さっそく飾りましょう」

男は再び背を向け、ガラス戸を開けると少し開いたスペースにりんごを置いた。後ろから覗き見してみると、ガラス戸の中は赤い物ばかりが置かれている。赤い石、赤い布、赤い木、赤い葉と様々ある。どうやら赤い物を集めているらしかった。その一番下の端っこに新しくりんごが加わった。

男は戸を閉じると、しばらく眺め満足そうに何度も頷いた。小さな声で「よしよし」と言ったあと、男は窓の前にある大きな机へと移動し、そのまま椅子に腰掛けた。見るといつの間にかトトが男の横に浮かんでいる。

「お前……名前は何なんだ？」

「え、あ、萩野真一ですけど」

「では、シンイチこちらまで来い」

男は机の前を指差し、真一は指示通りに歩み寄った。縄に縛られたリオも真一と並び立ち、横顔を伺えば怪訝そうに男を見下ろしていた。

「俺の名前はトトロイだ。名前通り、潤いの町トトロイの統治者だ。大体の話はトトから聞いている」

トトロイは真一とリオ、ヨウの顔を見上げた。視線の具合を見るからに、やはりヨウの姿は見えるようであった。ヨウもごくんと唾を飲みこんでトトロイの言葉を見張っている。

「まあまずは……これをやる」

そう言っただけの引き出しから出された物は、赤色のバッチだった。それを机の上に置くと、そのまま真一たちの前まで差し出した。シトモンからもらった証と同じ形で、色はトトロイのおでこにある寶石と全く同じであった。

真一は差し出された証を手に持った。前回とは違いあっさりと言葉を受け取ることができてしまい、思わず疑いの目をトトロイに向けた。「……もらっていいんですか？」

「ん、お前たちはそれが必要でやって来たのだから？ 何か不満でもあるのか？」

「な、ないです」

真一は慌ててトトバツクの中へと放り込んだ。

何はともあれ目的の物を手に入れることができた。それにほっとしつつも、再びトトロイに視線を戻した。トトロイの目は先ほどよりも陰しさを感じる。その視線の先は、隣にいるリオに向けられて

いた。リオはその視線を受けても暴れそうな気配もなく、無表情にトトロイを見下ろしていた。

「お前の名前はなんだ」

「リオ」

「赤髪か。エルモ人だな」

「そうだ」

短い会話ながら見えない緊張感が漂ってきた。隣にいるのは、敵国とされているエルモの人間。一方で、目の前にいるのはアラウの王族であるトトロイの統治者。立場は大きく違うものの、敵対しあう者同士が対面していること事態が大変なことである。

真一は今更ながら、リオがどうして警備されている国境を越えてきたのかと疑問に思った。国境を越えるなど、命を捨てるものではないのか。現にリオはひどい火傷を負っていた。今でこそ気丈な振りをしているが、おそらく完治はしていない。リオはエルモを追い出された、と言っていたがあれはどういう意味なのか。追い出されたからといって、どうしてリスクを負ってまでアラウへやって来たのか。

「トト、リオの縄を解いてドアを閉める」

「わかった」

トトはトトロイの言葉に従い、真一から縄を受け取るとそのまま縄を解いていく。リオはようやく縄から解放され、腕を上へと伸ばし背伸びをした。ローブの裾が垂れ下がって見えた腕にも、やはり火傷の跡が生々しく残っている。その間にトトは部屋のドアを閉め、再びトトロイの近くへと戻ってきた。

「ロイの自衛魔術から逃れ、よく町までたどり着いたな。恐らく優れた身体能力があるのだろう。しかしだ。ここはアラウだ。エルモとアラウの関係……リオ、お前もわかつているだろう？」

「ああ知っているさ。で、俺をどうするんだ」

リオは真っ直ぐトトロイを見つめていた。縄が解かれてはいるが、逃げる素振りはない。握りこぶしをぎゅっと作り、直立不動のまま

トトロイの言葉を待っていた。

トトロイはそんなリオを数秒見つめた後、小さく息を吐いた。少し目を伏せた後、ふっと鼻で笑った。

「……もつたいない男だ」

そう小声で呟き、顔を上げリオを見据えた。

「今からお前は派遣所へ連行される。もうすぐ、派遣所の役人たちがやって来る。そいつらにお前を引き渡す。それからは軍の指導だ。エルモの情報を吐かせるのか、何か処罰があるのか、それとも命を奪うのか。残念だが俺は知らん。俺はお前が逃げないよう見張るだけ。逃げようとするなよ、俺は自衛魔術を扱えるのだ。ロイよりもきつい炎を浴びせるぞ」

「逃げないさ。何があるうと受けてやる」

リオは頬を緩め不敵な笑みを浮かべながら、トトロイから目を逸らさなかった。それを受けたトトロイも、ふっと笑みを浮かべた。

トトロイの言葉を受けて動揺していたのは、その横にいた真一だけだった。

リオは悪い奴には見えない、このまま派遣所の役人に渡してしまってもいいのか。そんな思っただけが頭をぐるぐると回っていた。笑みを見せ合うトトロイとリオを後目に、真一だけが視線を床に泳がせ思案を巡らせていた。

【第三章 潤いの町トトロイ】忍び寄る影（前書き）

更新の間が空いてしまい、申し訳ございませんでした。

前回の内容を忘れた方がいらっしやるかもしれませんが、簡単に前回の終わり部分を紹介します。

真一たちは砂漠を歩き、ようやく潤いの町トトロイに到着しました。トトの紹介で統治者と会い、証を貰い受けます。ですが、エルモ人であるリオは派遣所に連行されてしまうと告げられます。どうにかしなければいけない、と考える真一 という場面で終わりました。では続きをお楽しみください。

【第三章 潤いの町トトロイ】忍び寄る影

「待てよ、おかしいだろ」

真一は吐き捨てるように言い放った。

「リオはここまで来る間暴れなかったし、町に入っても何もしてねえだろ。なのになんで連行なんだよ」

不躰な言い方だった。それでもトトロイは気分を害してはいないようで、薄笑いを浮かべている。

「それが何だ？ その言い分だと、俺の判断に異議があるように聞こえるが……シンイチは、俺が間違っていると言いたいのか？」

「ああそうだよ」

間髪入れず言い放つ。リオが連行されない方法はただ一つ。拒否するほかない。だが、当人は諦めたような笑みを浮かべていた。

なぜ笑っていられるのか、真一はそんな疑問を抱いている。連行されればどうなるかわからない。それをわかっていながら、笑みを浮かべる神経が理解できなかった。足掻く行為さえ見せないリオに苛立ちさえ感じる。

一方でリオは、思わぬ言葉に笑みは消え、驚いた顔を向けている。トトロイも真一の言葉に眉をひそめ、不愉快な表情を浮かべていた。少しの間椅子に腰掛けていたが、突然バンツと机を強く叩きつけるなり、勢いよく立ち上がる。

真一を見下ろす。威圧にも似た眼力が真つ直ぐ向けられる。心まで見透かされる眼差し。真一の意味を見定めるかのような目。

統治者としての品格なのか、一瞬にして身体が張りつけにされたような感覚になる。一つの動きも見逃さない鋭い視線。次第に視線を逸らしたくなる衝動が起こり、鼓動が足掻くように早くなっている。真一はそれでも、半ば睨みつけながら決して目を逸らさなかった。

「……まあよかろう」

意志が通じたのか、トトロイはふつと鼻で笑い目を伏せた。小さく息を吐くと、今度はリオを見据えた。

「どうしてこちらに来たのか、その理由だけでもお聞かせ願おうか。その理由によっては、俺がどうにかしてやる」

どかつと乱暴に椅子に身体を預けると、再び口元を緩めリオを見上げた。

「言うか言わないか。言わないのであれば、再び縛り上げる」

有無を言わさぬような強い口調である。

リオは小さくため息を漏らすと口を開いた。

「俺は祖国では武器商人だった。素材を集め、武器を作り、それを売る。その作ったものが祖国では受け入れられず、追い出された」

「ほう、武器……か」

怪訝そうな表情を浮かべるトトロイを察したのか、リオは持っていた銀の棒を取り出した。

「なんだ、それは」

手のひらに乗る棒に顔を近づけ、物珍しそうに眺めている。一方で、真一はその棒に見覚えがあった。ヨウとトトも気づき、小さく口を開けている。

まさかトトロイに攻撃を仕掛けるのか 真一は思わず唾を飲み込んだ。そのような行動に出してしまえば連行は間逃れない。

しかしその予想とは反し、リオはあっさりと言ったのけた。

「これは武器だよ。ほら」

棒の横に小さな出っ張りがある。それを押すと、銀の棒は一気に伸びた。その先端に鋭い刃が飛び出した。その瞬間、トトロイも身を引いて驚き、啞然とした表情浮かべた。

が、槍はトトロイに向けられることなく、刃先は真っ直ぐ天井へと向けられた。

「この武器はアラウで拝借した素材とエルモで取れる鉱物を掛け合わせたものだ。色々と試したんだが、ほとんど脆く使い物にならなかった。唯一、これだけが成功した」

槍は美しかった。何かラメでも入っているのかと思ってしまうほど、全体から光っているように見える。丁寧に扱われているのだろう、柄には傷一つなく、刃もこぼれてはおらず、妖しい光を放っていた。

その美しさに息を呑む真一に対し、トトロイとトトは一層険しい表情となっていた。

「待て。どうしてエルモにいたお前がアラウの素材を持っているのだ。答えろ」

強く言い放つ姿に迫力を感じる。明らかに殺気立ち、気のせいかとトロイの周りががゆらゆらと揺れているように見えた。

リオはその殺気から逃げるかのように視線をはずし、床を呆然と眺めている。

「……何度かアラウに侵入した」

その言葉と同時に、トトロイは椅子を倒しながら立ち上がる。腕を真っ直ぐ伸ばしリオに手のひら向け、鋭い眼光を向けた。

「やはり貴様はスパイか！」

部屋の中が一気に緊張感に包まれる。

トトロイの目は部屋全体を見据えたように見開き、手のひらは何か牽制しているように動きを封じ込める。

「説明しろ。その内容によってはお前を今、動けない身体にしなければならん」

「……説明するぞ」

その張り詰めた空気の中、真一は身動き一つできず立っているだけだった。直接は関係ないが無駄な動きも許さないという雰囲気を感じる。だが、リオは至って冷静だった。

涼しい顔をしてふっと息を吐く。そして真っ直ぐトトロイを見据えた。

「あんたも知っていると思うが、エルモには魔術という概念はない。目に見えぬものよりも己の力、それが考えた。それには賛同するし、今まで必死に身体を鍛え武器を作ってきた。だが、職人という目線

だと、その考えは余りに小さい」

そう言つと持つている槍を見上げた。微笑むリオに反応するかの
ように、槍はより一層輝きを放っているように見える。

「より良いものを作りたいと思うのが職人だ。今までの材料だけでは限界が見えていた。だから、俺は魔術が存在するアラウに目をつけ、何度か侵入しいくつかの素材を持ち帰った。……今考えてもよ
くできたと思うさ。その内、葉を溶かした鉄で作った槍が成功した
それがこれだ。銀色に輝き、堅さも尋常じゃない。後の素材は脆く
使い物にならなかった。ようやく完成した喜びをなんとか抑えて、
町の長に報告したよ。だが……長は激怒した」

リオは自嘲的な笑みを見せた。

「当たり前だよな。今でこそ戦争はないが対立しあっている二国だ。
それなのに不法侵入し、その上相手の物品まで盗んで帰ってきた。
そのことが相手に知られてしまえば、信用問題となり、戦争にまで
発展しかねない。当然、このことはすぐに国家に通報されたよ。す
ぐに処罰が下され、与えられた刑は祖国追放。……馬鹿だよな。祖
国のため己のためと作ったこの槍は、祖国に対する裏切りと捉えら
れてしまったんだ。急に馬鹿らしく思えて、足掻く気力もなくなり、
そのまま国境を追い出されたのさ。で、今の状況だ」

話を終えると、リオは再び槍を小さな棒へと変化させた。

トトロイは無言のまま腕を下ろした。目を伏せなにやら考え込ん
でいる。しばらくそのまま間を開けた後、再びリオを凝視した。

考えを見透かすかのように無言のままである。重苦しい雰囲気の中、真一はただその様子を眺めていた。

話を聞く限りでは、侵入こそ悪いが悪意はないと感じた。より良
い物を作りたい、その一心だけだったように思う。だが、それが国
レベルの話で通用するのかというと、それはわからなかった。許可
なく侵入し、ましてや盗みを働くなど言語道断である。この話をト
トロイがどう受け止めるのか 真一はただ言葉を待った。

すると、突然トトロイは後ろを向き、窓から顔を出し外を眺めた。

遠くから小さく足音も聞こえる。何か堅いものを叩くような軽い音が響き渡ると、すぐに声がした。

「トトロイ様！ 派遣所でございます。どうか扉を開けてください！」

「待っている！ すぐに開ける！ …… トト、扉を開けて迎えに行け」

「うん。わかった」

いきなりの行動に真一とリオの二人は、訳が分からず呆然とした。トトロイはそんな二人を振り返り頬を緩めた。

「派遣所の役人どもが来る。さつさと身を隠せ」

「え、俺を連行させないのか？」

行動しない二人に苛立ったのか、トトロイは小さく舌打ちをした。「俺がどうにかすると言っているんだ。さつさと隠れやがれ」

乱暴な物言いに少し驚いたが、段々と言葉の意味が飲み込めた。

つまり、連行されない。その時ようやく頬を緩め、互いに顔を見合い笑い合った。

すぐさま目に入ったベッドの下に二人が潜り込み、息を潜める。

床から響く足音は二人か三人。ばらばらと近づく足音が、部屋の手前で止まった。思わず唾を飲み込む。

「参りました。入ってもよろしいでしょうか」「入れ」

隙間から見える足の数が丁度三人分ある。やはり予想したとおり三人やってきたようだった。見えるローブの裾は真紅と水色が見えた。真紅のローブには見たことがあるので想像できたのだが、水色は初めてである。あんな色のローブを着た役人がいたのか。水色のローブを見つめながら、心の中で妙な引っかかりを覚えた。

そのやってきた三人は、微かに息が漏らした。入ってすぐに言葉を出さないで、どうやら真っ赤な部屋に圧倒されているようだ。黙っていたトトロイだったが、苛立ったのかぶつきらぼうに言い放

った。

「何だ、用事がないのなら帰れ」

「あ、いや失礼致しました！ 捕まえたというエルモ人を連行しに参ったのですが……どちらでしょうか」

緊張が頂点に達する。

少しでも物音を立ててしまえばすぐに見つかるだろう。身体を強張らせ、息も止める。早く出て行くように祈り続けた。

「逃がしてしまった。俺の不注意だ」

「トトロイ様が……ですか？ 珍しいですね」

「俺にも間違いはある。さあ帰れ、俺も忙しいんだ」

「はあ。……では私はこれで」

そう言うと、真紅のローブが入り口へと引き返していく。があとの水色のローブたちは動こうとはせず、その場に立ったままだった。真紅のローブは出る前に一度立ち止まり、振り返った。

「言い忘れておりました。その者たちは、城からの使者です。ではお先に失礼いたします」

扉が閉まる音が聞こえた。と同時に静まり返る部屋。二人の使者とトトロイが見合っているのか、布が擦れる音一つも耳には届かなかった。

城からの使者とは一体どういう意味なのか。それが気になり、真一は少しだけ頭を動かす。と下から状況を覗き見る。

机が丁度使者たちの上半身と重なり顔は確認できなかった。やはり二人いるようである。さらに上を見てトトロイの表情も盗み見る。

一段と険しい顔だった。

「使者だと？ 何か伝言ならば状をよこせばいいだろう。直接来るとはどういう用件だ」

眉をしかめたままぶつきらばうに尋ねた。鋭い眼光で二人を睨むように見つめている。

「トトロイ様は、四大都市統治者の中で唯一、使魔と契約者の関係に在られる方です」

「よつて、今回の伝言は直にお会いし伝えるに至った所存です」

抑揚のない二人の声に何かを察したのか、トトがトトロイの肩にしがみ付いた。訝しそうな表情を浮かべ、不安そうな気持ちが見て取れる。トトロイもちらりとトトの様子を見て、再び視線を使者たちに向けた。先ほどよりも牽制するような鋭い視線である。

「……どういう意味だ。お前たち、使魔が見えるのか」

「その通りです」

その声と同時に男が腕を前に真っ直ぐ伸ばした。

「アビシヤス」

手のひらから空間が歪んでいくのが見える。その歪みはすぐに向けられた者を捉えた。

その腕が引かれ視界に入ったものは、歪んだ空間に身動きが取れないトトの姿だった。

「トト！」

トトロイの叫びも空しく、目は見開かれた状態のまま腕と足は震えるだけで動く気配が見えない。声を出そうとしているのか、口元だけが微かに動いているのが見えた。そして、トトはその状態のまま二人の使者の間に無理矢理引き込まれてしまった。

「トトロイ様、使魔掃討作戦により、こちらの使魔を回収させていただきます」

余りにもそっけなく冷たい、無感情な声だった。

見る見る間にトトロイは怒りに震え、顔は赤く染まり上がっている。唇から血が出るのではないかというほど噛み締め、手を見れば握りこぶしが揺れていた。

トトロイは迷うことなく手のひらを使者たちに向け、その手の内にすぐさま炎を作り上げた。

「ふざけるな！ 使魔掃討作戦など知るか！ トトを返せ！」

あつという間だった。

手のひらから放たれた炎は、目の前にいる使者たちに放たれ激しく炎を上げた。凄まじい勢いで上がる炎を目の前に、生きてはいな

いだろうと予感させた。一緒にいたトトは大丈夫なのかと、不安が過ぎる。がそれは意味のないものとなる。

炎が収まって見れば何も無い。黒く焦げた床のみ。

「一度の過ちは報告いたしません。どうか怒りを静めてください」
冷淡な声が突如響く。が姿はない。足元を必死に探す真一だったが、トトロイは真つ直ぐ天井を見上げた。

「貴様ら逃げる気か！ このトトロイをなめるな！ 俺を誰だと思っ
っている、逃れられると思うな」

今度は両手を合わせ真つ直ぐ天井へと向ける。より強い炎を作り上げるのか気なのか　そう思った矢先だった。

「これは国王様のご命令です」

ぴくつとトトロイが反応する。しかめていた眉は解け、鋭い目は大きく開けられる。

その言葉は一瞬にしてトトロイの怒りを静まらせた。

向けられていた腕は段々と下がり、開かれた口はなかなか言葉を発さない。

「な……な、何だと。アラウ国王からの……命令、だと」

ゆっくりと俯かせた顔から見えたのは、とまどいの表情であった。視線は彷徨い、あからさまに動揺が見て取れる。

そんなトトロイを察したのか、再び二人の使者が目の前に現れた。今度は机に重なることなく顔が見えた。二人とも目元には白い仮面を被り口元だけが見えている。

二人の間に、固まってしまっているトトの姿が見えた。目は開かれ、その視線はがっくりと肩を落とすトトロイに向けられていた。声を出せるわけもなく、微かに動く口元が必死に助けを求めているようにも見える。

しかし、トトロイは首をもたれたまま言葉を発しなかった。

すると、二人の使者のうち一人の使者がロープから一枚の紙を取り出しそれをトトロイに向けた。

「国王様の命により、使魔を回収する。これに逆らう者は反逆者と

見なし身分関係なく刑を与える。 以上」

無感情な声が部屋の中に響いた。トトロイはゆっくりと顔を上げ、その紙を何度も読み返すようにしばらく見つめている。読み終わると、目を再び伏せた。唇を噛み締めている。悲痛な表情を浮かべ、拳を作り強く机を叩いた。なお強く握り締めているのか甲には筋が浮かんでいる。そしてまた机を強く叩く。

「すまん……すまない、トト」

かすれた声で、目を伏せたままトトロイは声を絞り出した。

その声に反応するように、身体の中で何かのリミッターが切れるが、それは真一だけではなかった。

すでにリオがベッドから出ている。

使用者らの後ろで槍を握り締め、大きく振りかぶり、今にも振り下ろそうとしていた。

【第三章 潤いの町トトロイ】新たなページ

リオは銀色の槍を握り締め、その柄を使って一人の使者の頭目掛け一気に振り下ろした。

何かを感じ取ったのか、当たる間際使者が振り返る。が遅かった。真っ直ぐ振り下ろされた槍と頭がぶつかり、鈍い音が部屋に短く響く。

頭から倒れる使者。振り下ろす格好のまま、片膝で着地するリオ。その時、一人の使者がようやく異変に気づき顔だけ振り返った。言葉を発しようとしているのか、口が開きかかっている。が、リオはそれさえも許さなかった。

片膝をついた状態のまま、振り下ろした槍を真横へと一気に振り抜く。風を切る音が聞こえた瞬間、柄は見事に使者の顔面へと直撃していた。

使者は膝から崩れ落ち、そのまま床にゆっくりと倒れ伏せていく。リオは使者が倒れたのを確認すると、すっと立ち上がった。あつという間である。

その時ようやく真一がベッドから這い上がった。使者を一発殴ろうと思っていたが、すでに遅かった。

「リ、リオ……お前……」

倒れている使者たちは指一つ動かしていない。瞬く間に二人も倒れて見せ、まるで寸劇を見ているようだった。

やってのけた張本人は何食わぬ顔をし、倒れた使者たちを見下ろしている。が、すぐに表情を崩すと苦笑いを浮かべた。

「困っていたようだったからひとまず殴った。……間違ってたらすまん」

「い、いや……」

トトロイも呆気に取られていた。そこへ、魔術から解放されたトトが胸へと飛び込んだ。外傷はないようで、背中の羽根を忙しく動

かしている。

そのことにほっとした表情を浮かべ、トトロイは優しい手つきで頭を撫でた。

「無事でよかった」

「ありがとう、マスター。どうなるかと思った……」

「身体が堅いな、怖かったのか？」

「ち、違うもんっ」

からかうような笑みを見せるトトロイと、頬を膨らますトトの人。微笑ましい光景に、真一たちも思わず頬を緩ませた。

少しの間様子を眺めていたが、ヨウが不意に視線を落とす。それに釣られて真一も視線を落として見ると 眼差しは使者たちへと向けられていた。

使魔掃討作戦、と使者たちは言った。二人に関係のない話ではない。直接巻き込まれる可能性もある。不安を拭えないまま視線を上げると、使者が取り出していた紙が目に残る。気になり凝視していると、トトロイが紙を拾い上げた。

「国王の署名がしてある。偽物ではない。使魔掃討作戦だと？ 国王は何を考えているのだ！」

舌打ちをした後、乱暴に紙を机に叩きつけた。

紙を覗き見ると、文字が書いてある。真一には読めなかったが、つらつらと書かれた文章の下に、違う筆跡が確認できた。おそらくこれが国王の筆跡なのだろう。ヨウもその視線を落とし、じっと紙を眺めていた。

国王とヨウは、おそらく顔見知りのはずである。姫が前マスターであるならそれは間違いない。だとしたらこの作戦の意味とは一体何なのか。考えれば考えるほど不可解であった。顔見知りであるならば、使魔について知っていてもおかしくはない。なのになぜ、掃討作戦など実行しているのか。

サモナーを作り出す血が足りないのか、はたまた何かしらの事情があるのか。いくら考えても答えなど浮かばない。

「それはそうと、シンイチの使魔は
もしかすると、ヨウが地球に来てしまった理由も関係しているの
ではないか。そんな予感が真一の中で生まれ始める。

一方でトトロイはヨウをじっと見つめ、何かを思い出そうと必死
になって考えていた。

「おい。何の話かは知らないが、こいつらはどうするつもりなんだ
？」

面白くない顔をしているリオは、いつの間にか槍を小さくし倒れ
ている使者たちを指で指した。

「こいつら起きたらまた何か仕出かすんじゃないか？ どうするん
だ」

言われて見ればそうである。今は気を失っているものの、目覚め
れば再び使魔たちを襲うに違いない。

慌てて身を隠すヨウとトトロだったが、トトロイはふつと笑って見
せた。

「心配するな。こいつらはロイの餌となる。俺に無礼を働いた罪だ」
にやりと笑うトトロイ。何か悪いものを感じ寒気が走った。

リオも同じように思っているのか苦笑いを浮かべている。

「……ロイって、あの変な生き物か」

「失礼な奴だな。ロイはかわいいぞ。まあひとまず、そいつらが目
覚める前に餌となってもらおう」

そういうとポケットから小さな本を取り出した。 召喚本であ
る。開くとそのページに手のひらを置き、叫んだ。

「プレサモン！」

突然、地響きのような物音がし、建物が小さく振動した。窓を見
れば、先ほどまで明るかったはずが何かの物陰で暗くなっている。

一体何が起こったのか。慌てて辺りを見回したが、答えはすぐに
見つかった。

「何か御用ですか」

いきなり降ってきた声に、一同は思わずびくっとさせる。

低い重低音。胸にぶつかるように響く声。耳を塞ぎなくなるほどの音量。今まで聞いたことのない声である。

「警備中すまないな、ロイ。お前に餌があるのだ。投げるから口を開け」

トトロイは一人、せつせと倒れている使者たちを担ぎ上げた。宙に浮かび上がっていたトトは、不機嫌そうに頬を膨らませている。

「……おいおい、まさかあの生き物が外にいるのか」

ロイは冷や汗を流し、無意識なのか後ずさりをしている。肩にしがみ付いているヨウも、理解できたのか頬を引きつらせていた。

唯一、真一だけが状況を飲み込めないでいる。昨日、トトがパラッグの雛がいるとは言っていた。だが真一の中で想像したのは、ピイの姿で、どこにでもいるような鳥である。

その時 いくつかのヨウの言葉が頭を過ぎる。

『一角の竜じゃよ。わしもそればかりは見たことない』

まさか。

恐る恐る窓に近づき、そつと外の様子を覗く。そこにいたものは。

「ちゃんと分けてくださいよ」

巨大な竜である。赤い胴体を家と壁との間で、窮屈そうに折り曲げている。全体を厚い鱗に覆われ、尻尾は太く先は鋭い。足と手の指は三本でそれぞれの爪先は尖り、鋭い爪が砂に突き刺さっている。そのままゆっくりと見上げていくと、飛び込んできたのは鋭利な牙だった。ずらりと並んだ牙。目は大きく見開かれ鋭い眼光だった。頭に二つの耳が立っていて、その間にはモヒカンのような赤い毛が背中まで続いている。

その姿に圧倒されてしまったが、一番驚いたのは双頭だということだった。

二つの顔が荒い息をしている。見える牙は鋭く光り、眺めるだけで震え上がってしまいそうだ。

「あれは……自衛の雛じゃ。それも、三段階目のな」

呟くように言ったヨウも、姿に圧倒されているのだろう、胴衣を握り締める手に力が入っている。真一もその姿に言葉を失う。目の前に竜がいるのだ。

一方、トトロイは使者たちを窓の傍へと運び終えていた。作業を終え一息つくくと、自衛の雛 双頭の竜に向かって叫ぶ。

「丁度二人いる！ どちらでもいいから、口を開け！ 投げ入れるぞ！」

一人の使者の腋の下に腕を入れ持ち上げる。窓の外を見れば、突如大きな穴のようなものが出現していた。周りには牙が生え揃われ、穴の奥は暗く何も見えない。見える舌は真っ赤に染まり、そこだけ別の生き物ではないかと思ってしまうほどである。

不意に真一の頭の中で、使者が食われてしまう場面が頭を過ぎった。余りに残虐で無残な姿である。

「ちよつと待て！ 餌にするって……そいつらまだ生きてんだぞ！ あんた正気か？」

目の前で人が殺される場面など見たくはない。真一は慌ててトトロイに駆け寄り、抱えられている使者のローブを握り締めた。

しかし、トトロイはその行動にムツとした表情を浮かべる。

「だから何だ？ 意識を取り戻して餌にしるといふのか？」

「違う！ もつと他にやり方があるんじゃないか？」

「他にやり方？ 跡形もなく証拠を残さぬやり方は、これが一番だろう。ロイも腹の足しになるし一石二鳥ではないか」

そう言いきると、真一の手を振り解くかのように思いつきり使者をぶんと振った。勢いに負け、真一の手が離れてしまう。

「あっ」

離れた使者の身体は、まるでゴミのように穴へと放り込まれていく。真一は何とか服を掴もうと腕を伸ばしたが遅かった。

穴は入った瞬間、勢いよく閉ざされた。それと同時に耳に届く不快な音。

骨を噛み砕き、血液がほとばしり、噛むごとに聞こえるぬちゃと

いう肉を噛む音。牙の間から滴り落ちる鮮血、見える肉片。その音と目の前の光景が信じられず、真一は咄嗟に顔を背けた。

「よし、もう一つの口を開け。投げるぞ」

一方でトトロイは満足げな笑みを見せ、ロイが食するのを眺めている。顔をほころばせながら、さつさと次の使者を抱えていた。

止めなければいけないと思っではいるものの、気持ち悪さが先に立った。窓から離れ、背を向けた。見ればリオもヨウも口元を押さえ、眉をしかめている。余りに惨たらしい不協和音と臭いはしばらくの間続いた。

「久しぶりに重いものを運んだな」

肩を回し、首をぼきぼきと鳴らしている。椅子に腰掛けているトトロイは平然とした表情をしていた。外にいたロイは元の場所へ戻ってしまい、何もなかったかのように静かな空間へとなっていた。

「大丈夫？ 君たち」

トトが心配そうに首を傾げる。真一たちはトトロイよりも疲れきった顔で立ち尽くしていた。未だに離れない音と臭い。見てはいないにしろ、嫌でも想像してしまう。言葉を失っている三人に気を遣ったのか、トトロイは豪快に笑い始めた。

「はっはっ！ 心配するな！ 使者のことを聞かれた時はどうにか取り繕う。そんな顔をするな」

平然と笑うトトロイに釣られ、三人は苦笑いを浮かべた。こうなっているのはそこではない、と突っ込む気力さえ失っている。

「しかし、使魔掃討作戦はどうにもならん。俺もどうにかせねばならんが、シンイチお前もだぞ」

「……ああ」

目を伏せ再び使者の姿を思い出す。

水色のローブに目元に覆った白い仮面。それが使者たちの特徴である。再び目の前に現れるような気がした。ヨウがいる限りきつとそうだろう。使っていた魔術といい、突然消えたことといい、おそ

らく移動魔術を扱う者、テイレナーだろう。魔力が豊富にあるトト
でさえ身動きが取れなかったのだ。魔力が減っているヨウが受けて
しまった時、果たして自分だけで守れるのだろうか。

「なあ、俺もついていっっちゃ駄目か」

顔を回復させたりオは真っ直ぐと真一を見つめる。思わぬ申し
出に、真一は思わず頬を緩めた。

「俺は受けた恩は絶対に返す。シンには命を救ってもらったし、何
かをしたいと思っっている。どうせ、祖国にも戻れん」

「駄目だ」

が、真一が口を開く前に、トトロイが一喝した。怒ったような目
で見上げている。

「シンイチはアラウ城へ向かっているのだ。それまで、行かねばな
らん町もある。そこには必ず派遣所が存在する。もし付いて行っ
たとして、エルモ人だとばれたらどうするのだ？ また捕まりたいの
か」

「その時はその時だ。シンに生かされた命だ。再び縛り上げられた
としても、悔いはない」

「馬鹿者。生かされた命を粗末にしては何の意味もなかるう」

トトロイは呆れたようにため息を漏らした。

リオもそれ以上の反論は見せなかった。代わりに、がっくりと肩
を落として俯いている。そんな姿を見つめた後、トトロイはにやりと
口の端を持ち上げた。

「リオはここに残れ。俺がその身を預かってやる」

「ええ！」

即反応したのはトトだった。慌てた様子でトトロイの真正面へ飛
んでいくなり、声を張り上げた。

「マスター！ 何言ってるの！ こいつはエルモ人だよ！」

「まあまあいいじゃないか。ほら、リオは赤髪だろう？ 俺は残念
ながら赤髪じゃない。だからこのように頭に巻いているんだ。それ
はお前も知っっているだろう」

「そりゃ知ってるけど！」

「一目見たときから羨ましかった。……リオ、お前は初めて俺が雇う兵士だ。これからよろしくな」

にっこりと満足げに笑みを見せた。傍らでは、トトががっくりと肩を落としたため息を漏らしている。トトが気の毒なように思えた。

この人は、統治者だとかそんなことは関係なく、どうやら人の意見を余り受け入れない人物らしい。

一方で、当人であるリオは嬉しそうに笑みを見せていた。

「よくわからないが、ありがたい。助かる」

笑みを見せていたトトロイだったが、すぐに表情を一変させ、急に真面目な顔つきとなった。空気もそれ相応に重く感じられる。リオもそれを感じ取り、ふっと表情を戻す。

「ここにおいても外に出られるとは思わな。この敷地内にいるときは俺がどうにかしてやるが、出た場合は知らん」

「そうか。しかし……」

リオと視線が合った。恩返しをしたい、という思いが捨てきれないのか、申し訳なさそうに俯いている。

真一も一緒に来てほしいと思った。だが、トトロイの意見と同じく、次捕まってしまうえば今度こそどうなるかわからない。それを思うと、どうしても一言が言い出せなかった。

言葉を押し込めるように、真一も目を伏せた。

「……がしかしだ」

トーンの上がった声で、トトロイはにやりと笑みを見せた。

「リオの、シンイチの力になりたいという意見だけは尊重しようと思う。シンイチに召喚された時のみ、外出を許可する」

「……召喚？」

首を傾げるリオをよそに、トトロイは顎を使って軽く振り、しろと言わんばかりに指示して見せている。

その方法を忘れていた真一は思わず頬を緩ませた。 召喚本である。

さつそくポケットから取り出し、真っ白なページを開いた。一方でリオはその行動を不審そうに眺めている。

「何やってるんだ」

「さっきのロイみたいに召喚するんだ。わりいんだけど、このページに血を垂らしてくれねえか」

「よくわからんが……力になれるのであればやる」

リオは棒を取り出し槍にすると、刃先で指を小さく切った。指から垂れる鮮血が一滴落ち、それに反応するかのように本が白い光を放つ。

「な、何だこれは」

「……よし、ありがとう。これでいつでもリオを喚べる。これからよろしくな、リオ」

差し出された手に、リオは笑顔で応じた。

「いまいち理解できていないが……ま、いいか。これでシンの役に立てるなら何でもやるさ。よろしくな」

分厚い手のひら。明らかに真一よりも力があるだろう。男として妬いてしまいそうではあるが、仲間となるとこれほど頼もしいものはない。

二人の握手を、トトロイも目を細めた。

「よしよし。万事これで解決だな。……そうだ、シンイチついでだ。次の町まで送って行ってやるう」

「え！ マジで。いいんすか」

一つ頷いてみせると、トトロイはトトを見上げた。それを受けてトトが真一の目の前に降りてくる。

「もう……マスターの指示なら仕方ないかあ。はあ、僕慣れてないんだけどな」

「まあそう言うな。ガナオンまで随分遠い。あの山を登るのは辛いだろう。それに、いつ使者らがシンイチの前に現れるかもわからん」

トトは自ら指を切ると、その血で真一の周りを小さな円で囲い始める。

赤い床に薄っすらと違う色の赤い円ができた。描き終わると、目を閉じ集中し始めている。

「それと……ヨウ、だったかな。姫はどうしたのだ。何かあったのか？」

突然のトトロイの言葉に、ヨウは凝視した。姫、という単語に一瞬言葉を失う。

なぜトトロイが知っている　ヨウは必死に記憶を呼び覚まそうとする。しかし、どうやっても浮かばない。

「な、なんで姫のことを知っておるんじや……」

ヨウが呟いた瞬間、カツとトトが目を開け円の淵に手を置いた。

すると、円から光が壁となるように上がり、一瞬にして目の前が光に覆われた。何も見えず真っ白になる。

「守ってやれ」

どちらに向けられた言葉なのか。確かめる間もなく、その声を最後に真一たちは潤いの町トトロイから去っていった。

飛ばされる間は一瞬である。がその一瞬でもヨウの中に、トトロイの言葉は妙な引っかかりを覚えた。

ヨウの頭の片隅にある閉ざされた記憶。

『守ってやれ』

何か大事なものを忘れている　大切な何か。どうして、自分はマスターから離れてしまったのか。一体なぜ。

ぼっかりと空いた記憶の穴。そこにいるはずの人。思い出したい、思い出さなければ。そう思えば思うほど焦燥感が増していく。

その焦りが鍵となったのか、一つ、思い出す。

悲しい笑みを浮かべた、姫の顔。

なぜ悲しい顔をして微笑む？
その顔に問いかけても答えは返っては来ない。

【第三章 潤いの町トトロイ】新たなページ（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

これで第三章は終わりです。次回、幕間を挟みまして、第四章が始まります。

どうかこれからもお付き合いください。

情報部にて

派遣所の本部、と言われている『情報部』がアラウ城敷地内に存在する。

深い森の奥　振り続ける雨は一時止み、今は濃い霧が立ち込めていた。霧に姿を隠されながらも、薄っすらと確認できるアラウ城。それよりも少し離れた森の中に本部はある。

派遣所から届けられる書類、軍事機密、アラウの情勢　それら全ての情報が集められていた。それらの情報は王族が共有し、魔天族にも流されている。全ての目的はただ一つ、アラウ国の発展。情報部はその目的を遂行するために存在する機関である。

「『使魔掃討作戦』は順調に遂行されております」

丸い大きな机を囲むように、幾人かが席についている。全員、真紅のローブを身にまといどれれも配られた資料に目を通していた。

「回収された使魔は二桁を突破しました。現在、捕らえた使魔はアラウ城に幽閉中。その後の処理を待っている状態であります」

「報告ご苦労」

悠然と席に座る者が一人。資料を投げ捨てるように机に置くと、肘を付き口元に手を組み合わせる。座る者全てに目を配らせ、半ば睨みつけていた。白い半面の仮面がさらに助長し、一瞬にしてその場が凍りつく。その者はただ一人、水色のシャツとズボンを着ている。真紅のローブが集まるこの場において、異常な存在となっていた。もっともそれは間違いではなかったが。

「処理に関しては直接、ダック様がなさる。それまで逃がさぬよう見張っておけ」

「……かしこまりました」

「で、他に報告することはないか？」

「はい。一つ気になることがあります……潤いの町トトロイに向

かった者たちと連絡が取れなくなっております」

「トトロイ、か。……あの方は相変わらずだな。まあいい、そのまま放っておけ」

トトロイの使魔については一度、直接見たことがあった。捕まえて暴れてもらっても困る。何せ国境を一人で守っているほどの魔力の持ち主。下手に突付かないほうが無難であろう。それに目的の使魔は一度確かめている。

「かしこまりました」

仮面の男は机をぐつと押すように立ち上がる。

「では、今日は解散だ。また後日、報告を待つ」

男の一言で一瞬にして、座っていた者たちが姿を消した。

机に置かれた極秘書類。作戦の内容がつつらと書かれているが、本当の目的など書かれてはいない。知るのはごく一部。彼もその一人である。

「次会うときは二人か……それとも一人か」

口の端を持ち上げ、薄く笑みを見せる。広い部屋に響く彼の声は、消えるようになくなり、彼自身もすつと部屋から姿を消した。

彼女ははっと意識を取り戻した。

今まで何をしていた。今はいつなのだろう。記憶を失っているかのように、今まで何をしていたのか思い出せない。

私は何をしていた？

周りを見渡せば自室であるのは間違いない。寝ていただけだろうか。それでも何か違和感がある。

身体はだるく、頭も重い。まるで自分の身体ではないようだ。頭に手を当てながら、必死に今までの記憶を遡っていく。

確か 別れた後だ。そこからの記憶が曖昧でうまく思い出すことができない。

何かがおかしい。何かを忘れている。

そもそも、なぜ別れることになったのだ。

それを考えるとひどく頭が痛む。まるで思い出さないよう仕組まれたようだ。 それでも思い出さなければ。

彼女は頭が割れるような頭痛に耐えながら、それでも記憶を辿る。欠けている記憶が間違いなく存在する。

父上…… 王族…… 魔天族…… 使魔……。

私の使魔 ヨウ。

思い出す。

私は知ったのだ。それを伝えるべく走っていた。父上に忠告するために。その途中に。

その時、頭を殴られたように痛みが走る。その痛さ故に再び目を瞑る。

また 意識が遠のいていく。私が私ではなくなるような感覚。

私は一体どうなってしまうのか。

父上どうか気づいてください。そして、ヨウ……どうか戻ってきて。

情報部にて (後書き)

次話から第四章が始まります。お楽しみに。

【第四章 山岳の町カナオン】紅一点

「全く……。暇だわ」

椅子に深く腰掛けている女は、ふうとため息を漏らした。大きな背もたれがある椅子は、彼女よりもはるかに大きい。手すりに肘をつき、ため息をもらしながら正面の扉を見つめる。

扉の外に立っている警備員は、一度も振り向こうとはしない。真紅のローブが揺れることなく、立っているだけである。誰かが駆け込んでくる気配もない。いつものように、のんびりとした時間が流れていた。

ふと、机の上の状に目を移す。一番上に大きな文字で『使魔掃討作戦』という題が付けられていた。

何を考えているのだ。それが読み終えた後の感想だった。

使魔は一度も見たことはないが、気配は時々感じることがある。

サモナーにとって、使魔は切っても切り離せない関係であるのは間違いないだろう。

サモナー政策で必要とされた使魔の血。その作戦により、幾人もの使魔が血を流したそうだ。それによってサモナーの数は増え、いくらか民の生活も楽になったと報告されている。それなのに、なぜ使魔に対しこのようなことを行うのか。

彼女は苛立ったのか、状をぐしゃりと握り締めると、そのまま床へ放り投げた。

国王の考えが理解できない。サモナー政策を発表してからどうもおかしい。発表されてから、サモナーに対し風評が立った。サモナーで王族でもあった彼女も、その煽りを受け、当時はくだらない噂に苛立ちを覚えた。同じ召喚魔術を扱うものとして、同志が貶されるのにはいささか腹も立つ。

しかし、彼女はその思いを町の発展への力とした。できる範囲で、サモナーを集めることにしたのである。

おかげで、町も険しい環境ながら豊かになった。他の町で受けやすい軽蔑の目もない。サモナーが自由に公平に扱われる町へと変貌を遂げた。

その結果が、今のおだやかな時間の流れなのだといつも感じる。

山岳の冷たい風でさえも、今では心地よい。

しかし この新たな作戦。この穏やかな時間に何かしらの影響を与えそうなの、そんな雰囲気は漂わせている。

状に書かれてあつた理由は一言『全ては民のため』だった。

胡散臭い理由である。民のためという理由だけで、使魔をこんな扱いにしていいものなのか。もつと他にやり方があるのではないか。そう考えては見ても、所詮統治者だった。王のやり方に口を挟むことは許されない。コマでしかない統治者という立場。

思わず彼女は頭を抱え、再び深いため息を吐いた。床に転がる状を見下ろす。幾人もの使魔が、あの紙切れ一枚によって失われるかもしれないのだ。そう思うと心が痛む。

使魔、という言葉にふと思ひ出すことがあつた。あの赤色好きの男にも使魔がいたはずである。

名はトトロイ。王族の中でもっとも変わった男。

あいつのところにはどう報告されているのやら。黙っている男ではないと思うが と耽っている時だった。

「うおっ！」

突如、机の前の空間が歪むと声が響いた。声と同時にいきなりおかしい格好をした男が、どこからともなく倒れた。彼女も驚き思わず立ち上がる。

扉の向こうにいた警備員も、突然の物音に驚いたように部屋へと入ってきた。その間に空間の歪みはなくなり、元通りとなっている。

「何者だ！ どこから入ってきた！」

「ええ！ ちょ、いきなり何だよ！」

真一たちが送られた場所は、部屋の中だった。真つ暗になったかと思えば、急に足元が開けそのまま床へと落下する。幸い、落下の高さも低かったことと床が柔らかな絨毯だったことから、打ち身をすることはなかった。二人が頭をさすっている、遠くから怒声が届く。

その方向に顔を向けたと同時に、いきなり身体を押さえ込まれた。腕は背中に回され、うつ伏せにさせられる。手荷物はその場に散乱し、頭も押さえ込まれた。

「何すんだよ！」

必死に首を回そうとするが、押さえ込まれ自由が効かない。目を動かして見える範囲で状況を確認する。どこかの部屋の中のように。とにかくこの状況は良くないと考え、逃げようと必死にもがくが、頭をぐつと床に押し付けられ立てない。ただ、ヨウは捕まえられてはおらず、すつと空中へと浮かんだ。

「おお！ こりやなんと……」

ヨウのため息が頭の上から聞こえた。すると。

「この部屋へ来るとは……彼 トトロイからの使者ですか」

後方から落ち着きのある女性の声が聞こえた。が、姿までは確認できない。ひたすらもがくが、どうにも上に乗る男がそれを許さなかった。頭を抑えられていることに抗議の意味も込め、真一は力いっばい叫んだ。

「トトロイさんから移動魔術で送ってもらったんだ！ 何もしねえからどけよ！」

しん、と部屋が静まる。すると、上に乗る男あつさりと立ち退いた。すぐさま立ち上がりキツと男を見上げれば、男も眉をひそめ見下ろしている。真一は軽く舌打ちをした後、荷物を拾い集め乱れた袴を直す。

直していると、目の前に立っていた男がいきなり一礼し、部屋から出て行ってしまった。不審にそれを眺めているとすぐに後ろから声がした。

「彼が送るとは珍しい。名前は何と言うのですか？」

真一は後ろを振り向きながら口を開いた。

「萩野真一。あんたこそ」

その姿にはつと息を呑んだ。

真紅のローブを身にまとい、胸の辺りまで伸びている黄色の髪。軽くウェーブしており、艶やかだった。顔は小さく、細身の身体である。一目でわかるが、それに似つかない大きな胸が目飛び込んだ。ローブで覆っているのにも関わらず、誇張してるかのようにどんと大きい。

「私はこの町の統治者です。名はガナオン。それで、なぜトロイから送られたのですか？ 彼が送るなんて珍しいんですよ」

口元を緩ませ微笑んだ。よく見れば口元に小さなホクロがあり、綺麗な顔立ちに思わず魅入る。

が、真一ははつと意識を取り戻し、誤魔化すように咳払いをした。ちらりと目の前を見れば、いたずらっぽく彼女は笑っている。

「……俺、証を集めてるんです。それでトロイさんがガナオンまで遠いから送ってやるって。まさか目の前まで送ってくれるとは思いませんでしたけどね」

「そう、貴方のことが気に入ったのね。……あら」

統治者はじつと真一の腕を凝視した。釣られて真一自身も見てみれば、腕の胴衣の下から黒い布が出ている。

視線を逸らしたガナオンは、突然引き出しを開き、黒いバッチのようなものを取り出した。それを机の上に乗せ、前へと出す。

「証ね。差し上げます」

出されたものは、間違いなく証である。黒い光沢が輝いて見える。素直に受け取れば良いのだろうが、真一は身動きができなかった。普通に部屋へと尋ねてきたならまだしも、いきなり現れたのだ。

それに対して説明もしないければ、その証拠も見せていない。自分ならこんな怪しい奴に証など渡さないが　　そう考えれば考えるほど、証が怪しい物に見える。

頭の中で考えても埒が明かず、ちらりとヨウを上げた。何か助言をくれるかもしれない、そんな考えがあった。が、ヨウは証を見ることもなく、口元を緩めたままガナオンを見つめ続けていた。どうやら完璧に色香にやられてしまっているようだ。呆れ果て頬が思わず引きつる。　　すると。

「証を渡すのはちゃんとした確信があるから。別に貴方を試そうというわけではないわ。だから受け取って」

ガナオンのはつきりとした声と、大きな瞳が真っ直ぐと向けられる。色香を漂わせていてもやはり統治者は統治者らしい。真一の考えを見抜いていた。

「　　は、はい」

有無を言わさぬ雰囲気に飲み込まれ、真一も手が自然と証へと伸びた。

拾い上げれば、手のひらに収まる小さな証。これまでと変わらないう形である。やっと三つ目が　　そう思いながら、トートバックの中へと入れた。

「私が貴方に渡した理由は二つ」

彼女は大きな椅子に深く腰掛け、手を太ももに組み置き足を組んだ。

「一つは、トトロイが直接私の部屋まで貴方を届けたこと。これは、トトロイがよほど信用する者でない限りありえませんが。あの人は言うなれば変人です。好き嫌いがはっきりしていて、兵士も雇わないくらいですから。そんな人がわざわざ送り届けた　　私はトトロイを信用していますし、どのような人物かに対し疑う余地もありません」

そういえばトトロイの屋敷はがらんとして、人気を感じなかった。好き嫌いのために兵士を雇わないとは　　聞きながら変に納得して

しまった。

「そしてもう一つは、貴方がサモナーだからです」

意外な答えに思わず首を傾げる。そんな様子にガナオンはくすつと口元を緩ませ、話を続けた。

「私自身もサモナーなのです。……すでにご承知かもしれませんが、世間ではサモナーに対する偏見の目は厳しい。その目は私自身も苦しめました。統治者という立場関係なく、サモナーという時点で人の目は変わってしまいました。治める土地を移動することになり、岩肌しかない切り立ったこの土地へ身一つでやって来ました。しかし、私は逆に　この町だけでも、サモナーが住みやすい町にしよう思いついたのです」

「サモナーが……住みやすい場所」

「そうです。場所も場所ですから、この町までやって来る民は少ないでしょう。ですが、追い返したりなどしません。全ての人を歓迎しますが、サモナーなら大歓迎です。この町は偏見のない、全ての民が平等に扱われる町なのです。この二つの理由で、私は証を渡しました。納得されたかしら？」

大きな目を垂れ、ほくろのある口の端をにやりと上げる。小首を傾げ妖艶なその笑みに、真一は自然と頷いてしまった。顔が火照りそうだった。このときだけは、同じサモナーでよかったと真一は心から思えた。

「……とは言え、貴方　シンイチ、くんでしたっけ。珍しい格好をなさっているのね。色々なサモナーを見てきましたけど初めてだわ。一応聞いてみるのだけど、アラウ城へは何の御用なのかしら？」

「実は、使魔がいて、そいつを前マスターに返しに行くんです」

「使魔……。では、『使魔掃討作戦』という新たな政策について……ご存知かしら？」

「え、はい。知ってますけど……あ」

しまった、と思ったがすでに遅い。

にやにやとさせているヨウの服を咄嗟に掴み、自分のところへ引

き戻した。いきなりのことでヨウは不満そうに眉をひそめた。

「なんじゃい！ いきなり！」

黙れ、と言葉にしない代わりに、軽く舌打ちをし睨みつけた。それを見て、ヨウはきよとんとした表情となる。が、すぐにはっとしてすぐさま背中の後ろへと隠れた。

トトロイの時は特別だった。彼自身にも使魔がいたため、使者を対峙することとなった。が、目の前にいる彼女はまた違う。統治者とはそもそも王族で、王の考えに沿う行動をする者たちのことだろう。だとすれば、『使魔掃討作戦』を忠実に実行する可能性が高い。うっかり使魔がいるとバラしてしまった自分を後悔しつつ、ガナオンから後ずさりし一定の距離を置いた。

「知ってますけど……使魔を捕まえる、そういう意味ですか」

「警戒させてしまいましたね。本来、王の命令に従わなければいけないのですが……私は捕まえようとは思いません」

そういうとガナオンは椅子から立ち上がり、おもむろに後ろにある窓から外を眺め始めた。外は霧がかかり、白いもやに覆われている。

「使者に用心なさい。もしかしたら、町の近くにもいるかもしれない」

「え？」

身体を強張らせ警戒心をむき出しにしていた真一だったが、途端力が抜けていく。ヨウも意外な言葉に背中から顔を出し、肩へとしがみ付いた。

背を向け外の様子を伺っているガナオンは黙ったまま、そのまましばらく沈黙が流れる。窓からひんやりとした風が流れ込み、真一は思わず身震いをした。すると、タイミングよく彼女は振り返り、真剣な眼差しで真一を見据える。

「アラウ城から状が届いたのですが、もしかすると使者たちが直接来るかもしれません。ここから見渡す限り、使者の姿は見受けられません。ですが、道中にいる可能性もあります。残念ですが、私は

トトロイのように送ってやる事ができません。ですから十分気を
つけなさい」

「はい……でも、いいんですか？ アラウ国王の命令なんですよ
ね？ トトロイさんは自分に使魔がいたから背いたってというのはわか
るんですけど、ガナオンさんは違いますよね？」

すると、彼女はふつと表情を緩めた。

「心配してくださるの？ 貴方は……変わった人ね。捕まえようと
すれば敵意をむき出しにし、気遣ってやれば遠慮がちに。ふふ、格
好もそうだけど人柄も面白いわ」

目を細めて笑うその顔に、またも二人は呆然と眺めていた。窓か
らそよぐ風は彼女の黄色の髪をなびかせ、霧の間に差す太陽の光が
艶やかな髪を照らし、より一層輝かせる。絶世の美女という言葉は、
まさに彼女のためのもの、と思わせるほどだった。

「そんなに見ても、もう何も出てこないですよ」

「あ、え、す、すいません！ じゃ、じゃあもう俺行きますので」
我に返りすばやく回れ右をし、出口へと足を向ける。すると、後
ろから再び声がした。

「もし、使者たちに出くわし身の危険が迫ったなら、私の証を強く
握り締めなさい」

「え？ それはどういう……？」

「もしその時が来たならわかること。……幸運を祈ります」

真つ直ぐ真一に向けられるその瞳は真剣そのもので、それ以上彼
女の口から言葉が出てくることはなかった。真一は頭を下げ、その
まま部屋から去っていった。肩に乗るヨウも視線をガナオンへと残
したまま、真一とともに去った。

彼女は再び椅子に腰掛け、深く息を吐いた。自分が行ったことは
正しいのだと、言い聞かせるように何度か軽くおでこを叩く。ふと

見れば、丸められた状はそのまま床へと転がっている。あんな紙切れ一つのせいで、今のようなサモナーが苦しむことはないのだ。

すると、再び目の前の空間が歪み始めた。思わず顔を上げ、険しい眼差しでその歪みを凝視する。

「ん、なんだ？ そう睨むな。まだ何もしてないだろう」

見えたのは短いローブを着た、ターバンを巻いた男だ。トトロイである。

彼は出迎えたガナオンの態度にむっとした表情を浮かべたが、一方で彼女は気にする様子もなくほっと息を吐いた。

「驚いた。使者でも着たのかと思っただわ」

「俺が使者なわけがないだろう。わざわざ来てやったんだ、もっと嬉しい顔をしたらどうだ？」

「別に私は貴方なんか呼んでいないわ。……それで、何の御用？」

彼は頭を忙しく動かしながら部屋を見回している。何度も来る彼にとって、この部屋の様子など見慣れているはずだった。

その態度に疑問を抱き、ガナオンは小首を傾げた。

「何か探し物？」

「いや……俺が送った奴がいると思っただわ……。どこだ？」

「ああ。彼ならもう行ったわ。一応使者に気をつけるとは言っただわ……」

彼は動きを止め、ガナオンに向き直る。困ったように眉を八の字にし、低い声で唸りながら持っていた小さな袋を目の前に掲げた。

「うーむそうか。リオから渡すものがあっただわがなあ……遅かったか」

「渡す物？ それか？」

茶色の布にしか見えない小さな袋。食料が入っているわけでもなさそうである。彼はそれを机の上の軽く投げた。落ちる音も静かで、硬いものではなさそうだ。

袋を手に取り持って見ると、何も感じないほど軽い。小さく振ってみれば、中からさらさらと粉末のような音がする。

「それはな、アラウにはない代物だ」

目をやれば、口の端を持ち上げにやりと自慢げに笑っている。

「もし会う機会があったなら、それを渡してくれないか。一応俺のものもある。もし俺が会えば俺のを渡す。頼めるか？」

「いいけど、これは一体何？」

「触媒だ。お前でも扱えるだろうが、お前は武器など召喚しないだろ」

「……触媒。そう、わかったわ。もし喚ばれることになれば、その時渡ししよう」

ガナオンはその袋を自分のローブのポケットの中に入れた。それを見届けると、トトロイは何もない肩に視線を移した。

「じゃあ戻るか。移動魔術頼むぞ」

どうやら使魔がいるらしく、行動を追っているのか視線が泳いでいる。しかし、ガナオンにはその姿は見えず、トトロイの様子を伺うしかなかった。初めこそ戸惑ったものの、慣ればおかしいとも思わなくなった。もっとも、この男自体が変わっているのだ。

「貴方のところにも、使者が来たんじゃないかしら？」

「ああ来た。おかげで食費が浮いた」

意味が理解できずガナオンは首を傾げた。しかし、彼はそれ以上の説明をする様子もなく、使魔を視線で追いつけている。

「ひとまず、王がおかしいことは間違いない。……お前も見逃したのだ、気をつけるよ」

「貴方こそ」

力強い眼差しで見つめられた後、彼は頬を緩めた。片手を上げそのまま口を開く。

「じゃあな。また来る」

そして、彼はふつと姿を消した。何事もなかったかのように、再び静寂した部屋となる。

ガナオンはふうと息を吐いた。相変わらず身勝手である。それでも嫌な気分にならないのは、彼が彼なりに気遣っているせいな

の
か
も
し
れ
な
い
。

【第四章 山岳の町ガナオン】油断

町は霧が濃く全体が白みがかっている。真一は肌寒さに耐え兼ね、ロープを重ね着した。いくらかマシになったものの、しつとりと湿った空気は肌にまとわり付く。

真一の肩にしがみ付くヨウモ、小さく身体を震わせていた。息を吐けば白くなり、冷たい風が身体を冷やしてく。

「……静かな町じゃなあ。前も霧のせいではほとんど見えんの」
言葉とともに、白い息がふわっと広がった。

ガナオンの屋敷を出ると目の前に大きな地図が立っていた。その地図をヨウが見て、真一は指示される通り進んでいる。

町全体が大きな岩がごろごろと存在し、それを縫うように道も細く入り組んでいた。家もその岩を切り崩したようなものばかりで、一見家には見えず岩ばかりが並んでいるようにも見える。足元も岩盤に覆われ、土や草などは一切ない。冷たい黒い岩があるだけである。

だがそれでも住人はいる。進む最中でも何度かすれ違うことがあった。手には金色に輝くフェル草を持ち、いそいそと家の中へと入っていく。岩の家の入り口は長い布で仕切られていた。真一はその隙間から、こっそりと覗き見てみた。仲のよさそうな家族三人が、フェル草を食べ物へと変え、それをおいしそうに頬張っている。よく見れば全員が黒い布を腕に巻きつけていた。

その光景に思わず頬を緩ませながら、そつとその場を後にした。

サモナーが住みやすい場所。作物が育てられないこの環境においては、サモナーは俄然有利だろう。ガナオンが言っていたことに間違いはなさそうで、住みづらい環境でも人々は強く生きているのだと真一は思った。

「……お、門じゃ」

しばらく歩くと目の前に柵の様な閉ざされた門が現れた。近づい

て軽く押してみると、あっさりと開く。

「ここから山を下ればいいのか」

「そうじゃ。ひたすら下ればええ」

濃い霧と黒い岩がひたすら続く下り道。目の前には雲が広がり、町がかなり高い場所にあることを伺わせた。足元は整備などされておらず、ごつごつとした岩肌が靴底から感じる。それでも急な坂ではなく、緩やかだった。下は雲のせいで降り立つ地は見えない。本当にこの下に世界があるのかと思うほどだ。

「まあ行くか」

荷物を担ぎ直し、真一は一步踏み出した。

冷たい風が吹きつける。霧は相変わらず濃く、少し先は白い世界が覆っている。目印も何もなく、ただ坂を下っているだけだった。大きな岩や小さな小石が地面を覆い、殺風景な風景がどこまでも続く。

真一は足元を気をつけながら黙々と進んでいたが、ヨウは険しい表情で忙しく頭を動かしていた。

「……見張られとる」

「は？」

冗談を言っている風でもなく、真剣な表情で目を配らせていた。

「縁起でもねえこと言っつな。こっちは足元を気をつけるだけでも精一杯なんだよ」

しかし真一も何か違和感があった。白い靄の中から、何か気配を感じるのだ。

足を止め、周りの様子を見回してみる。　白い霧が覆っていて遠くまでよく見えない。近くにある岩や小石があるだけだ。しんとする空間に、耳が痛くなりそうである。それでも見えない視線を感じた。じつと様子を伺われているような見えない圧力だ。

鼓動が自然と早くなる。弓をぎゅっと握り締め、足を肩幅に広げた。目を配らせ周りに集中する。

「……お前の言ったこと、まんざらでもねえな」

「じゃろつ。気をつける」

静か過ぎる空間から、かすかに布がこすれるような音が聞こえた。ほんのわずかな音であったが、それは異常な音として耳に届く。

真一はすぐさま振り返った。

「なっ！」

目の前に水色のローブを着た者が立っていた。顔の目元は真っ白な仮面に覆われ、表情までうかがい知ることができない。

間違いない使者である。

使者は口を真一文字にしたまま、腕を伸ばしている。その腕は真っ直ぐヨウへと向けられた。

「アビシヤス」

静寂した空間に使者の詠唱が響き渡る。伸ばされた手のひらから空間の歪みが真っ直ぐ伸びていく。あまりに唐突なことで、ヨウはそれを見るだけしかできなかった。もう目の前に空間の歪みが迫る。これに捕まれば終わる。頭で理解できても身体が反応し切れなかった。

もう駄目だ。そう思った矢先だった。

ヨウの身体に手のひらが押し当てられた。その手のひらは力強くヨウを跳ね飛ばす。思わぬ方向からの力にヨウはあっさりと肩から離された。

何が起こったのか。飛ばされる中、ヨウは反射的に背中の中羽根を動かして空中で止まった。そしてすぐに、振り返る。

歪みは真一を捕らえていた。

真一の足元には荷物が散らばり、腕はヨウを払った格好のまま固まっている。歯を食いしばり、頬は微かに動いていた。

「シンイチ！」

ヨウの叫びに、かすかに真一の口元が動く。一方で使者は舌打ちをした後、顔をヨウへと向けた。仮面で覆われているものの、苛立っているのか唇を噛み締めている。が、すぐにもう片方の腕をヨウ

へと伸ばした。そしてすぐに詠唱した。

しかし、今度は歪みのスピードは遅く、ヨウは軽々と避けることができた。避けると同時に真一に近寄り、手を伸ばした。が、歪みは真一の身体全体を覆っている。触れようと歪みに手を伸ばすと、指先が痺れたような感覚となり触れることができなかった。

「シンイチを元に戻せ！」

使者に向かって叫ぶものの、使者は再びヨウに向かって魔術を仕掛ける。いくら近距離とは言え、ヨウは素早く避けることは楽に行えた。何度も何度も使者は魔術を繰り返し、その度にヨウは避けた。次第に歪む空間のスピードは落ちていき、真一を束縛している歪みも緩くなっていく。避けながら真一を見てみると、固まっていた腕や足元が動き始めている。

このまま避け続ければ使者の魔力がなくなるかもしれない。そう考え避けることに専念した。使者は軽々と避けるヨウにひたすら魔術を向けた。使者の抑揚のない詠唱が、静かな空間に響き渡る。

そこへ。

「にげる」

真一が顔を向け言葉を発した。魔力が弱まっているらしい。それでも顔は険しいまま、自由が効かないようだ。

「さっさと、逃げる」

「馬鹿もん！ お主はどうするつもりじゃー！」

「う、っせえ！」

じりじりと真一の腕が下がっていつている。それが自身の力なのかははっきりとしないが、もう少しでローブのポケットまで届きそうな位置までになっていた。

もう少いで動けそうだが、そう思いつつ空中に止まっていた。その時だった。

「アビシヤス！」

はつきりとした使者の声が聞こえた。今までの詠唱とは比べものにならないほどの音量だった。はっとヨウは顔を向ける。と同時に、

真一の身体が一瞬自由になった。

真一はポケットに手を入れ召喚本を取り出した。すぐさま本を開き叫んだ。

「プレサモン！」

使者の気が一瞬逸れた。それを見逃すことなくヨウはすぐさま身体をねじり、空間の歪みを避ける。歪みはヨウを捕らえることなく、そのまま空へと伸びていき消えた。

一方真一からは眩い光が発生していた。使者はその光に向き直り、ぐっと向けている腕に力を込めた。厚さを増した歪みが真一に届き、手から召喚本が落ちていく。召喚した格好のまま真一はぴくりともしなくなってしまった。

「シンイチ！」

ヨウはすぐさま飛んで行き、落ちた召喚本を拾い上げる。開かれたまま落ちた召喚本は、一番最初のページであった。

「……このページは」

血のついたページをじっと見つめる。そこに、バサツという羽音が上空から聞こえた。

【第四章 山岳の町ガナオン】すれ違い

羽音にヨウは顔を上げた。

「……やっぱりひよこか」

「私はパイです！」

上空に大きな翼を広げているパイがいた。鋭い爪と黄色のくちばし。茶褐色の羽と、黄色い眼光。まさに鷹の姿である。

パイはヨウから視線を逸らし、真下にいた真一を見下ろした。周りには空気の歪みがあった。おまけに動く気配もない。パイは真一の前にいる男へと目を向けた。

見れば男はこちらを向き、口を開いたまま見上げていた。腕からは空間の歪みが発し、繋がるように真一の身体を包み込んでいる。

状況を理解したパイは、即座にぐつと翼に力を込め、羽ばたきの幅を大きくした。扇ぐたびに集まる風。感じる風の重さ。敵はあの仮面の男だ。

「真一さんを離しなさい！」

力いっぱい叫ぶと、パイは一気に翼を前へと扇いだ。

集められた風は大きな渦となり、風を切る凄まじい音を出しながら、小さな竜巻となった。目に見えるほど渦を巻き、まっすぐ使者へと向かっていく。

が、使者は避けなかった。平然と竜巻を見上げ、すつと片腕を上げた。

「シント」

使者の静かな声と同時に、空間の歪みが発生した。その歪みは波のように伸び、向かってくる竜巻と真正面からぶつかった。

その瞬間、突風が巻き起こった。

強烈な風は四方にちらばるように吹き荒れ、近くにいたヨウも飛ばされまいとぐつと羽根を広げた。強烈な風のため、顔の目の前を腕で覆う。その隙間から真一をちらりと見ると、相変わらず動か

ないままだ。あそこだけ別空間のように見えた。

一方で使者とピイは、互いに突風を受けながらもその場に留まっている。羽は突風でなびき、ローブは激しく揺れた。睨み合い互いに次の行動を伺っている。

と、そんな時、真一の腕がかすかに動いた。表情に変化がないものの、開いた手のひらを閉じようとしている。

今ならセンチチを解放できるかもしれない。ヨウはそう思うや否や、ぱつと両手を真つ直ぐ横へ伸ばした。

「インディションサモン！」

手の中に渦巻く空気がパンツとはじけ、そこから短剣が出現する。ぐつと短剣を握り締めながら、心で叫んだ。自分がなんとかしなければと。

一方で、ヨウの声に驚いたのか一瞬だが使者の気が逸れ、視線がヨウの方向へと向けられた。それをピイは見逃さなかった。

上空から一気に使者を指し急降下し、鋭い爪を向ける。羽音に気づいた使者は、はつと上空を見上げた。向いた瞬間、ピイはすでに使者の目の前にまで迫っていた。

頬に爪が触れる。鋭利な刃物のように、頬に真つ直ぐ赤い線が描かれた。と同時に、大きな翼は風を生み使者のバランスを崩した。傷から出る微量な鮮血が、再び上空へと舞い上がる。ピイと一緒に飛び散る。

使者の身体は後ろへと傾き、真一へと伸びていた腕が逸れる。すると、包んでいた歪みはパツと消えた。

歪みから解放された瞬間、真一はぐつと腕に力を込めた。血管が浮くほど拳を握り締める。と同時に地面を蹴飛ばし使者へと一気に駆け寄る。

倒れそつになる使者目がけ、真一は躊躇うことなく拳を振り下ろした。

バキツという骨と骨がぶつかるような音が響き渡る。使者は顔を歪ませながら地面へと叩き落ちた。

「……た、倒したか……」

張り詰める場の中で、最初に口を開いたのは真一だった。肩で呼吸を繰り返しながら、ひざに手を付き、苦しそうに顔を俯かせている。

動かせなかった身体は痺れ、力がうまく入らなかった。呼吸をなんとか落ち着かせた後、ぐっと腕に力を入れ、背筋を伸ばす。久しぶりに感じる冷たい空気が身に染みだ。

「真一さん大丈夫でしたか？」

そこへパイが舞い降りた。黄色の瞳をまん丸と開け、真一を見上げています。

「ああ……大丈夫だ」

「よかった。この人も意識を失っているようですね」

仰向けに使者は倒れていた。目元は見えないものの、見える口元は小さく開き端からは殴ったせいか青く血が滲んでいる。意識を失ったのは、岩に頭を打ち付けているせいであるようだった。

真一はほっと安堵しつつ、浮かんでいたヨウを鋭い眼光で見上げた。

「おい、なんでお前逃げなかったんだ」

思わぬ発言に、空中にいたヨウはすぐさま真一の近くへと舞い降りた。

「……なんでわしが逃げんといけんのんじゃ」

「は？ 使者はお前を狙ってたんだろ？ 俺がわざわざ身代わりになったのも、お前を逃がすためだったんだぞ」

「そりゃありがたいが、わしはシンイチを見捨てて逃げるような腰抜けの男ではないぞ」

その時、ぴくっと真一の眉が動いた。刻まれていた眉間の皺が少しだけ深くなる。

『お前が俺を助けようとするのは、お前が死にたくないからだろ』
ぐっと拳を握り締め、出そうになる言葉を飲み込んだ。

半ばヨウを睨みつける形で、真一は口を閉ざした。

本当の真意を問いたいと思うのだが、それを言葉として出す勇気がなかった。相手は目的を果たせばそれで終わりという考えなのかもしれない。その時に、それ以上の関係を感じていた自分の受けるダメージが恐ろしかった。

真一は苦々しい表情を浮かべながら、ずっと地面に視線を落とすた。

「なんじゃその顔は。……助けんぼうがよかったのかの!」

ヨウはヨウで、助けたお礼の一言ぐらいは期待していた。

ムツとしたものの、ある程度真一がどのような人間なのか理解しつつある。こんな言葉を吐いたところで、また文句が返って来るだけのこと。そう思っていた。

しかし真一は、何の反応も示すことなく背を向けた。

荷物を拾い上げ山を下り始める真一。その姿をヨウはただ呆然と眺める。予想しなかった反応だった。

一体どういうことなのか、本当に助けられないほうがよかったのか、ではなぜそう思うのか。疑念が次から次へと沸いて来る。

しばらくの間、その場に浮かんたままで後を追いかけることができなかつた。ただ呆然と、遠ざかっていく背中に目を向ける。身体から一気に力が抜け、冷たい風が吹きつけていた。重い沈黙を流すかのように風は吹きぬける。その風に押されるように、ヨウはようやく前へと動き始めた。

明らかに様子がおかしい。何を考えているのか。そう問いかけようと口を開くも、背中が質問を受け付けていないような気がした。距離を縮め、いつものように肩へと身体を預けようかと考えた。しかし、それさえも許されないような雰囲気。ヨウはゆっくりと顔を俯かせ、真一の少し後ろを飛ぶことにした。

「ちよつと、ヨウ。真一さんの機嫌を損ねるようなことをしたんですか?」

ヨウの後ろからピイが小声で話しかけてきた。

「しとらんわい。わしが聞きたいぐらいじゃ」

ぶすつとしたまま、ヨウは前を歩く真一を見つめる。

話しかけられない。いつもと調子が違うのだ。今まで感じたことのない、重苦しい雰囲気だった。使者の魔術に何か仕掛けでもあったのかと思ってしまう。しかしそれはない。では、ヨウ自身が何か間違ったことをしたのか。　　が、行ったことは真一を助けようとしただけ。そのことがヨウの考えを複雑にしていた。

「きつとヨウが悪いんですよ。心当たりがないだけでね」

「なんじゃそりゃ。お主、どうあってもわしを悪者にしたいんじゃないの」

「……だって真一さんは意味もなく機嫌を損ねるような人じゃないですもん。きつとヨウが原因よ」

羽ばたきながらピイは横目でじろりとヨウを睨みつけた。ヨウは言葉を返さず再び前を見た。

真一の背中を後ろから睨みつけながら、ヨウはふんと鼻息をした。絶対に謝らない　とヨウは心で強く思った。

きつと機嫌が悪いだけ　　だったらそれが収まるまでこの距離は縮めない。そう思い、ヨウは一定の距離を置いたまま話しかけるともなく、真一の後ろを付いていく。

「ヨウ、真一さんはこの世界の間じゃないのよ」

しんとした中、ピイの声が響き渡る。その声につられヨウはピイに顔を向けた。

「きつと言わないだけで色々不安を抱え込んでいると思う。それに気づいてやれるのは、一番近くにいるヨウしかいないの。それなのにヨウが真一さんに意地を張ってどうするんですか」

真つ直ぐピイはヨウを見つめた。事実を突きつけられたような気分になり、ヨウは思わず視線を落とした。

「わかっつとるわい……じゃけど、わからん故にわしもどう動いたらええかわからんんじゃない」

その時ピイの身体がほのかに発光し始めた。それには視線を上げ再びピイを見た。

「召喚時間が切れるみたい。……ヨウが本当に真一さんを信用しなければ、真一さんも同じように信用してくれないですよ。とにかく頑張ってね」

ピイはそう言い残し、羽を広げたままの姿でふっと消えてしまった。再び静寂な空間へと戻る。

前を見ればピイが消えたことに気づくこともなく、召喚主は黙々と歩いていた。少しだけ肩と頭が下がっているようにも見える。ヨウは深く息を吐くと、距離を詰めることなくその背中を追った。

使者が現れて以降、特に変わったことはなかった。周りに何もないくだり坂。あるのは足元に転がる大きささまざまな岩と、周りを覆う濃い霧ともや。真つ白な世界と足元には黒い岩盤。天と地が真つ二つに割れたような世界がずっと続いている。不快な音もない、人の声も聞こえない。ただ静かな空間が流れている。時折冷たい風が吹きつけるが、町にいた時よりもマシになっていた。背中を押すように、下へ下へと流れていく。

と、しばらく立ち霧が晴れ始めた。白いカーテンが払われ、目の前に現れたのは緑色の絨毯だった。　　広大な草原である。真一は思わず足を止めた。

先ほどまで感じた風は冷たさをなくし、身体に染み渡るような温かな風へと変化している。その風が吹き渡り、草が波のように揺れていた。真つ青な空と緑色の草原、先ほどとは違う世界だ。風に煽られ、上に着ていたローブを脱ぐ。半そでの、皮膚に伝わる日光と風が気持ち良い。目を閉じ深呼吸をした。　　心の中にあつたもやもやとした感情が緩和されていく。

ヨウとは嫌でも一緒にいなければいけない。そう考えるとこの距離感を縮めないといけなかった。どうにも居心地が悪い。かと言って、こちらが素直に頭を下げるか、と言われればそれはできなかつた。真一は真一で、ヨウが事実を言わないことに疑問を抱いている。

自分が死ねばヨウも死ぬ、だから守っている。そう思うだけ

で胸が痛む。ぎゅつと拳を握り締め、ちらりと後ろを振り返ってみた。

ヨウもじつと真一を見ていた。無表情のまま、じつと。事実を言うような感じではない。真一から話しかけるまで待っている。だから距離を縮めてこないし、いつものように肩に乗らない。

真一は再び前向きなおし、俯き加減にため息を吐いた。やっぱりこの感情を隠し通すしかない。そう思い、再び振り向こうとした時だった。

「……あ、あやつは」

黙りこくっていたヨウが突然口を開いた。眉をひそめ振り返ってみれば、遠くを見つめ指差している。

「は、何だよいきなり」

吐き捨てるように言いつつ、指差す方向を向く。指は真つ直ぐ草原の中を示していた。

そこに目を向けていると 人影がいる。先ほどまでいなかったはずの人がいた。思わずぎょつとした真一だったが、その格好に見覚えがあった。目を細め再び人影を凝視する。

水色の服だった。ズボンと長袖のシャツ。何よりも目を引いたのは、顔につけている白い仮面だった。

「マスク……か？ な、何でここにいんだよ」

笑いかみ殺すかのように頬を緩め、急ぎ足でマスクの元へ向かう。港町シトモンで知り合ってから、いつの間にか姿を消してしまっていた。別れの挨拶もしていない。早く声をかけたいという一心だった。

一方、ヨウはいきなりのマスクの出現に疑問を抱いた。真一が走り出したので仕方なくその後ろを追うが、どうにも腑に落ちない。遠目から表情までうかがい知ることができないが、異様な光景だった。緑色の草原にぽつんとマスクだけが立っている。まるで待ち伏せしていたかのような。嫌な予感を感じながらも、徐々に近づいていく。

待ち構えているマスクはじつと真一たちを見ていた。口の端を持ち上げ笑っている。紫のツンツンと逆立った髪はそのまま、こちらへ近づいてくる真一を眺めていた。

草原に走る温暖な風。揺れる草の中、待つマスク。マスクは笑みを抑えることができなかった。真一もそのようだが、おそらく同じ理由ではない。マスクに再会の喜びはない。真実を告げたとき、真一がどのような表情、態度を取るのか、それだけが楽しみで仕方がなかった。

【第四章 山岳の町ガナオン】暴露

「……マスク！ いつからここにいたんだよ」

少しだけ息を切らしつつ、真一は山を駆け下りた。

草原は思ったよりも背が高く、真一の腰ぐらいまで伸びていた。

吹く風は止むことなく、暖かな風が心地よい。その気候と久しぶりの再会に、真一の表情も自然と和らいでいった。

「……久しぶりだな、ハギノ」

はつきりとした口調でマスクは応えた。が、顔は俯き加減のまま
で全体の表情までは見えなかった。ただ口元だけが笑っている。

マスクはズボンのポケットに手を入れて立ち、相変わらず白い仮
面が顔半分を覆っている。水色のシャツとズボンはそのまま、別
段変わったことはなかった。しかし。

「いつまで茶番を続けるつもりだ？」

いきなり聞きなれない声が真一たちの耳に届いた。真一の口から
思わず、えっ、という言葉が漏れる。マスクの声よりも少し高い声。
この声の主は一体誰なのか。真一は忙しく辺りを見渡した。後ろ、
左、右 しかし、どれも草原が広がるだけで人の姿など見えない。

「お前は相変わらずせっかちだ。……気づいてしまったではないか」
ふふ、とマスクは口元を緩ませにやりと笑った。

「ま、マスク……お前誰と話してんだ」

顔を俯かせたままのマスクを不審に思い、真一は一步踏み出し近
づこうとした。明らかに様子がおかしい。

しかしその時、後ろから胸衣を引っ張られた。振り返るとヨウが
眉間に皺を寄せたまま、マスクを睨みつけていた。

「……その声聞き覚えがある！ 誰じゃ！」

そう言うと、視線を下げていたマスクはすつと視線を真一へと向
けた。冷たい視線だった。何の感情も持っていないような、真一を
見据えた目。一瞬にして、その場に釘付けされたような感覚になる。

視線さえ逸らすことができず、目が合えば心の中まで見られているような気がした。何か異様なものを感じ取り、真一はごくりと唾を飲み込む。

ヨウも何かを感じ取り、すぐさま真一の斜め前へと移動した。真一を庇うかのように両手を広げるヨウ。マスクを睨みつけ警戒心を露わにしていた。

が、マスクはヨウの声に反応を示さなかった。使魔の声は契約を結んでいる人間のみしか聞こえない。そのことを知っていた真一は、マスクの鋭い視線から目を離し、ヨウに声をかけようとした。が。

「覚えていたか、ヨウ。……とすると、余計な記憶はもう蘇ったのか？」

再びマスクの方から、マスクではない声が聞こえたのだ。ヨウへと向きそうになった顔を再びマスクへと戻した。マスクの横、後ろ、周りを人がいないか確かめたがやはり誰もいない。

そんな様子を見たマスクは、ふっと笑みをこぼした。

「紹介が遅れたな、ハギノ。では紹介しよう……」

そう言いながら、ゆっくりと白い仮面に手を伸ばすマスク。少しづつずれていく白い仮面。マスクは笑みを崩さぬまま、じつくりと仮面を動かしていく。

白い仮面が顔から取り払われた。と同時に、そこから何かが飛び出す。そして、仮面の下から見えたものは真っ黒な空洞だった。

「なっ！」

目を見開き、真一とヨウは思わず声を上げた。

マスクの顔半分が欠落していた。本来あるべきはずの頬や目が見えなかった。肌色の顔を持ちながら、半分では真っ黒な穴。信じられない光景に、真一は言葉を失った。

一方で、マスクはその様子に満足しているかのように、笑みを崩さなかった。

「ふふ、そう驚くな。慣れればどうということはない。……そうだ

ろっ、トグ」

片目の視線がずっと上空へと向けられる。釣られて真一とヨウも見上げた。

「慣れる慣れないの話ではない。そこは俺の檻だ。窮屈すぎてたまらん」

「……えっ!」

真一はその姿に息を呑んだ。

姿形、全てがヨウにそっくりだった。金色の髪に幼い顔。ただ、ヨウのようなくりつとした目ではなく、どこか流すような冷たい目。そして、背中についている羽も塗りつぶしたような黒だった。マスクからトグと言われた使魔は、視線をそのまま真一たちへと移した。黙ったまま真一を見た後、ヨウを見下ろした。

「思い出せたか? それとも……命が惜しいがために、忘れたフリをしているだけか?」

「お前は……あ!」

そう叫んだ瞬間、ヨウは目を大きく見開いた。トグを見上げたまま微動だにしない。瞬きを忘れたように、そこに固まってしまった。「……どうした?」

固まるヨウを心配し、真一は手を伸ばし声をかけた。触れようとしたとき、ヨウの小さな肩が震え始めた。真一は思わず手を止める。「思い出したぞ。貴様ら……姫に何をした!」

ヨウは怒声を上げると同時に、鋭い視線でトグを睨みつける。その横顔は今まで見たこともない険しい表情で、唇を噛み締め真っ直ぐトグを見上げていた。一方で、トグとマスクは驚く様子もなく平然と立っている。トグはふんと鼻で笑うと、マスクの顔の位置まで降りてきた。マスクは再び白い仮面をつけ、真っ直ぐ真一たちを眺めていた。

「思い出したのなら説明することもあるまい。どうして再び俺たちが目の前に現れたのか、その理由がわかるだろう? なあヨウ」

「……わしは、姫がどうなったのかを聞いておるんじや」

笑みを見せるマスクとトグ。一方で険しい表情のままのヨウ。真一は少しでも事情を理解すべく、再びヨウに手を伸ばし、その肩を掴んだ。

「おい、お前何を思い出したって言うんだよ。ちゃんと説明しろ」
肩を掴まれたヨウは顔を少しだけ後ろに向けた。向けられた顔も眉間に皺を寄せ、怒っているようだった。

「……簡単に言えば、あやつらは悪じゃ。許してはならん」
「は？ 意味わかんねえよ。なんでマスクが悪なんだ。あいつ、俺らを助けてくれたじゃねえか」

すると、ヨウは身体を真一へと向けた。

「それは隙を突くための作戦じゃ！ 騙されちゃいかん！ シンイチ、あいつらはな……！」

続きの言葉を発しようとして、ヨウが口を大きく開いたその時だった。突如、ヨウの後ろから赤い光が強く発光した。陽は高く上っているはずだったが、後ろから光を浴びるヨウに影ができるほどだった。それには思わず口を閉じ、二人同時に視線を移す。そこには、真つ赤な光の玉を作り上げたトグがいた。真つ直ぐ手を向け、無表情のまま口を開く。

「黙れ」

その言葉と同時に、真つ赤な光の玉が二人に向かってきた。玉のスピードは速く、あっという間に目の前まで迫る。しかし。

「インデিশョンサモン！」

両手を前に突き出し、叫んだヨウの手元から水のような青い透明な壁が出現した。真つ赤な光の玉がぶつかると大きく波打ち、突き破ることなくそのまま真つ赤な玉を消滅させてしまった。カんでいたヨウの腕だったが、それを確認するや否やすぐに下ろす。すると、青い透明な壁はまるで水のように一気に地面へと落ちていった。

「き、貴様ら……」

「余計なことを言わなくてもいい。ハギノには関係のないことだ」
はつきりとした口調で、マスクが声を上げた。先ほどまで笑って

いた顔はなくなり、冷たい視線でこちらを見ている。何も感じられない無表情な顔。真一の背中にぞくりと悪寒が走る。

「ま、マスク！ 意味わかんねえよ、ちゃんと説明しろよ！」

握っていた弓をぎゅっと握り締め、一步踏み出した。恐怖心がばれないよう、大声で叫んだつもりだったが少し声が震えていた。

「……ハギノに問いたいことが一つ」

「な、何だよ」

が、マスクは表情を変えることなく抑揚のない声を発した。何も感じられない瞳に見つめられ、真一はその場に立ち尽くした。一体何を問われるのか、マスクが口を開くまでのほんの数秒が長く感じられる。

マスクは視線を逸らすことなく、ゆっくりと口を開いた。

「見ぬ振りをし友を捨てるか、それとも、向き合い共に命を落とすか……どちらを望む？」

少し見下すような目線。真一に圧力をかけるよう眼力。端を釣り上げ笑う口元。

目の前にいるのは以前のマスクではない。

知っているマスクの姿とは全く違う様子に、真一は軽い眩暈が起こりそうだった。何といえはいいかすぐに言葉が思い浮かばず、何か言わなければならぬと口だけが開いていた。

しかし、マスクは答えなど待つつもりはなかった。うるたえる真一の姿を満足そうに眺めた後、両手を真っ直ぐ横へと伸ばしぐっと拳を握り締めた。

「まずは、ヨウ……貴様を処分する」

今から行うことを楽しみにしていたのか、マスクの目を細めた顔は喜びの何者でもなかった。

【第四章 山岳の町ガナオン】握りしめたもの

真つ直ぐ横に伸ばされたマスクの両手から、青白い光が大きくなつていく。その少し上空で、トグも両手を頭の上に掲げ、黒い光を発生させていた。

「嫌な予感がする！ シンイチ！ お主は逃げるんじゃない！」

険しい表情でヨウが叫んだ。目の前で作り上げられている光の玉は、空気を裂く音を轟かせながら少しづつ膨らんでいる。

「お前はどうすんだよ！ てか、なんでマスクはあんな風になつちまっただんだ！」

「なつたんじゃない、元々あんな奴だつたんじゃない！ ええからさつさと逃げるんじゃない！」

真一はむつとした。

「うるせえよ！ ちゃんと質問に答えろ！」

「そんな暇はないんじゃない！」

二人で騒いでいる間に、マスクの二つの青白い光の玉は合わさり一つの玉となった。マスクは真つ青な光の玉を掲げ、視線を上空へと上げる。その合図を受けたトグが軽く頷いて見せた。

「……いくぞ」

その声当真一とヨウの口論は止まり、一斉に顔を向けた。

上空からトグが黒い光の球を下に投げつける。同時にマスクも真つ青な玉を真つ直ぐ投げた。投げられた二つの玉が交錯するようにぶつかると、バチツという稲光が発生した。その瞬間眩い光が放たれ、真一たちも咄嗟に手で目を覆った。

その時目の前に気配を感じた。草の揺れる音が耳に届く。

次第に險越しの光は弱まっていく。一体何があつたのか 真一はゆっくりと目を開けた。

「……うわっ！」

目の前に真つ黒な泥人形が立っていた。二本の足で立っているも

の、服などは一切着ておらず全体が丸く帯びていた。背丈は真一と同じくらいあり、顔には丸い赤い瞳があるだけであった。どろどろとした黒い物体が身体を流れていき、足元には小さな黒い水溜りができていた。じつと赤い瞳を真一へと向けている。

「やばいの……人型造形を作りよった」

と、軽く舌打ちをしたヨウが呟くように言った。歯を食いしばり苦々しい表情を浮かべていた。小さな頬に汗が伝っている。

「人型、造形？ ……まさか、マスクが召喚したって言うのか？」

「そうじゃよ。あれは一種の複合魔術じゃ。トグの召喚魔術とマスクの回復魔術　トグが召喚した造形に命を吹き込む。それがあれじゃ」

真一は再度人型造形を見た。だらだらと黒い液体が身体から流れていて、動く気配は感じられない。

すると、マスクがゆっくりと腕を上げ、人差し指をヨウへと向けた。

「標的は奴だ。　行け」

マスクがそう言うや否や、人型造形の腕が変化し始めた。黒い泥は意思を持ったかのように渦巻き、そのままドリルのように固まる。固まると身体をヨウへと向け、一気に草を蹴り上げた。

「来る！　逃げるんじゃ！」

叫びながら、ヨウは力一杯真一を横へと突き飛ばした。いきなりこのことで真一の身体はよろけ、草の中へと倒れこむ。すぐさま身体を起こしヨウを振り返った。

人型造形はすぐそこまで来ていた。両手のドリルを振りかざし、先端をヨウに向かって突き刺そうとする。

が、ヨウは寸前のところで上空へと舞い上がった。手も届きそうにないところでヨウは止まり、下を見下ろした。避けたものの息を切らしている。小さな肩を上下に揺らし、何度も深呼吸をしていた。先ほど召喚魔術を使ったのが身体に堪え、がっくりと膝に手をつく。目を閉じて荒い呼吸をする姿は、攻撃を避け続けることが困難だと

予感させた。その間も、人型造形はヨウから視線を逸らすことなくじっと様子を伺っていた。

真一はぐつと足に力を入れ立ち上がる。気をこちらに向かせようと考えた。身体は疲れてはいないし逃げ回って時間を稼げばいい、自分にはそれぐらいしかできない。と思った時だった。

ヨウを見上げていた人型造形は、突如、膝を折り曲げ力を貯めるように身体を固めた。顔はヨウに向けたまま、じっと見上げている。そして次の瞬間、一気に草を蹴り上げ上空に飛び上がった。

両手のドリルの先端をヨウへと向けたまま、目にもとまらぬ速さで上昇していく。

肩で息をしていたヨウは膝に手をついたまま、下から迫ってくる人型造形が一気に襲いかかる。

「ヨウ……！」

上空で大きな影と小さな影が合わさった。逆光のせいであろうなっているのか、真一にはすぐにわからなかった。

そこへ小さな雨粒が飛んできた。頬についた一滴を指で拭う。指についた液体は赤かった。ぎよつとした真一はすぐさま、手で日光を避け上空を見上げる。

真一が見たもの、それはドリルが小さな身体のヨウに刺さっている光景だった。鮮血がドリルを伝い流れている。ヨウは身動きせず、苦悶の表情を浮かべた。

「ヨウ！」

真一は手早く弓巻きを取り外すと、すぐさま弦を張る。そして、背中の矢筒から最後の矢を取り出した。右手にかけはしていなかった。が、今の真一にかけをつける気持ちの余裕などなかった。矢を番え、素手のまま引く。指の付け根に弦が食い込んだ。それでも痛みなど感じないほど、頭に血が上っていた。これ以上開かないというほど目を見開き、上空を見上げた。

弓を力いっぱい引く。届かない距離ではない。いや、当てなければいけない。そんな思いを抱きながら、真一は勢いよく弦から

右手を放した。

バシユツ、という弾く音が響いた。弛むことなく矢は真つ直ぐ飛んでいく。ただひたすら矢の行方を目で追った。真一の弓から飛ばされた最後の矢は、真つ直ぐ人型造形へと伸びていく。

が、矢の存在に気づいていた人型造形は、身体を一気に降下させた。無情にもすり抜けていく矢。しかし、その拍子に刺さっていたヨウの身体がふわりと浮かんだ。まるで木の葉のように力なく上空に浮遊した後、その身体が地面へ向かって落ちていく。ヨウは身体を固めたまま、羽根を動かそうとはしなかった。それを見た真一は荷物を放り投げ、すぐさま移動しヨウの身体をキヤツチした。

「大丈夫か！」

ヨウは身体を硬直させていた。苦悶の表情を浮かべる頬には汗が伝い、血を止めようと腹部に両手が添えられている。その両手は真つ赤に染まっていた。紺色の服も腹部から広がるように、さらに濃い紺色と変化している。身体から噴き出す血は絶え間なく流れ、すぐに真一の両手を濡らした。

「ハギノ、それをこちらによこしてもらおうか」

啞然とした表情のまま真一は顔を上げる。マスクが手のひらを向けていた。口の端を持ち上げにやりと笑い、その傍らにはトグと人型造形もいた。

「ハギノにまで危害を加えようとは考えていない。目的のものはそれだ」

「……目的の、もの？」

「そうだ。それ以上のことは知る必要もない」

真一はマスクから視線を落とし、そのまま腕の中に倒れるヨウを見下ろした。目に見えて顔がどんどん青ざめている。

ヨウを見下ろしたまま動かない真一。それをマスクは待ちきれないのか、一步踏み出してきた。そして、徐々に真一との距離を詰めていく。

「さっさと渡せハギノ。それとも、渡さないつもりか」

なお歩きながらマスクは続けた。

「知らねば永らえるものを自らつぶすのか？ 愚かだ。知ったところで何の得もない。己の命は自ら守るべきだろう。それを、こんなくだらんことで捨てるのか」

「……つるせえ」

ぼそつと俯いたまま真一は呟いた。マスクの歩みも止まる。もう目の前にマスクは来ていた。足を止めながらも眉をひそめ、マスクが口を開いた。

「何か言っただか」

「黙れつつてんだよ！！」

顔を上げると同時に叫ぶと、マスクを睨みつけた。怒りを抑えることができず、顔は紅潮し身体全体が震えた。

「俺はずっと、お前はいい奴だと信じてた！ けどもう違う！ てめえ最低なんだよ！」

ヨウを抱く手のひらにも力が入り、身体の芯から熱い何か がせり上がってくる。まともに息を吸うことさえできず、自然と鼻息が荒くなっていった。

「なんとでも言え、いいからよこせ」

そう言い腕を伸ばすマスクだったが、真一がその腕を振り払った。顔をしかめるマスク。

「……どういっつもりだ」

「俺は何も知らねえし、今の状況だっけいまだに理解できてねえ……だけどな！ こいつが命を張って俺を守ろうとしたことだけはわかる！」

その時、うつすらとヨウが目を開けた。うつろ目線で真一を顔を見上げる。

「……てめえにだけは絶対に渡さねえ！ 俺も命を賭けてこいつを守る！」

嘘のない熱い目は、冷たい視線を送るマスクをじっと睨みつけた。マスクは表情を変えないまま、しばらく沈黙した。一方で抱えられ

たヨウは、震える手のひらを動かすとぐつと歯を食いしばる。すると、指の先がほのかに青白く光り始めた。

真一とマスクはそれに気づかぬまま、少しの間睨み合い沈黙が流れた。険しい表情を崩さない真一に対し、マスクも表情を変えない。しかし、突然ふつと口元を緩めた。

「……そうか。ハギノの意思、受け取った」

思わぬ言葉に真一は力んでいた表情を緩めていく。わかつてくれた。そう思った瞬間だった。

「ならば死んでもらおう」

表情を一切変えず言い放った。それと同時に、ポケットの中から小さな小瓶を一つ取り出す。すると、後ろにいたトグが真つ直ぐ腕を伸ばし手のひらを向けた。

「は？ 死んでもらうだと？ ふざけて……！」

真一が一步踏み出そうとした。しかし進めない。というよりも、目の前に見えない何かが立ちふさがっていた。足を振りかぶろうとしても、何かが目の前にあつて足も出せない。壊そうと蹴りを入れるも思った以上に固い。後ろに下がろうとしても、背中にびつたり合わさるように見えない壁があつた。

「どうなつてんだ！ ここから出せ！」

真一は叫びながら、四方八方に蹴りを入れた。見えない壁に足が激しくぶつけるが音もしない。後ろに身体を預けるように押ししてみるものの、びくともしない。

一方マスクは、目の前で薄笑いを浮かべるだけだった。

「無駄だ。トグが召喚した檻は簡単には壊せない。短い付き合
いだったなハギノ、さらばだ」

そう言うと、マスクは手に持っていた小瓶を真一の目の前に置いた。踏みじられた草の上に、小瓶が蓋の開いた状態で置かれている。見れば、マスクも両手を広げ目を閉じて集中し始めた。

その様子に、真一の背中にぞくりと悪寒が走った。何をされるのか想像もつかないが、このままでは危険だ。とにかくここから逃

げなければならぬ。逃げろと訴えるように心臓が激しく暴れだす。再び真一は蹴りを入れ始めた。が、やはりびくともしない。見えない圧迫感が真一を余計に焦らしていく。とにかく壊さなければ、出なければ！

「シ……シンイチ。証じゃ……！」

突然腕の中にいたヨウが呟いた。ハツとして見下ろしてみると、うつすらと目を開いている。血が流れる腹に手を置き、その手は青白く弱い光を放っていた。

「証を握るんじゃ……！」

証という言葉に、真一は視線を地面に落とした。証はトートバツクの中に入れている。

しかし、トートバツクは見えない壁の向こうに落ちていた。

拾えない。ぐつと歯を食いしばり悔しさを噛み締める。がしかし、足元にきらつと光る何かが目に入った。すぐさま拾い上げ手の中に収める。その瞬間だった。

握りしめた黒い証。その証から黒い光が手から漏れ、それは強い光線となって辺りに広がった。

「インディシヨンサモン！」

女の声が響いたや否や、透明な壁が取り払われ、その拍子に真一は後ろに尻餅をついた。そのまま視線を上げ、黒い光の元を凝視する。

「さっそく喚ばれるとはね。大丈夫かしら？」

「あ……あんたは、ガナオンさん？」

戸惑う真一を見たガナオンは、黒子のある口元を緩ませ微笑んだ。風に揺れる黄色の長髪と、真紅のローブ、そして大きな胸。真一たちの目の前に現れたのは、紛れもなく統治者ガナオンだった。

【第四章 山岳の町ガナオン】対峙

ガナオンは振り返ると、毅然と立つマスクを見据えた。見覚えのある青年だった。否応にも目立つ白い仮面が目に留まる。じつと考えた末、ある人物が頭に思い浮かんだ。

「……貴方は、ダック公爵の部下かしら」

「おっしゃる通りでございます。ガナオン様」

マスクは腰を折り、深々とおじぎをした。

「私はマスクと申します。まさかこのような場所で、美しいガナオン様にお会いできるとは……」

「今の状況を説明しなさい」

言葉を遮りガナオンは言った。険しい表情のまま腕を組み、マスクとその隣に立つ人型造形に睨みを利かせている。一方で、マスクはそんな様子に臆することなく、笑みを浮かべた。

「すでにご存じのこととは思いますが、私はただ、使魔掃討作戦を遂行しているのみでございます。……何か問題でも？」

「あるわ。統治者として、いくら使魔掃討作戦のためと言え、一般市民を巻き込むなど許すことはできません。すぐにこの場から去りなさい」

しばらく沈黙が流れる。マスクから笑みは消え、視線を上空へと上げた。その方を見れば、トグが上から見下ろし一つ頷いている。すると、マスクは小さくため息を漏らし、人型造形に掌を向けぎゅつと握りこぶしを作った。すると途端、人型造形は崩れ落ちただの泥へとなってしまった。

「……わかりました。統治者様のお命令となれば、逆らうことなどできません。ですが……」

すつと視線がガナオンを通り越し、真っ直ぐ真一へと向けられた。「その使魔は回収させていただきたい」

獲物を逃さない鋭い目をしていた。思わず息を呑む真一に、ヨウ

が薄らと目を開けた。短く呼吸をしながらマスクたちに顔を向ける。歯を食いしばり負けじと睨み返していた。

「それはできないわ」

ガナオンのその言葉に、マスクは鋭い視線をそのまま移す。

「……どういう意味でしょうか？」

「そのままよ。回収などさせません」

使魔掃討作戦について当然ガナオンも知っている。歯向かうことがどういうことになるのか、そのことについても理解していた。

マスクは薄笑いを浮かべ、ガナオンの発言に対し鼻で笑って見せる。

「ご正気か？ 回収させないという発言は、アラウ国王様の命令に背くということになりますよ。先ほど貴方様がおっしゃったように私はダック公爵の部下だ。その発言が本当であるならば、当然上に報告させていただく。……ガナオン様もう一度伺います。そこにいる青年の使魔……回収してもよろしいか？」

ガナオンはすっと目を閉じた。腕をだらりと垂らし、何かを考えているのか黙り込んだ。

統治者は王族で、アラウ国王に従うべき身分であり手足となる者だ。大抵の決まりごとは、四大都市の統治者とアラウ国王で話し合われ決められる。

アラウの繁栄と平和を考え、隣国のエルモ国に対してはいかに穏便に物事を運ぶか。最近はそのような議題ばかりだった。それまでの国王たちは、エルモとの戦争に勝つことだけを考えていた。手段を選ばず、民をも巻き込むのは当たり前だった。が、現国王となって以降戦争はほとんどない。それは国王自身が平和主義者であり、温厚な人柄であるためだった。

「……信じられないわ」

ゆっくりと目を開けたガナオンは呟いた。記憶する国王と、使魔掃討作戦というものがどうしても結びつかないのだ。優しい国王が使魔たちに対し、このような仕打ちをするだろうか。

そして、ガナオンは真っ直ぐとマスクを見据える。目の前に立つ青年は、冷たい目線で言葉を待っていた。白い仮面は無表情で、彼から漂う冷たく鋭い雰囲気有助長させているようである。

「信じるも信じないも、送られた状が全てですよ」

吐き捨てるように言うと、マスクは再び真一を睨みつけた。

「ハギノ」

はっとして真一はマスクへと視線を向けた。向けられた片目は冷たく何の感情も持っていないようだ。

「使魔掃討作戦により使魔を回収する」

そう言うや否や、マスクは草を蹴り上げ一気に真一たちへと飛びかかる。しかし。

「待ちなさい！」

真一たちの目の前で、ガナオンが両手を広げ立ち塞いだ。それは向かっていたマスクも止まり、眉をしかめガナオンを睨みつける。「私は山岳の町ガナオンの統治者として、サモナーを守る義務があるわ」

丁度草原に強く風が吹き抜けた。草が波のように揺れ、ガナオンの美しい黄色の髪も同じ方角へとなびく。しかし、マスクは微動だにしない。

「……ガナオン様、あくまでも邪魔をするおつもりですね」

「私はただ義務を守るだけよ」

「私も命令という絶対的な仕事を遂行するのみ。そして、統治者である貴方も命令に従うべき立場。命令に背いてまで守る者とは到底思えないですが」

「統治者だからこそよ。前に国王はおっしゃったわ。……民あつての国だ、とね」

「そうですか」

そうマスクは吐き捨てると、視線をちらりと上空に向けた。それに気付いた真一はすぐさま上空を見上げた。

上空にいたトグが両手を突き出し、手で三角形を作っている。ど

こかで見た見た光景だった。真一の頭の中で、さまざまな場面がフラッシュバックする。

「ガナオンさん逃げる！」

身動きをさせなくする移動魔術だった。それを思い出した真一はすぐさま叫ぶが、ガナオンも感じていた。腕を大きく振りかぶり、一気に地面まで振り下ろす。

「インディシヨンサモン！」

叫ぶと同時に、ガナオンとマスクの間に土が一気に盛り上がった。それは丸い円状に盛り上がり、小さなドームを形成した。その中に真一も巻き込まれるような形となり、天井まで土壁一色となった。

「……な、なんだこりゃ」

天井こそ低いものの、太陽光まで遮り音一つ聞こえない。地面を見れば草もない。声は反響し土の匂いもした。

ガナオンはふうと一息入れると、真一に近寄り跪いた。

「心配しないで、ひとまず貴方を守るために作ったのよ。それより、これを」

そう言ってガナオンは懐から小さな袋を取り出した。手のひらに乗るほどの小さな袋。

「……これは？」

真一は受け取り振ってみると、さらさらと粉のような音がする。

「トトロイから、貴方に渡すよう頼まれていたのよ。何でも召喚魔術をする際の触媒になる素材だそうよ。これで武器を召喚できるかもしれないわ」

「武器……」

そう言われ思わず弓に目がいく。すぐ近くに置かれている弓。背負っている矢筒の中に矢はない。弓は矢があつてこそである。最後の矢はどこへ行ったのか、草が生い茂るこの草原では探すのは一苦労かもしれない。半ば弓を引くことを諦めていた真一にとって、この袋は朗報だった。

「その血は使魔ね。……治療をしたいけど、私は回復魔術は扱えな

いし、何より下手に血に触れてしまったら大変だわ。困ったわね」
弓から視線逸らし、ヨウを見下ろした。ゆっくり瞬きをしているものの、呼吸は弱々しく腹部は血で染まり上がっている。すると、ヨウは真一を見上げ口元を緩めた。

「……心配するでない。平気じゃ。どれぐらい魔力が持つかかわからんが……回復魔術を施しておる」

真一にはその笑みは強がりには見えなかった。小さな手は震え、回復魔術を施しているものの、青白い光はほのかで頼りない。何より、魔力がなくなってしまうえば、また気を失ってしまうかもしれない。そうなってしまうえばアラウの人々との意思疎通が難しく、余計にヨウを治療することが困難になるかもしれない。

回復魔術が扱える者に治療を頼むしかない。そう考えた時ライトの顔が浮かんだ。ライトならヨウを知っているし回復魔術が扱える。思わず表情が緩む真一だったが、すぐに元通りとなった。今の状況で盲目のライトを喚ぶことは、余りに危険なのだ。ガナオンがいるとはいえ、本気で殺しにかかったマスクである。ライトが邪魔するものなら、ためらうことなく殺すかもしれない。兎にも角にも、マスクからヨウを遠ざけなければいけない。

「……何かいい案でも浮かんだのかしら？」

「治療してくれる奴は思い当たるんです。でも……マスクがいる限り余りにも危険すぎる」

「……そうね。この土の壁も長くはもたないわ。きつと召喚魔術が切れるのを待っているでしょうね。……それにしてもダック公爵の部下なんて……分が悪すぎる」

ガナオンはそう呟くと、唇を噛み締め悔しそうな表情を浮かべた。「ダック公爵って……何ですか？」

「アラウ国王の相談役よ。直接は見たことはないけれど、影の国王と噂される人物……。簡単に言えば、唯一国王と肩を並べることができる方なの。余りにも情報がなさすぎて、統治者たちは皆危険視しているわ」

「マスクはその部下、か……。一体、こいつの前マスターとの間に何があったんだ。おい、お前一体何を思い出したんだ？」

焦点が合わず呆然と見上げているヨウ。何かを思い出しているのか、苦々しい表情だった。

「待って。シンイチくんが契約者でしょう？ 前とはどういう意味かしら？」

「俺は元々のマスターじゃないんです。こいつの前マスターは、確か……。アラウ国王の娘さんです」

「なっ……。イツチ姫ですって！ 本当なの？」

ぐつと近寄り問い詰めるガナオン。まん丸の目を一杯に見開き、驚いているようだった。

「え、ええ。間違いないと思いますけど……」

「使魔がいるとは知っていたけど……。どうして……。姫は使魔のことを……。彼が執拗に使魔を回収したがるのも不自然だわ……。それに国王」

ガナオンは動揺しているのか忙しく視線を泳がせている。ヨウもガナオンの言葉に顔を歪ませ唇を噛み締めていた。

「とにかく、彼らをどうにかしないと……！」

ガナオンが顔を上げた時だった。ガナオンの身体から淡い光が帯びてきたのだ。白く柔らかい光は身体全体を覆い、ガナオン自身までも白く薄くなり始める。

「いけない、召喚時間が終わってしまうわ！」

「えっ！」

「私が元の場所に戻ってしまったらこの土壁も崩れるわ！ それまでにシンイチくん！ 彼らに対抗できる武器を召喚しなさい！」

そう言われ、手のひらに持っていた袋の紐を口と片手を使い開けた。中を見れば銀色の粉が入っている。

ガナオンの身体はどんどんと白く帯び、今にも光で見えなくなりそうだ。

「適当な量を握ればそれ相応の大きさになるわ。もし、本当に危な

いようだったら、また私を喚びなさい」

「……ガナオンさん、どうしてそこまで……」

ほとんど白い光に覆われ、ほとんどガナオンの姿は見えない。周りを覆っていた土壁の天井も崩れ始めている。

「トトロイが貴方を気にいったように、私も貴方を気にいったのよ」
崩れ落ちる土の中、ガナオンの言葉がはつきりと耳に届く。そして、一番強く光が放たれた後、一瞬にしてガナオンの姿は消えてしまった。それと同時に、周りの土壁が大きく揺れ始めた。

真一はすぐさま立ち上がると、袋は懐の中にしまい、代わりに召喚本を取り出した。片腕に抱くヨウは力なくぐったりとしている。矢を作り出したところで、ヨウを抱えて弓を引くことはできなかつた。と言つて、丸腰のままマスクと対峙すればまた殺され兼ねない。そうなれば、喚ぶしかなかった。

真一はそのページを開き左手を乗せた。そして力いっぱい叫ぶ。

「プレサモン！」

崩れ落ちた土の中、出てきた人影は二人。その姿を確認したマスクは、ふつと鼻で笑つて見せた。

「ふつ。ハギノ、懲りもせずまた召喚魔術か。それも……エルモ人を」

ヨウを抱える真一の隣に立っていたのはリオだった。赤髪の団子頭に赤い瞳。トトロイと同じ格好のようで、袖と膝から下の布がない真紅のローブを着ている。肩幅に開いた足元は、革の紐でできたサンダルを履いていた。リオは持っていた銀の棒を延ばし槍へと変化させる。鋭い先端を上空へと上げ、どんと乱暴に立てた。

「相手はあいつか」

冷たい視線を向けるマスクに対し、リオは口元を緩め笑みを見せ

た。

【第四章 山岳の町カナオン】リオ召喚（前書き）

z 先にお詫びを……。戦闘場面ですが、迫力がなくてすみませんor

【第四章 山岳の町ガナオン】リオ召喚

崩れ落ちる土壁の中、リオは戸惑う素振りも見せずゆっくりと振り返った。

「シン。久しぶりだな」

天井からは砂がぱらぱらと落ちている。それにも関わらずリオは堂々としていた。手には例の銀の棒を握り締めている。

「急にすまねえ……けど、説明する時間がねえんだ！ 力を貸してほしい」

己の不甲斐なさの余り握りこぶしに力が入る。歯を食いしばる真一をリオは冷静な目で眺めた。と、あることに気づきそれを指差した。

「……その腕の血はどうした？」

両腕がヨウの血によって真っ赤に染まっている。リオはヨウそのものは見えないが、血だけが見えるようだった。

「ああ、これは使魔の血だ。とにかく、この土壁が崩れたらある奴がいる。そいつの気を逸らしてほしいんだ」

「……なるほど」

天井から土が塊となって落ち始める。慌てる真一に対し、リオはふっと表情を緩め笑って見せた。

「どんなことだろうと引き受けるさ。まかせろ」

土壁は全て崩れ落ち、二人の周りだけ土が覆っている。その円状よりも外側の生い茂る草の中、マスクは二人に対し冷やかな視線を送っていた。

「ガナオン様の次は、エルモ人とはな。……まさか、そのエルモ人が俺と勝負でもする気なのか？」

馬鹿にしたように鼻で笑って見せた。それに対し、リオはぴくつと眉をしかめ槍を真っ直ぐマスクへと向ける。

「だつたらなんだ？ 負けるのが怖いのか？」

「それは貴様だろう。魔術も扱えぬエルモ人が、我らに勝てるのも思っているのか」

アラウとエルモ。隣り合う二国であるが、体質は全く異なるものであった。

魔術が当たり前のように存在するアラウに対し、エルモではそのような考えはない。そうならば当然、戦う兵力も違っている。魔術を主体に構成するアラウ軍。一方で、武器や防具といった近接攻撃が主であるエルモ軍。大砲など、中距離長距離向けの武器もある。だが、それでも魔術に対抗できるほどの兵力ではなかった。

一見、魔術を扱えるアラウ軍が有利に見えるが、エルモ軍が唯一優れている点があった。

それは個々の能力そのものである。魔術が扱えない故に、エルモの民は己を鍛え抜く。筋力や走力、また身体ばかりではなく知識も高いものがあつた。民の生活だけ見ても、アラウでは召喚魔術に頼るしかない食生活も、エルモでは植物の栽培をし豊かな作物が収穫される。魔術がない分、エルモの民はそれぞれに努力を惜しまなかつた。その結果が互いに反発しあい、今でも対立を維持させることとなつた。

「……貴様のような人間にエルモの民が殺された。だが……今は関係ない。死にたくなければ、この場からさっさと退け！」

「愚かな。それはこちらの台詞。例え逃げようとも逃がしはせん。

……トグ、用意しろ」

トグは険しい表情でマスクの近くまで降下した。先ほどまでの無表情はなく、眉間に皺を寄せ憎々しげにリオを睨みつけている。やはり使魔にとってエルモ人は憎むべき存在らしい。

その表情のまま両手を突き出し、再び黒い光を作り上げた。リオはトグの姿は見えないので、いきなりの黒い光の球の出現に声を出し驚いた。

「なっなんだ、あれは」

「相手はあいつ一人じゃねえ。もう一人使魔がいる。今から何をす
るのかわからねえけど、気をつける」

真一はマスクを睨みつけたまま注意を促した。その言葉に、リオは目を細め黒い光の球を凝視した。それでもやはり姿までは見えな
い。

「シンが見えるならそれでいい。見えんが頭に入れておく」

一方、マスクはポケットから何かを取り出し握り締めている。ちらりと黒い光の球を見た後、再び視線を真一たちに戻し口元を緩めた。

そして、そのまま握り締めていたものをその光の球に投げつける。その瞬間、黒い光が膨張し少しずつ膨らんでいく。

「……エルモ人。まずは貴様からだ」

不敵な笑みを見せた途端、光の球が弾けた。そこから現れたのは、見たこともない生き物だった。

全身が黒色。服など着ておらず、両手が鎌のようになってい
る。顔は牙がむき出しの口があるだけで、他に何もなし。頭には牛のよ
うな角が生え、翼は蝙蝠である。切り裂かれた口からは、だらだら
と唾液が垂れ流れている。

「いくぞ」

マスクがすつと腕を上げ真つ直ぐリオを指差した。すると、魔物
はびくつと反応しマスクに向き直る。その瞬間、翼を一気に羽ばた
かせた。

口を大きく開き、振り上げている鎌は鋭く薄い。目にもとまらぬ
速さで、気づけばすぐ目の前までいた。真一は息つく間もなく逃げ
る隙もなかった。しかし。

すぐ近くから甲高い金属音が響いた。

魔物が振り下ろした鎌をリオが槍で受け止めている。力がぶつかり合い、鎌と槍が共に揺れていた。それでもリオは臆することなく口元を緩めた。

「……汚い奴だな。これ以上近寄るのは勘弁してほしいものだ」

「ギィギァアア！」

魔物は不快なダミ声で叫んだ。口は鋭い牙が覗き、真つ赤な舌も見える。

その時草が揺れる音がした。はっとした真一が真正面を向くと、すぐ目の前にマスクが立っている。冷たい眼差しで口の端を持ち上げている。

見えた手のひらには黒い光が渦巻いていた。が、身体が反応しない。見るだけで身体が動かなかった。もう駄目だ、真一がそう思った時だった。

死角から伸びてくる槍。そこにリオがいた。

リオは躊躇うことなく槍を振り上げた。しかし、マスクは瞬時に槍を避けすぐに身を引いた。リオはすぐさま、マスクと真一の間立ちをだかる。

「おい。貴様の相手は俺だ。シンを襲うんなら、卑怯な手を使うのはやめてもらおうか」

リオの背中越しに、マスクの苦々しい表情が見えた。小さく舌打ちをしている。

と、近くから低い唸り声が聞こえた。視線を向けてみれば、片腕を切り落とされた魔物がいる。痛々しい姿ではあるが、荒々しい呼吸を繰り返しながら身体はリオに向けられたままだった。

が、二人はそんな魔物など目もくれず互いに睨み合いを続けた。

「素早い奴だ。やはり貴様から殺すべきだな」

「残念だが、俺は簡単に死なん」

すると、リオが軽く顔を横へ向け口を開いた。

「シン、俺があいつらを引き寄せた。その間に遠くへ行け」

「え。でも、リオお前は……！」

「心配することはないさ。まかせろ」

言い終えるや否や、リオは真っ直ぐマスクへ向かって走り始めた。「真正面から来るとは愚かな！」

そう叫ぶマスクは真っ直ぐ腕をリオへと伸ばす。また、横から魔物が片腕の鎌を振り上げ襲いかかろうとしている。

その時だった。リオは走っていた足を止め両足で踏ん張ると、高く跳ね上がった。見上げれば丁度太陽と重なり逆光となる。見えな
いのは真一だけではなく、マスクも魔物もそうらしく見上げたまま動けないでいた。

リオは刃先を向け魔物に向かって降下する。落下速度が速く、気づいた時には魔物の脳天に、見事槍が突き刺さっていた。魔物は口を開けたまま動かず、一方でリオはにやりと笑みをこぼす。そして、逆さ状態のまま足を振り上げ、半回転するように地面へと降り立った。引き抜かれた魔物の頭から、噴水のように血しぶきが飛ぶ。そして、魔物の身体は黒い砂と化しあつという間に崩れ去ってしまった。

「……次はお前だ」

真一からはリオは背中しか見えない。その背中越しからマスクを見れば、眉をしかめ悔しそうな表情を浮かべていた。ぼうつとその様子を眺めていると、リオが片手を後ろに回し、手を振っていることに気付いた。あっちに行け、という合図のようだった。確かに魔物も消え、マスクとトグの注意はリオに向かっている。遠くに行くなら今だった。

真一はゆっくりと後ずさりをし、なるべく音を立てないようにした。そして、背の高い草に身を隠すように屈むと一気に走った。

リオなら大丈夫。きつと大丈夫だ。

見渡す限りの草原。身を隠すことはほぼ不可能。それでも真一は走る。腕の中には深手を負ったヨウ。若干顔色が戻ってきているものの、油断はできない。丸腰の真一にできることは、早くヨウを回

復させること。そのためにはライトを召喚する必要がある。

リオのためにも、ライトを召喚する。他人ばかりに頼っていると、思っている中でも、真一は己にできる最低限のことは成し遂げたかった。

【第四章 山岳の町ガナオン】ライト召喚

短く息を切らしながら、真一はようやく足を止めた。低い姿勢を維持しながら懐の中から召喚本を取り出す。

ヨウを抱えた状態のまま、難しい体勢でページをめくった。そこには小さな丸い血の跡が鮮明に残っている。それを確認し、ゆっくりと息を整えながら集中する。そして左手をページの上に乗せた。「プレサモン！」

眩い光が放たれる。そして、真一たちの前に姿を現したのは白いローブだった。

「え、えっ？ な、何？」

出てきたライトは草の中に座り込み、眉を八の字にしている。

久しぶりに見る姿に真一の表情も明るくなった。が、すぐに顔を引き締めると近寄りそつとライトの手に触れる。

「ライト。俺だ」

その瞬間、驚いたのかライトがびくつと震えた。が、すぐに強張っていた顔が緩んでいく。

「シ、シンイチさんですか？ ど、どうして！」

「俺が召喚したんだ。いきなりごめんな」

ライトの顔は赤く染まり、信じられない様子で身体が固まっている。一方で、真一は手を離すとライトの前にヨウを横たわらせた。出血はしているものの、だいぶ緩やかになっていくようだった。ヨウの顔色も青白いことには間違いないが、久しぶりに再会したライトに口元を緩ませている。

「ライト……わしを、覚えておるかの？」

ヨウの弱々しい声に、ライトははつとした。

「ヨ、ヨウさんですか！ 何かあったんですか？」

「ライトを召喚したのは、こいつの治療をほしいからなんだ」

「え……」

ライトはそのまましばらく動かなかった。だが、真一たちから感じる雰囲気を感じ、恐る恐る手を伸ばしていく。まるで見えているように真つ直ぐ近寄っていく手を見ながら、真一はあることに気づいた。

「あ……」

思わず小さく声を上げる。それに反応しライトの手が止まった。

ライトが血に触れてしまったら、契約者が自分ではなくなってしまうのではないか。そんな予感がしたのだ。が、ヨウがそれを見透かしたようにふつと鼻で笑って見せた。

「大丈夫じゃ。一度契約した者は、他の使魔とは契約できん。それも知らんで……ライトに治療を頼もうとしとったんか」

「……うっせえ」

二人の会話に、ふふ、とライトは声を漏らすと再び手を伸ばした。そして、ライトの指が血で染まるヨウの服に触れた。

腹部に近いところだったためか、血が乾き切っていなかった。いきなりの冷たい感覚に驚き手が一瞬離れた。が、もう一度手を伸ばし丹念にヨウの身体を調べていく。

最初にヨウの頬に触れた。ライトの手のひらでも、簡単に納まってしまうほどの小さな顔。虚ろな目と青白い顔。見る限り体調が良いととは思えない。ライトはそれらを見ることができなかったが、手のひらを頬に添えたまま眉をひそめていた。

手のひらは頬を離れ細い腕を伝っていく。袖も出血のせいで、血で染まり上がっている。ヨウの両手は腹部に添えられたまま、今でも弱々しい青い光を放ち続けていた。何かを感じたのかライトの眉がぴくつと動く。

「ヨウさん！　こんな状態で回復魔術は危険です！　すぐにやめてください！」

そう叫ぶと、ライトはすぐさまヨウの手のひらをぎゅっと握りしめた。すると、ヨウの両手から青白い光が消え、腹部の傷が露わとなった。やはり傷は開いたままで、生々しい刺し傷となってい

る。

「……すまんの。ライト、治療お願いできるかの……」

「もちろんです。もう無理しないでくださいね」

口元を緩ませ微笑むライト。白いローブに黄色のおかつぱ頭。一見頼りなさそうに見えるライトも、今の真一にとっては女神のように見えた。

「はあ、はあ……」

リオは激しく肩を上下させ、真正面に立つ仮面の男を睨みつけた。マスクは汗一つ流すことなく、涼しい表情でリオを眺めている。一方でリオの状況は芳しくない。ローブのあちこちは切り裂かれ、露出している腕と足には生々しい切り傷がいくつもある。リオの表情にも疲労の色が濃く、今でも槍を支えに立っているほどだった。

「くっ……！」

それでもリオは踏ん張り槍を構えた。そして目を閉じ意識を音に集中する。

「貴様もしぶといな。さつさと死ねばいいものを」

マスクの言葉にもリオは動じなかった。

目を閉じ、自分の世界に集中する。真っ暗な世界に、少し前に人の気配を感じた。間違いなくマスクである。問題は上空にいる小さな気配。見えずとも凄まじい殺気を感じる。強い恨みを持ち、本気で殺そうと思っっているようだ。何度も実践を重ねてきたリオでさえ、これほどまでの殺気は今まで感じたことはなかった。

しかし、相手は簡単に殺そうとは思っていない。身体につけられた切り傷は全て、その小さな気配からのものだった。

弄もてあそんでいるのだ。リオは見えない故に避けるだけで精一杯。さらにはマスクも同時に攻撃を仕掛けてくる。ならば、見えるマスクだけでもと思うが、邪魔するかのようになりオを切り裂く。先ほどから

ずっとこの調子だった。まるで一人舞台のように、リオは血を流しながら舞っている。息切れが激しく身体全体が鉛のように重い。

目を閉じたリオを尻目に、マスクは空を見上げた。

「トグ。いつまで遊ぶつもりだ？俺たちの目的はエルモ人ではない。ヨウを回収することだろう」

余裕が伺える言葉にリオは眉をひそめた。しかし、それは明らかに見えない相手に向けての言葉である。そのまま黙ったまま様子を伺った。

「わかつている。だが、目の前に現れたエルモ人を放っておくほど、俺は平和主義者ではない」

一方で、トグは鋭い視線のまま見下ろしていた。両手には短剣を握り締めている。金色の髪はほのかに逆立ち、小さな身体の周りにはゆらゆらと黒い空間ができていた。

じつと見上げていたマスクも、その姿にため息を漏らした。

「……ではお前一人でやっている。俺は任務を遂行する」
リオがぱつと目を見開く。

「待て！絶対にシンの所には行かせん！」
「愚かな」

ふいつと顔を背けると、マスクはリオの横を通り抜け走り去っていく。見れば、真一が去った後の草が少し倒れ周りと少し違うものとなっていた。その先を見れば小さく何かが見える。身体は草に隠れているものの、隙間から影が見えた。真一たちに間違いない。

そう思い、マスクの後を追いかけようとした。その時だった。足元に気配を感じた。行く手を遮るように殺気立っている。それでも一歩踏み出した。危険と感じながらも、頭の中は止めるという行為しか浮かばなかった。が、しかし。

突如足の脛に激痛が走った。と同時に何かが折れるような音も小さく響く。踏ん張っていた足は一気に力が抜け、それと同時に痛さ一気に沸き上がる。

「っー」

悶絶し崩れるようにその場に倒れた。脛が真っ青に膨れ上がっている。

痛さを堪えるように歯を食いしばるが、痛みはより激しさを増す。痛さの分だけ槍を強く握り締める。そんなリオに容赦なく、トグは次なる攻撃を仕掛けた。

ライトは黙々と両手から青い光を放っている。ヨウの紺色の服に染み渡っていた血はなくなり、元の状態へと戻っている。残るは刺された腹部の傷。青い光を通してでも、未だに鮮血が滲み出ている。「大丈夫か？」

真一はちらりと視線を上げた。ライトは眉をしかめ集中しているようだ。額からは汗が流れ、召喚したときよりも疲労の色が伺える。魔術という行為が、どれほどの労力を必要とするのかわからない。が、重症の患者を元の状態に戻すことは、考えてみれば相当な労力である。

「も、もう少しです。絶対に治します……！」
ぐつと手に力を込め集中するライトの姿に、真一はそれ以上の言葉をかけなかった。

「……悪いな」

真一はライトの体調を聞いたつもりだったが、本人はヨウのことと勘違いしているらしい。真一は何気なく元いた場所に目を移した。リオが気になっていた。身体能力は明らかに上。それでも、マスクとトグが相手では不安を覚える。もし、マスクがこの場に姿を現したなら、リオの身に何かしらの異変があったということだ。

じつと遠くを眺めていると、妙な胸騒ぎがした。何の確証もないが、嫌な予感がする。

真一は再びヨウに目を落とした。先ほどよりは、顔色も優れ腹部の傷も小さくなってきている。ちらりと視線を上げれば、ライ

トがひたすら回復魔術を施している。ヨウが快復するのも時間の問題だろう。

「ライト」

真一の呼びかけに、ライトが顔を向ける。

「ちよつと気になることがあるんだ。わりいけどちよつと行って見てくる。……治療が終わったらここでじっとしててくれ」

そう言つと真一は弓を握り締め、元いた場所に向き直った。ここまで来た道のりが、草が倒れ細い道のようになっている。これを辿れば元いた場所に戻れることが可能だった。

「あ、あの……何かあつたんですか？ どうしてヨウさんはこんなひどい怪我を……？」

ライトは不安そうに眉を八の字にしていた。目の見えないライトにしてみれば、余計に不安に感じるのかもしれない。が、説明をしている余裕はなかった。ヨウの治療も、リオの状況も一刻を争うもの。真一はゆつくりと立ち上がると、ぽんつとライトの頭に手を置いた。

「大丈夫だ。その代わりにここから絶対に動くんじゃねえぞ。……そいつの治療よろしくな」

そう言い残し、真一は低い体勢で草原の中を再び走りだした。

残されたライトは一人黙々と回復魔術を施していた。ヨウは寝息を立て眠っている。疲れているのだらうと思ひ、ライトは起こすこととはしなかった。

ありつたけの魔力を注いだおかげか、ヨウの傷はほとんど癒えていた。といつても見て確認したわけではない。手から伝わる青い光は、伝わる情報をそのまま自身に送り込まれる。なので、見えずとも治療は可能だった。後はヨウの体力回復のみ。その手助けのため、ライトは自らの魔力を分け与えている。

それを続けながらライトはふうと息を吐いた。そのまま顔を上へ向ければ暖かな日差しを感じる。そこへ風が吹き抜け草が揺れる音が聞こえた。

心が空になるような、のどかな光景がライトの頭に浮かんだ。町は人の声が絶え間なく聞こえ、風の音など聞こえることもない。それが今、風が草を楽器に音楽を奏でている。新鮮な情景にライトの胸は高鳴った。

この草原の向こうには何があるのだろうか。寝ころび空を仰げば、どれほど心地よいだろう。空と草原はどんな表情で自分を迎えてくれるだろう。

そう考えたところで、ライトは顔を地面へと伏せた。所詮、無理な願いだった。盲目であるライトにとって、風景や情景はあくまで偽物でしかない。いくら想像しえど、本物の風景に巡り合うことは二度とない。想像すればするほど虚しさを感じた。

ライトは再び顔を上空へと向ける。きつと空に太陽がさんさんと照り付けている。皆平等に光と暖を与え、一日の様子を見守っている。

平等には自分も含まれているのだ。見えずとも感じることはできる。見えない分、その点が優れているのだと思ひ込む。そう思えば自然と前向きになれた。

「……おや。これはこれは、ライト様」

突然の呼びかけ。真一ではない声が、すぐ近くから聞こえた。

【第四章 山岳の町ガナオン】交換条件

揺れる草原の中に、男が一人佇んでいる。薄く笑みをこぼすその男。顔に半面の白い仮面、逆立った紫の短髪。マスクである。

ライトは姿こそ見えないが、声を頼りに記憶を遡っていく。

「貴方は……マスクさん、ですか？」

「おっしゃる通り。お久しぶりですね」

そう言うのと、つかつかと歩き近づいていく。

「こんな所でライト様に会えるとは光栄です。時にライト様、一体何をされていらっしゃる？」

「えっ、あ、あの……」

威圧するような声色にライトは嫌な予感がした。回復魔術をやめ咄嗟にヨウを抱える。そして隠すように背を向けそのまま身を固めた。

ライトの行動に、マスクは足を止めふうと長い息を吐いた。

「……ライト様。貴方がいるということは、大方ハギノに召喚されたのでしょうか？　そして腕の中にいるのはその使魔だ」

すでにヨウがいることはばれている。嘘を付き通すことはできないと考えたライトは、ゆっくりと正面に向き合った。

「……だ、だったら何だというんですか？」

「その使魔をこちらへよこしてほしいのです」

その言葉に息を呑んだ。

マスクが真一の友人であるとは知っている。だが、真一とは違い信用できなかった。声は人の弱みを探るかのように聞こえ、感じる空間の歪みは人をも潰すような重々しいもの。

ライトから見れば、感情を一切受け付けない冷血な人間にしか感じられなかった。そんな人間に弱ったヨウを渡すこと絶対にできない。ましてやヨウは真一から預かっている。渡してしまえば、真一を裏切ること一緒だろう。

ライトは黙ったままその場から動こうとはしなかった。震える身体を必死に抑え、強くヨウを抱きしめている。

「……渡すつもりはない、ということですか」

ため息交じりの声が聞こえた。そんな声に震えがひどくなる。正直なところ怖くてたまらない。

これからどうなってしまうのか、ヨウを守ることができるのか考えれば考えるほど、足は地面に根付いたように固まった。恐怖に負け気を抜いてしまえば、そのまま地面に倒れ込みそうである。それを必死に堪えライトはひたすら気を張った。真一が帰ってくる信じても。

「では渡す代わりに……貴方の目を治す、というのはいかがですか？」

思考が止まる。

今なんと言った？

「私はイシャイナーです。どんな病気であれ、治す自信がありますよ」

頭が真っ白になった。

一瞬にして震えが止まる。息詰まり苦しくなる胸を何とか吐き出し、絞り出すように声を出す。

「う、嘘……。私の目は、父上ですら治すことができないんですよ？ それを貴方が治せるなんて……」

それでも動揺を隠しきれず、指先の震えが止まらない。

統治者であるシトモンは、回復魔術を扱う人間の中で一番優れた人間である。それでも、ライトの盲目を治すことは不可能だった。

落胆するシトモンの声は、当時のままライトの頭の中に焼き付いている。涙声で何度も謝る父。そんな声を聞きながらライト自身も涙を流し、もう見えないという現実と向き合った。

「貴方の目は治りますよ」

平然と言つてのけるマスク。心臓の鼓動が身体全体を揺らしている。

「ほ、本当……ですか？」

声が震えた。

そんなライトを見下ろしながら、マスクはにやりと笑みを見せる。

「ええ。必ず」

断固たる自信が言葉に滲み出していた。

今渡してしまえば再び光を取り戻せるかもしれない。

耳元で悪魔が囁く。

渡してしまえばいい。

眩暈がした。

真つ暗な世界にライト一人が立っている。見渡す限りの黒、黒、

黒。どこを進んで今どこにいるのか、それさえもわからない闇の世界。

そんな世界に『治せる』という言葉が現れた。今まで誰一人として、口にしたことはない。ライト自身でさえも考えたことなどない。それが目の前に浮かんでいる。

どこにも根拠はないはずだった。それでもそれを信じたい自分がいる。それを掴んでこの闇を振り払いたい。

いつの間にか、強く抱きしめていた腕の力が抜けていた。ゆっくりと腕を身体から離していく。

その時だった。

「……ううん」

腕の中のヨウが本当に小さく唸り声を上げた。ライトははっとし

た。

今、何をしようとしていた？

「さあライト様。それを私に渡してください」

ライトは存在を確かめるようにヨウの顔に触れた。

しっとりとした肌、温かな小さな頬。　きつと、安心しきって

眠っているに違いない。

腕の中に収まるほどの小さな使魔。真一から託された使魔。

渡してはいけない。

再び自らの腕の中にぎゅっと抱きしめる。そして、深呼吸をす
とすつと顔を上げた。

「絶対に渡しません！　そのような嘘、わ、私は信じません！」

強く言い切ったものの、再びマスクに対する恐怖が身体を支配す
る。自然と身体が震え始めた。

「やはり信じてもらえませんか」

冷たく言い放つ言葉に、思わず身体がびくつと震える。

「では一度、体験していただきましょうか」

その言葉と同時に、草をかき分ける音が聞こえる。それはどん
どんライトに近づいていた。

逃げたい。そう思っても身体がすくみ、足が地面に張り付いたよ
うに動かない。腰が抜けそうになるのを堪え、ヨウを奪われないよ
う自分の腕の中で抱きしめる。顔を伏せ身体を固めた。

が　マスクの手が伸び、ライトの顎を掴むと無理やり顔を上げ
た。

「ライト様。貴方に少しだけ光を差し上げましょう」

そう言うと、ライトの目に冷たいものが触れた。それはマスクの
手のひらだった。驚き身を引こうとするも、顎を掴まれているので

動けない。ただひたすらヨウを強く抱きしめ、ライトは耐えるしかなかった。

「トウルメイ」

そうマスクが呟いた。魔術の詠唱　そう直感し、ライトはますます身を固めた。

だが、マスクの手が次第に温かみを持ち始める。固く閉ざしたライトの瞼をほぐすように、柔らかく心地よいものだった。すると、瞼の壁から光が漏れ始めた。何も映らないはずの壁に、ほのかな明かりが確かに見えたのだ。

「ライト様。目を開け確かめてください」

そう言うとマスクはライトから手を離れた。

離されてもライトの身体は固まったままだった。確かに瞼の向こうに光が見える。それだけで心臓が激しく脈打つ。自分自身を落ち着かせようと頭を俯かせる。それでも鼓動は止まらない。

ゆっくりと、ゆっくりと瞼の力を抜いていく。そして、固く閉ざされた瞼を開けた。

「あ……ああ」

そこには色彩のある世界があった。

腕の中に眠る金色の髪の少年。色を忘れかけた目に飛び込んできたのは、寝息を立て眠るヨウの寝顔と、足元に広がる緑色の波だった。

「ライト様、信じていただけましたか？」

視線を上げると、白い仮面をつけた男がいた。逆立つ紫の髪と、冷たい片目の視線。ライトよりも身長が高く、見下ろすように口元を緩め笑みを見せていた。

しかし、ライトはさほど驚かなかった。それよりも、久しぶりに感じる色彩に胸が熱くなる。

一面に広がる緑色の草原。腕の中に眠る金色の髪。

目の前に立つ紫色の髪と白い仮面。草原の中に浮かぶ水色の服。

空を見上げれば、青色の中に光輝く太陽。

強い日差しに目を細めるライトに、太陽は躊躇うことなく光を降り注ぐ。

目に飛び込んできたのは、紛れもない色のある世界。

マスクに視線を戻すライトの目に、自然と涙が溢れていた。

「し、信じられません……。こんなにも……。こんなにも眩しい世界だったなんて」

「ふふ。喜んでいただけただようですね。……。それにライト様。やはり貴方は目を開けられた方が美しい。きっと八ギノも貴方に見惚れてしまうでしょう」

どきつと心臓が動いた。今なら、一番見たい人の顔も見ることができる。感じることでしかわからなかった存在も、今はつきりと確かめることができるのだ。

一瞬表情が和らぐライトだったが、マスクは言葉を続けた。

「しかしながら、その効力は一瞬です。すぐにまた、貴方は闇の世界へと戻られる」

「ど、どうしてですか!」

「申したはずですが? 私は、その使魔と交換条件で貴方の治療をすると言ったのです。今一瞬見えるようにしたのは、事実だとライト様に教えるためのもの。勘違いしないでいただきたい」

「そ、そんな……!」

一転、地獄へ突き落とされた気分となった。そんな様子のライトを見て、ふつとマスクは鼻で笑っている。

「さあ、どうされますか? それを渡していただくだけで、ライト様の目は完治できるんです」

目の前がぐらりと歪んでいくような気がした。動揺を隠しきれず視線が泳ぐ。

彷徨った末、行きついたのは腕の中にいるヨウの寝顔だった。

思った以上に幼い顔である。人間よりも遥かに小さな身体。その

寝顔はまるで天使だった。

「どうして……。なぜヨウさんをほしがるのですか？ 理由を聞かせてください」

その時だった。

「っ！」

突然目に激痛が走る。

思わず目を瞑り手で押さえる。頭に走るような激痛に耐えながら、再びマスクを見据えた。しかし、ぼやけていた。はつきりと見えていた光が弱まっている。

「なぜか……。それを言えば、私は貴方を殺さねばならなくなる。ライト様、私が今問うているのは渡すか渡さないかの二択ですよ」
薄く笑うマスクの顔が霞み始めた。徐々に視界が狭まっている。再び闇が待っているのは確かだった。

視界がどんどんと霞み狭まっていく。目の前に闇が迫りくる恐怖と焦りが、ライトを再び惑わし錯乱させた。

渡してしまえば光を与えられる。光が再び灯れば、また新たな日々を送れるかもしれない。

見たかったものが、自分の目で見る事ができる。もう二度と闇に覆われた世界に戻ることはないのだ。

強く抱きしめていたヨウを少しずつ身体から離していく。規則正しい寝息もはるか遠くに聞こえた。

このまま光を失いたくない。

どうしようもない願望が頭を占めていた。それでも、ヨウと真一の声が脳裏を蘇る。

しかし 光を失うという絶望が、その手を止めることを許さなかった。

もう一度光が見たい。

ヨウがマスクの目の前に迫る　その時だった。突如、マスクが表情を歪めた。

「チツ。……ライト様、この話はまたにしましょう。私は行かねばならなくなりました」

「……え？」

びくつと驚くライト。一方で、マスクは顔を歪め後ろの遠くを睨みつけた。

そして顔だけ振り向くと、口元を緩め笑みを見せた。

「心配なさらないでください。私はいつでも貴方をお待ちしております。また会いましょう」

ぼんやりとする視界の中、最後に見たのは冷たく笑みを浮かべるマスクの顔だった。白い仮面が最後にはっきりと見え、それを最後に再び闇へと引き戻された。

ざあという草の揺れる音がした後、マスクの気配はなくなった。いないと確信すると、ライトは一気に脱力しその場にしゃがみこんだ。

震える手でヨウをゆっくりと横たわらせる。きつとあの天使のような寝顔のまま寝ているだろう。リズムよく寝息が聞こえていた。

それを聞きながら、再び瞼を閉じる。

見なければよかった。

その直後、静かに頬を一筋の涙が伝い落ちていった。

【第四章 山岳の町ガナオン】真一の矢

真一は来た道をそのまま戻ってはいなかった。途中、大きな光が見えたのだ。他に人気はない。

リオしか考えられなかった。焦る気持ちを落ち着かせながらも、急いで草原の中を駆け抜けて行く。

すると、うつすらと人影が見えた。遠くからでも見える赤い髪。そのすぐそばには煌めく槍も見える。

しかし様子がおかしい。槍にすぎるように立ち、構えている様子もない。またマスクの姿がなく、リオだけがそこにいるようだった。

「リオ！」

走りながらそう真一が叫ぶと、リオは驚いた顔でこちらを向いた。「シン！ 無事だったのか？」

草をかき分け、見えたリオの身体は傷だらけだった。とくにひどいのは足の脛で、真つ青に膨れ上がっている。槍で支える身体は震え今にも倒れそうだ。赤いローブはあちこちが切り裂かれ、腕や身体にも無数の切り傷があった。

「リオ……だ、大丈夫か？」

目を見開き驚く真一に対し、リオはぐつと背筋を伸ばして見せた。そして頬を緩ませ笑みを見せる。

「……なあに。ちよつとした不注意だ」

「無理すんなよ……ひどい怪我じゃねえか」

「大丈夫だ。それよりシンが無事でよかった……さつき仮面の男がそちらへ向かったので心配したんだ」

「マ、マスクが！」

慌てて真一は振り向く。風が草原を揺らしている。何事もなく静かな風景。しかし真一の胸騒ぎは止まらない。

もし、ライトがマスクに見つかってしまったとしたら……。

「シン！ 来るぞ！」

突然のリオの叫びにはつとし、正面に向き直す。

遠くから黒い光の球が迫ってくる。どす黒い球は小さな稲妻が走り、轟音と共に真っ直ぐ真一たちへ向かう。

「避ける！」

隣からリオの轟音にも負けない叫び声が聞こえた。その声に押されるように、真一は咄嗟に身体を横へと投げだした。その直後黒い光がすぐ横を通過する。その熱気が離れた真一の身にも届いた。

強く草の上に叩きつけられた真一は、痛みも忘れず元の位置を見た。

リオがいない。

草は黒く焦げ灰となっている。真一は立ち上がり呆然とその跡を見た。嫌な予感が胸を締め付ける。

「リオ……」

呆然と焦げた草に目を落としてみると、突然、日差しが遮られた。不思議に思った真一はすぐさま空を見上げた。

そこにはリオがいた。槍の柄の部分を下にし足が空に向いている。まるで高跳びの選手のように、空に高く舞い上がっていた。リオの表情に余裕などなく、歯を食いしばっているように見えた。青く腫れあがる脛に力はない。

その状態のまま槍を即座に持ち替えた。空に向いていた先端を地面へと向け、ぐっと槍を握り締める。そして、その状態のまま槍を真っ直ぐ草の中へと突き刺した。

ずどん、という小さな地響きがした。リオは震える腕を堪えながら、ゆっくりと足を地面へと下ろしていく。

真一はすぐさま立ち上がり、リオの元へと駆け寄った。

「む、無茶すんなよ！ あのまま地面に激突したらどうするつもりなんだよ！」

足をゆっくりと地面に下ろし、リオはなんとか着地をした。目を閉じ深呼吸を一、二度するとゆっくりと目を開けた。やはりどこか疲労の色が見える。そして、リオはそのまま己の足元に視線を落と

した。

「……こうでもしないと避けられないのさ。さつきからこんな調子だ。俺の足が効かないことをいいことに、あえて遠くから攻撃を仕掛けてくる。わざと避けるよう仕向けているようだ。　　大方俺が弱るのを待ってるんだろう」

真つ青に腫れ上がった脛。立っているのが不思議なほど痛々しいものだった。そんな脛をリオは唇を噛み締めながら、恨めしそうに見つめる。

何があつたんだ、と真一が口を開こうとした時だった。背中に殺気を感じぞくりと悪寒が走った。

慌てて振り返ると、小さな黒いオーラが見え空間が歪んでいる。その中に漆黒の羽根を持つ使魔がいた。

身体はどう見ても小さく、人形にしか見えない。だが、こちらを睨みつけている顔は子供や人形などではなかった。眉をしかめ憎々しげにこちらを睨みつけ、じつと目を合わせるだけで恐怖すら覚える。

「あいつはマスクの使魔……！」

口を開け驚いている真一に釣られ、リオもその方角を見てみた。確かに殺気を感じる。が、その正体まで見えなかった。見るだけで嫌な汗が流れ、大きな憎しみと殺気が肌に伝わる。

「……あそこにいるのか」

「ああ」

するとリオはぐつと歯を食いしばり、すがつていた槍を地面から離し始めた。足が痛いのか、身体全体が震えている。それでゆつくりと両手で槍を支え刃先をその方角へと向けた。

顔が痛さで歪んでいる。それでも口の端を持ち上げにやりと笑みを見せる。　　無茶だ。真一はそう思いやめさせようとした。

「お前が来たところで何も変わらん」

幼い声が耳に飛び込む。見れば冷めた目線を送るトグがいた。見下した眼差しのままなお続けた。

「貴様、ヨウの契約者であろう？ そのくせ、まともに魔術を扱えぬ。呆れたものだ、そのような奴が来ようと何の足しになるのか」
「なにに」

「そうか、エルモ人の後始末か。それならチキュウ人でもできようふん、と鼻で笑って見せた。

真一は自分でも顔が熱くなっていくのがわかった。ヨウと同じ使魔とは考えられない。持っている弓に力が入る。

「確かに、俺はお前たちみたいに魔術を自由に扱えねえよ。けどな、俺はお前が見えるんだよ！」

「見えたところでどうなる？ お前がエルモ人に教え逃げる間に、俺はすぐに追いつく。全くの無駄だ」

真一はにやりと口元を緩めた。そして懐に手を伸ばし、袋の中の粉を少し掴んだ。さらさらとした感触の良い粉。握る右手にぎゅつと力を込めた。

「誰が逃げるつつつた。俺をなめんじゃねえぞ」

少量の砂を握りながら、真一はあるものを想像した。

トトロイのように攻撃魔術も使えない。ライトのように怪我の治癒もできない。リオのように強い身体ではない。真一が唯一胸を張れるのは 弓道だった。

目を閉じる。愛用してきた矢はすでにない。だが、その矢は毎日のように目にしていた。思い出すことはたやすい。

銀色のシャフトに青い羽根。それが真一の矢だった。頭の中で鮮明に蘇る。すると手の中の砂が変化し始めた。熱い。砂は意思を持ったかのようにうねり始め、手の中で暴れだす。その瞬間真一はかっと思を開けた。

「インディションサモン！」

反応するかのように、手の内の砂は変化し熱い液体に変化する。銀色に光るその液体は握りこぶしから漏れ、真つ直ぐ横へと伸びて行く。形は矢そのものとなり、あっという間に真一の想像した通りの矢となった。

青色の羽根に銀色のシャフト。しかし、矢そのものから光が放たれている。それはまるで、リオの槍と同じ美しくも妖しい輝きだった。

「それは……俺がトトロイに渡した素材か！」

リオも矢に見とれていた。トグに向けられていた槍もいつの間にか下がり、リオを支える杖となっている。立つのも困難のように身体全体が震えていた。それでも顔だけは、ぼかんと矢を見つめ驚いている。

「リオ。お前はそこで休んでろ。俺がなんとかする」

真一はリオを目で制し、そのままトグを睨みつけた。トグの表情は変わらず、見下した目線で二人の様子を伺っている。真一も目を離すことなく、矢筒についていた袋からかけを取り出した。

「なんとかするって……。シン、戦うつもりなのか！」

真一は軽く跪くとささつと右手にかけをつけた。久しぶりにつけたかけは、しっくりと手になじむ。そして作り上げた矢をそのまま右手に持った。弓は左手に握り締め、真一は勢いよく立ち上がる。

「一矢で決める」

そのままトグに向かって身体を横に向ける。そして肩幅に足を開いた。

射法八節。上手になりたい、その一心で鍛錬してきた動作。

一つの動作、呼吸までもが真一の身体に染みついている。ゆっくりとした動作の中にも、独特の雰囲気を持つ弓道。弓を伝い矢を伝い、トグを見定める真一の瞳に迷いはなかった。

「愚か者。そのような遅い動作で　この俺を仕留められると思っているのか！」

トグの身体から放たれる黒い空間が、一気に広がった瞬間だった。真一に向かい一気に飛びかかってきた。

凄まじい殺気にリオも身震いをする。姿は見えない。それでも何かが確実に狙っている。戦い慣れたリオでさえも、動悸がし逃げろと身体が警笛を鳴らす。リオは注意を促そうと真一を横目で見る。

が 真一は違っていた。弓を引いている姿は美しかった。十字となつている弓と矢。狙いを定める真一の瞳に曇りはない。そこだけが異空間だった。

”バシユッ”

乾いた弦の音が鮮明に響いた。真一は右手を真つ直ぐ弦から離し、その反動で弓はくるりと左手の中で回る。真一の顔を身体だけが動かず、じつと黙視していた。

放たれた矢は虹色の残像を残し飛んでいく。向かうはトグ。真正面から向かうトグとぶつかり合おうとしていた。しかし。

「こんな棒、避けることなどたやすい！」

真つ直ぐ向かっていたトグは、矢を目の前にして上空へ高く舞い上がったのだ。にやりと口元を緩め真一を見下す。

「エルモ人ともども始末してやる！」

両手を広げそこから真つ黒な光が放たれた。リオもそれに気付き見上げた。真つ青の空に、黒い塊がこちらに向かつてきている。

「シン！ 何か来る！」

リオの言葉にも真一は反応しなかった。ただ、放たれた矢を見つめる。虹色の残像を伸ばし飛んでいる矢。トグに避けられたかと思われた。

しかし、突如矢が輝きを放った。

七色に発光するや否や、矢は止まり、再びトグに向かつて飛んでいった。駆け抜ける虹のように空を掛ける矢。襲わんとするトグに、迷うことなく先端を突き立てた。

「なっなんだと……！」

黒い空間が少しずつ縮まっていく。小さな背中には、その空間を吸収するかのように矢が輝きを放っていた。丁度トグの羽根の間に見事矢が突き刺さっている。トグは身体を震わせ、信じられない顔で矢を見ていた。

「避けたはずだ……それがなぜ！」

「さあな。ただ、当たってくれと念じただけ。……まあそれを言う

と先生に怒られそうだけどな

「ふざけた……ことを」

トグは力なくそう呟くと、草原の中へと落下した。すると背中に突き刺さった矢は、さらさらと再び粉へと戻っていく。そして残ったのは背中に残った小さな刺し傷のみだった。

それを見て真一はようやく弓を下ろした。そして足を元に戻し、気を失ったトグと向き合った。目を瞑る顔はヨウソツくりである。じっと地面に目を伏せる真一に釣られ、リオも視線を落とした。

「終わったのか？」

「ああ」

真一はそういう草むらに跪いた。トグを拾い上げようと手を伸ばす。

「待て」

聞き覚えのある声が響いた。低い声。真一とリオは一斉にその方を向いた。

そこにはいつの間にかマスクが立っていた。冷めた目線で二人を睨みつけ、腕組みをしている手のひらに力がこもっている。二人を目で牽制した後、視線を草むらへと落とした。

「トグをやったのか」

そう言うや否や、リオと真一の間突風が吹き抜ける。思わず顔を手で覆い隠した。

やがて風はやみ、二人とも手を下した。が、そこに倒れていたトグの姿がない。驚く真一たちだったが、背後に人の気配を感じた。

「……これではこちらが不利、か」

いきなりの声に驚き振り返ると、トグを腕に抱くマスクがいた。冷めた表情でトグを見下ろしている。

「い、いつの間に」

驚き固まる真一とリオ。すると、マスクが視線をすっと上げる。真っ直ぐ二人を見据えた。

「ハギノ。今回は見逃してやろう。だが、次会う時は死ぬ時だ。そ

れを忘れるな」

そう言い残すと、そのままふつと姿を消してしまった。

何事もなかったかのように、草原に風が吹き抜けていく。草の波が立ち、聞こえるのは風の音。広がる青空と太陽も、いつもと同じように日差しを届けていた。

【第四章 山岳の町ガナオン】新たな出発

腰の辺りまで伸びている草が、風によって揺れている。波のように揺れる中を、真一はリオの肩を持ちながら進んでいた。リオも片手に槍を杖代わりに、痛さを堪えながら懸命に歩いている。

マスクが消えた時、緊張の糸が切れたのか激痛が走った。脛が真っ青で膨れ上がっていたのだ。それを見て、慌ててライトの元へと歩き始めたのだった。

真一はもう一つ、ライトのことが気になっていた。先ほどのマスクに変った様子はなかった。しかしマスクがライトの元へ行ったのは間違いない。

ライトは無事なのか、ヨウは一体どうなったのか。不安だけが募る。急ぎたい気持ちを抑え、リオの歩調に合わせ草原を進んで行く。

「ライト！」

草原の中に黄色の髪が見えた。真一の叫び声に、その頭は立ち上がり姿を現した。

「シ、シンイチさん？ シンイチさんですか！」

ライトは口元を緩めほっとしている様子だった。胸元に両手を硬く握り締め、祈りを捧げていたかのように見える。

外傷もなく無事だったライトの姿に、真一もほっと息をついた。歩み寄りリオをゆっくりと座らせる。痛さのためか額には汗が滲んでいる。

すると、ライトが真一以外の気配に気づき、ぴくっと身体を震わせた。

「大丈夫。こいつは仲間だから」

「な、仲間？」

眉を八の字にし不安そうにしている。真一はリオを座らせた後、ライトに近寄りそっと肩に手を置いた。

「無事でよかった。心配してたんだ。……それで、また治療を頼みたいんだけど」

「え、え？」

座るよう促す真一に、ライトは素直に従う。ゆっくりと膝を折り曲げそのまま草の中に腰を下ろした。まだ警戒心の取れていないライオに対し、リオが頬を緩めそつと手を差しのばした。

「初めまして。俺はリオ。見ての通りエルモ人さ」

「は、初めまして。わ、私はライトと言います。えつと……」

ライトが手を無造作に動かしている。不思議そうに首をかしげるリオだったが、すぐさまはつとした表情となった。驚いた表情のまま真一に顔を向ける。指で目を差すリオに、真一は黙ったまま頷いて答えた。

「ライトか……よろしく」

リオは悲しげに微笑み、彷徨うライトの手を握り締める。突然触れられびくつとしたライトも、温かな手の感触ににっこりと微笑んで見せた。

そんな二人の様子を眺めながら、真一はふと草の中に視線を落とす。そこにヨウがいた。汚れていたローブは元通りとなり、血が流れていた腹部はその形跡すらない。真一はすぐに駆け寄り跪いた。

「治してくれたんだな！　ありがとう！」

「あ、い、いえ」

ぎこちない笑みだった。しかし、真一はライトを見上げることなくヨウをじつと見下ろした。

規則正しい寝息が聞こえている。暖かな日差しを受ける寝顔は、笑っているのではないかと思えるほど幸せそうだった。それを眺める真一に、自然とイライラが募っていく。

ライトは一生懸命治療をした。リオは負傷しながらトグやマスクの足止めをした。全て、ヨウのためである。それが、張本人が寝ている。

腹が立つた真一は握りこぶしを作ると、そのままヨウの頭へと振り下ろした。

「……いった!」

鈍い音とともに、ヨウが跳ね起きた。おでこを両手で押さえ真一を見上げる。

「何すんじゃない! もっと怪我人を労らんかい!」

「うつせえ! お前いつまで寝てんだよ!」

そんなやり取りにライトはくすくすと笑い声を漏らした。口元を手で覆い、頬を緩め笑っている。一方でリオは、真一の独り言にぽかんとした表情だった。

「ついでにお前に聞きたいことがある! ……ライト、悪りいんだけどリオを治療してやってくれ」

「え。あ、は、はい」

ヨウを掴むと、真一はライトたちよりも少し離れた場所へと歩き始めた。一方で、ライトは再び両手から青白い光を作り出す。それを目の当たりにしたりリオは、ぎょっとした表情を浮かべた。本当に治せるのか、という問いかけにライトは控えめに微笑み頷いて答えている。

ヨウは服の襟元を掴まれたまま、慥然とした表情で黙っていた。

真一は黙々と草をかき分け歩き進んでいく。

「シンイチ、何をするつもりじゃ……って」

真一の顔を見上げ文句を言おうとした。が、すぐに口を閉ざした。見上げたその顔は、眉間に皺を寄せ殺気に満ちた目をしたからである。そこで、ようやく足を止めた真一は、腕を真つ直ぐ前に伸ばしヨウを離した。

「そ、そんなに怒ることないじゃろう?」

「……」

「あいつらとの間に何があったのかも、あとでちゃんと説明する。じゃからそんなに睨むでない」

「はは、と笑いでごまかすヨウ。それを見て真一はふうとため息を漏らした。しかし、すぐにヨウの小さな頬を掴むと思いつきりつねった。」

「そんなこと当たり前だろうが！」

「わわ、わかった！ 痛いから離せ！」

離すとヨウの頬が赤く染まっていた。ヨウはそこを何度も摩る。

真一はそれを見ながら黙っていたが、ゆっくりと口を開いた。

「……俺が怒ってるのはそんなことじゃねえ」

「え？」

「どうして俺が死ぬとお前自身が死ぬって言わなかったんだよ」

はつとした表情でヨウの手が止まった。それでもなお真一は続ける。

「お前、ここまで来ても俺が信用ならねえのか。いつ俺に言うのかずっと黙ってたんだよ。なにお前は言う素振りさえ見せねえ。なのに、今回俺をかばうし……意味わかんねえんだよ！」

真一は口調こそ刺々しかったものの、ヨウを見る目はどこか悲しげだった。そんな表情をじっと見るヨウも申し訳なさそうに視線を落とす。

出会った当初、それこそ本当に自分の身を守るためだった。言わなかったのは、恐れ慄き前マスターまで届けることを放棄してしまわないため。一緒に旅をするのもそれが一番の目的だった。

しかし　ヨウの中で、その一番の目的が揺らぎ始めた。前マスターの場所に戻りたいのは変わらない。が、その運び役である真一がそれ以上の存在になりつつあった。

魔力がものを言うアラウの国。その中で真一は魔力もなければ魔術も知らない。もし、真一がアラウで生まれ育ったなら弱者として生活していたことだろう。

が、真一はそうではなかった。理由なく人を助け、アラウ人やエルモ人、王族さえも気にしない。全てを同じ人間として扱う姿に、ヨウの心も巻き込まれていた。その真一の心意気は、確実に魔力を

上げ力となっている。

そんな真一に、次第にヨウの考えが変わっていた。命のためではなく本当に守りたい存在　真一と一緒にいれば何かが変わる、そんな思いを抱くようになっていた。

「シンイチ…… すまんかったの」

ヨウは伏せていた視線を上げ、真っ直ぐ真一を見た。

「確かにシンイチの言う通り、お主が死ねばわしが死ぬことは事実じゃ。じゃが、言わなかったのは変な心配をかけたくなかったからじゃよ」

「…… 本当かよ」

「ああ。最初こそ、前マスターに届けてくれればそれだけでよかった。変に言って放棄されても困ると思つての。じゃが……今は違う。わしはこの命を捨ててもお主を守つてやる。……信じてくれるかの？」

真一はじつとヨウを見たまま、すぐに口を開かなかった。ヨウの目は嘘をついているようなものではない。何より本当に自分の命を守るためなら、危険を冒してまで助けないはずだ。

ヨウは不安げに真一を見つめている。幼い顔の小さな使魔。今にも泣きそうなその顔に、思わずふつと頬を緩めた。

「…… ばーか。お前が本当に守りたいのは前マスターだろ？　お前一人じゃ頼りねえから、俺も手伝つてやるよ」

にやりとそう言つと、ヨウの表情が見る見る明るくなっていく。そして、それを照れ隠すようにすぐさま真一の肩にしがみついた。

「当たり前じゃ！　シンイチ、何のためにアラウまでやってきたんじゃ？　全てわしのためじゃろう」

「…… あんまり調子乗んなよ」

軽くこつんと殴り、再びライトたちの元へと戻っていく。が、ヨウは殴られた頭を両手で押さえながらも、その顔は満面の笑みだった。

「……あれ、リオは？」

戻るとそこにはライト一人となっていた。ぽつんとライトは一人草むらに座り込み、真一の声に口元を緩め振り返る。

「リ、リオさんは召喚時間が切れて戻られました。それと、また何かあれば喚んでほしい、そう伝えてほしいと」

「そうか。……まともなお礼も言えなかったな」

真一はそういうと、ライトの隣に腰を下ろした。ようやく緊張がほぐれ、自然と大きく息を吐く。

「シンイチさん……大丈夫ですか？」

「え。ああ、大丈夫。ちよつと気が抜けただけ」

そう言つとちらりとライトへと視線を向けた。

真一自身も疲れてはいたが、おそらくライトも疲れているはずである。重症だったヨウとリオの二人に回復魔術を施したのだ。ライトは目を瞑つたまま、呆然と顔を伏せ考えているようにも見える。

なんとなくではあるが、ライトの様子がおかしい気がした。もしかすると、マスクと何かあったのかもしれない。

「ライト……マスクに会つたんだろ」

「えっ」

びくつとし怯えたような表情を浮かべた。それを真一は見逃さなかった。ぐつとライトの肩を掴む。

「何かあったのか？」

「あ、いえ、とくに何もされてません。だ、大丈夫です」

「あ。そ、そか……」

はは、と真一は笑いながら肩から手を離した。しかし、ライトの表情はまだ優れなかった。顔を伏せたまま、口を真一文字に結んでいる。

ヨウもそれを不審に思い、肩から離れライトの肩へと乗り移つた。「ライト。何か悩んでおるのかの？ わしは治療してもらつた身じや。遠慮せず言つてみ。相談ぐらい乗るぞ」

ヨウの屈託のない笑みに対し、ライトはすぐに口を開こうとはし

なかった。考え込み言うか言うまいか迷っているようだった。

「ライト……どうしたんだ？」

明らかに様子がおかしい。何か脅かされているのではないかと真一は思った。躊躇わずに襲ってきたマスクである。目の見えないライトとヨウしかいなかった時に、何もせず手を引くというのは考えにくい。

真一はちらりとヨウに視線を送った。何か聞いているのではないかと思っただからだ。が、ヨウは困った表情で頭を横に振っている。

「……ライト。何か、わしらには言いにくいことでもあったのかの？」

赤い瞳で心配そうに見つめるヨウ。そんな声に反応し、ライトはゆっくりと顔を上げる。

が、口をすぐに開こうとはしない。少し俯き加減に黙り込む。

マスクの言葉が、一度見た光が、ライトを惑わせていた。

温かく降り注ぐ日差し。色彩を放つ風景。久しぶりに見た人の顔。何もかもが今では体験できないことだった。

もう一度見たい。そして、今日の前にいる真一の顔を見たい。助けてくれた恩人、温もりのある手のひらと声を持つ人。

どんな顔をしているのだろう。どんな風景を見ているのだろう。私をどんな風に見ているのだろう。

一度は諦めた光。だが、まだ手に入る好機があるかもしれない。

それは　ヨウの受け渡し。あの小さな使魔を渡せば治すというマスクの言葉だった。

迷っている。

今を見逃してしまえば二度と治らないかもしれない。いや、治らないだろう。だとすれば　。

ライトは俯かせていた顔をゆっくりと上げる。口をゆっくりと開けながら、喉の奥から言葉を絞り出した。

「シ、シンイチさん……私を……私と一緒に連れて行ってください」
「……は？」

思わぬ言葉に、二人は顔を見合わせた。

「ライト。わしらと行くということは、当分の間シトモンには戻れんということじゃぞ？ 本気か？」

「はい、構いません」

真っ直ぐ顔を上げている。迷いはないという雰囲気である。

「ライト……だけど、道のりは長いんだぞ？ それにほとんど野宿だし……」

「大丈夫です。盲目である故、迷惑をかけてしまうことはわかっています。だけど一緒に行きたいんです。その分、私の回復魔術を使ってください。お願いします」

ライトは無造作に手を動かし、真一の手を掴んだ。ぎゅっと握りしめる細い手。

真一とヨウは戸惑った。再び顔を見合わせ、どうしてもものかと言葉に苦しんでいる。

「ら、ライト。知ってるか知らねえけど、今俺たち使魔討作戦っていうので狙われてるんだ。不意打ち食らうかもしれないし、それに巻き込まれる可能性もあるんだぞ」

ライトは不安そうに眉をしかめ、少し顔を背けた。しかし手をぎゅっと握りしめるとすぐに顔を上げる。

「それでも、それでも一緒に行きたいんです！ シンイチさん、お願いします！」

「う、うーん……困ったな」

困り顔の真一に変わり、肩に乗っていたヨウは真一へと移った。じっとライトを見つめている。

「ふむ、ライトは本気のようにじゃぞシンイチ」

おどおどした雰囲気もなく、自分の意志を通そうとしている。それを感じ取ったヨウは、ふうと息を吐くと頬を緩め真一を見た。

「一緒に行っても良いじゃろう。もし、危険が及んでもわしらが守

ればいいこと。それとも……シンイチはおなご一人も守れん男かの？」

「は？ んなわけねえだろ」

「じゃあええじゃろう。それより、もうすぐ時間が切れてしまうぞ。ライトが戻ってしまいう前に、召喚本のページにライトを触れさすんじゃ。そうすれば、戻ることなくここに留まることができる」

真一も言い返す言葉もなく、ふうと息を吐くと召喚本を取り出した。ヨウがライトに、大丈夫だ、と耳打ちをすると頬を赤らめ喜んだ。ライトの久しぶりの笑顔に、にやにやするヨウと思わず見入る真一。無理すんなよ、という言葉にライトは笑みをこぼしながら頷いた。

ライトは自分の落としたページに触れ、シトモンに戻ることもなくその場に留まった。そして真一の手につかれ、ライトは共に歩き出す。

三人の向かう先は、城下町オデイ。求めるは最後の証。新しく三人となったこの道に、一体何が待っているのだろうか。

【第四章 山岳の町ガナオン】新たな出発（後書き）

この話で第四章は終わりです。

次は幕間を挟んで、第五章が始まります。どうかお付き合いください。

主の部屋にて

広い部屋には本棚と机しかない。そこに、椅子に腰かける人物が一人。肘をつき、今か今かと報告を待っている。外は相変わらずの濃い霧が立ち込め、窓からアラウ城を見ることができなかった。暇を持って余していたが、報告の期待感がそれを相殺していた。

「……只今戻りました」

そこへ、ふっと人が現れた。すでに跪いた格好となっている。

主は身を乗り出し頬を緩ませた。

「待っていた。それで、始末はできましたか？」

主の声にその者は顔を上げた。顔半分に白い仮面をつけている男マスクである。が、視線は彷徨い、主と目を合わせようとはしなかった。視線を落したまま口を開く。

「残念ながら……失敗に終わりました」

「何！ お前とトグがいながら失敗？」

「申し訳ございません。……途中邪魔が入った上、トグが負傷しました故に……」

そう言っただけマスクは両手を差し出した。その中には気を失ったままのトグが倒れている。目を瞑ったまま、手をだらりと垂れ下げている。

「……何があつた？」

それを一瞥し、主は低い声で問いた。杖を握り締めている手の甲は、力が入っているのか血管が浮き上がっている。

それでもマスクは平常心を保ったまま、今度は真つ直くと主を見上げた。

「ヨウの契約者であるハギノシンイチが、召喚魔術により複数人を呼び寄せました。それらに応戦している最中に、トグは負傷した模様です」

「……お前は何をしていた」

「ライト様にある条件を出してありました」

そう言うと、マスクはトグを前に横たわらせた。一方で、主は思いもせぬ名前に驚き眉をひそめる。

「ライト？　ライトと言えば、シトモンの娘の名ではないか。……
どういうことだ？」

「ハギノは、ガナオン様、エルモ人、ライト様の三名を召喚しました。また、トグをやったのもハギノ。予想以上に力をつけてきているようです」

「……ガナオンにエルモ人か。アラウ国王に逆らうとはいいい度胸をしている。……まあ良い。で、ライト嬢に出した条件とは？」

「盲目を治す代わりにヨウをこちらによこせ、と」
すると主は一変、豪快に笑い始めた。

「あっはっはっ！　あのシトモンでさえも完治できんだ。それをお前が治すだと？　そのような条件誰も信じまい！」

静寂する部屋の中、その声だけが反響し響いている。それを顔色一つ変えずにマスクは見つめ続ける。

「……失礼ながらダツク様。同じことを言ったライト様に対し、少しの間光を与えました」

マスクの言葉に主は口を閉ざした。そしてじつとマスクを見下ろし沈黙する。疑い眼だった。真意を探るように睨みつける。

物音一つせず、重苦しい沈黙が部屋を支配する。マスクは決して目を逸らさなかった。主も顔色一つ変えない。が、ようやくゆっくりと口を開いた。

「私を除き回復魔術の極めた者はシトモンだ。それをお前が一瞬でも治しただと？　一体何をやった？」

その問いにマスクはポケットから小さな小瓶を取り出し、主に示した。

「これを使いました」

栓をした小さな小瓶。透明なガラスの中には何も無い。ただ、ぼんやりと淡く光っていた。

「奪った生命か。……行つた魔術はトウルメイか」

「おっしゃる通りでございます」

そう言つて頭を下げたマスクは、その小瓶を再びポケットの中へ忍び込ませる。そしてそのまま、頭を上げることなく主の言葉を待った。

「やはりお前は冷血に徹してはいない」

その言葉と共に大きなため息が漏れた。なお主は続ける。

「トウルメイは禁術だ。命を奪うことは一向に構わない。だが、それを他人に分け与えるという考えは無駄だ。生命はいわば最大の魔元素。四大魔元素とは別の全くの力なのだ。それをお前に教えたのは、私の部下として認められた故だ。意味がわかるか、マスク」

「はい」

「お前は私の手となり足となる者なのだ。その力を……」

主はそこで言葉を切ると、乱暴に椅子から立ち上がった。がたん、という大きく椅子が引かれる音が響く。

「他人に分け与えることなど言語道断！ 私を侮辱する行為に匹敵する！」

それでもマスクは頭を下げたまま微動だにしない。そこに、足音が忍び寄り真横までやってきた。見えた黒い革靴は、主その人である。

「マスクよ。お前の命を奪うことは造作もないことだ。しかし、お前にはこのトグを渡した故簡単には殺せん」

先端に赤い宝石をつけた杖が、真つ直ぐとトグに向けられた。そこから青白い光が帯び、やがてそれはトグ全体を包み込む。

強く光つたや否やすぐになくなり、トグがゆっくりと目を開いた。

「……ここは？」

「私の家だ」

はつとしたトグはすぐさま身体を起こした。見下ろす主を見上げ、そしてそのすぐ横で頭を下げているマスクに目をやった。

「……ヨウを逃して戻ったのか」

トグの問いかけにも、マスクは何も言わず動かなかった。

「俺のせいで戻ったのだろう？ 愚かな……」

小さく舌打ちをすると、そのままトグは浮き上がった。そして主の真正面で浮遊する。

「ダツク、今回は俺のせいだ。エルモ人にカツとなってしまうた。

その結果がこれだ」

「……ほう」

「俺はマスクに貸しができた。もし、マスクに対し何らか罰を与えられるつもりなら俺にやれ」

マスクは驚きすぐさま顔を上げた。冷めた顔でダツクと対面するトグがいる。一方で主は不機嫌そうに顔をしかめていた。

「トグ。心までマスクの契約者に成り下がったか」

「違う。俺は貸し借りが嫌いなだけ。俺は俺だ」

しばらく睨み合いが続いたが、突然、主がふつと鼻で笑った。すると、そのまま椅子に戻り再び腰かける。

「……立てマスクよ」

言われた通り立ち上がる。主は椅子に肘をつき、にやりと口の端を持ち上げていた。

「トグの心意気を買ひ、今回は見逃してやろう」

マスクは表情を変えず、真っ直ぐ主に視線を送る。

「それにお前は使魔掃討作戦の責任者。引き続きその公務に携わってもらおう」

「かしこまりました。……ヨウはいかがされますか」

「放っておきなさい。こちらに向かっているならば、向かわせれば良い。記憶が戻ろうとも、姫がいる限り意味はない。それに、力をつけてきているとは言え使魔の契約者は異星人。私の魔力に叶うことはない。……むしろ、姫の目の前で惨状を見せるのも一興だろう」

窓に雨が当たる音が響き始める。静寂する部屋の中、雨音が音楽のように流れ始めた。

確かに、とマスクは思った。この方に比べれば自分は冷血などで

はない。もしあの時、主が同じ状況に置かれていたなら、ためらうことなくヨウを奪い去っただろう。マスクの中で、やはり女だという躊躇いが生じていた。同じイシャイナーであるライト。そして、同じではないにしろ障害を持つ同士。片目だけでも世界が拝めるマスクより、ライトはその世界さえも失っている。

同情していたのだ。単なる気まぐれだ　とマスクは思う。ヨウさえ手に入れば良い。それさえできれば、万事がうまくいく。

「かしこまりました。では、失礼いたします」

マスクは腰を折りおじぎをした。そして白い仮面に手を伸ばし、それを取り外す。黒い穴。そこにためらうことなくトグが中へと入った。それを見計らい再び白い仮面をつける。

すると、身体が軽くなりすつと目の前が暗くなった。トグが移動魔術をしたからである。どこへ向かうのか、答えはすぐに思いつく。

「城下町オデイか」

トグは黙ったままだったが、マスクはそれを肯定と受け取った。主からは放っておけと言われたが、どうやらやはり気になるらしい。それはマスクも同じだった。

「だが、手は出さな。ダツク様の命令は絶対だ」

「……ふん」

ふつと重力を感じた。それと同時に目の前が明るくなる。そこは綺麗に舗装された道の真ん中だった。行き交う人は多く、マスクたちの出現にも動じる者はいない。そのままマスクは人ごみの中に紛れた。

すれ違ふ度、人々は驚き少し身を引いていく。しかし、マスクは堂々と歩いた。マスクの中に感情はほとんど残ってはいなかった。他人からどう思われようが関係ない、己を必要としてくれる主だけ従っていれば良いのだ、と考える。

と、ちらちらと視線を感じその方へ視線を流した。すると相手は驚いたようにすぐ顔を背けた。

じつと睨みつけた後、また正面を向き直す。

愚かだ、と心の中で吐き捨てた。この白い仮面をつけるようになって、ますます人はくだらない生き物だと感じる。所詮、人は外見やその者にある身分や体裁にしか目がいかない。それが世間では受け入れがたいものだとすれば、人はそれを避け見て見ぬ振りをする。自分には関係ないものだと思いつける。 全てがくだらない。

立ち止まり、ため息交じりにふと空を見上げる。真つ青の空が広がっていた。

『こんなにも眩しい世界だったなんて』

ふとそんな言葉を思い出す。そう言ったのは誰だったか。まるで、今考えたことと逆の言葉である。マスクは自嘲気味に笑うと、再び歩き始め人ごみの中に消えて行った。

主の部屋にて (後書き)

次話から第五章が始まります。この先も、どうぞよろしく願います。

一応、今まで通り日曜日に更新をしたいと思っています。

……ですが、間に合わない場合があるかもしれません。その時はブログで報告しますのでご参照ください。なるべく、更新できるよう頑張ります。

いつもお読みいただきましてありがとうございます。――――*――<

【第五章 城下町オデイ】ヨウの記憶 1 (前書き)

第五章が始まります。どうかお付き合ってください。

なお、この話と次話はヨウの過去話となっております。

もしご興味がない方は、第五章の三話目から進行形の話となりますので、そちらからお願いします。> (| *) <

山岳の町ガナオンから山を下ると、どこまでも広がる草原がある。真一たちとマスクらが会ったのもここで、残された三人はその草原をただひたすら歩いた。

丈の高い草は、いつの間にか真一の胸のあたりまで伸びている。青臭い草の匂いは鼻にこびりつき、風に揺れる草は波のように見えた。日中は温かな気候も、日が沈めば肌寒い夜へと変貌する。街灯などない。ただ夜空に浮かぶのは、数えきれないほどの星。それらが淡い光を放ち、僅かながら真一たちの手元を照らしていた。

「そろそろ話してもいいんじゃないかねえのか」

そう言う真一の手には食パンがある。先ほど真一は四枚ある内の三枚を使って食パンを召喚した。柔らかい生地と香しい匂いが漂っている。どうやら味も失敗ではなかったようで、ヨウとライトも頬をほころばせながら食パンにかぶりついていた。

「……何がじゃ？」

とぼけた様子もなく、まん丸とした目をぱちぱちさせながらヨウは言った。

「とぼけんな。お前とマスクたちの関係だよ」

「ああ……そのことか」

すぐに言う素振りも見せず、黙って食パンにかぶりついている。その様子を真一はじつと睨む。

ライトも何か只ならぬ雰囲気を感じ取り、動かしていた口が止まった。

「……そうじゃの。じゃあ食べながらでも話そうかの……」

思い出すかのように、呆然と地面を見つめるヨウ。草が揺れる音が響く中、静かに語り始める。

「マスター。どうもおかしいと思わんか？」

そこはとある一室。窓は外から鉄格子があるものの、そこから眺める景色は美しい。ほとんど霧に囲まれたアラウ城ではあるが、晴れた日にはまるで空の上にいるかのように見えた。今日も空からは太陽が顔を出し、明るい日差しと温かな陽気を運んでいる。

「ヨウもそう思う？ 私もよ」

ヨウからマスターと言われた女 イツチ姫は、外に向けられた視線を肩に乗るヨウへと移した。

高い身長の割りに小さな顔。ぱつちりと開かれた瞳ではあるが、どこか凛々しく隙のない顔立ちである。長い黄色の髪を一つにまとめ、頭を動かすたびに艶やかに光る。

胴衣には鎖帷子のような丈夫で軽い服を着用し、背中には白いマントを羽織っている。また薄紅色のスカートは短く、それが特有の服装であった。

「父上がいきなりあんな政策を発表するだなんて……。確かに、民の生活は著しくくない。けれど、あんな政策では貧富の差が激しくなるだけよ」

政策 それはサモナー政策である。この時、アラウでは食糧難で苦しんでいた。

魔術のみで成り立つアラウにとって、作物を育てるという技術がなかった。そのため一般に食べ物の供給は、フェル草で作られる召喚魔術の食べ物のみである。

しかし、サモナーの数は少なかった。土魔元素を扱える者が元々少なく、それ以外であれば使魔と契約した者のみだったからである。また食糧難の背景に、現国王になってから戦争行わなくなったことも含まれていた。戦利品の減少、また、兵士たちの食糧確保のため、民に回される食糧が減ってしまったのだ。

「いっそ……軍なんてなくなってしまえばいいんだわ。父上なら、きつとエルモ国との話し合いで解決できる。それなのに……どうし

て軍にこだわるの？」

「国王の周りの連中が納得せんものじゃろう。……しかし、サモナー政策か。またわしらの血が流れるのか……」

悲しげに俯くヨウに、姫はそつと頬を寄せた。

奇しくも姫の予想は当たってしまつた。

サモナー政策が施行されて以降、貧富の差は広まる一方となつた。さらには、浮浪者や貧困者を対象に、無理やりサモナーの身分を与えられたことにより、サモナーに対する偏見の目が出始めたのだ。それは民ばかりに及ばず、統治者の一人ガナオンをも巻き込まれる形となつた。

「……姫。そんな顔をしないでください。私は気にしていませんから」

アラウ城の中、大会議室の間に姫とガナオンの姿があつた。

「けれど……サモナーに対する偏見の目だけで、どうして貴方が山岳の町へ行かなければならないの。不条理な話だわ」

姫はぐつと唇を噛み締め、申し訳なさそうに俯いた。そんな姫の肩に、ガナオンは優しく手を置いた。

「仕方ありません。城下町は一番アラウ城に近い都市。そんな都市を治める統治者がサモナーでは民の納得が得られない　　そうおっしゃつた国王の意見は正論です」

「……確かに民の考えを汲み取ることが、私たち王族の役目です。けれど……父上は貴方に事前の相談もしなかつた。……何かがおかしいのよ。ガナオン、貴方もそう感じないですか？」

ガナオンは姫をじつと見つめた後、ちらりと視線を後ろへとやつた。それに釣られ姫も後ろを振り向く。

「姫。私も……いえ、統治者たち全員が異変を感じ取っています。そして、その原因ではないかと思われる人物が一人……それがあの席の方です」

部屋には二人しかいない。がらんとする大きなテーブルの一番奥に、ひとときわ目立つ席がある。そこが国王が座る椅子である。その隣、統治者たちと変わらない椅子ではあるが、国王と肩を並べて座れる人物が一人だけ存在した。

「……ダック公爵、ですか」

椅子はあるが、一度も会議の場に顔を出したことはない。しかし、イツチ姫は何度か顔を見たことはあった。

赤い杖を持った老人である。白髪を肩まで伸ばし、目元は窪みいかに不健康そうな顔つきだった。挨拶をしに行った時、鋭く光る眼光に身震いをしたのを思い出す。

「私たち統治者は、誰一人としてお会いしたことはありません。国王から口伝えて紹介されたのみ。魔天族の方ですから、変に勘ぐるのも国王に対する非礼にあたりましょう。ですが、王族の一員である統治者の立場から言わせていただければ、魔天族の方の素性を知らないというのは気味が悪くて仕方ないのです。ましてやそれが国王様の出資者。……何か企みがあるのではないかと勘繰りたくもありません」

「……つまりガナオンの考えは、公爵が裏で絡んでいるのではないか、ということね」

空いた席を見つめながら、出会った時のことを思い出した。

いつ出会ったのかも知らない。いきなり国王が姫の部屋へ訪ね、『やつと莫大な資金を援助してくれる貴族が現れた。良き友にもなり得る素晴らしい人物だ』とにっこりと微笑んでいた。

初対面のこと　深々とおじぎをしてみせる姫に対し、ダック公爵も軽く会釈をし微笑んで見せていた。その隣には満足そうな顔をしている国王がいる。

二人は旧知の仲だったように、和気あいあいと雰囲気では話を楽しんでいた。

「……あの、姫。このことはどうか国王には……」

イツチ姫は呆然としていた意識をはっと戻し、再びガナオンの方

に向き直る。

すると、ガナオンは視線を泳がせながら苦笑いを浮かべていた。日頃見ないような表情に、姫は思わずふっと声を漏らす。

「大丈夫です。父上には言いません。……ガナオン。どうか元気でいつかヨウと二人で会いに行きましょう」

ちらりと肩に視線を送り、それに対しヨウは大きく頷いて見せる。嬉しそくに微笑む姫の表情だけがガナオンには見えた。幸せそうな姫の表情に、自然と顔がほころぶ。

「仲がよろしいようですね。イツチ姫様もどうかお元気で。いつでもお待ちしております。来られるまでに、山岳の町を立派な町へとして見せますわ」

「ええ楽しみにしています」

ガナオンは一礼すると、部屋に姫を残し出て行った。

日に日にダック公爵に対する疑念が強くなっていく。それと同時に、国王は自ら発表したサモナー政策の現状を知り、徐々に体調を崩していた。姫たちは心配し何度も部屋に足を運ぶが、国王は姫の前では気丈に振る舞った。ダック公爵について聞いても『彼は私を気遣ってくれる。本当に良き友だ』と疑う様子もなく、目を細め微笑むばかりであった。

「……ヨウ。私はどうすればいいの？」

夜明け前 部屋にまだ日は届かず、小さな炎の明りが一つ灯っているだけである。机の上、淡く光る炎を見つめながら、姫は呆然と耽っていた。

「民の生活も著しくくない。その上サモナーや貴方がた使魔の血も、今だって流れているかもしれない。確かに以前よりも食糧の確保はできている。けれど、その犠牲になっている人だって大勢いる……。もしかしたら、本当に潤っているのはごく一部の民だけかもしれない。どうにかできるのは父上だけ……。けれど……」

瘦せこけた顔色の悪い国王の顔が浮かぶ。苦しそうな咳を繰り返して、それでも心配させまいとして笑顔を作る。その笑顔が姫の胸を締め付けていた。

「……あんな状態じゃ民の前に出ることさえできないわ。民も父上も苦しんでいるなんておかしい……」

握りこぶしをおでこにつけ、姫は唇を噛んだ。ヨウは顔をしかめ姫を見つめる。

「マスター、もういつその事……サモナー政策をやめるよう進言したらどうじゃ？」

姫の顔がふつと真顔に戻る。そして顔を上げ机の上に座るヨウを見た。

「サモナー政策を……。そうよ、そうだわ。あの頃から父上の様子がおかしかったのよ」

「じゃろう。国王が体調を崩されておるのも、そのサモナー政策が原因じゃ。ならば、その原因を取り払ってしまえいだけのことじゃ」

しっかりと視線で頷く姫。二人は陽が昇るのも待たずに部屋を出た。

廊下も点々と灯る灯りのみで薄暗い。窓に視線を送れば、薄らと白い霧が見えるのみ。物音一つしない。昼間とは違った雰囲気がある。

国王の部屋に行く途中だった。突然目の前に人の気配を感じた。

暗い廊下の奥　静かに足音が近づいてくる。兵士ならば気にする必要もない　そう思った。しかし、姿を見せたのは思いもよらぬ人物だった。

「おはようございます、イツチ姫様。このような時間にお会いするとは……いやはや驚きました」

どんよりと鈍く光る眼光。杖を片手に歩く黒いローブ。歳を感じる風貌ながら、背筋はぴんとしていた。

「ダ、ダック公爵……。おはようございます。私も驚きました」

姫は動揺しながらも、にっこりと笑顔を作った。一方でヨウは鋭い目のまま警戒を強める。現れたのはダック公爵だけではなかった。

「公爵。その隣にいらっしやる方は……？」

「ああ、こやつは私の使用人……。部下ですよ。気になさらないでください」

隣に、白い仮面をつけた奇妙な男と見慣れた使魔 トグがいた。しかし、二人は姫を目の前にしても無然とした表情で挨拶もしない。ただ無表情のまま姫をじつと見ているだけだった。

見たところ王族特有の髪色でもない。一般の者が姫を前に挨拶もない。非礼の行為にヨウは二人を睨みつける。

「トグ。貴様、わしのマスターに挨拶もせんつもりか。国王の姫君じゃぞ」

「だから何だ？ 俺は使魔だ。人間の国王など関係ない」

さらりと言つてのけるトグ。その顔は無表情で冷たい視線だけを送っている。隣に立つ男も同じで、無言のまま姫をじつと見ているだけだった。

「ところでイツチ姫様。こんな早い時間にどちらへ行かれるのですか？」

ヨウが口を開こうとした時、丁度ダック公爵が割って入った。にやりと口元を緩め笑っている。

「父上の元へ。公爵こそどちらへ？」

「私は国王の所から帰ってきたところです。国王は今ご就寝されたばかりだ、行かれない方が良いでしょう」

ダック公爵は一步踏み出した。

「ささ、部屋へお戻りください。こんな早い時間から出歩いていては、兵士たちも困りましょう。それとも、何か国王に事伝えがあるのであれば、私から伝えておきましょうか？」

姫の肩に手を伸ばす。が、それを姫は振り払い鋭い視線を向けた。

「いいえ。父上に直接訴えたいのです。寝ていようが起きていようが関係ありません」

「ほお、さようでございますか。して、イツチ姫様がそれほどまでに訴えたいことは一体何でしょうか？」

「それは公爵には関係のないことです」

「いえいえ、関係ありません。私は国王の友　出資者であります。互いに民のため知恵を振り絞る故に、いかなる情報も手に入れておきたいのです」

友という言葉に、姫とヨウが眉をひそめる一方で、ダック公爵はにやりと笑っている。

窪んだ眼の奥、何か邪な考えが見え隠れするようなそんな笑みだった。

姫はその目から逃げるように視線を逸らし、ぐっと唇を噛み締めた。いくら素性が怪しいとは言え魔天族。国王と協力する立場であることには変わりはない。姫は少し間を空け、先ほどよりも小さな声で目を合わすことなく言った。

「……サモナー政策について、父上に進言したいことがあるのです。びくつとダック公爵の眉が動く。

「イツチ姫様。一体何を進言なさろうとしているのですか？　サモナー政策は今、この国を支えているのですよ。それをまさか……やめるとでもおっしゃるつもりですか？」

「支えている？」

逸らしていた視線をダック公爵へと戻した。

「確かに食糧は確保されつつあるでしょう。しかし、民の間に貧富の差が広がりがりつつあります。サモナーに無理やりさせられた民や元々サモナーだった者たちは、その巻き添えになっています。サモナー政策に欠かせない使魔だつてそうでしょう。潤っているのはごく一部……そんな政策がこの国を支えているとおっしゃるのですか」

ぐっと握りこぶしを作り、目はしっかりとダック公爵に向けられ

ている。半ば睨みつけているように見ていたが、ダック公爵はふつと口元を緩めた。

「……イツチ姫様の考えはよくわかりました。しかし……それを国王に進言するのはやめなさい」

すつとその場に霧困気が変わった。姫も感じたのか、思わず一歩身を引く。

「サモナー政策はアラウ国のための政策に間違いはないのですよ。現に、食糧難だったのにも関わらず、兵士の食糧を確保できその上に民にも流通されている。アラウは魔術がものを言う国だ。食糧も魔術で補わなければならない。イツチ姫様、皆が幸せ、なんていう甘い考えは通用しないのです。誰かを犠牲にしなければ、困難に立ち向かえることは不可能。サモナー政策はまさにそれです。一部のサモナーや貧困者浮浪者のおかげで、この国はまた持ち上がった。貧困者や浮浪者は今までは社会に何の役にも立たなかった。それがこの政策によって役立つている。……考えてみなさい、もしサモナー政策をやめてしまえば、再びその者たちが放り出されてしまう。そして、また食糧難だ。戦争は休戦しているが、もし国内で食糧を巡って戦いが始まったらどうするおつもりですか？」

息つく間もない言葉に、啞然とした表情を浮かべた。それを見たダック公爵がなお続ける。

「よくわかっていらっしやらないようですね。つまり、サモナー政策はもう引くに引けないものとなったのですよ」

目を見開いた顔がぐつと近づいた。肩まで伸びる白髪と、顔に刻まれた皺が歳を物語っている。そしてそれらが、有無をも言わさない霧困気を助長させていた。見るからに歳をとった老人にしか見えないが、何か狂人的なものを感じさせられる。これ以上の口応えは許さない。身体全身から訴えているようだった。

「つまり……父上に進言をするな、とおっしゃっているのですね」「とんでもない。ただ、そのようなことをおっしゃって国王を悩ませてほしくないのです。今体調を崩されているのは、イツチ姫様も

「ご存じでしょう」

はつとした表情で姫は息を呑んだ。ヨウも小さく舌打ちをした。確かに、サモナー政策をやめると言ってしまうえば、余計に国王を悩ますことは確実である。体調を崩した原因は間違いなくサモナー政策。だが、ダック公爵の言ったことも一理ある。二人は返す言葉がなく、視線を床に落とした。その様子に、トグのふっという鼻で笑う声があった。ダック公爵も、体勢を再び整えるのにやりと笑みをこぼした。

「さあ部屋へお戻りください。国王には私がついておりますから、ご安心ください」

立ちふさがるように立つダック公爵たちを目の前に、姫は無言のまま部屋へと戻って行った。

部屋に戻り椅子に腰かける。灯りもつけない部屋は薄暗く、しんとしている。まだ陽は昇ってはいないが、窓からの風景が少しずつ明るいものとなっていた。

「……このままでいいわけではない」

虚ろな表情で姫は呟いた。

「いづれにせよ、このままでは父上も民も傷が広がるばかり。ダック公爵の言ったことも一理あることは間違いない。だけど、先延ばしにしてしまえば本当にどうしようもなくなってしまう」

ぐっと拳に力を込めた。力で小さく震えている。それを見ながらヨウは口を開いた。

「ダック公爵、か。国王を友と言ったあの顔……どうにも胡散臭い。それに、進言しようとしたマスターを無理やりやめさせた気がせんでもない。……どうするんじゃ、マスター」

首をもたげ黙り込む。何かを思索しているようで、呆然と机に視線を落としていた。眉間に皺が寄り、厳しい表情が見て取れた。

「が、急に姫の表情がふつと戻る。」

「やめさせるわ」

そう言うと顔を上げた。何かを決心したような精悍な顔つきだった。

「じゃが……国王がそのことで悩むかもしれんぞ。それに、食糧難で内紛が起こることも否定できん」

「そうかもしれない。だけど、このままサモナー政策を放置してしまえば、貧富の差は広がるばかり。罪のないサモナーたちを放っておけない。内紛が起きてしまうのであれば、それを全力で鎮めるのが王族の務め。それに……」

そこで言葉を切り、ぎゅっと拳に力を込めた。

「食糧を確保するためなら……エルモ国に援助を求める手だってあるわ」

「え、エルモ国じゃと？ マスター、相手は敵対国じゃぞ！ ただで援助するわけがない！」

ヨウは立ち上がり姫を見上げる。その顔は真剣そのもので、視線を逸らすことなく姫を見つめていた。しかし、真っ直ぐと視線を伸ばす姫の横顔も迷いはなかった。

「その時は私の身を捧げる」

「な、なんじゃと！」

「アラウにあつてエルモにないものは魔術しかない。私一人の身で、幾人もの民が救われるのであれば……喜んで行くわ」

そう言つて、姫はヨウに視線を移し弱く微笑んで見せた。全てを受け入れる、そんな気持ちがあるその笑みから見て取れた。

ぐつとヨウは唇を噛み締める。姿が見えない自分が忌々しかった。目を伏せたまま、姫から顔を背けた。すると。

「……ヨウ。私はね、使魔たちも救いたいの」

透き通るような声だった。それにヨウの表情も和らぎ、思わず上を向いた。

「わがままで、自分でもわかつてる。けれど……ヨウとはこれからもずっと一緒にいたい」

薄暗い部屋の中、姫の瞳がしっかりと見えた。

「遠くへ行くことがあっても、私の元へ来てくれる？」

ヨウの返事に緊張しているのか、若干眉が寄り不安そうな表情に見えた。固唾をのみ返事を待っている。

先ほどとは全く違う表情に、ヨウは自然を頬を緩ませた。 答
えなど一つしかない。

「そんなの当たり前じゃ。その代わり、逃げられても追いかけるから！ 覚悟するんじゃない！」

そう言いヨウはぶいっと顔を姫から逸らした。どこか気恥ずかしかつた。しかし一方で、姫は段々と表情を和らげていく。

すると、ヨウを両腕で抱き寄せるとそのまま頬を寄せた。

「ありがとう、ヨウ」

赤く染まるヨウの頬を、部屋の薄暗さが隠していた。

三人が持っていた食パンはなくなり、頭上には無数の星が煌めいている。ヨウが話すその間、真一とライトは黙ったまま耳を傾けていた。

「……………でどうなったんだ」

無造作に足を伸ばしている真一。ライトは胸の辺りに手を合わせ、ヨウの話が夢中になって聞いている。

「ヨウさんの前契約者さんって、イチ姫様だったんですね……………」

お、驚きました」

ヨウはすつと夜空を見上げた。

「これを聞くとマスクに命を狙われるかもしれん。……………ライトええのかの？」

「はい。一緒に行くこと決めた以上、その覚悟はあります」

それを聞きヨウは再び視線を真一へと戻した。

「……………これから話すことは、絶対に他言するな。その者が命を狙われるかもしれん」

「するかよ。いいから、もったいぶらず話せ」

急かす真一という言葉にふっと鼻で笑うと、ヨウは視線を再び落とし再び語り始めた。

朝の食事。普段なら、姫と国王の二人が顔を合わせながら食べる。しかし、その日は国王の姿がなかった。使用人に話を聞けば、体調を崩し部屋で寝ている、とのことだった。

大きなテーブルに一人姫が座り、呆然と耽つていとそこへ扉が開く音が響く。

「おはようございます、イチチ姫様。国王の代わり　　と言つては何ですが、私がお食事を一緒にさせていただきます」

ダック公爵であった。にっこりと微笑んだまま、姫の真正面の席へと腰掛ける。

今まで朝の食事には顔を出したことはない。驚いたが何とか軽く会釈をし、さっそく食事が始まった。

「……たまにはいいですね、イチチ姫様とお食事というのも」
スープもすする音を出すこともなく、上品に飲んでいた。

いつもなら国王と姫が互いの近況を報告し合う時間だった。この時間だけが、立場を忘れただけの親子になる。それが、目の前にいるのは疑念を抱いている相手。話すこともなく、姫は黙々と出された食事を食べている。向かい合わせに座る相手が気になり、食事の味さえも曖昧だった。

「……先ほどの連れの方はどちらへ？」

さつき見た男と使魔の姿がなかった。さほど気にすることでもないが、重くのしかかる空気を取り払いたかった。

「ああ、一応あれでも使用人ですね。仕事をこなしていることでしょう」

その言葉に姫もそれ以上の言及はしなかった。

それよりも早く食事を平らげてしまい、と思った。机を挟んでい

るとは言え、ダック公爵と対面という状況は落ち着かない。どこか観察されているように感じた。

いつもよりも早く食を進め、姫はダック公爵よりも先に立ち上がる。

「ではお先に失礼します」

「おや、お早いですな」

おじぎをし、さっさと部屋から出て行く。ヨウは振り返りダック公爵を見た。変わった様子もなくスープを啜っている。表情からも何を考えているのかわからなかった。

しかし、それが逆にどこか心に引つ掛かり、妙な胸騒ぎがした。

いつもなら食事を終えると、すぐに部屋に戻っていた。が、今日は違う。姫の足は国王の部屋へと向かっていた。

「今ならダック公爵に邪魔されることはないわ。早く父上に会いましょう」

そう言いながら早歩きとなっている。広く長い廊下には兵士たちが間隔を空け立ち、姫が目の前を通り過ぎるたび頭を下げていた。姫はそれらに気を取られることなく、真つ直ぐ前を向いている。

出た部屋より、国王の部屋は城の最上部にある。その一つ下の階に姫の部屋があった。自分の部屋を通り過ぎ、階段までやって来た。その階段の前には警備の兵士が二人立ち並んでいる。二人は姫に一礼すると、止めることなく階段を開けた。その間を抜け、姫は螺旋状になった階段を上って行く。頑丈な石でできた階段からは、上るたびに足音が短く響いていた。

「……父上は起きていらっしやるかしら」

階段を上がると広い廊下に出た。しかし、他の階とは距離の短いもので、真正面に国王のいる部屋がある。左手には来賓を迎えるための部屋がある。

姫は迷うことなく、真正面の木製の扉へ向かい歩こうとする。その時だった。

「イツチ姫様。国王様は今、就寝中でございます」

突然左手の扉が開くと、そこからあの仮面の男が現れたのだ。

「姫とヨウは驚きの余り身を引いたが、すぐさま険しい表情となる。な、なぜこの部屋にいるのです！ 王族でもない者がここまで来るとは、一体どういう用件なのですか！」

「……ダック様からのご命令なのです。貴方を見張るようにと」

冷めた眼差しだった。男の隣には、薄く笑みをこぼすトグがいる。「トグ！ どういうことじゃ！」

ヨウは肩から離れ、姫よりも前に出る。

先ほどのダック公爵の様子といい、目の前にいる二人といい、まるで姫が国王に会うことを予想しているようだった。どうにも腑が落ちないヨウはなお言葉を続ける。

「それほどまで、姫が国王に進言するのを邪魔したいのかの！ 一体何を企んでおる！」

「さあ。ただ、今は国王とその女を会わすのは都合が悪いのだ……そうだろう、ダック」

トグの視線が後ろへと注がれる。それと同時に背中に悪寒が走った。慌てて振り返ると、そこには腕組みをしてにやりと笑うダック公爵がいた。

「……イツチ姫様。あれほど注意を促しましたのに従っていただけないとはい」

「ダ、ダック公爵！ いつの間に……！」

姫はダック公爵から離れるよう、少しずつ後ずさりをする。

しかし、国王の部屋の道を閉ざすように仮面の男が仁王立ちしていた。冷たく見下ろす視線に、道を譲るといふ考えはなさそうである。

張り詰める空気に姫は顔をしかめた。この立ち塞ぐ二人からは、簡単に逃れられるような気がしない。むしろ、何か嫌な予感がしていた。

ちらりと、木製の扉に目を向けた。

開かれる様子はない。

視線を逸らしダック公爵の後ろの階段に目を向ける。 階段の下には兵士二人がいた。

視線が泳ぐ姫に対し、ダック公爵がふつと鼻で笑って見せた。

「逃げる隙を伺っておられるのかな？ 残念ですが、逃げようとも声を上げようともそれは無駄ですな。なぜなら、そんな暇を与えないからです」

「……え？」

その刹那、真後ろから空気が切れる音がした。と同時にヨウが振り返り羽根を飛ばたかせる。

姫が振り向き見たものは、トグが短剣を振り下ろそうとしている姿だった。しかし、それをヨウが同じく短剣で受け止めている。二人の力で互いの短剣が震えていた。

「トグ！ どういうつもりじゃ！」

「さすがに早いな。だが、お前一人では駄目だな」

「何っ！」

すると、トグの後ろから仮面の男が腕を伸ばした。手のひらの中、黒い空気が渦巻いている。それに触ってはいけない。ヨウはそう直感し、すぐさま身体を翻しトグに向かって剣を振り下ろす。

「馬鹿が！ 目的はお前ではない！ その女こそ真の標的だ！」

男の腕はヨウではなく、姫に向けられていた。トグの言葉に姫に視線を向ける。姫は目を見開き男を凝視していた。渦巻く手のひらが姫に触れようとする。ヨウはそれを阻止しようと、間に割って入ろうとするが、トグがそれを許さずヨウの服を乱暴に掴む。振り払おうとする間も、刻々と黒い渦が姫に近づいていく。

しかし、姫は至って冷静な表情で静かに言葉を放った。

「非礼な人。下がりなさい」

姫は手のひらを向けた。

まるで時間が止まったようだった。向けられたと同時に、仮面の男の身体が固まっている。必死に動かそうとし、身体の端々が震えているがそれでも動かない。

「シント」

その瞬間、男の身体が後方へと吹き飛ぶ。余りの勢いに男は壁に身体を強く打ちつけた。冷めた様子で眺める姫。ヨウはトグの腕を振り払い、すぐさま姫の肩に捕まった。

「ほう。やりますな、イツチ姫様」

振り返ればダック公爵が薄く笑みをこぼしていた。使用人が吹き飛ばされたというのに、何事もなかったかのように振る舞っている。それはトグも一緒に、後ろから二人を眺めていた。

「やはり、国王の娘となると移動魔術の威力も相当なものようですね。予想以上で大変驚きましたよ」

「今の行動はどういうことでしょうか？ 私に攻撃を仕掛けるなど、それこそ父上に申し上げなければならなくなりました」

毅然とする姫。不敵な笑みを崩さないダック公爵。ヨウは集中を高め、また攻撃を仕掛けられたときの場合を考えていた。すぐ目の前に立つダック公爵。彼の主魔術は一体何なのか。トグが仮面の男とダック公爵の、どちらと契約しているのかさえわからない。

吹き飛ばされた男も立ち上がり、乱れた服を整えていた。冷めた眼差しが、ヨウの背後からでも感じた。囲まれた状態であるが、ヨウは絶対に姫を守る覚悟でいる。

「……イツチ姫様の魔力、素晴らしいものだということが確信できました。殺すのには惜しいほどだ」

姫とヨウ、二人同時にぴくつと眉をひそめた。

「こ、殺す……じゃと？」

「本気で……。公爵、本気で私を殺そうというのですか」

見下ろすダック公爵の眼差しが、瞳の奥で冷たく光っていた。そのまま命を吸い取られそうな、どこまでも黒くそれでいて濁った色をしている。

公爵はふつと息を吐くと、軽く頭を振った。

「惜しいと言いましたでしょう。今、別のことを思いついたのです」

「……別のこと？」

すると、ダック公爵が視線を後ろへと向けた。

「……イッチ姫様。私は、ただ融資をする魔天族ではありません。ほしいものは何でも手に入れる。それが金だろつと、人だろつと、魔術だろつと……全てだ。そして今私が一番ほしいもの……」

姫は首を傾げた。眉をひそめ見上げる姫を、ダック公爵はゆつくりと見下ろした。歪む口元がゆつくりと開いていく。

「この国と貴方の力ですよ」

「っ！」

はつと姫が息を呑んだのもつかの間、いきなり背中から羽交い締めされてしまった。

「な、何をするんですか！」

背中越しに睨みつける姫。羽交い締めしているのは仮面の男だった。無表情を崩さず、一向に姫を離そうとはしない。

「貴様あ！ 姫から手を離せ！」

「ヨウ、貴様は黙っている」

男の腕を振り払おうとヨウが掴んだ瞬間、トグの拳が飛んできた。痛みと共に姫の肩からはがされ、そのまま冷たい床へと落ちてしまった。強い衝撃が身体全体に受けるが、すぐさま姫を見上げる。

姫は腕を無造作に動かし、何とか振りほどこうとしていた。それでも羽交い締めにする男の力が強くびくともしない。

「ヨウ！」

姫の顔は男の背中に隠れ見えない。それでも姫の悲痛な叫びがヨウを突き動かす。すぐに立ち上がり、空中に浮上した。

「イッチ姫様。移動魔術と言えど、腕を塞がれては使えないようですね。こうなれば、貴方もなかなか女々しい方だ」

男の背中越しにダック公爵の笑みが見える。薄らとし開かれた目は、姫を舐めるかのように眺めていた。そして、腕をゆつくりと上げその手が姫の頬に触れようとする。

「姫に触れるな！」

自然と声が出ていた。その声は一瞬空気が揺らし、廊下にある窓

ガラスが震える。トグはその瞬間身構え、すぐに男の背中に移動した。そして、ダック公爵の視線もヨウへと注がれた。先ほどの笑みは消え、殺気のこもったあの濁った目をしている。

ヨウはダック公爵の視線など気にせず、その腕目掛け飛びかかっていた。状況が悪いことや、相手が魔天族のことは頭に消えている。ただあつたのは、姫を助けることのみ。

『この先も、ずっと一緒にいてくれる？』

約束を守るため。

「……ヨウ、冷静さを欠いたな。馬鹿な奴め」

トグが両手を突き出し、そこから炎を作り上げる。自身の身体よりも遙かに大きな炎。それを躊躇うことなくヨウへと投げつけた。

ヨウの目の前に炎が塞ぐ。熱気は近づくにつれ肌にヒリヒリと痛みを届ける。しかし、ヨウはまだ冷静だった。両手を突き出し、青い光の盾を作り上げた。それは炎の中でも消えず、熱気と炎を遮りヨウは炎の中を突き進む。そして、抜けた瞬間トグの身体が目の前にあつた。

炎のせいで見えなかったのか、急に現れたヨウにトグは避ける暇はなかった。そのまま体当たりされると、身体が横へと倒れる。そしてヨウはそのまま男の背中に思いつきり体当たりをした。

「うっ」

その時、羽交い締めにしていた男の力が弱まった。その隙を姫は見逃さず、すぐさま腕を大きく手前へと引く。腕が自由になる。

姫はすぐさまその場にしゃがみこむと、後ろへと転がるように移動した。姫の動きと同時に、結わえている髪が激しく乱れる。膝をついた状態からすぐに立ち上がると、木の扉に身体を向け走り出す。父上に……国王に知らせねば。

息が短く切れる。長くない廊下のはずなのに、目の前に見える扉が遠く感じた。あと五歩。あと四歩……。

「甘いわぁ！」

後ろから声が響く。と同時に、何か雷が落ちたような鋭い音が鳴

り響いた。

ヨウは見た。

扉まであと少しの姫。その後ろから、ダック公爵が杖を振り上げそこに電撃が走る。その電撃はまるで意思を持っているかのようにうねり、先端は顔のように見えた。それが扉へと走る姫へと伸びていく。

腕を精一杯伸ばし、扉を開けようとする姫。しかし、その後ろ、電撃が大きな口を開け姫に襲いかかる。

「姫ええ！」

ぶつかろうとした瞬間、辺り一面が真っ白に発光した。ヨウも目を腕で覆う。

治まったあと、廊下は静寂した空間だった。あまりの静けさにヨウは恐る恐る腕をどける。

「なっ、姫！」

電撃が姫の身体全体を覆っている。ヨウはすぐさま羽根を広げ、姫に向かって飛んでいく。

姫は扉に身体を向けたまま身体が固まっている。目が虚ろでまるで意識がないように見えた。腕を伸ばす姿が痛々しい。すぐさまヨウは姫に触れようとした。しかし。

包んでいる黄色の刺々しい帯びは、ヨウの手を弾き飛ばしてしまった。何度試みようとしても結果は同じ。何度も何度も手を伸ばすが、全て弾かれてしまった。

「一体何をやった！」

振り返ったヨウは怒りをあらわに、ダック公爵を睨みつけた。見れば、帯びはそのまま伸びて杖に繋がっている。

声が聞こえているのか、ダック公爵の視線がゆっくりとヨウへと移る。皺が刻まれた顔、窪んだ目、端を持ちあがにやりと笑う口元。じっとヨウを見据え、ふっと鼻で笑った。

「言ったところでもう遅い。使魔、お前は死ぬだけです」

「何っ」

はっとすれば、男とトグがすぐ目の前に迫っている。トグの両手にある剣が冷たく光っていた。ヨウは姫の前に立ちふさがるように移動する。

避ければ再び姫が狙われるかもしれない。そう思いその場から逃げなかった。代わりに、両手を突き出し薄い光の膜を作り上げた。

それでもトグが突っ込んでくる。剣の先端は鋭く、この膜さえも切り裂きそうなほど光っている。そんな先端を向け躊躇うことなくトグはヨウへと突き刺しにかかった。しかし、ヨウの魔力が勝っていた。

強固なものに見えた剣でさえ、ヨウの光の膜にぽつきりと折れてしまったのだ。剣を握り締めたトグが、信じられない様子で剣を見下ろしている。そしてそのまま視線を上げ、膜の向こうにいるヨウを睨みつける。

「……さすがだな」

ふつと鼻で笑うトグに、ヨウは眉をひそめた。　　なんだこの余裕の笑みは。

次の瞬間、ヨウの真横にあの男が現れた。白い仮面は無表情のまま、手のひらの黒い渦を向けている。咄嗟にヨウも顔を向けたものの、トグがいるせいで動けなかった。

男は後ろにいた姫には目もくれず、真っ直ぐヨウに向かい手のひらを押しつけた。

「っー！」

ヨウは口を開いたものの、言葉にならなかった。触れられた瞬間異変が起こった。

男の手のひらは、ヨウの身体の半分を隠している。その下腹部に何か吸い込まれるような感覚がある。身体の内側から全てを奪い去るような、思考までもが奪い去られてしまいそんな感覚。腕を伸ばしていた力もなくなり、がくつと腕を落とす。動かしていた羽根も力を失い、そのまま床へと落下した。

苦しい。呼吸をするための運動さえままならない。開けた口を閉

じることさえできず、ただ短く呼吸をする。腕や足、羽根も動かさない。目を動かすのがやっとで、瞬きすらできなかった。

「ご苦労。お前たちは下がれ。私が手を下そう」

仰向けの状態で、ダック公爵の声だけが聞こえた。それと同時に、ゆっくりとした足音が廊下に響く。

殺されるのか。

天井を見上げながら、ヨウは漠然と思った。何の飾り毛もない天井が最後に見たものになるのか。

どんとどんと足音が近づいてくる。こつん、こつんという単調な音。自分の死期が近づいてくる死神の音。短い呼吸を繰り返しながら、視線をなんとか動かしていく。

焦点が合わないが、最後に見るものは決めてある。無表情な天井からじつくりと視線を移動する。その間にも足音はどんとどんと大きく響いてくる。

姫。

包んでいる黄色の帯が、ヨウの視界を遮ろうとしていた。それでも、一つに結わえている美しい黄色の髪ははっきりと見えた。

「ひ……」

姫、申し訳ない。

そう言葉に出そうとしても、喉は言葉を通さなかった。苦しい胸に閉じ込めたまま。

守ることもできず申し訳ない。

じつと姫の後ろ頭を見上げる。

姫も動けないのだ。発した言葉さえ届いていないだろう。それでも、最後に姿だけでも見れたことに少し胸が晴れる。だが、このまま死んでしまうことが情けなかった。

「さあて。痛めつけるのも面白いですが、楽に死なせてあげましょう。私の気まぐれに感謝しなさい」

視界に不敵な笑みを浮かべるダック公爵が入った。言葉を言い返すこともできない。視線を逸らすこともできない。ただ死ぬだ

け。

その時だった。

視界にいた姫の身体から、突如黄色の帯が消し飛んだ。そして息つく間もなく、姫は振り返りヨウに向かって手を伸ばす。細い指がヨウを抱える。

何が起こったのかヨウも理解できなかった。天井が占めていた視界が、一変に姫の笑顔へと変わった。

あのいつも見た姫の優しい笑み。自分にしか見せない柔らかかな表情。

「待っているから」

その瞬間、ヨウの意識は飛んだ。

目覚めたのは身体に受けた衝撃のせいだった。何が起こったのか理解できない。

思い出そうにも記憶がなかった。ただわかったのは、今近くに姫がいないこと。そして　ここがアラウではないこと。

目の前にヨウの姿に言葉を失う男　それが新しい契約者、真一との出会いでもあった。

【第五章 城下町オデイ】ヨウの記憶 2 (後書き)

お読みいただきましてありがとうございます。

これでヨウの過去話は終わりです。次話から現在に戻ります。

……ですが、次の更新が日曜日に行えるかわかりません。大変申し訳ないのですが、次話の更新は未定とさせていただきます。

話のストックが溜まり次第、更新しようと思います。その時はあらずじ、またはブログにて報告しますので、そちらをご参照ください。

【第五章 城下町オデイ】証の条件

暖かな風が吹き抜けて行く。その度に草が波のように揺れていた。草も進むにつれて少しずつ短くなり、今では足元までの高さとなっている。

三人は多少の会話をしながらも、辛抱強く歩き続けた。幸いなことに天候にも恵まれ、歩くことに支障はなかった。だが、やはりずっと歩けば身体は悲鳴を上げる。靴に隠れる足の裏はじんじんと痛み、地面を蹴り上げる力も弱まっていた。口数も減る一方だったが、真一もライトも愚痴は絶対に言わなかった。

「……あれが城下町オデイじゃよ」

頭を下げ黙って歩いていた時、耳元でヨウが言った。真一とライトは立ち止まり、垂れていた首をぐつと上げる。草原の向こうに建物のようなものが見えた。その奥には山もある。

「あれが、最後の都市……か」

ヨウも指を差しつつ遠くを見つめている。が、その視線はどことなく虚ろで、呆然とした表情だった。

過去のことを語って以降、時折こんな表情を覗かせることが多くなっている。呆然と空を見上げたり、じっと考え込むように視線を落したりと、まるで意識がここにはないようだ。

じつとヨウの様子を見ていた真一は、わざとらしく咳払いをした。

「……じゃあさっさと行くか！」

と同時に、何かの合図のようにライトの手をぎゅっと握り締めた。「……はい！」

何かを察し、ライトは微笑み大きく頷いて見せた。気丈に振る舞っているが、色白の頬から汗がじんわりと流れている。歩き回らないライトにとっては、この徒歩の移動は過酷だったに違いない。しかし、それでも声を張り上げ笑顔を作っていた。

ヨウは黙ったまま、そんな二人の様子を眺めた。

言わずとも感じる二人の心遣い。見ていると自然と顔の表情も和らいでいく。だが、犯してしまった過失が消えることはない。

守るべき者を守れなかった記憶。そして、それを忘れてしまっていた事実。

だが、二人はそれ以上聞き出すことはしなかった。その話題に触れもしない。話を聞いたせいで、二人が命を狙われるかもしれない。それでも二人はそれ以上の探索はしなかった。ただいつも通りに接する。忘れろとも言わず、疑問を投げかけることもない。

町へ向け歩く二人の様子を眺めながら、ヨウは静かに微笑んでいた。

城下町オディは、四大都市の中で一番の広さを持つ。

アラウ城がある山のふもとにあり、集まる人々のほとんどが上級階級のものばかりだった。召喚魔術を扱うサモナーはもちろん、回復魔術を扱うイシャイナーでさえも、この町では偏見の目で見られる。

町に入ると多くの人々が行き交っていた。人の流れに目を奪われていると、腕に布を巻き付けている者があちこちにいる。見れば、ほとんどが赤い布と黄色の布だった。

「あの色は……自衛魔術と移動魔術って意味だったっけな」

目の前を行き交う人々に視線を移しながら、真一はぼそっと呟いた。

「……にしても人が多いな」

真一たちが立っているのは、大きな大通りだった。

今までの町にないきちんと舗装された通りで、地面は整った石がずらりと並んでいる。大通りの左右に目を移せば、レンガ造りの四角いビルのような建物が建っていた。

窓はまん丸や四角など、それぞれの建物によって異なっている。

一階の入り口辺りに目をやれば、その入り口の上には何やら文字が入ったプレートが貼ってある。どうやら、建物一つが個人の持ち物

らしい。そんな建物が隙間なく建てられ、時折小さな建物がある。

「城下町オデイは一番華やかな都市なんです。私も幼い頃この町を訪ねた時、人の多さと建物の多さに驚きました」

そう口元を緩めているライトの頭には、いつの間にかフードが被せられていた。

「ライト、なんでフード被ってんだ？」

「あ……わ、私の髪色を見ると、王族だとばれてしまいそうで……。ばれてしまうと、色々面倒なことがあるかもしれないので……」

そう言いつつ、ぐっとフードを顔に引き寄せた。綺麗な黄色の髪は、すっぽりと隠れてしまい全身白いローブだけとなっている。

「ああ……そうだな。俺の髪と格好も、この世界じゃ目立つよなあ……」

視線を感じそちらに目をやると、訝しそうに人々が眺めていた。

黒髪も当然だが、真一の持つている荷物も十分目立つ要因となっている。

「シンイチ。どこか人が少ないところへ行つて、黒いローブに着替えた方がええぞ。その荷物は仕方ないとしても、ここは人が多すぎる。統治者を探すのはその後がええ」

「……だな」

大通りを避け、適当な横道へと入る。細い路地裏のような道は、先ほどの人だかりが嘘のようにひっそりとしていた。高い建物の間のせいか、思いのほか暗い。そんな場所で真一はさっさと袴をたたみ、黒いローブへと着替えた。

「……よし。じゃあ、統治者を探るか」

ポケットに触媒の小さな袋を入れると、トートバックを肩から提げた。

「でも、これだけ広いとどこにいるんだか見当もつかねえな。……」

おい、お前何か知らねえのか」

「うーむ。わしらがこの町を訪ねる時は、大抵移動魔術で目の前だ

つたからのお。町全体のこととは覚えとらん」

腕組みをし頬を膨らませている。真一はため息を漏らすと、ライ
トに視線を移した。

「ライト、さつきこの町に来たことあるって言ったよな。統治者が
どこにいるか知らねえか？ 証をもらわねえといけねんだ」

「……幼い頃のことですので記憶が曖昧ですが、一応は覚えていま
す。で、でも目が……」

そう言うとき軽く顔を伏せ、ぐつと唇を噛み締めた。

すぐにヨウが真一を睨みつけた。おまけにばしばしと肩を叩いた。
真一がむっとした表情で顔を向けると、声こそ出ていないものの口
が「ばかもん」と言っている。しかし、真一は平然と言い切っ
た。

「ライトが覚えているなら、それでいいんだよ」

「……え？」

はつとして顔を上げるライト。眉が八の字になり不安そうな表情
に見える。思わぬ言葉にヨウもきよんとした表情を浮かべた。

そんな二人を気にすることもなく、真一はライトに近寄ると手を
握り締めた。

「見えなくても、俺がライトの目の代わりになりゃいいんだ」

真一はにっこりと笑うとフードを被った。

「建物とか目立つもんを言うから、ライトの記憶と照らし合わせて
見てくれ。……頼んだぞ」

すっぽりと黒髪をフードに隠すと、そのまま裏路地から出ようと
歩き始めた。

ライトは手を引かれるまま、少し後ろを歩き始める。その頬は少
し赤く染まっていた。手を握る温かな手のひら。見えないはずの瞼
越しに、うつすらと、真一の笑顔が見えた気がした。

真一は大通りに出ると、まず今どんな場所にいるのかを説明しよ
うとした。が、周りを見渡しても似たような建物ばかりである。小

さくため息を漏らすと、肩に乗るヨウへと視線を移した。

「お前、上から目立つ建物がないか見てくれよ。ここからじゃ人が多すぎるし、目立つもんがねえんだ」

「うむ、そうじゃな。ちよっと待っておれ」

背中羽根を羽ばたかせ、ヨウは一気に上空へと舞い上がった。それを見上げていると、隣のライトが軽く腕を引いた。

「……ん、どうした？」

「あ、あの……私の曖昧な記憶で探すよりも、派遣所で聞いた方が早いと思うのですが……」

久しぶりに聞いた単語に、思わず真一は「あつ」と声を漏らした。しかし、すぐに眉をしかめ低く唸り声を上げる。

「うーん……いや、まあその方が早いだろうなあ。まあ、あいつの返答次第で考えるよ」

歯切りの悪い言葉に、ライトは不思議そうに小首を傾げる。すると、上空からヨウが降りてきた。むっとした表情で、小さく首を横に振っている。

「駄目じゃ。どれもでかく、建物自体にそれほどの差がないぞ」

「そうか……。今、ライトから提案があつただけだよ……派遣所で聞けばいいんじゃないかって……」

ヨウも小さく「あつ」と声を漏らした。一瞬、ぱつと明るい表情となったがすぐに視線を落とし、乱暴に頭を掻いた。

「……派遣所、か。まあ仕方あるまい。さつきそれらしき建物が見えたから、わしが案内しよう。シンイチ、お主また反抗的な態度をとるんじゃないぞ」

「わかつてる。俺だって、もう取り調べなんてごめんだ」

一人が首を傾げるライトを引き連れ、真一たちは再び大通りを歩き始めた。

近距離で人がすれ違う大通り。ざわざわと騒がしく、何か行事があるのかと思うほどの人の流れ。その中を真一とライトが歩き進む。

ライトは顔を俯かせ、人の目を避けるように背中を丸めている。一方で真一は背筋を伸ばし堂々と歩いていた。人々の目が弓具に行っているが気にしていない。

真一の荷物も目が行く要因だが、二人の対照的な色彩にも人々の目が自然と釣られていた。

「ライト。疲れたらちゃんと見えよ」

「……はい」

真一も視線を感じていた。ちらりとその方へ目を向ければ、皆が怪訝そうに眺めている。が、足を止めることはしなかった。今はこの視線の餌食になっているのは、真一だけではない。ライトも、盲目ではあるがきつと雰囲気は感じ取っているはずである。それに、ロープだけ見れば真一よりもよほど目立っている。

「……つたく、この町の連中は失礼な奴ばかりだな。みんな揃ってガン見かよ」

「まあしょうがない。さつきも言ったじゃろ？　ここはテイレナーとフィティナーが住人のほとんどを占めておる。シンイチの黒い布が、ロープで隠れとることが幸いじゃよ……。とにかく、こんな居心地の悪い町の用事は済ませて、さつさと出て行きたいの」

容赦なく視線を送る住人たちを眺めながら、ヨウはため息を漏らした。

上級階級ばかりが住む、城下町オデイ。もしかすると、ヨウの姿も見えている者もいるかもしれない。さらに言えば、使魔掃討作戦の使者がこの中に紛れ込んでいる可能性もある。

と、ふつと思いつき出しヨウは視線を真一へと戻した。

「シンイチ。アラウ城から一番近い都市じゃ、もしかしたら派遣所でわしの姿が見える者がおるかもしれん。着いたら、わしは上空で様子を見ておくぞ」

「……あ、そうだな。でも、言葉通じるのか？」

「ああ大丈夫じゃ。言葉が通じなくなるのは、わしの魔力が底を尽きかけた時か、契約が切れた時か、はたまたわしが死んだときのこと

れかじゃよ。覚えておくとええ」

「……要するに、言葉がわからなくなったらやばいってことだな」

人の目に耐えながら進むと少し開けた場所へと出た。丸い円のよ
うな広さで建物も立ってはいない。ふと、町に入って初めて見
る建物を見つけた。

三角錐の屋根をした小さな小屋である。木の柵で閉じられた入り
口の上には、木の板に文字が書かれていた。真一には読めなかつた
が、おおよそ『派遣所』などと書かれているのだろうと思った。

「じゃ、わしはしばし上空におるぞ。シンイチ、喧嘩腰になるんじ
やないぞ」

「何度も言われなくてもわかってら」

ヨウはふん、と鼻息を漏らすと羽根を広げそのまま真つ直ぐ上空
へと舞い上がる。一方で、そんなヨウには目もくれず真一はそつと
派遣所の中を覗き見た。やはり真紅のロープを着た者たちが見
える。

「ここだな。……にしても、大通りから離れた場所にあるんだな。
それになんだ？ あの広場みたいな場所は」

派遣所の建物の真正面に、楕円型に窪んだただっ広い場所があつ
た。その中には何も建ってはいない。内側は階段のようになってい
て、そこに人が座れるようになってる。

「広場、ですか？ ま、前はそんな場所なかったと思うのですが…
…。すいません、私ではわかりません……」

しょんぼりと俯くライト。声はかすれ消えそうである。その様子
に慌てた真一は、ぼんつとライトの肩に手を置いた。

「そ、そんなに落ち込むことじゃねえだろ。小さい頃のことなんて、
全部覚えられるはずねえもん。気にすんなって」

「……私、シンイチさんのお役に立てられるのか不安で……やつぱ
り迷惑なんじゃないかって」

白いフードがすっぽりと覆い、顔まで見ることができない。が、

声の具合から今にも泣きそうな感じだった。

「ライト。お前、もつと自分に自信を持って。俺にはできないことが、お前にはできることだってたくさんあるだろ？ それに迷惑なんて思っちゃいねえよ。……まあすぐに自分に自信を持つなんて簡単じゃねえよな。俺だってそうだしよ……」

「シ、シンイチさんも……？」

とその時だった。派遣所の入り口の柵が開く音が響いた。

「お前たち。我らの目の前で何をやっている？」

二人の間から割って入ったのは、真紅のローブを着ている男だった。見れば腕に緑色の腕章をしている。

怪しげに二人を眺めながら口を開く。

「……何か派遣所に用があるのではないか？ それとも、何かしらの悪戯でも仕掛けようか？」

「そ、そんなことはいたしません。ただ、道をお尋ねしたいのです」「……道？ ふん。どこへ行きたいのだ？」

鼻息を鳴らし腕組みをした。どうやら、目を閉じた状態のライトを察したらしい。真一も、ここはライトがしゃべった方が良いと判断し黙り込むことにした。じつと男の顔を眺める。

「と、統治者オデイ様のお屋敷へ……」

「オデイ様の？ 一体何の用だ？」

「証を……い、いたきたいのです」

腕を締めぎゅっと握りこぶしを胸の辺りに作っているライト。不安そうな姿ではあるが、しっかりとした口調だった。

一方で、じろつと二人を見下ろす男。眉をひそめ、二人の姿を視線で調べているようである。真一はその視線から逸らすことなく、真正面から見上げた。睨むと心証を悪くしそうだったので、なるべく顔の力を抜き真顔を維持する。

「ふん。証か。……オデイ様はご自宅をこの町にいくつか持っておられ、今どこにいらっしゃるのかはわからん」

「では、その家々がどこにあるのか教えていただけませんか？」

「教えてやっても良いが、家は十以上ある。巡っている間にオデイ様は移動されている。直接会うことは不可能に近いだろう。」

その言葉に肩を落とすライト。あからさまに落胆の色が見える。真一も男の言葉に一瞬顔をしかめたが、すぐにやめ口を開いた。

「じゃあどうすればいいんですか？ 諦めろって言うんですか？」
むっとした表情で男が真一を見下ろす。

「諦めろとは言ってはいない。……お前らどちらか、パラッグの雛はいるか？」

「パラッグの、雛？」

思わぬ単語に真一は首を傾げた。ライトも俯かせていた顔をすつと上げる。男は言葉を続けた。

「もしいるならば、明日、パラッグの雛の大会が開かれる。その優勝者には無条件で証が手渡される。どうしてもほしいならば、明日の大会に出場することだ。……というより、オデイ様から証がほしければこの大会に出るしかないだろう。おそらくだが、オデイ様に直接訴えても相手にされない。今まで渡した奴らは皆、大会の優勝者ばかりだからな。」

「優勝者だけ……。今までの統治者さんたちは、説明したら渡してくれたんですけど。その、オデイ……様ってのはどういう方なんですか？」

言葉遣いが気にいらぬのか、男はむっとした表情のままである。

「……移動魔術にたけた素晴らしい方だ。その言い方はまるで侮辱しているように聞こえるか？」

「いえいえ、とんでもない。……ひとまず、証がほしいんで大会出場します。どこに行けばいいんですか？」

「目の前のあの広場に行けば良い。当日受付だ。……まあ頑張るんだな。」

そう言つと身体を翻し、建物の奥へと消えて行った。

真一とライトは派遣所から離れ、人の少ない横道へと入った。す

ると、それを見計らったようにヨウが肩へと降りてくる。

「どうじゃった？ 場所はどこじゃ？」

「……家が十以上あるんだとよ。探すのは不可能だってさ」

「なにい！ じゃあどうしろと言っくんじゃー！」

「大会で優勝すりゃ証が無条件でもらえるんだとよ」

「大会？」

真一はライトから手を放し、懐から召喚本を取り出した。ページをめくる。それを見ながらヨウはびんつと閃いた。

「……まさか、大会というのは」

「そう。パラッグの雛の大会」

真一は開いたページに左手を乗せ「プレサモン」と言った。同時に、かっつと召喚本から光が放たれる。

すると、目の前に鷹の姿をしたピイが現れた。

【第五章 城下町オデイ】証の条件（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

まず、更新に間が空いてしまったことにお詫び申し上げます。申し訳ございませんでした。

次話はすでに書き上げておりますので、来週には更新できそうです。引き続き、楽しみただけでしたら幸いです。

【第五章 城下町オデイ】大会前日 ヨウとパイ

茶褐色の翼を羽ばたかせ、綺麗に折りたたむ。ヨウより少し大きな姿で、その羽根は美しく光の具合では光っているように見えた。

パイはその黄色の瞳をまん丸と見開き、じっと真一を見上げた。

「何か御用でしょうか？」

声にライトは一瞬びくつと身体を震わせた。が、ほっと肩を下げ声の主にも口元を緩ませる。

「パイさんこんにちは」

一方で、振り返ったパイは思わぬ人物の声に思わず羽根を広げた。つかつかと近寄りじつと顔を見上げる。

「ライト様！ どうしてこちらにいらっしゃるのですか？」

「……無理を言っつて、シンイチさんたちと同行させていただいてるんです」

「まあ。……真一さんと同行できるなんて、私もご一緒させていただきたいです」

ライトとパイが笑い合っている中、真一はわざとらしく咳払いをした。パイは顔を真一へと向ける。

「……パイ。その、冗談じゃなくて、本当に少しの間一緒にいてほしいんだ」

「え？」

真一はその場で先ほどの派遣所での話を語った。

パラッグの雛の大会。そう告げても、パイは表情も変えず黙って真一の話に耳を傾けている。一方で、ヨウだけが顔をしかめ一人地面に視線を落としていた。

「つまり、私がその大会で優勝すれば、真一さんたちに証がもらえるというわけですね」

「ああ。……出場してくれるか？」

そう言っつて真一の視線がパイに集中している時、ヨウは静かに目

線を上げた。眉をしかめ、苦い表情でパイを眺めている。

パイも、すぐ横で渋い表情をしているヨウには気づいていた。一人理解しているのだろう、ヨウだけが浮かない顔をしている。何を言いたいのかも、パイは手に取るようにわかった。が、あえて気付かない振りをし、再び真一へと視線を戻した。

「もちろんです。おまかせください」

その声に真一もライトもほっとした表情を見せた。しかし、ヨウだけが驚き目を見開く。

「よかった。もう出場するって言ってたからな」

「ふふ。私はいつでも真一さんの味方ですから」

真一はすぐに召喚本を広げた。ひとまず、この場に留まらせることが先である。すると見ていたパイは知っていたのか、つかつかと近づきページにそつと足を触れた。

その瞬間召喚本は光を放った。が、すぐに元の状態へと戻る。

「これでまた真一さんの傍にすることが出来ますね。とても嬉しいです」

「ああ。改めてよろしくな」

微笑みながら真一は召喚本をポケットの中にしまい込んだ。これでパイはこの場に留まることができる。そう思った時だった。

「ひよこ！ おまじ気か？」

といきなりヨウが耳元で叫んだ。と同時に肩から離れパイの真正面に移動する。

「ひよこ！ 自分がどういう状態かを知っておるじゃろ？ なのに大会に出るじゃと？ 大会がどんなものか知らずに出ると言ったんかのー！」

「おい、お前いきなり何怒ってんだよ」

振り返ったヨウは眉をしかめ、険しい眼差しで真一を見上げた。

「シンイチもじゃぞ！ わしは前にパラッグの雛の状態について説明したではないか！ なのになんで出場するんじゃー！」

「はあ？ そりゃ証をもらうためじゃねえか。今更何言ってるんだ」

「違う！ わしはもつと根本的なことを言っておる！ じゃから……」

言葉が出かけそうになった時、急にピイが嘴でヨウの服を啜えた。そして、そのままの状態ですくへ飛び立っていく。

「な、何するんじゃない！」

「お、おい！ ピイどこ行くんだよ！」

手を伸ばすものの届くはずはない。建物の間をすり抜け、一気に建物よりも上空に舞い上がっていた。啜えられたヨウは短い手足をじたばたと動かしている。離せ、やら、下ろせという言葉が降ってきた。すると。

「真一さん、少しヨウを落ち着かせてきますね。夜までには戻りますので、町の外で待ち合わせしましょう」

そんなピイの声が聞こえたかと思うと、そのまま空から遠くに飛んで行ってしまった。ヨウの叫び声も一緒に遠のいていく。

「……なんだあいつら」

呆然と空を見上げる真一。ライトも声が聞こえているのか、呆然立ち尽くしている。

「ピ、ピイさんはどちらへ行かれたのでしょうか……」

「わかんねえ。まあ、夜には戻るって言ったんだし、そんなに心配することでもねえだろ。……でも、夜か」

建物の隙間から見える空はまだ明るい。青空が見え、日差しもまだまだ強かった。夜まで十分時間がありそうである。

夜に戻るといつても、正確な時間までわからなかった。陽が落ちてすぐ戻るのかもしれないし、落ちて戻らないかもしれない。どこへ向かったのかわからないので、見当もつかなかった。となるとその待ち時間をどうするかという問題となる。

「ライト。これからどうする？」

見上げていた顔を元に戻し、ライトへと向けた。胸の辺りで手を組んでいる。

「ど、どうするとは……？」

「んー。このまま町の外に出て夜まで待つか、それとも町を散策するか……。あーでも俺の荷物があるからなあ」

持っている弓を目を移し、困った様子で頭を掻いた。

真一よりも背が高い弓は、どこへ行っても目立つ存在である。だからと言って、どこかへ置いて離れると物珍しさから盗まれる可能性も否定できない。

真一はそんな風に考えながら一人唸っていた。すると突然

。「まっ 町を散策したいです！」

いきなり的大声にびくつと真一は身体を震わせた。見ると、ライトが一步踏み出し珍しく眉をしかめている。

。「い、いきなりどうした？」

「視線なんて気にしません。わ、私……シンイチさんと一緒に町を歩きたいです！」

胸に組まれていた腕は側面にぴったりとくっつき、手はぎゅっと握りこぶしを作っていた。気のせいか、ほんのりと頬も赤く染まっている。

見慣れないどこか必死な姿に驚き、真一は不自然に頷いた。

。「いいけど……」

その瞬間ライトの表情が和らいでいく。しかめていた眉はすぐに解かれ、きつく閉じられた目は力を緩ませる。真一文字に結ばれた口元は口角を上げ、すぐに満面の笑みへと変化する。

頬を赤く染め嬉しそうに微笑むライト。が、真一は何を喜んでいいのかかわからず、不思議そうに首を傾げていた。

一方で、ヨウを啜えたままピイは町上空を飛んでいる。上空を飛んでいるせいなのか、ピイたちの姿に気づく者は誰もいない。そんな賑やかな町を眼下にしながら、ヨウは不機嫌そうに頬を膨らませ

ていた。

「おい、ひよこ！ わしを一体どこまで連れて行くつもりじゃ！」

町はどこまで行っても人がいる。薄暗い裏路地もあったが、大通りに近いため人がいつ来てもおかしくはない。パイは人気のない場所を探しながら飛んでいたが、どうにも町の中では見つかりそうになかった。忙しく目を動かしている最中も、ヨウがじたばたと暴れている。

「降ろせ！ なぜわしがひよこなんぞに捕まらんといけないんじや！ わしだって飛べるぞ！」

「……うるさい使魔ね。わかりました、草原の適当な場所に降ろしましょう」

そう言つとパイは大きく旋回し、そのまま町の外の草原へと目指し飛んで行った。

パイは町からかなり離れた場所に降り立った。草原の遠くに町がうつすらと見える。

降ろされたヨウは、ぶすつとした表情のまま着衣の乱れを整えていく。

「貴方がいきなりあんなことを言うから、こんな所まで連れてきたのよ。全て貴方が悪いんです」

「……なあに？」

ぴたりと手の動きを止め、頬を引きつらせながらヨウが振り返った。明らかに怒っている。それでもパイは臆することなく言葉を続けた。

「当たり前じゃないですか。せつかく真一さんに対して、恩返しできる機会が巡って来たというのに……。事実を知ってしまったら、きつと真一さんはやめるとおっしゃるに違いないわ」

「そんなの当たり前じゃ。大会の勝敗は、相手が死ぬまで続くんじやぞ。誰だって止めるに決まっておる！ ……それを、第二段階のお主が出場するじゃと？ ふん！ 冗談にもほどがあるわい！」

そう言つとぷいっと顔を背けた。一方で、ピイはまん丸と目を見開き驚いた。

「ヨウ……貴方、私のことを心配しているんですか？」

すぐさま言葉に反応し、ヨウはすぐに振り返ると首を何度も横に振る。

「ちつ……違うわい！」

慌てた様子でピイを睨み上げた。

「は、恥をかかせるなという意味じゃ！ と、とにかく……」

わざとらしく咳払いをすると、ヨウは真つ直ぐピイを見上げた。

「大会の出場なんてやめたほうがええ。出場せずとも、証が手に入る方法は必ずあるはずじゃ。……生かされた命を粗末にするものではないぞ」

ピイはそれに対し何も言い返さず、すつと空を見上げた。遠くを見つめる黄色の瞳。そのまま黙り込み、ただじつと空を仰いでいる。それに釣られ思わずヨウも空を見上げた。

真つ青な空。白い雲がゆっくりと流れていく。太陽は少し傾き始め、日差しも少し影を落とし始めていた。

「ヨウの言つ通り、私は真一さんに命を救われました」

ぼつりと、空を見上げたままピイは言葉を漏らした。

「あの時、真一さんはヨウの意見に逆らつてまで私を連れて行ってくれた。本当に、感謝しきれません。言葉をしゃべることも飛ぶこともできなかつた。それなのに、真一さんは優しく接してくれた。そして、この姿になつてようやく意思を伝えることができるようになった。けれど、言葉では言い表せません。命をかけて守ろうとしてくれた真一さんに、私も行動でその気持ちを伝えたいんです」

生まれた時、ひよこの姿は死を意味する。それが今では、空を自由に飛び回っている。風を切り陽を浴び、心行くまで飛び回る。その全ては真一のおかげだった。

ピイは視線をヨウへと戻し、目じりを下げて言った。

「ヨウ。私は負けるとわかっていても戦います。それが私のできる、

唯一の恩返しですから」

「……お主、そこまで」

真っ直ぐと向けられる瞳に、迷いの色は見えなかった。じっと見下ろす黄色の瞳をヨウもしっかりと受け止める。

数秒沈黙が流れたのち、ヨウはふつとため息を漏らし視線を落とした。

「……わかったわい。シンイチには黙っておこう」

「ヨウ……ありがとうございます」

「……ただし、出るからには負けてもらっては困る」

それは当たり前　　パイがそのことを伝えようとした時、ヨウが顔をふんと上げた。

「証がかかっておるんじゃからな。じゃから今回だけ特別に、このわしが、練習相手をしてやるわい！」

ふんぞり返り胸を張るヨウ。しかし、パイは一気にしらげ半目でじっと見下ろした。

「……貴方に私の練習相手が務まるんですか？　私の嘴から逃げられなかった貴方が」

「馬鹿もん！　わしが本気を出したら、ひよこなんぞあつという間に倒れてしまっわい！」

「よく言いますね。風にあおられたらすぐに落ちるくせに」

「……おのれ。言わせておけば……」

それから間もなく、二人は自然と喧嘩　　ではなく、練習試合を始めた。飛び合う風と悪口の中で、一羽と一人は時間も忘れ戦う。

二人の目的は優勝し、証をもらうこと。第三段階の雛が集まることが予想できる中で、第二段階のパイがどこまで食い込めるのか。

パイと対峙する中、ヨウは時折表情を曇らせる。

第三段階の雛の姿を知っている。魔力は遥かに違い、また仕掛ける技も格段に違う。生か死か、それが勝負の分かれとなる大会で、それはまさに一瞬で決まってしまうかもしれない。それだけは避けなくてはいけない　　せめてパイが心おきなく戦わなくては救われ

ない。

そんな風に考えていたヨウに、ある考えが思い浮かんだ。……し
かし、それは本当に最後の手段だった。

【第五章 城下町オデイ】大会前日 真一とライト （前書き）

大変お待たせいたしました。

かなりの間が空いてしまったので、簡単に前話までの振り返りです。

最後の証を求め、真一、ヨウ、ライトは城下町オデイへと向かう。その途中ヨウは前マスターと別れることとなった経緯を説明した。城下町オデイに到着し、統治者を探す三人だったが派遣所で統治者には簡単には会えないと告げられる。しかし、パラッグの雛の大会で優勝すれば証がもらえると聞き、参加をする真一たちだった。

という内容です。ものすごく簡単に書いていますがご了承ください。では続きをどうぞ。

【第五章 城下町オデイ】大会前日 真一とライト

ヨウとパイが練習をしている間、真一とライトは町を歩き回っていた。

「……たく俺たちは見世物じゃねえつての」

石材で舗装された道。その大通りを人が無造作に行き交っている。皆がそれぞれ好みの色のローブを着て、子供大人の差別はない。手を繋ぎ微笑みあいながら歩く親子や、荷物を手に歩く男女や腰を曲げた老婆もいる。また大通りに面した建物も、今までの町にはない高さだった。色に統一性はなく、さまざまな着色を施されている。

町全体が虹色のような町 そんな優雅な町であつても、真一とライトに対する視線は冷たい。

「やはり……皆さん私たちを見ていらつしやるのですか？」

「ああ。けど、いちいち気にしてたら町なんか歩けねえからな。……そんなことより、せっかくこんな町歩けるんだ。俺がすっかり説明するから、しっかり聞けよ」

「ありがとうございます！」

ライトは嬉しそうに微笑むと、ぎゅっと真一の手を握り締めた。

目の見えないライトに聞こえるのは、がやがやと賑やかな町の音。フードをすっぽりと覆い、顔はしっかりと隠す。髪色は絶対に見せてはいけない。今は王族だということを隠したかった。例えどんな目で見られようと、今この時を奪われなくなかった。

温かな手。

ライトは静かに微笑む。それを感じられるだけで世界が変わる。肌に感じる町の雰囲気、どれだけ痛いものであつても関係なかった。

目に見えない分、自分の世界が広がり続ける。それはどんな町よりも、ずっと居心地の良い場所だった。

雑踏の中、真一は目に映る風景をそのままライトに伝えていく。が、うまく説明できるほど器用ではない。

何色の建物がある、良い匂いのおいしそうな食べ物売っている人が多い、など　あまりに簡潔な内容だった。進めば進むほど、前に言った説明と重なりどんどんと言葉に詰まっていく。最後には、綺麗、すごい、など単純な感想だけとなっていた。

「……ごめん、俺、やっぱ説明下手だな」

大通りを抜け、二人は長椅子のようなものに並んで腰かけた。

丸い広場の真ん中に、噴水があり水が沸き上がっている。それを囲むように長椅子が並んでいた。周りを見渡せば、長椅子に寝ている者や呆然と思いつけている者などがいる。

人の流れが早い通りに比べると、この広場だけがゆったりとした時間の流れる感じられた。そのせいか、真一たちの姿をじろじろと見る者はいない。

「そんなことはありません。町の光景が目浮かぶようでした」

にっこりと微笑むライトの横顔に、真一も釣られ頬を緩めた。

「そっか。ならよかった」

「本当に……本当にシンイチさんは優しい方です……」

そう言つと、ライトは少し顔を俯かせながら両手を丸め拳を作つた。

「……私、本当に感謝しきれません」

呟くような声だった。フードの端で顔が隠れ、真一からライトの表情がわからなかった。

そのまま二人の間に沈黙が流れる。遠くから大通りの騒がしい音が聞こえ、噴水の水が沸き上がる音が静かに響く。

その間も一寸も動かないライト。呆然と前を眺めていた真一も、沈黙に耐えきれずちらりと横を覗き見る。が、ライトは顔を少し俯かせたままの状態だった。

まさか泣いている？

不安に思つた真一は、静かに身体を屈め恐る恐る表情を盗み見る。

しかしライトは泣いてはいなかった。ただ眉を八の字にし、今にも泣きそうな雰囲気だった。

「ら、ライト？ どうした？」

思わぬ方向からの問いかけに、ライトははっとした。そしてすぐに顔を上げる。なぜかほんのりと頬を赤く染めていた。

「……なんか考えごとか？」

ライトは首を横に振りながら、明るい声で答えた。

「な、なんでもありませんよ！ そ、それより……わ、私、シンイチさんがいらっしやっしたチキュウについてのお話を伺いたいです！」

「え、地球の話？ ……いいけど、本当に何でもねえの？」

切り替えの早さに真一は首を傾げるが、ライトは笑みを崩さない。「わ、私のことは気になさらないでください。そ、それより、シンイチさんのご家族やお友達はどんな方々なんですか？」

につこりと微笑むライトの一方で、真一はすつと真顔になりそのまま視線を落とした。

しばらく無表情のまま黙り込み、呆然と地面に視線を落とす。ライトは見えないため、その沈黙の意味が理解できず首を傾げた。

「……俺、一人暮らししてた。友達も、いねえ」

「……え」

予想外の返答に言葉を失い、ライトの表情が曇っていく。

「俺さ、今まで友達とか仲間とかどーでもいって思ってたんだ。

所詮上辺だけの関係、困った時にしか寄ってこない奴ら、とか……まあそんなこと思ってた。今だって、地球　　というか俺の学校じや普通に授業が進んでいるんだろ。けど、戻りたいとも思わねえし、むしろ行けなくなってほっとしてる。……言ってもわかんねえと思うけど、俺の親が離婚してさ。そのせいかはわかんねえけど、自分でも驚くほど冷めてる」

ふうと息を吐くと、真一は口元を緩め空を見上げた。

「けどヨウに会って振り回されてるうちに、こういう関係も悪くねえなあって思うようになってたよ。まあ、こっちの世界で一人じゃ

生きていけねえのが最大の理由かもしれねえけどな」

「……ご、ごめんなさい。私……すごく失礼な質問を……」

見ると口を手で覆い、また不安そうに眉を八の字にしている。小柄な身体はますます小さくなっていた。

「別に失礼でも何でもねえよ。でもまあ、地球から離れて……心配かけてるなあって思うのは一人いるな」

「……お一人ですか。シンイチさんの大切な方……ですか？」

「んー大切というより、尊敬してる人。俺の弓道の先生なんだ。あの人だけ、本当に俺のことを見てくれるし、本当に世話になってる」

遠い空を見上げながら、真一は自然と先生の顔を思い浮かべた。

もう何日過ぎたのかわからない。たった一枚の手紙だけを残し、先生にだけ伝え去って行った。あれを見て何と思ったのだろうと真一は思う。

審査の心配をしてくれていたのが、遠い昔のように感じた。

もう審査の日は過ぎたのだろうか、先生は受けないと知り呆れてしまったのか。今そのことを考えても、答えを知る手段はない。

「……シンイチさんは、冷めた人なんかじゃありません」

「え？」

はつきりとしたライトの言葉に、真一は視線を戻しライトに向ける。フードから見える横顔は笑っているように見えた。

「私はチキユウについて全くわかりません。ガッコウとかジュギョウとか、リコンとか……今話をお伺いする限りでは、相当シンイチさんが苦労されたんだなと思います。けど、シンイチさんが冷めた方、だなんてそれは信じられません。私が耳や肌で感じたシンイチさんは、とっても温かい人ですよ。私が不安に思うことを察してくれて、いつも真っ直ぐで……本当に本当に心の温かな人……そんなシンイチさんに私は……」

はっとしたライトはすぐさま口を閉じ、手のひらで口を覆った。

「……私は、なんだ？」

「あ、いや、あ、あの！ な、なんでもないです……」

「そ、そう。……はは、なんかライトにそんなこと言われると恥ずかしいな。でも、ありがとう」

照れ笑いを隠すように、真一は空を見上げた。一方、その横でライトは身体を硬直させていた。ありがとう、の一言が心を温める。

暗い世界に光が差すような、温かく心地の良いもの。

それをずつと感じていたい　もつと知りたい　ライトはいつの間にかそんなことを考えていた。

だからこそ、もう一度光がほしい。

ライトは再び表情を曇らした。一度だけ見た、マスクの顔とヨウの寝顔を相互に思いだす。

ヨウを渡さなければ目が治ることはない　真一たちについてきたのも、それを実行するため。

そう思うと胸を締め付けられた。

「あ……そう言えば今思ったんだけどよ……」

突然の言葉にライトはすつと顔を上げた。

「なんでライトは俺たちについていくつて言ったんだ？ シトモンさんだつて心配してるだろうに……」

どきつと激しく心臓が打った。身体全身から汗が噴き出すような感覚になり、顔を背けたい衝動に駆られる。が、そんな行動をとれば怪しまれるに違いない　そう思いライトはなんとか平常を保った。

「ち、父上はいいんです……。た、ただ私は……シンイチさんたちのお手伝いをしたくて……」

「そうかあ？　絶対心配してると思うけどなあ……」

幸いなことに、真一は空を見上げたままだった。びくびくとするライトの様子に気づいていない。が、ライトは声色でしか判断できず、真一が自分を疑っているのではないかと思った。

ぎゅっと手を合わせ必死に話の話題を考える。　　が考えつく間もなく、勝手に口が開いた。

「あ、あの！ シンイチさんに尋ねたいことがあるんです！」

「ん……ど、どうしたいきなり」

真一が顔を向けると、ライトは険しい表情である。

何を言われるのかと思い、真一は思わず姿勢を正す。

「……シ、シンイチさんは……」

一方で、ライトは何を言おうかと迷っていた。とにかく話を逸らせること　それしか頭になかった。

「私のことを……どう思ってますか？」

「えっ……」

予想しなかった言葉に真一は言葉を失った。

一方、ライト自身も見ると見る顔が火照ってゆく。

「あ……ち、ちが……ど、どう思っているというのは……わ、私の、め、目のことです！」

「め……目？」

目という言葉に真一は眉をしかめた。ライトは赤く染まる頬を隠すように、再び顔を俯かせる。

「私は目が見えませんが……。そのせいか、様々なことを言われそれを耳にしてみました。あるいは、周りの方がどれだけ気を遣っているのか……それを肌で感じてきました」

話しながら、ライトの頬の赤みも引いていく。しかし、今までの経験を思いだし次第に胸が苦しくなるのを感じた。

「私は……この目が憎い、です。光を持っていた時があるからこそ、今が余計に悔しいんです。見たい、知りたい世界でさえも、この目は受け付けてはくれません。……今だって、私、一番見たいものがあるのに……」

ライトはぎゅっと拳を握り締めていた。何かに耐えるように、小さく震えている。

「俺は、目が見えないことなんて気にしてねえよ」

真一が静かに言うと、ライトの拳の震えた止まった。ハツとして顔を真一へと向ける。

「ライトが苦しんできたことは……きっと俺の想像以上だと思う。けど、そのことでライトをかわいそうとかそんなことは絶対に思わねえよ。ライトはライトじゃねえか。こんな俺に協力してくれる仲間だと、俺はそう思ってる」

「……仲間？」

「ああ。だから、ライトが困ってるなら俺はそれを助ける。……もし、目が治ったら一番見たいものを見せてやるよ。絶対に協力する」
につこりと笑う真一。

ライトにも、瞼越しに真一の笑顔が見える気がした。だがその笑顔は、逆にライトの胸を締め付ける。

私が光を取り戻すとき、シンイチさんは目の前にいないかもしれない。

ライトは再び顔を俯かせた。それでも 光がほしかった。

一方で、俯いたライトに大した疑問を抱くことなく、真一は終始笑顔を崩さなかった。

「……ありがとうございます。その時はよろしくお願いしますね」

「ああ。だから、目が見えなくなつて気にするんじゃないぞ。何かあったら俺とヨウが守るから」

それから二人は再び大通りへと戻り、町から出る間に陽はいつの間にか傾いていた。

広い草原の中、必死にヨウとピイを探す真一。その後ろをついて歩くライト。探している間に陽はどんどんと陰り、このまま探せないのではないかと真一は焦った。

が、遠くに何か二つの物体が寄り添うようにあるのが見えた。それを見つければ足早に行ってみると、互いに寄り添う寝るヨウとピイの

姿だった。

今までになく仲の良い光景に、そつと真一はライトに耳打ちをする。

「……こいつら寄り添って寝てる。俺らも今日はここで休もう」

「はい……」

身体と身体を互いの枕にし合っている。真一も思わず頬を緩め、静かにその場に腰を下ろす。平和そのものだった。

ライトも、頭で想像し出来る光景にふつと頬を緩めた。

大会前日の、静かな夜だった。

【第五章 城下町オデイ】大会前日 真一とライト (後書き)

お読みいただきましてありがとうございます。

ええ次話ですが……またまた、更新に間が空きそうですorz
正直に申し上げますと、執筆をする時間がないほど多忙な身となっております
おります……。ですが、なんとか更新は続けていきたいと思えます。
また二か月近く、もしかするとそれ以上空くかもしれないですが、ど
うかよろしくお願い申し上げます。

【第五章 城下町オデイ】初戦

大会当日 町は異様な活気に溢れていた。

大通りには大弾幕があちこちに掲げられ、文字らしきものがいたるところに躍っている。同じ方向へと進む人の列は大通りを埋め尽くし、人が進む様は川の流れのように見えた。

がやがやと騒がしい人ごみ中、真一たちも流れに沿って歩いていった。

「……これ、みんな大会に行くのか？」

「当たり前じゃ。祭りじゃからの」

皆、顔をほころばせ祭りを楽しみにしていたように見える。今日ばかりは真一の荷物を怪訝そうに見てくる者もない。

「まあ、早く受付済ませちまおう。……受付終了したらシャレになんねえからな」

流れに沿って進んでいくと、昨日見た窪んだ広場へと出た。

昨日と打って変わり、階段には人が埋め尽くされている。広場の中央には長い机が並べられ受付をしているらしい。そこにはすでに何人かの人が見えた。

「あれか……間に合ってよかった。じゃあ俺受付済ませてくるからお前、ライトと一緒に席をとっててくれ」

「わかった。……そういえば、ひよこはどこじゃ？」

「ああ、ピイなら上空だ。じゃ行ってくる」

そう言うと真一は階段を足早に降りて行った。それを見届けた後、ヨウはライトの指を握り締める。

「じゃライト、足元に気をつけるんじゃよ。人が多いからわしの声が聞こえにくいかもしれないが、慌てなくても良いからの」

「はい。ありがとうございます」

真一は緩やかな階段を下り、広場の中央へと行った。見ると、机

には昨日見た派遣所の役人が座っている。真一の姿を見るなり手招きをした。

「こっちに来い。お前は昨日の奴だろう」

覚えていたらしい。真一はその指示に従い、机の前まで移動する。「丁度よかつたな。お前を入れて四人だ。これで受付も終了だ」

役人は本を開き、何やら書き込もうとしている。覗いてみるとすでに三人の名前が書かれていた。もっとも真一には読めないのも、どんな内容かは確認できない。

「お前の名前、パラッグの雛の種類を教えろ」

「俺の名前は萩野真一。パラッグの雛は、召喚の雛」

「……ハギノ、シンイチ。……召喚の雛」

流れるように文字が書かれる。

「ご苦労。これで受付は終わった。あとは始まるまで適当にくつろいでいる。始まった時広場に出て、雛を出せばお前の役目は終了だ。あとは雛が勝手に戦って勝敗をつけてくれれば良い」

「……はあ。どうも」

そう言うつと役人は立ち上がり、すたすたと準備されたテントの中に入ってしまった。

残された真一も、身体を翻しライトたちの姿を目で追う。すると、上空からヨウが聞こえた。

「おい、シンイチ。受付が終わったなら、あっちに行くんじゃ。ライトがまつとるぞ」

ヨウが指差す方向を見ると、ライトが一人きりでぽつんと座っている。何か寂しげな姿に、真一は慌ててその席へと急いで行った。

「わりい、待たせちまった」

人の前を通り過ぎ、ようやくライトの隣へと腰掛けた。冷たい石はひんやりとお尻を冷やす。

「あ……お疲れ様でした。受付、間に会いました？」

「ああ、なんとか。てか、なんであいつはライトを一人にしてんだ」

上空を見上げれば、遠く建物の奥の方にヨウが見えた。真一が見ていることに気付いたのか、手を振っている。

「やはり使者のことが気になるとおっしゃっていました。だから少し離れた場所から見られるそうです。何かあればすぐに駆けつけると……」

「まあ、確かにこれだけ人がいたら気になるよな。ライトも疲れたら言えよ。ここうるさいからな……」

ライトの隣、真一の隣にも人が隙間なく座っている。広場のどこを見ても空席が見当たらず、皆が今か今かと大会の始まりを待っているようだ。

すると、広場の中央のテントの中から真紅のローブを着た者が姿を現した。と同時に広場のざわつきが治まる。

「……お待たせした。今からパラグの雛の大会を始めようと思う。拡声器も使っていないのに、男の声は広場に響き渡る。階段に座る人々の視線も自然と男に注がれた。

「今回の大会に参加したパラグの雛は四匹。自衛の雛、移動の雛、回復の雛、召喚の雛の以上だ。こちらで抽選を行い、今からその対戦を発表する。呼ばれた雛の主は速やかに雛を呼び寄せるように」
人々が静かにざわめき始める。その声はライトの耳にも届いたように、そつと手を組んでいた。

そして、男は紙を見て確認した後すつと視線を上げ口を開ける。
「最初の対戦は、回復の雛と召喚の雛！ それぞれ、主は前へ！」
人々のざわめきが一気に爆発する。

皆口ぐちに「この対戦はちゃんとした試合になるのか」「今日中に決着がつくのか」など、試合に対する不満が聞こえてきた。もちろん、その声は真一たちにも届いていた。

「シ、シンイチさん……召喚の雛ってピイさんのことですよな？」

「ああ。……まあ行ってくる」

「が、頑張ってくださいね！」

にこつと真一は微笑んだ後、立ち上がりゆっくりと階段を下って

行く。下る間、一気に人々の視線が真一へと注がれる。鼻で笑う者やひそひそとしゃべっている者が見えた。しかし、真一は気にすることなく中央の広場へと足を運ぶ。

そして、空を見上げた。空高く　パイが翼を広げ優雅に飛んでいるのが見える。真一はそれを見た後、思いつき指を鳴らした。

「……両者前へ」

真紅の男は静かに告げた。真一が広場の中央で正面を向くと同時にパイが隣に降り立った。

しかし　パイが姿を現した途端、一気に客席から怒号が飛び交い始めた。

「おい、ありや第二段階じゃないか！」

「あの男は狂ってるのか？」

「つまりん試合だ、さっさと次の試合を見せろ！」

いきなりの罵声の嵐に真一は啞然とした表情を浮かべるしかなかった。皆、明らかに苛立ち今にも物が飛んでいきそうな雰囲気である。パイもその様子をじっと黙ったまま見つめている。

「なっ……何なんだよ！　第二段階だろうがためえらには関係ねえだろ！」

そう真一が叫ぶが、聞こえるわけもなく罵声は止みそうにない。拳を握り締め肩を震わせる真一だったが、そこへ罵声とは違う声が届いた。

「第二段階の召喚の雛……ね。回復の雛だからってなめてるの？」

女の声である。しかし、声は明らかに上空から聞こえた。真一は不思議に思い、すぐさま空を見上げた。

そこに女が二人いた。一人はもう一人の肩に捕まり、真一を冷たく見下ろしている。　どうやら今の発言はこの女らしい。

だが、もう一人の女の姿にざわついていた客席はあっという間に静まりかえった。

丈の長い水色のドレス。その布は薄く透けていた。その布自体もキラキラと輝いているように見える。風が吹いているわけでもない

のに着ているドレスはなびき、長い袂はふわふわと浮いていた。一見、人間のように見えたが肌が水色で人間とは違う雰囲気がある。目があるもののその目に瞳はなく、口元は微笑んでいるように見える。広場にいるものが、人間ではない生き物だと感じた。

「ま、まさかそいつが……回復の雛、なのか？」

雛という言葉に似つかない、それはまさしく人間の姿だった。言葉を失い目で追う真一を尻目に、その女二人は静かに広場に降り立つと真つ直ぐ観客を見据えた。

「次の試合が見たいなら、ぐだぐだ言わずさつさと始めてほしいね」
回復の雛の主と思われる女が、小さく舌打ちをした。回復の雛とは違い、紫の髪は乱れ、着ているローブも清潔感がなく薄汚れている。

一方で、回復の雛は主の言葉に同調することもなくただ微笑んでいた。

「では……始めようとしてよう。両者は勝敗がつくまで、この広場に立ち入ることを禁ずる。それは観客にも言える。また試合を妨害した場合、その者はオデイから出て行ってもらおう。では……両者、主がこの広場から立ち退き次第試合を始める」

そう言われ、対戦相手の女はすぐに回れ右をし広場から出て行く。だが真一はまだ動けずにいた。

「……真一さん。ほら、この広場から出ないと」

「あ。わ、わりい……回復の雛の姿に驚いちゃった」

視線を再び回復の雛へと向ける。どう見ても雛には見えない。だがしっかりとこちらに顔を向けている。微笑む顔から殺意は見受けられなかった。

「無理もないです。第三段階になると姿ががらりと変わりますから。……私、頑張りますね」

「おう。応援してるからな。でも無理すんじゃねえぞ」
そう告げ、真一は足早にライトが待つ席へと戻って行った。

【第五章 城下町オデイ】優しい雛たち

静まる広場。軽い傾斜部分は階段のようになり、そこに数えきれないほどの人々が試合開始を待ち望んでいる。その中央　　パイと回復の雛が対峙していた。

パイを見下ろす回復の雛。雛という言葉が似つかない、人型の雛である。水色の肌。ふわふわとする薄く透けたドレスは、太陽の日差しにより一層輝いて見えた。目に瞳はなく、何を考えているのか、それさえもわからない幻想的な雰囲気漂わせていた。

「では、始め！」

真紅の男の声が広場に響く。

と同時にパイは翼を広げ、一気に空へと舞い上がった。

音もなく空へと舞い上がる姿に、観衆は釣られるように空を見上げる。その中に真一の姿もあつた。

「……パイ頑張れ……」

呟いた真一の横で、ライトはひたすら祈りを捧げていた。

ひたすら高く高く舞い上がる。近づく太陽の光と暑さを感じながらパイは考えた。

相手は回復の雛の第三段階。パイ自身、第三段階がどのような相手であるかは十分承知している。回復の雛だから攻撃手段がない、そんな憶測はもつてのほかだった。

一見人間のように見える雛。薄く微笑むその顔に邪気はない。パイにも恨みはない。だが、試合はどちらかが死ぬまで続くのだ。

初めから全力でいかないと死んでしまう。

グツと翼に力を込めた。そして半回転をし、今度は太陽を背に一気に急降下を始める。眼下に見える広場が小さく見えた。

狙いは一点。水色の女。

視線をそれ一つに集中し、急降下しながら翼に風を貯め込んでい

く。風を切る轟音がパイを包み、かかる重力がさらに速度を上げた。どんとんと近づくと地上。近づくとつれ、観客全員が注目しているのが見えた。

一方で、雛も表情を変えず、黙って空を見上げパイの行方を追っていた。

すると、遠くから何か落下するような音が聞こえ始めた。逆光の中見えたのは、翼を大きく広げた鳥。紛れもなくパイだった。それに気付いた観客たちからは再びざわめきが起こり始める。

そんな中、雛は静かに片手を口元へやった。手のひらを広げ、まるで息を吹きかけるような姿勢だった。

パイにもその姿は確認できた。しかし、気にせずそのまま雛へと向かっていく。

ぶつかるとその瞬間だった。

雛は目の前にパイが迫った時、ふうつと息を吹きかけた。息ははつきりと見える青色で迫るパイをそのまま包み込む。目を見開き翼を広げていたパイだったが、包まれた瞬間その勢いを失った。と同時に、雛は両手を空へ向かって伸ばした。すると、雛から一気に青い空間が広がりそれはパイをも巻き込む形となってしまった。

「パイ！」

真一は思わず立ち上がり叫ぶ。広場の中央に小さな青いドームのような半円が、くつきりと出来上がっている。しかも中まで確認することができなかった。

「シンイチさん、きつと大丈夫です……大丈夫です」

そう呟くライトだったが、声は弱々しく合わさる手に力が入っていた。

パイの目の前に広がっていたのは、真つ青な空間だった。他になにもない。勢いよく急降下していたはずなのに、今は身体は勢いを失い止まっている。いつの間にか地面へ降り立っていた。

「……アナタ、なぜ、タタカウ？」

片言のような言葉が上から聞こえた。ハツとして声のする方を見ると、いつの間にか雛が立っている。口元を緩めたまま微笑んでいた。

驚いたピイは思わず身を引いた。雛と距離をとり、翼を広げ警戒心を露わにする。

一方で雛は小首を傾げるだけだった。殺気を全く感じさせない。

「モウイチド、キク。……なぜ、タタカウ？」

「……」

同じ言葉を繰り返す雛に、ピイは黙ったまま答えなかった。

なぜそのようなことを聞くのか、聞いて何になるのか。そんな疑念だけが頭に浮かぶ。

そんな質問よりも、今の状況がピイには不安だった。

この青い空間の中で、雛は一体何をしようとしているのか。周りを見ても青一色で、隠れる場所もなければ物音もしない。雛の術中に嵌ってしまったと思った。

ならば　と、ピイは突如浮かび上がり翼を大きく仰いだ。羽音が無音の空間に響き、そこから風が発生する。翼に集まる風は増えて行きやがて竜巻となる。翼の中渦巻く風をそのまま大きく仰ぎ、真っ直ぐ雛に向かって放った。

しかし雛は慌てる様子なく口元に手を添えた。そして先ほどと同じように息を吹きかけたのだ。

向かってくる竜巻と吐き出された青い息がぶつかる。すると、形のないはずの竜巻が青い息の中に固まってしまった。

「ワタシ、シツモンシタ。……なぜ、タタカウ？」

固まった竜巻はそのまま地面へと落ちていく。それを見届けた後、ピイは険しい眼差しを雛に移した。

戦う姿勢を感じられない。ただ微笑み答えを待っているように見えた。

このままでは埒が明かない。そう判断したピイは宙に浮いたまま答えた。

「……主に恩を返したい。だから戦っているんです」
「オン？」

すると、微笑んでいた口元がなくなり真顔へと変わった。そのまま言葉を発さず、呆然とパイに顔を向けている。瞳がない分、真顔の表情が全くの無表情に見えた。何を考えているのか全くわからない。パイはますます警戒を強め、少しずつじりじりと後ろへと下がって行く。回復の雛とはいえ、攻撃されてしまえば命を奪われてしまいかもしれない。そんな風に考えていた最中だった。

「ウラヤマシイ」

突然、雛がぽつりと呟いた。そして目から一筋の涙が頬を伝う。

「アルジ、アナタ、ヨイ、カンケイ。ワタシ、タダノ、モノ。……オモチャ」

「え」

流れる涙の前に、パイは思わず翼を閉じ静かに地面へと降り立った。雛は涙を拭くこともなく、涙を流しながら微笑みを浮かべる。

「ワタシ、シヌ、ケド、カワリ、タクサン。アルジ、ワタシヲ、キニシナイ」

「代わりが……たくさん？」

予想外の言葉にパイは思わず顔をしかめる。だが、雛はなお続けた。

「……ウラレタ。ホントウノアルジ、ワタシ、ウツタ。……ワタシ、ヨリ、カネ。……ワタシ、カナシイ」

雛は華奢の手でそっと涙を拭う。

透き通るような美しい雛の青い肌。しかし今の状況において、その肌は青色の空間の中に消えてしまいそうなほど弱々しく見えた。

パラッグの雛の運命さだめは、全て主によって決められる。

どんな姿になり、どんな性格になり　どんな運命を辿るのか。全ては最初に触れられた人間の手に掛っている。

パイはそれが真一だった。自分を信じ、頼りにしてくれる　だ

から今、この戦いの場に挑んでいた。だが、今日の前にいる回復の雛は違った。

城下町オデイによくあることなのだろう。上級階級ばかりが住むと言われるこの町に、パラッグの雛で商売をしている人間がいないはずはない。定期的に行われるこの大会も、きっとそんな人間の存在があるからこそだろう。それでもパラッグの雛は、本当の主のため、偽りの主に従う。

歪な忠誠心がピイの心を締め付ける。

「そんな……そんなことを聞かされて……私にどうしろと言っんですか！」

翼が石のように重い。声を張り上げ、失いそうになる闘争心を再び燃やそうとする。

だが、殺さなければならぬ相手は同じパラッグの雛。この戦いも人間を楽しませるだけの活劇。

相手は何の罪もなく、ただ戦わされている。主の欲望のために偽の主のために。

「同情はします！……けど、私は命を賭けてるんです！」

ピイは再び宙へ舞い上がり、大きく翼を仰ぎ始めた。翼に風を貯め込んでいく。

憎いとも思わない相手を殺さなければならない　そんなジレンマがピイを苦しませる。

「私に向かつてきなさい！　私は貴方を倒さないと進めないんです！」

そう叫ぶと大きく翼を仰ぎ、先ほどよりも大きな竜巻を作り上げた。それを躊躇うことなく雛へと放った。

轟音を響かせながら向かってくる竜巻。

だが　雛は何もしない。真っ直ぐ顔を向け微笑んでいた。

当然避けることもなく、そのまま竜巻に巻き込まれ雛の身体が大きく裂かれ舞い上がった。そして、受け身をとることなくそのまま

地面へと激突してしまう。

「なっ……なぜ防御しないんですか！ 戦う姿勢を見せなさい！」
倒れた状態からゆっくりと立ち上がる雛。服は竜巻のせいであちらこちらが引き裂かれ、浮いていた布もだらしなく垂れ下がっている。透き通るような青い肌も、裂かれたところから赤い血が流れていた。

「コロシテ」

切れた口元から流れる血を拭いながら、雛は静かに言った。

「ワタシ、イキル、リユウ、ナイ。アナタ、アルジ、イル、マツテル。ダカラ……」

「ふざけないで！」

ピィは一喝した。そして、雛の元まで飛んでいくと翼で思いっきり雛の頬を叩いた。

叩くこと自体に痛さはない。だが、雛は微笑みをなくし呆然とピィを眺めた。

「私は、昨日から大会で優勝することを考えていたんです！ 勝敗がどちらかの命が尽きるまでと知っていたし、対戦相手が第三段階だということも知っていました！ 全ては真一さんに恩返しをするため……だから私は……命を賭けても証がほしい！ なのに……どうして貴方は私の戦意を削ぐようなことばかり言うんですか……！」
目を潤ませながらピィはなお続ける。

「私は本気で貴方を殺そうと思ったのに……なのに、どうして……殺してなんて言うんですか……！ 私は……私は……貴方のためになんかに殺すわけじゃない！」

そう叫ぶとくちばしで何度も雛の足を突き始めた。鋭いくちばしで、すぐに足からは血が流れ始める。

「反撃しなさい……私を……本気で殺しにかけなさい……！ 私を、恨みなさい！」

何度も突くピィ。同じところを突くので、痛々しく血がどんどんと流れていく。だが、雛は叫ぶこともなく顔色を変えずピィを見下

ろしていた。

雛は何かを考えるように黙り込んでいる。突くパイをやめさせるわけでもなく、その行為を受け入れていた。

すると、雛は再び口元を緩め微笑んだ。そして、両手を伸ばしそつとパイを抱き上げた。

「……戦う気になりましたか」

翼を抑えられ身動きがとれなくなってしまったパイ。鋭い視線を雛に向けるが、その瞳は潤んだままだった。

「アナタ……トテモヨイ、アルジ、デアッタ」

「私は簡単には死にません。例え翼を奪われようとも、絶対に勝ちます」

くすつと雛は笑った。目尻を下げている表情に、パイは初めて笑ったと思った。

「アリガトウ」

そう言うつと雛は思いつきパイを上空へと放り投げた。突然のことに、パイもすぐには翼を広げることができず上空でバランスを失う。くるくると上空で回る中、視線を雛へと移した。

見ると、雛は微笑んだ表情のまま上空に両手伸ばしている。

何をするのか　そう思った矢先だった。なんと、雛はそのまま勢いよく振り下ろし自らの胸に腕を突き刺した。

手は鋭い刃のように胸を突き破っている。水色の肌が赤く染まる。吹き出る血の雨に、青白い身体には赤い斑模様ができていく。

それでも雛は笑顔のままだった。

パイが叫ぼうとした時、丁度青色の空間が一気に晴れた。と同時に、観客席が現れ一気に歓声が耳に届いた。

「……召喚の雛、勝利！」

男の声がした。だが、パイにはその声は遠くに聞こえた。

先ほどまで笑っていた雛は、胸に自らの手を突き刺したまま倒れている。微笑む顔に噴き出した血が生々しくついている。　先ほ

どまで微笑んでいた回復の雛。

呆然とする。パイの前に、雛の主が現れた。

「……負けたのか。やっぱり回復の雛は戦い向きじゃないわね……次は別のにするかあ」

そう言う主は背を向け、そのまま席へと戻ろうとする。パイはすぐに後を追いかけてよつとした時、後ろから真一の声が聞こえた。

「パイ！ よかった……無事でよかった」

「……し、真一さん」

「あの青いバリアみたいなのやつのおかげで、中の様子が全く見えねえし聞こえなかったんだよ」

「そうですか……」

真一は倒れている回復の雛に視線を移し、気の毒そうな表情を浮かべた。

「こいつ……なんで自分の手で胸を差してんだ……。なんで……自殺なんか……」

「……真一さん」

パイの呼びかけに視線を戻した。パイは真つ直ぐ真一を見上げている。だが、その目は薄ら潤んでいるように見えた。

「席に戻りましょう。ライト様がお待ちですよ」

「あ、ああ。そうだな」

席に戻って行く真一とパイ。だが、途中パイは足を止め振り返った。

倒れていた回復の雛は、真紅のローブの男たちによって運ばれていた。死体をどう処理するのかわからない。ただ　とパイは思う。せめて主の元へ返してあげてほしい。せめて近くで眠らせてあげたい。

運ばれる回復の雛を見届けた後、パイの目には光るものがあつた。

【第五章 城下町オデイ】準備と決意

もう一つの試合である、自衛の雛と移動の雛の対戦はすぐに始まった。

自衛の雛は以前トトロイで見た、ロイの姿そのままだったが大きさが違っていた。

ロイの大きさよりもはるかに小さく、広場の半分の大きさもない人二人分ほどの高さで横幅ぐらいである。それでも竜であることは変わらず、口から見える鋭い牙と爪に観客は歓声を上げていた。

一方で移動の雛も第三段階の姿だった。

が、その姿は 人が入りそうなほどの黒い箱だった。目があるわけでもない。ただ、しゃべるのか上の部分が閉じたり開いたりする。

そんな二匹の対戦に、どんな試合内容になるのかと広場全体が盛り上がった。

「……こいつら、本当にあの卵から生まれたのか……？ 絶対嘘だろ」

対峙する雛たちを眺めながら、真一は思わず言葉を漏らした。疑いの眼で腕組みをし信じられない様子だった。

「ど、どんな姿なんですか？」

「一匹は……頭が二つある竜。これは自衛の雛の第三段階なんだ。で、もう一匹は黒い箱。……移動の雛の第三段階らしいけど、あんなの雛って言わねえよ」

観客が熱い眼差しが注がれる中、最初に動いたのは自衛の雛だった。

二つの口を大きく開き激しい炎を吐き出す。観客席まで熱気が伝わり、真一も思わず手をかざした。ライトも突然の熱気に顔をしか

めている。

だが移動の雛は逃げることもなくただ口を開いていた。

当然、激しい炎は移動の雛を包み込んだ。一瞬にして炎で見えなくなる。誰もが自衛の雛の勝利を確信した。だが。

急に炎が中心から吸い取られるようになると、そこから口を閉じた箱が出てきたのだ。紛れもなく移動の雛で、炎で焼かれた様子もない。平然とした様子で飛び跳ねていた。

「なっなんて……！」

そう真一が叫ぶと同時に、移動の雛が一気に自衛の雛へと近づいて行った。

自衛の雛も驚き、すぐさま炎を吐き出す。だが、炎はまた移動の雛の中に吸い込まれてしまった。まるで炎が水であるかのように、その箱の中へと流れ入る。

そして、自衛の雛の前へと飛び跳ねると一気に箱の口を開いた。大きく膨らんだかと思っただ瞬間、その中へと自衛の雛が吸い込まれてしまった。

「……い、移動の雛、勝利！」

一瞬しんと静まる広場に、真紅の男の声が響いた。と同時に、一気に広場がざわつき始める。皆、突如姿の消えた自衛の雛に驚きを隠せないでいた。

「ど、どこにいったんだ……あの竜」

「な、何があつたんですか？」

「いきなり……移動の雛が吸い込んだんだよ。そしたら、自衛の雛がどっかいつちまった……」

観客たちも口々に真一と同じことを言っている。忽然と消えた自衛の雛の行方に驚きとざわめきが広場に漂う。

そんな中、真紅のローブの男は冷静さを取り戻し再び声を張り上げた。

「決勝は召喚の雛と移動の雛の対戦となる！ なお、時間はオディ様がこの広場に到着次第開始とする！」

その言葉と同時に、観客が一斉に歓声を上げた。

「……統治者のおでましつてことか」

ふん、と鼻息を鳴らした真一はあからさまに嫌な顔となった。歓声が沸き上がる広場を目で追いながら、ふと思う。

なんとなくは予想していたが、祭りといっても結局のところ統治者の趣味で行われているような気がした。趣味だけで一匹のパラッグの雛は死んでしまつて、もう一匹の雛はどこかへ行ってしまつた。何か身勝手すぎる統治者のお出ましに、真一は嫌でも気分が悪くなる。

「……そう言えば、パイさんはどちらに？」

「ああ。何かヨウに用事があるつてどっか飛んで行つた。まあ、また指鳴らせば降りるから大丈夫だろ」

呆然と広場の中央を眺める真一。一方で、何か不安げな様子で両手を組むライト。これから始まる決勝と統治者の登場に、それぞれ苛立ちと不安を感じていた。

「ええか、ひよこ。絶対に無理をするでないぞ」

何時にも増してヨウの表情は真剣だった。

広場が小さく見える上空　そこにヨウとパイは浮いていた。

「そんなこと……できるわけじゃないじゃないですか」

「……ぬ？　らしくない言……」

「違います。無理をしなきゃ勝てないと言っているんです」

むつとした表情でパイは答えた。そしてさらに続けた。

「次の相手は移動の雛でしょう？　一番やつかない相手じゃないですか」

「それがわかつとるなら、無理はせず様子を見ながら攻めると、わしは言つておるんじや」

今度はヨウがむつとした表情となる。

「昨日も言つたが、命を粗末にするもんじやない。ましてや、お主はシンイチに助けられた身じやろ？　恩を返したいという気持ちも

わからんでもないが、それで死んでしまっただけでは今度はシンイチが苦しむことになる。……お主もわかっておるじやろ？」

真一は初戦でも、相手が自殺したために勝敗がついたと思っている。そのため、相手が死ぬまでとはわかっていなかった。

だが、ヨウとピイは知っていた。移動の雛に吸い込まれてしまえば即終わってしまう。

あの中が一体どうなっているのか、それは誰も知らない。わかっていることは、吸い込まれた者は二度と姿を現さないということだけである。

「わかってます……けど、それでも私は……」

ヨウから視線を逸らすピイ。真一が事実を知れば、きつと止めるに違いないだろう。心配する真一の顔が目に見えた。

「ひよこ、お主は……死んでもシンイチに尽くしたいと思うか？」

「え？」

思わぬ言葉に顔を上げた。

「どうなんじゃ？」

ヨウは真っ直ぐピイを見つめる。ふざけた様子もない。真剣な眼差しだった。

「死んでもなお真一さんの役に立てるなら……私は尽くしたい」

その視線に応えピイは即座に答えた。嘘のない、本当の言葉だった。それはヨウにも伝わったようで、深く一つ頷いて見せた。

「……わかった。では、お主の羽根を一枚、わしによこせ」

「羽根を……？ どうしてですか？」

そう言いながら、ピイは自らの羽根をくちばしで啄み、茶色の光沢のある羽根をヨウに渡した。

手のひらよりも大きな羽根を見ながら、ヨウはそれを両手で挟みぐつと力を込める。そして目を閉じると、ぶつぶつと何かを呟き強く念じ始めた。すると、次第に両手全体が黒い炎のような、燃え上がる空間の歪みが覆い始める。

「よ、ヨウ……貴方、一体何を」

パイが思わず声をかけた時、丁度カツとヨウが目を見開いた。と同時に、両手を覆っていた空間の歪みが一気に吹き飛ぶ。が、その両手の中に挟まれていた羽根がどこにもない。

「お主の羽根を……わしの中に取り込んだ」

「……え？」

口を開こうとしたパイよりも先に、ヨウが口を開いた。が、顔には汗が流れ荒い息を上げている。ぐったりと肩を落としている様子から、かなりの魔力を消費したようだった。

「プレサモンと、異なる、召喚魔術の準備じゃよ」

「プレサモンとは異なる召喚魔術？ なんですか、それは」

「わしの中に取り込んだ者……つまりひよこを、死んだ状態でも召喚を可能にする魔術じゃ」

ふう、と息を整えたヨウはぐつと背筋を伸ばした。一方でパイは驚いているのか目を見開いている。

「あくまでも、最悪の事態に備えた準備。これをしたから言って、今のお主に影響はない。それにお主が死なん限りすることはないし、魔術をするかせんかはシンイチの意思次第じゃ。……とにかく試合に勝つんじゃぞ」

「そうですか。……おや、広場が何か騒がしいですね」

二人は同時にはるか下の広場に視線を落とした。米粒よりも

小さな人々が何やら歓声を上げている。

それを見た二人は一緒に下降し始めた。

とくに会話はない。ヨウも魔術に対するそれ以上の説明もしなければ、パイもそのことについて疑問を投げかけなかった。だが、パイはなんとなく予想できていた。

きっとその魔術を行ってしまえば何かしらのリスクを伴うのだろう、と。真一に対してのことなのか、もしくはパイ自身に対することなのか。そこまではわからない。だが、最後の最後でヨウがこのことを行ったということは、本当に最後の手段であることは間違いない。

試合に勝てば良い。真一に恩返しができたら良い。
そう思うだけで自然と力がみなぎる。向かう広場の歓声も、そんなピィを歓迎する声に聞こえた。

広場の中央に真紅のローブを着た男と、もう一人、同じく真紅のローブを着た見たことのない男が立っている。今までの統治者たちと同じく頭に細い紐を巻き、丁度おでこの中心に黄色い宝石がある。目は鋭くきつい目つきで、満席の客席を満足そうに眺めていた。今までの統治者とは違い、頭はスキンヘッドだった。

「皆の者、今回も良く来た。いよいよ始まる決勝だが、楽しんでいるか？」

一斉に歓声が上がる。盛り上がる広場の中、真一とライトだけが啞然とした表情で見下ろしていた。

「……あれが統治者か」

「今の声の方が……オデイ様ですね」

二人だけを除き、皆席を立ち統治者に向かって拍手や歓声を上げていた。何か異様とも思える光景である。

「……盛り上がっているようだ。なら良い。ではさっそく決勝を見せていただくか。余を満足させる、見応えのある試合を望むぞ」
そう言くとオデイは客席に背を向け、後ろに用意されていた椅子へと腰掛けた。椅子の周りには囲いがされており、左右には派遣所の役人らしき男たちが二人並んでいる。

それを見届けた後、残されていた真紅のローブの男が大きく声を上げた。

「では、これより決勝を始める！ 召喚の雛、移動の雛は中央へ！」
再び広場から歓声が沸き上がる。

いよいよ決勝が始まる。真一はずっと上空を見上げ、指を鳴らした。するとピィは滑降しながら広場の中央へと降り立った。今度はピィの姿を馬鹿にする者はいない。すると、反対側にも移動の雛がぱつと現れた。相変わらず箱の上部を開けたり閉めたりしてい

る。

大歓声の中、ピイは真一の方へと顔を向けた。

「ピイ、応援してるからな。頑張れ」

当然の如く、真一の声はかき消される。それでもピイは二つ頷いて答えた。

死ぬか勝つか。二つしかない結末の試合が、今、始まる。

【第五章 城下町オデイ】届かぬ思い

先ほどまで盛り上がっていた観客はそのまま、中央に対峙する雛をはやし立てるかのように声援が飛び交う。奥で観覧するオデイは、ひじをつき口元を緩めたまま眺めている。客席に目を移せば、盛り上がる観客席の中、真一とライトだけが席に座り真剣な眼差しを送っていた。

様々な視線を集めている当人たちは、睨み合ったまま微動だにしない。移動の雛は箱を閉じたまま、飛び跳ねることもなくただの箱となっている。パイも飛ぶこともなく、じつと雛を睨みつけていた。「おい！ おまえらさっさと戦え！」

そんな声が客席から上がり始めた。歓声だった声は、すぐに罵声へと変化してしまう。急かすような言葉が次々と降りかかるが、パイは冷静だった。

移動の雛は最も謎が多い雛。それはパラグの雛を生み出す人間の中に、雷魔元素を持っている人間が少ないためだった。また、第三段階となると、魔天族や王族の位にはないと生まれにくい。目の前の移動の雛が、誰の手から生まれたのかも謎である。が、それは今の戦いで追及すべき点ではない。

どうやって試合に勝つか。

考えたところで、パイにできることは風を生み出しダメージを与えるだけだった。だが、微動だにしない雛も何か気味が悪い。

それでも仕掛けなければ。

意を決し、パイは宙へと舞い上がった。そして、大きく翼を仰ぎ風を貯め込んでいく。

身体の周りに風がまとわり、パイを中心に大きな竜巻へとなっていく。その様子に客席からも歓声が上がります。

そして、一気に翼を大きく前に仰ぎ竜巻を雛へと飛ばした。

吹き荒れる風は広場全体にわたり、観客の服や髪が大きく乱れて

いる。それでも目線だけは離れず、一点に注目した。

竜巻が雛を襲う。　しかし。

「馬鹿者」

言葉とともに大きく箱を開く。中は真っ暗だった。がしかし、変化しまるで鏡のようになった。襲うとする竜巻が映し出される。

「えっ」

その瞬間だった。

放ったはずの竜巻が逆走し始めたのだ。予想だにしない竜巻の進路に、その場から逃げる事ができなかった。

ピイは自ら作り上げた竜巻に巻き込まれ、バランスを崩し巻き上げられてしまう。

「ピイ！」

真一の叫び声が竜巻の轟音にかき消された。抜け落ちた羽根がひらひらと宙を舞う。

物のように空へと舞い上がったピイは、そのまま地面へと激突した。ざわつく広場の中心に、羽根を無造作に広げたままぐったりと倒れている。

「第二段階の召喚の雛。余は何もしない。どんどん攻撃するがいい。それら全てお前に返し、どれだけ低魔力か味わせてやるっ」

回復の雛とは違い、流暢な話し言葉が聞こえた。

その声に反応したようにぴくつと翼を動かす。そして、ゆっくりと翼を折りたたみ足を踏ん張り立ち上がる。

「……ずいぶんと……生意気な雛ですね」

「生意気？　お前に無駄口を叩く暇はない。さっさと攻撃してこい。余を楽しませろ」

いつもの光沢のある羽根ではなくなり、羽根が抜け乱れている。それでもピイの目にはまだまだまだ生気は宿っていた。一方で、雛は箱を開けたり閉めたりするだけで表情というものが無い。あるとすればしゃべる言葉のみである。

「……言われずとも……しますよー！」

叫ぶとパイは翼を仰ぎ、かまいたちのような薄く鋭い風を雛に放った。

だが、先ほどと同じように雛が箱を開くと、そこに鏡がある。同じように鏡に風が映ると、また逆行しパイに跳ね返したのだ。今度も避けることができず、鋭い風はパイの翼を切り裂いた。茶色の羽根に赤い血が染み渡って行く。

「…… なっなぜ……」

「馬鹿者。どう見ても余が跳ね返しているに決まっているだろう。もっと別の攻撃を仕掛けてこい。……む。なるほど、お前の攻撃手段は風しかないのだな」

的を得ている言葉に、パイは言い返すことができなかった。それに、飛ばうにも羽根を傷つけられてしまいうまく力が入らない。ぐっと嘴を噛み締め、痛さと苛立ちを隠す。

「やはりそうだな。……情けない。余を満足に楽しませることもできないか。所詮、召喚の雛、第二段階の姿か」

そう言い終えると、雛は今までの中で一番大きく箱を開いて見せた。そしてそのままの状態で一気にパイの真上に飛び上がる。

「お前の存在価値はない。このまま消えてしまおうが良い」

「なっ……なんですって！」

迫りくる箱。大きく開いた箱の中に光はない。

このまま吞まれてしまえば終わってしまう！

そう思っではみても身体が言うことを聞かず、翼を広げることができない。頭上から雛が無情にも迫りくる。焦る気持ちの中、パイは咄嗟に真一の方に顔を向けた。

盛り上がる客席の中、二人が心配そうに眺めていた。真一は叫んでいるのか大口を開け、ライトはひたすら手を組み祈りを捧げている。

このまま死ぬわけにはいかない！

パイはぐっと足を踏ん張り横へと転がる。

すると、すぐさま雛が落ちてきた。箱の蓋をぱっくりと開いてい

る。もし、そこにパイがいたならまるごと飲み込んでいたに違いなかった。

ほっとしているのもつかの間、すぐに雛の声が届く。

「……無駄だ」

ぴよんと飛び上がると、雛は正面へと向き直った。そして大きく箱を開く。

「翼を奪われた雛に、何の取柄がある？」

身体がいきなり箱の中に向かい、強く引き寄せられ始めた。吸い込むような風が箱の中から来ている。

パイは咄嗟に普段使わない足を使い、懸命に地面に踏ん張った。

鉤爪を地面へと突き刺しなんとか身体を踏ん張らせるが、じりじりと流されていく。足は震え今にも力が抜けてしまいそうだった。それでも嘴を噛み締めながら、翼の痛みを堪え必死に耐えていた。

しかし。

「ご苦労であった」

雛からそんな声がした途端、吸い込む勢いが増した。さっきの比ではなかった。後ろから誰かに押されるような感覚となる。

「っ！」

鉤爪の一つが地面から離れる。踏ん張る足はすでに限界だった。

逃げようにも翼に力はない。浮く身体。それに耐えきれず最後の鉤爪が地面から離れてしまった。

「……ごめんなさい」

聞こえはしない、それでもパイは呟いた。目に映るのは真っ暗な箱の中。

パイにはもう逃げる力は残されていないなかった。その言葉は、最後に諦めてしまったことに対する、真一への謝罪だったのかもしれない。

死とは一体何なのだろう。生まれてくることに意味があるのなら、死ぬことにも意味があるのだろうか。

……今更こんな考えを巡らすのもおかしい話ですね。答えを見つけてよつと意味はないのに。

それでも 死ぬことに意味があるのなら、私にとってその意味は真一さんのためになるのでしょうか。

もし生まれ変われるなら、もう一度真一さんのそばにいたい。生まれ変われなくても、そばにいたという記憶があれば良い。

……真一さんも私のことを、頭の片隅にでも覚えてくださればいいなあ……。

何の役にも立てなかった私でも、もう一度一緒に一緒にいただけなら。

その時は必ず力になります。

そしてまた、よろしくお願いしますね。

移動の雛はピイを箱の中に閉じ込めると、そのまま飛び跳ね元の位置に戻ってしまった。そして、再び口を開くがピイはすでにいなかった。

「移動の雛、勝利！ 今大会優勝、移動の雛！」

一気に沸き上がる歓声。と同時に拍手が沸き起こる。だが、その中で真一とライトだけは言葉を発することができずにいた。

一体何が起きているのか 頭で整理しようにもできない状態。広場にピイの姿がない。

しかし、広場はそんな二人に構うことなく盛り上がる。そして、统治者オデイも歓声に押されるように席を立ち中央へとやってきた。

「今大会も優勝は移動の雛……か。まあ当然のことであろう。短い試合時間ではあったが、時間がそのまま移動の雛の強さを示すこととなった良き試合であった。見事である」

統治者は移動の雛の隣にいた。満足げに口元を緩め笑っている。

「移動の雛に拍手を。皆もご苦労であった」

優勝した移動の雛に対する拍手と、観戦し無事大会が終了したことに對する拍手。沸き上がるような拍手は無事に大会が終了したことを意味していた。

が、真一たちは違う。

呆然とした表情のまま動かない真一とライト。ライトも見えはしなかったが、聞くだけでも状況が目に見えなかつた。

「あ……あの……し、シンイチさん……移動の雛が優勝して……。そ、それでは……び、パイさんは……」

言葉が震えていた。嫌な予感しかしなかつた。

真一もライトの言葉に反応をせず、ただ呆然と移動の雛を見ていた。あの雛に呑まれたパイはどこへ行った……？

気づくと勝手に身体が動いていた。

真一は素早く階段を駆け降りると、一目散に移動の雛へ向かつて走っていた。もしかしたらあの中にまだパイが閉じ込められているのかもしれない。そう思った。いや、そうだと信じたかつた。

「おい！　パイを出せ！」

乱暴に移動の雛を掴む。突如現れた真一に、統治者はムツとした表情となつた。

「貴様、何者だ？　いきなり余の目の前に現れるとは無礼な奴め」

「うっせえ！　おい！　パイを出せつつつてんだよ！」

統治者には目もくれず、真一は黒い箱に向かって叫んだ。顔も何もないただの箱。移動の雛は箱を閉じたまま無反応だつた。それでも、真一は手に力を込めグツと握り締める。

「聞いてんのか！　どこにやったかつて聞いてんだよ、答えろよ！」

「下がれ！　無礼者！」

すぐ真横からそんな声が聞こえたと同時に、急に吹き飛ばされてしまった。誰かに投げ飛ばされたかのように、真一の身体は簡単に広場の端まで飛んで行ってしまった。そのせいで背中を強く打ち、真一は少しその場にしゃがみこんでしまった。

「わかったぞ、貴様、召喚の雛の主だな。……ふん。今更何を言っている？ この大会の勝敗はどちらかが死ぬまで続くのだ。勝敗が決まったということは、貴様の雛はすでに死んだということだ」

一瞬で頭が真っ白になる。

『すでに死んだ』

真一はその場座り込んだまま何度も言葉を反芻した。目を見開き微動だにしない。

「……その様子だと知らなかったのだな。憐れな奴だ。何の目的で今大会に出場したのかは知らぬが、何事も事前の調べが必要ということだ。良い学習となったな。次回、また参加するが良い」

統治者は真一に背を向けると、そのまま広場から立ち去ろうとする。それを移動の雛が後から追いかけて行った。

観客たちも何事かと、真一の様子を眺めていたが、一向に動かない真一に飽き徐々に広場から去っていく。満員となっていた広場から人が去って行き、やがて広場には真一とライトのみとなっていた。

大会は静かに幕を閉じる　二人だけを残して。

【第五章 城下町オデイ】真一の抵抗

空は夕日のせいで赤く染まっている。傾いた太陽はそびえる建物の影を作り、そこから伸びる影からは夜の気配を感じさせた。

影は広場まで伸びるが、そこにほとんど人は残っていない。残っているのは、広場に座り込んだままの真一と階段に腰掛けたままのライトだけだった。

「し……シンイチさん……」

誰もいないせいで、ライトの声さえもよく通った。ライトは不安そうに眉をひそめ、どこに行ったかわからない真一を求めた。

ライトはおそらく自分を放ってまでどこかに行かないだろうと思いい、広場にいるのは間違いだろうと考えた。

それでも反応の声が聞こえないのは 相当なショックを受けている。

目の見えないライトでさえも、悲しみに暮れる真一の姿が見えるような気がした。

真一はただ呆然と何も無い広場を眺めていた。何度探しても、見ても、そこにピイはいない。

『貴様の雛はすでに死んだということだ』

何度も反芻しては否定する。嘘だと信じたかった。だが、いないのだ。現実とその言葉が、真一の動く気力さえ奪ってしまった。

なぜ。

統治者の言う通り、下調べを怠ったせいだ。それともピイに頼りすぎたせいだ。それとも……。

自分に力がないせいだ。

グツと拳に力を込める。悔しさと虚しさがこみ上げる。

あの時何ができたのか。その、何かできる最低限のことさえしていれば、こんな状況にはならなかったのではないか。しかし、今そ

のようなことを考えても仕方がなかった。

じゃあ今できることは何か。

呆然としていた真一の表情に、再び生気が宿る。

真一 直ぐ前を見据え、統治者と移動の雛が去って行った道を見た。統治者の言葉が全てではない。もしかすると、パイはまだ助けを待っているのかもしれない。だとすれば、今できることはただ一つ。

パイを助けること。

「ライト！」

突如立ち上がり、真一は声を張り上げた。

「は、はい！」

いきなりの呼びかけにライトも驚き立ち上がる。

真一は階段を駆け上がると、ライトの元に行きすぐさま手を握り締めた。

「俺、パイを探しに行くから、その間ライトはヨウと一緒にいてくれ」

「え、パイさんを……？」

「ああ！ とにかく裏路地に！」

遠く建物の影を見上げると、そこにはこっそりと隠れているヨウの姿があった。遠くのため表情まで知ることとはできなかったが、真一は指で指示しあっちへ移動するよう送った。

駆け足でひっそりとした裏路地に入る。夕方のためなのか、余計に路地が暗く見える。当然人もおらず、大通りとは全く異なる世界だった。後ろで軽く息を切らしているライトの元に、上空からヨウが降りてきた。表情は暗い。

「シンイチ……」

気の毒そうに目を伏せている。だが、真一は違った。

「おい！ お前ライトと荷物、頼んだぞ！ 俺、パイを探しに行くから」

「……何？」

「あの箱の中にいるはずなんだよ！ こうなったのは俺の責任だ、絶対に助ける！」

半ば無理やり弓具をヨウに押しつけると、走り去っていく。

「待てシンイチ！ 探すんだけど、一体どこを探すつもりじゃ！」

「まずあの箱だ！ 絶対見つける！」

走りながらそう叫んだ真一の背中中は、すぐに大通りの人ごみの中に消えてしまった。

残されたライトとヨウは呆然と消えた大通りに目を向けている。

事情を説明する余裕はなかった。と言うより躊躇ってしまった。真

一が余りにも必死だったからだ。

「……ライト。お主も薄々感じておるのではないか？」

「え」

「ひよこが……もうすでにおらんことじゃよ」

ライトは返事はしなかったが、そのまま顔を俯かせる。それを肯定と捉え、ヨウも大きいため息を漏らし空を見上げた。

とにかく場所を知るには、まず派遣所に聞くしかない。あの移動の雛の主が誰で、どこに住んでいるのか。さっきの裏路地から広場まではそう遠くない。派遣所もすでに見えていた。行く先を立ち塞ぐように流れる人を避けながら必死に走って行く。

「はあ、はあ……」

ようやくのことで派遣所の目の前に着いた。汗を拭いながら扉を押す。するとすぐに役人が姿を現した。真紅のローブに腕には緑色の腕章をつけている。

「……何だ？ 何かあったか？」

真一の険しい表情と乱れた呼吸に、役人もただ事ではないと感じたらしい。心配そうに真一を眺めている。

「今日の……大会の優勝の……移動の雛は、どこだ？」

「……。貴様、召喚の雛の主か」

決勝が終わった直前、真一が移動の雛に迫ったことはその場にいる全員が目にしてしている。移動の雛の所在を尋ねる者も、今では真一ぐらいしかいないだろう。

「どこかって聞いてんだよ！」

役人は思わず眉をしかめる。あの時も尋常ではない行動だった。今もそうである。乱暴な口調とこの表情。尋ねる態度ではない。

「……聞いてどうする？」

「移動の雛に聞きたいことがあるんだよ！ それはいいから、早く場所を教えてくれ！」

真一は役人の腕を掴んだ。

焦る真一の一方で、役人は冷めた様子でじつと見下ろす。

「……あの時、オデイ様が申されたはずだ。大会の勝敗はどちらかが死ぬまで続くとな。そして勝敗がついた。……その意味がわかるだろう」

「わからねえから確かめに行くんだよ！ ……くそ、教える気がねえなら自分で探す！」

掴んでいた腕を乱暴に払い、そのまま役人に背を向ける。が、すぐに肩を掴まれた。

「待て。わからないならばはっきりと言ってやろう。貴様の雛は死んだのだ」

「うっせえ！ 俺は自分の目で確かめる！ 誰が何と言おうと俺は信じねえ！」

「落ち着かんか！」

頭が割れるような大声だった。通りを歩いていた人々もじろじろと二人の様子を見ている。突然の大声に真一も一気に怯んでしまった。

一方で役人は人の目など気にせず、肩を掴む手に力を入れたまま冷静な声で続けた。

「……貴様がそこまで言うなら案内してやろう。ただし、少しの間

だ。こちらにも仕事があるからな」

「……すまねえ」

ちらりと視線を役人に向けた。しかしすぐに逸らし視線を地面に落とす。だが、先ほどよりも落ち着きを取り戻したようだった。

「すぐ行ける。決して手を離すなよ」

その言葉直後、足元が浮いた感覚となった。

一瞬暗くなつたかと思うと、すぐ目の前に大きな檻が現れた。真一と役人は立ち並んだまま、いつの間にか町の郊外へ移動している。

「……い、移動魔術か」

「あの檻の中に移動の雛はいる」

役人は前に進むと、鉄格子の檻の鍵を開け始める。見れば、確かに黒い箱だけがある。動いていないためただの箱にしか見えないが、間違いなく移動の雛のようだった。

一歩遅れ、真一もすぐに檻へと近づく。箱以外にとくに何も無いふと、何のための檻なのか、と疑問が沸いた。

「……なんで檻の中に」

「移動の雛は珍しいのだ。だから盗まれぬよう檻の中にいる。……さあ開けたぞ」

鉄が軋む音と共に、重そうな鉄格子がゆっくりと引かれる。役人は入り口に立ったまま、真一を入るよう促す。それに従い真一は頭を屈めながら中に入った。

「俺は誰か来ないか監視している。好きならだけ確かめればいい」

そう言うつと役人は檻から少し離れ背を向けた。それを見て、真一はもう一度じつと移動の雛を見る。

目の前にピイを吸い込んだ 移動の雛がいる。

冷静さを取り戻していた頭が上気し始める。

絶対にこの中にいるはず、いや、そうなのだと何度も自分に言い聞かせる。そう思うと同時に、ピイとの出会いが走馬灯のように頭を駆け巡って行く。

「おい！　パイを出せ！」

乱暴に箱を叩く。握りこぶしに力を込め、思いつきりぶん殴る。しかし箱は固く、逆に真一の手が痛々しく赤く染まって行く。だが関係なかった。

「聞いてんのか！　なんか言えよ！」

何度も何度も叩いた。何か反応があるまで続けるつもりだった。すると。

「無礼な奴だ。余の眠りを妨げて、出た一言目がそれか」
初めて聞いた雛の言葉に手が止まった。

「パイとは……召喚の雛のことか」

顔はない。だが、少しだけ箱が開いたり閉じたりした。

「ああ、わかってんなら……」

「奴なら死んだ」

はつきりとした声が耳に届く。

目の前が一瞬にして真っ暗になる。だがそれを振り払い、真一は再び手に力を込める。

「どいつもこいつも……俺は絶対に……！」

「ならば、召喚してみれば良いだろう。召喚できれば生きていて、できなければ死んだ」

真一はハツとした表情となり、手の力が抜けて行く。

雛の言うことは一理あるのだ。慌ててポケットから召喚本を取り出し、パイのページを開く。そして躊躇くことなく叫んだ。

「プレサモン！」

だが……何も起こらない。

「……プレサモン！」

本に乗せる手が震える。いくら待っても何も起こらない。

「……なんで……なんで何も起こらねんだよ！」

「……だから死んだのだ。貴様馬鹿か。何度も言っておるではないか」

膝から崩れ落ちるようにしゃがみ込む真一。がっくりと肩を落と

し、わずかに震わせている。

召喚ができない。

それは、パイがないことを意味している。

信じたくない事実。振り払おうにも、目の前にパイは現れない。

閉じる瞼の裏に、パイとの出会いからの出来事が思い出される。

卵から生まれた大きなひよこ　それがパイだった。怯えた目の黄色のひよこは、差し出した真一の右手にふわっと乗った。見た目以上に軽く、羽根がふわふわとしたかわいらしい雛。ひよこの時はずっと真一の頭の上が定位置。呼べば返事をし、時にはあの身体で真一を守ったこともある。

「パイ……」

真一が危ない時、パイはひよこから鷹へと姿を変えた。そして言葉をしやべるようになった。丁寧な言葉で、常に味方で居てくれた。優雅な姿と強さに、真一は嬉しかった。

この世界に来て、初めて心を許せたのはパイだった。

「俺は……パイを……」

顔を俯かせる真一に、雛は冷たい言葉を吐き出した。

「おい。気が済んだのならさっさと去れ。余の睡眠の邪魔である。

……その役人！」

雛の声にびくつとさせ、役人は振り返り慌てて檻の中に入って来た。

「この者を立ち退け。余は寝る」

「了解しました」

役人はぐつたりとする真一の脇に腕を入れると、そのまま立ち上がりせ檻から出て行くこうとする。　しかし。

「……ふざけんな！」

真一は目を見開き、両腕に力を込め役人から離れる。そして、移動の雛に向かって駆け出した。

「てめえがパイが殺したんだろが！」

しかしすぐに役人に腕を掴まれた。

「落ち着かんか！ 貴様、移動の雛をどうするつもりだ！」

「パイの敵を取るに決まってるじゃねえか！ こんな……こんなふざけた奴に殺されたなんて……！ 許されるわけねえよ！」

力を込めなんとか振りほどこうとするものの、やはり体格が役人の方が良いため解けない。逆に今度は脇からしっかり押さえられたために、腕も上がらない状態となってしまう。少しだけ動く腕と足をばたつかせながら抵抗する真一に、移動の雛は静かに言った。

「……可笑しな奴だ。ならば、初めから貴様が出さなければこんな結果になっていなかったのではないか？ 第三段階と第二段階。どう見ても不利なのは試合前から誰の目にも明らかなことではないか。それを余のせいにするとは……貴様に主としての資格はない」

抵抗していた真一だったが、一瞬にして動きをやめた。茫然とした表情でゆっくりと視線を落としていくと、そのままがっくりとうなだれる。役人もこれ以上の抵抗はないと判断し、きつく絞めていた力を緩める。

「……わかったか。俺も忙しい。さっさと帰るぞ」

真一は返事をしなかったが、役人は構うことなく移動魔法を行った。

一瞬にして派遣所の前に到着すると、真一をそのまま放置し、派遣所の中に入ってしまった。

「うーむ。探しに行こうにも、うろつくと使者に見つかる可能性があるあるしのお」

腕組みをしたヨウは、ため息を吐きながら空を見上げた。

「ひよこはシンイチにとって、アラウへ来てから初めての仲間だったからのお……相当落ち込むじゃろって……」

「……ピイさん……どうして……」

ライトは流れる涙を指で拭っている。声は今にも消えそうなほど弱く、相当なショックを受けているようだった。一方でヨウは涙を見せないものの、何か申し訳なさそうな表情を浮かべている。

「奴は……ただシンイチに恩を返したかったんじゃ。おそらく、試合に勝つことができず悔いておるじゃろう。初めから死ぬ気だったからの……」

「そんな……。まさか、試合の勝敗というのは……」

「そうじゃよ。どちらかが死ぬまで続く。ひよこは、それをシンイチには言うなとわしに言ってきた。知ればシンイチはきつと止めるからと、な」

その時、急に後ろから声がした。

「お前知ってたのか」

びくつとして振り返ってみると、そこには啞然とした表情で見る真一が立っていた。驚いているのか目を見開き真顔だった。そしてそのまま足早に近づいてくる。

「俺に言うなってどういうことだ」

「し、シンイチ……」

ヨウは視線を逸らした。だが、真一はそれを許さずヨウの小さな顔を掴み無理やり向かせる。

「はつきり言え。お前とピイで、何か話してたのか？ 俺に何か隠してんなら言えよ」

「……ひよこは、シンイチに……ただ恩を返したかっただけじゃ」

「……さっきの俺に言うなってのは何だよ」

「大会の勝敗はどちらかが死ぬまで続く、ということじゃ。ひよこはそれを知った上で、試合に出たんじゃ。わしも知っておったから止めようとした。じゃが、ひよこ自身がシンイチには言うなと口止めしてきたんじゃ。……シンイチ、ひよこは死んでしもった。じゃが……おそらく死に対して後悔はしておらん。じゃからシンイチ……」

……」

「そんなのわかんねえじゃねえか！」

突然の大声にヨウも驚き口を閉ざす。

真一は目を潤ませヨウを睨みつけていたが、ぐつと唇を噛み締めると顔を逸らした。丁度前髪のせいで表情が隠れている。噛み締める唇だけが見えた。

「寿命を全うしたわけじゃねえ……俺のわがままで死んだ……後悔しないなんて絶対あり得ねえよ」

「……シンイチ、それは違うぞ」

はつきりとした声に顔を上げて見れば、ヨウは真っ直ぐ真一を見ていた。

「ひよこは本当に、本当にシンイチに感謝しておった。命を賭けて証を手に入れたかったんじゃ。それはシンイチのためでもあり、ひよこのためでもあった」

「……ピイのため？」

一つ頷くヨウ。さらに続ける。

「ひよこはシンイチに言葉では言い表せんほど感謝しておった。それを今回、証を手に入れることでシンイチに感謝の意を示したかったんじゃよ。証を手に入れることは、ひよこがここまで成長することができた証でもあったんじゃ」

黙り込む真一。視線を落とし呆然とした表情だった。

「それに……わしも黙ったままではない。この事態を想定して、あの召喚魔術を施した」

「……召喚魔術、だと？」

言葉に反応し、再び視線をヨウへと向ける。

ヨウも一つ頷くと、真剣な眼差しのまま静かに答えた。

「『デアサモン』。……死んだものを生き返らすことのできる召喚魔術じゃよ」

【第五章 城下町オデイ】残されたもの

ヨウの言葉に、真一は目を見開き信じられない様子だった。さらにヨウは続けた。

「生き返らす、と言ってもほんのわずかな時間だけじゃ。しかも、一度行くと二度とできん。さらに言えば……その対象となったものは、生きていた頃の記憶などなく只の屍。指示だけを聞く人形となっておる」

その言葉に真一は目を伏せた。眉間に皺をよせ唇を噛み締めている。ライトも、眉をひそめ俯いていた。

「……どうする。生前、ひよこは死んでもシンイチに尽くしたいと言っておった。その意思を汲み取り、また大会に参加し証を手に入れるか？」

「……いや」

ぼそつと呟くと、真一は少し顔を上げた。

「ピイは……頑張ったんだ。死んでまで俺たちに尽くす必要はねえよ。だから……その魔術はしねえ」

ぐつと拳を握り締めている。ヨウに視線を向けていないものの、見える目は赤くなっていた。

「それに、記憶がないピイなんて……見るのも辛い」

「じゃが……証はどうするつもりじゃ？」

今、真一の手元にオデイの証はない。アラウ城へ行くには、証は最低限の条件である。

だが、ピイが死んでしまった今、証を手に入れる手段はない。

「証がないとアラウ城へは行けん。証を与えられるのは大会の優勝者。それが条件である限り、大会に出場せんともらえんぞ」

そのことは真一も重々承知していた。だが、また新たなパラッグの雛を連れて行くという考えには及ばなかった。

「大会には出ねえ……ピイの代わりなんているはずねえだろ」

「そ、そりゃそうじゃが……どうするんじや」

二人とも良い考えが浮かばず沈黙が流れる。

家を探そうにも、派遣所で不可能と言われてしまった以上動けなかった。知っている町ならまだしも、広い町である。また目の見えないライトや、使者に狙われているヨウがいる以上、思うように動けないのも事実だった。

証を手に入れる手段はあるのか　そう二人が考えている最中、ライトの声が響く。

「わ、私が…… オデイ様をお願いしてみましようか……？」

「え？」

思いもよらない言葉に、二人同時に顔をライトへと向けた。

「ライトが……？　面識でもあんのか？」

「……はい」

そう言つとライトはかぶっていたフードを取った。黄色のおかっぱの頭が露わとなる。

「この髪色さえ派遣所で見せれば、すぐに話を通るはずですよ。シンイチさん…… 派遣所まで連れて行ってくれませんか？」

何か自信がある様子のライトに、真一とヨウは互いに目を合わせ頷き合う。というよりも、他に手段が思いつかず、頼るほかなかった。

「わかった。一緒に行こう」

真一はヨウに預けていた弓具を受け取り、ライトの手を取った。だが、真一は全てをライトにまかせるつもりはなかった。

ピイの責任を果たすために何をすべきか。

真一はある決心を胸に、弓をぎゅっと握り締め派遣所に向かって歩き始めた。

暗いことも幸いし、ライトの髪が人々の目に留まることはなかった。使者に狙われる可能性があるヨウは、派遣所には近づかず上空で待つこととなった。

真一とライト、二人きりの道のりとなったが会話はない。それだけにパイのことが頭をよぎり、その度に目頭が熱くなる。

真一は何も知らずパイに頼んでしまったことを後悔し、ライトは何もしなかった自分を責めた。

だが　ライトはまた別のことで不安を抱いている。
オデイとの関係。ライトはオデイを毛嫌いしていた。

歳は倍ほど離れているにも関わらず、深い交流を図ろうとする姿を見れば食事に誘い、物を送り　気を引こうとする態度はライトでさえもわかるほどだった。もちろんシトモンも知っていたが、それを止めようとはせず、むしろライトにきちんと受けるように言ってくる。確かに身分だけ見れば、統治者という揺るがない肩書きである。だが、ライトは心底嫌だった。姿は全く知らない。しかし、触れる手、聞こえる声、感じる視線　全てにおいて不快感を抱いた。

「……ライト。派遣所に着いたぞ」

そんな真一の声にライトは顔を上げた。ぐつと拳に力を入れる。

「あ、ありがとうございます……」

真一はライトの手を引きながら、派遣所の戸を叩いた。すると間もなく役人が姿を現した。だるそうに欠伸をしている。が、ライトの髪色を見るや否や口を閉じ目を見開いた。

「そ、その髪色！　貴方は一体！」

「私は港町シトモンの娘、ライトと申します。折り入ってお願いがあるのですが……」

「し、シトモン様のこと、大変失礼致しました！　して、そのお願いとは一体何でしょうか？」

叫ぶと同時に、役人は膝を折り曲げライトに対し頭を下げた。一方で、ライトは不安そうに眉をひそめ胸元に手を組んでいる。

その横で真一は、役人の態度の急変に思わず笑いそうになっていた。漏れそうになる声を、手で口元を覆っている。

「そ、その……オデイ様をお願いしたいことがあるのです……。お

会いできませんか？」

「……オデイ様に、ですか」

顔を上げ眉をひそめる役人。ちらりと後ろにいる真一の姿にも目が行った。だがすぐに視線は戻りライトに向けられる。

「かしこまりました。オデイ様もライト様に会えると聞けば飛んでいらつしやるでしょう。少々お待ちください」

そう言うつと役人はすつとその場から姿を消した。移動魔術をしたらしい。

「態度変わりすぎだろ。……しかしまあ、やっぱりライトは王族つてことか」

「そ、そんな……肩書きだけです」

苦笑いを浮かべるライト。

その時だった。突然後ろから聞き慣れない声が届いた。

「ライト、その馴れ馴れしい男は何だ？ 余を差し置いて別の男というなど……気に食わぬ」

ライトと真一はびくつと驚き、すぐに振り返った。

そこに立っていたのは、赤いローブを着たスキンヘッドの大男だった。鋭い眼光におでこには細い糸で巻かれ、その中心には黄色の宝石が光っている。

統治者オデイ その人だった。

「お、オデイ様……いつの間に」

「お主が珍しく会いに来たと聞いたから急いで来てやったものを……別の男と一緒にとは……しかもそやつ昼間の主ではないか」

苦々しい表情で真一を一瞥すると、すぐにライトの目の前までやって来て手を取る。

「まあそれは今回会いに来たということで見逃してやるうではないか。ライト、前よりも大きく女らしくなった。肌も美しい」

そう言いながらライトの手を撫でまわしている。ライトは顔を歪ませながらも、振りほどかず我慢した。

「そ、それより……お願いがあるので」

「ん、何だ、申してみよ」

「……その方に……証を差し上げてほしいのです」

ぴたつと手の動きが止まった。そしてオデイはゆっくりと振り返り、真一を睨みつける。

「この者に……？　なぜだ。余は大会で優勝した者のみにしか渡してはおらぬ。この者は準優勝。……証を渡す条件を満たしてはおらぬ」

「どうか……どうかお願いします！　この人はずっと、港町、潤いの町、山岳の町と回られていらつしやるんです。あと、オデイ様の証で全ての証が集まるのです。オデイ様、どうか……お願いします……！」

ライトはぎゅっとオデイの手を握り締めた。眉を八の字にしながら顔を上げ、オデイの方に顔を向ける。

「……王族であるライトがここまで頼むとは……貴様、ライトの何なのだ？」

鋭い眼光を真一へと向けるオデイ。ライトの手を離し、真一と対峙する。

真一もオデイを睨み上げた。

「……仲間だ。それに、ライトを頼って証を手に入れようとは思っちゃいねえよ。こうやってあんたに会えてよかった」

「ほう。余に会ってどうするつもりだ？」

「俺が下調べを怠ったせいでパイは死んだ。それはもう……どうしようもない。けど、パイの意思を継ぐことはできる」

「……というかどうかだ？」

弓をぎゅっと握り締め、心を落ち着かせる。何を言うか　それはすでに決めていた。

「俺と移動の雛、勝負させる。俺が勝つたなら証をくれ」

ぴくつとその場にいた全員が驚いた。ライトも息を呑み、思わず口を手で覆う。オデイも思わぬ申し出ににやりと口元を歪めた。

「ほほお。それは面白そうである。当然、どちらかが死ぬまで続く

……ということだな？」

「当たり前だ。条件は大会と同じで構わねえよ」

「し、シンイチさん！」

思わずライトは叫ぶ。やめろと言う意味だったが、真一は見もせずオデイを睨みつけていた。そんな真一を見下ろしながら、オデイは大きく笑い始めた。

「ハハハッ！面白い奴だ。余を楽しませてくれそうである。よし、いいだろう。我が屋敷で取り行おうではないか。二人とも我が屋敷へ招待してやるう」

横を向きにやりと笑うオデイ。ライトは返事をせず黙っていた。

「別にあんたを楽しませようと思って試合するわけじゃねえよ。俺は証さえ手に入ればそれでいい」

ふんと鼻息を鳴らし、真一はライトの手を掴もうと手を伸ばしたが、しかし。

「……行きません」

触れようとする時、ライトがぼそつと言葉を吐いた。

思わぬ言葉に驚いた真一は、伸ばしていた手を止め顔を見上げる。

だが、ライトは顔を俯かせているため表情が見えない。

「行かぬのか？ まあ良い。目の見えぬお前だ、下手に動き回ることもできまい。町のどこかで休んでいるがいい」

「……ライト？」

いつもと様子が違う。

そう直感した真一は、一步ライトへ歩み寄った。そして、肩を掴もうと再び腕を伸ばす。が、横からオデイにその腕を掴まれてしまった。

「さっさと行くぞ。我が屋敷へ」

足元がふわつとし、今にも移動魔術が発動する。その瞬間。

真一の目に、顔を背け今にも泣きそうなライトの表情が見えた。

役人に案内を求め、ライトは人の少ない路地へと連れて行ってもらった。一緒にいると役人は言い張ったが、ライトはそれを断った。それでも役人は一人きりになるライトを気遣ったが、すぐに連れが来ると説明されしづぶ了承した。

ひっそりとする路地にライトは一人座り込む。出るため息は静かに消えて行く。

「ライト」

びくつとし顔を上げた。声は空から聞こえ、その声の主はすぐにはわかった。

「よ、ヨウさん……」

周りに人はいなかった。ライトにはわからないことだったが、ヨウは周りの様子を伺いつつライトの元へ降りて行く。

降りてヨウは周りを見渡す 真一の姿がない。

「シンイチの奴はどうした？」

「……オデイ様のお屋敷に行かれました……移動の雛と勝負されるようです」

「な、なんじゃと！」

ぐつと齒を食いしぼり、乱暴に頭を搔く。

「シンイチの馬鹿め！ 移動の雛と勝負じゃと？ 死んだらどうするつもりじゃ！ ライト！ オデイの屋敷はどこじゃ！」

「……わかりません」

低く唸りながらヨウは上空へ舞い上がる。もしかしたら姿が見えるのではないか、そんな風に考えた。が見えるはずもない。大通りは淡い光に包まれているが、大通りでさえ人ははっきりと見えない。ましてや光のない路地は真っ暗である。また建物自体も大きさは見えるものの、そこに人がいるのかどうかもわからない。それでもヨウは必死に探す。

そんなヨウの様子など、ライトはわからない。ただ気配がなくなつたので、近くにはいない、そんな風に感じるこしかできなかつ

た。

なぜ付いていかなかったのか。

一緒に行き、真一の応援をすればよかったのかもしれない。だがオデイがいる。また、ヨウを一人放っておくこともできない。だがそれらはあくまでも表向き。

本当の理由は。

『貴方の目は治りますよ』

急に頭の中にマスクの音が蘇る。今、近くに真一はいない。ヨウとライト二人きり。

真一の目に触れられることのない時間。

「ライト様……アラウ城の山の麓……そこでお待ちしております」

そこにはつきりとした声が耳に届いた。思わずライトは立ち上がる。

「だ、誰ですか!」

気配を感じない。それでも声は間違いなく聞こえた。さらにその声は続けた。

「申し上げなくてもおわかりいただけでしょう? ハギノがいない今が渡す時ですよ」

マスクだった。気配はしないにしろどこかで様子を伺っている。ライトは恐ろしいと思った反面、その存在を確かめたかった。

「ま、待ってください!」

「それでは……その時に……」

その言葉を残し、声は消えてしまった。呆然と立ち尽くすライトの元に、ヨウが帰ってくる。

「おのねええ! やはりどこにおるか見当もつかんわい! ……ん、どうしたライト。顔色が悪いぞ」

「な、何でもありません」

ライトは慌てて笑顔を作った。ヨウが気づかないということは、

やはり姿は近くにいないらしい。

真一の行方がわからず低く唸り続けているヨウ。イライラとして
いるのか、忙しく動き回っている。

今しかない。

マスクの言葉が何かのスイッチだったかのように、ライトの頭の
中から迷いが消えた。目の前を覆う暗闇が一層濃くなる。

「ヨウさん。わ、私……一つ心当たりがある場所があるのですが…
…」

「何！ 本当か！」

「は、はい……。口で説明しますので……一緒に付いてきてもらえ
ませんか？」

「もちろんじゃ。早く行かねば、シンイチが心配じゃ！」

そう言うときさっそくヨウはライトの指を握り締めた。ライトもフ
ードを目深にかぶり髪色を隠す。

「ありがとうございます……ごめんなさい……」

「ぬ？ 何を言っておる、一緒に行くのは当たり前ではないか」

ライトの言葉にヨウは小首を傾げた。だがそれは無理もないこと
だった。

「山の麓へ……お願いします」

「……わかった。足元に用心するんじゃぞ」

ライトは俯いたままだった。その様子が心に引っ掛かったものの、
ヨウはそれ以上の追及はせず先を急ぐ。

だがヨウにライトの本当の考えなどわかるはずもなかった。

暗闇を払いたい。

ライトは黙り込んだまま、ヨウの後ろを付いて歩いて行った。

【第五章 城下町オデイ】証と雛

移動魔術で真一が来た場所は、砂場の回りを塀で囲まれた所だった。何かの建物の中のように、天井があり、また塀の上には客席がずらりと並んでいる。

「ここは闘技場である。存分に戦うが良い」

掴んでいた真一の腕から手を離し、オデイはにやりと笑った。

「試合の準備でもするが良い。余は移動の雛を呼んでこよう」

そう告げると、オデイはふつと姿を消してしまった。一人ぼつんと残された真一は、周りを見渡した後静かに弓を引く準備を始める。命を賭けた試合。もう逃げることはできない。

パイも命がけて試合に臨んだ。

弓巻きをはずしながら、そんなことを思った。弓巻きを取り終えると、すぐに弦を張る。丁度良い長さに調整し終わると、一旦しゃがみ込み、かけを右手につけ始めた。

あんな小さな身体で……俺のために……死んだ。

ぎゅつとかけの紐を結ぶ。熱くなる目を堪えながら、真一は立ち上がった。その瞳に迷いはない。すると、丁度目の前に大きな黒い箱が現れた。

「……さあ連れてきてやったぞ。いつでも始めるが良い！」

声のする方を見上げてみると、オデイがいつの間にか客席で座っている。にやにやと、笑みをこぼしながら真一を見下ろしていた。

「眠りを妨げたのは……召喚の主、また貴様か」

真正面からの声に視線を移せば、移動の雛が箱を開けたり閉めたりしている。

「そりゃ悪かったな」

そう言いながら真一はポケットの中に手を突っ込む。袋からほんの少し粉を握り締めると、拳を真正面に真っ直ぐと伸ばす。

「インディションサモン」

拳から眩い光が四方に放たれた。そして、握られていた粉は意思を持っていくかのようにうねり、そのまま矢へと変化した。

銀色に輝く矢を握り締め、真一は移動の雛を睨みつける。

「ふん、そのようなものを召喚しようと関係ないことである」

そう言うと、雛は大きく箱を開けた。すると、中に鏡のようなものがあるのが見える。そこに映し出されているのは、真正面に立つ真一の姿だった。

真一はそれをじっと見た後、目を閉じ大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。

ピイの試合で、あの鏡は攻撃を全て跳ね返している。だが、真一に迷うことは許されなかった。

ピイが風しか攻撃手段がなかったように、真一も弓矢で戦うしかない。閉じていた目を開け、鋭い視線を雛へと向けた。

「射止めてやるよ」

そう言い放ち、雛に対し真横を向けた。そしてすぐに足踏み足を肩幅に開く。それを行いながら、気持ち_を落ち着かせ呼吸を整える。弓をきちんと握り、腰の辺りに手を当てる。

特別なことはない。全ては練習通り。今までのことを発揮するだけだった。

「無駄が多い動作である。……まあ無駄なあがきも一興であろう」

ふん、と鼻で笑うオディ。にやりと口を持ち上げ、見下した視線を真一へと送っている。だが、真一はその声や視線さえも感じないほど集中していた。

弓構え。

視線を上から弓を伝いながら、静かに顔を雛へと向ける。一点だけを見据え、ゆっくりと腕を上げて行く。

打ち起こし。

矢が平行になるようゆっくりと上げる。

引き分け。

左手は弓を押すように、右手は力まず、身体を割るようなイメー

ジでゆつくりと弓を引いていく。

「一体何の真似である？ 貴様の遊びごとに付き合う時間など無駄さつさと死んでもらう」

そう言つと雛は大きく箱を開いた。そして、一気に真一へと向かう。

「余の養分となるがいい！」

迫る雛。だが、真一は動じない。冷静に心を落ち着かせ、弓を引き続けていた。

会。

弓を引き分けた状態でじつと雛を睨む。

真つ直ぐ向かっているせいで、狙うのは容易かった。矢を放つのは、自分の心持次第。

雛が迫りくる。

だが、真一は焦ることなくただ雛を見据えていた。そして、離れ。

緩まないよう、真つ直ぐ右手を弦から離す。弦が弾く音が響くとともに、左手に握り締める弓はくるりと回った。そして、放たれた矢は真つ直ぐ雛に向かって飛んでいく。

「馬鹿者！ 貴様、試合を見ていなかったのか！ 余に攻撃など無意味！ 全て跳ね返してくれる！」

虹色の残像を残しながら飛ぶ矢。一方で、恐れなどなく勢いそのままに襲おうとする雛。

二つがぶつかる瞬間 激しく光りが四方に広がった。

上から見ていたオデイは思わず手で光を遮る。白い光はあつという間に広がり、真一を除く人間全てが目を瞑った。

光は徐々に治まって行く。外からゆつくりと波が引くように光が薄くなり、最後に中心部がやっと姿を現した。

「な、何をやっている！」

光の中から現れたのは、雛の中の鏡に矢の先端が触れた状態で固まっているものだった。互いにびくともしていない。落ちるはずの

矢も、なぜか鏡に触れた状態のまま浮いている。

「移動の雛！ 貴様、一体何をやっている！ そんなもの跳ね返すべきである！」

オデイは顔を紅潮させ立ち上がった。目を見開き、力いっぱい拳を握り締めている。そんな怒号にも似た叫びに対し、雛は言葉を発しない。真一も同じく、離れの形 残心ざんしんのまま、微動だにしない。

それがまたオデイの逆鱗に触れ、今度は椅子を思いっきり叩きさらに叫んだ。

「何か言わぬか！ 貴様、余の雛であろう！ それが主に対する返答か！」

真一が一瞬、視線だけをオデイへと向けた。あの移動の雛の主は、統治者オデイだったのだ。だが、オデイは声援を送ることもなく怒りに震えるばかりだった。

「わけのわからぬ魔術を跳ね返せぬとは言語道断！ 移動魔術は最強なのだ！」

すると、雛の身体 黒い箱が変化し始めた。ゆっくりと赤色が斑模様になり、やがてどす黒い赤へと変化してしまった。

「……主の意のままに」

雛のその言葉とともに、鏡から強い赤い光が発せられる。

と、その瞬間 放ったはずの矢が真っ直ぐ真一に向かって飛んできた。

「なっ！」

銀色の矢が飛んでくる だが、集中を切らしていなかった真一は咄嗟に身を引いた。

間一髪、矢は真一のすぐ横を飛んでいき、壁に見事突き刺さった。そして、そのまま粉へと戻って行く。

尻餅をつき荒い呼吸を繰り返している真一に、雛の恐ろしく低い声が届く。

「……貴様、良く避けたものである。だが、余に残された時間は少

ない。さつさと勝負つける」

「はあ……はあ……っ！」

突然雛が真一の頭上に飛び上がると、大きく箱を開け放ち急降下し始めた。

一方で真一は、座り込んだまま呼吸も整っていない。だが、雛は容赦なく大口を開けどんどんと真一に迫りくる。

このままじゃ……死ぬ！

歯を食いしばり、なんとか立とうと試みるものの身体が動かない。「ご苦労である。召喚の主」

避けることができず、咄嗟に真一は目をきつく閉じた。

だが 何も起こらない。それでも身を固め、真一は動かなかった。しかし。

「う……う……」

うめき声が聞こえた。

真一は恐る恐るゆっくりと目を開けて行く。すると、頭上にあつたのは 赤く丸い空間に箱を歪ませ固まった雛の姿だった。

「うわっ！」

真一はすぐさま立ち上がり距離をとる。真一がその場から逃げても、雛は動く素振りさえ見せない。箱を開き固まったまま、動かない。よく見てみれば、丸い空間の歪みから一筋歪んだ空間の線が延びている。それを伝うように真一は視線を上げて行った。それに辿りついた場所は……。

「何やってんだ！」

冷たい視線で見下ろし、雛に向かって手のひらを向けるオディの姿だった。

「余に従う雛は、常に完璧であるべきである。それを……貴様、何とも醜い戦いを見せてくれた」

オディはそう言いながら、広げていた手のひらをゆっくりと閉じて行く。それに伴って雛を包む空間の歪みが徐々に狭まっていった。すると、中にいる雛の身体 箱が少しずつ欠けて行く。

「移動魔術はどの魔術よりも勝る、優れた魔術である。それを……わけのわからぬ魔術相手に手こずるとは……言い訳ならぬ」

手のひらがほとんど握り締められる形となる。雛を包む空間の歪みがさらに狭まり、中では雛の破片が飛び散っている。それでも雛は叫ぶこともあがくこともしようとはしない。

「やめろ！ 今は俺と雛が試合してんだろうが！ てめえが手出すんじゃないよ！」

「黙れ！」

顔を紅潮させたオデイは真一に鋭い視線を向けながら、なお続けた。

「余は統治者である！ 貴様たかがサモナーであろう。身分をわきまえよ！」

その言葉に真一はびくつと眉をしかめた。

「身分……？ だから何なんだよ！ 今関係ねえだろうが！」
その時だった。

空間の歪みに包まれていた雛が、突如赤く光りを発し始めたのだ。そして一番強く光った瞬間、大きな爆発音とともに吹き飛んでしまった。

近くにいた真一は、その爆風により吹き飛んだ。激しく背中をぶつけ、顔を歪めながらもすぐに雛が元いた場所に目を移す。だが、そこにはすでに何もなかった。

「……ど、どういうことだ。おい！ てめえ一体何しやがった！」
立ち上がり真一はオデイを睨み上げる。が、オデイはため息を漏らし、呆れた様子でどかつと椅子に腰かけた。

「……くだらん。死ぬつもりなら余の力を使わず済んだものを……。ふん、時間の無駄であった。……くれてやろう」

オデイは真一に目もくれず、何かを投げ入れた。

真一の足元に、その何かが音もなく落ちる。見れば見覚えのある形だった。

「これは……証」

拾い上げて見れば、黄色いバッチのようなものだった。真一が持っている証と変わらない、色違いのものだった。それを握り締めつつも、真一は納得がいかず再び見上げる。

「どういうことだ！　なんで雛は爆発したんだよ！」

「勝手に死んだ、それだけのこと。ふん、貴様何を言っている。命拾いをしたのだ、もつと素直に喜べばよかるう」

「お前……自分の雛が死んだんだぞ。何とも思わねえのかよ……」

「……つまらん戯言である。たかが、パラッグの雛一匹。代わりなど山ほどいる。……貴様、証がほしかったのではないのか？　証はすでに貴様の手の内。何の不満がある？」

真一は視線を落とし、手のひらにある証を見つめる。

証のため　全てはこのためである。パイが死んだことも、そして今、移動の雛が死んだのも　全ては証を手に入れるため。

「ふん。わけのわからぬ奴だ。さつさと余の目の前から立ち去るがよい」

オデイはすつと真一の横へと移動してくると、真一の肩に手を乗せ移動魔術を行った。

目の前が暗くなるとともに、地に足をつけている感覚がなくなる。真一は証を見つめたまま、身動きできなかつた。

真一は呆然と思いを巡らす。

証を手に入れるため　それは事実だった。今回、この証のためにパラッグの雛がいくつもなくなった。パイだけではない、回復の雛、自衛の雛、そして移動の雛。どれも人間の勝手な考えに動かされ、そして死んでいった。

真一自身、自分は違うと思っていた。だが、結局真一も証のためだった。それは変えようのない事実である。

だが　と、真一は目を閉じた。

真一にとつてパイは代わりのいない存在。アラウへ来て、初めて出会えた仲間であることも事実だった。死は受け入れがたい、しかし、パイがいなければこの証は手に入らなかつた。そう思いながら、

ぎゅっと手のひらを握り締める。

ピィに限らず今回見てきた全ての雛に、真一は感謝をし、心の中で静かに祈りを捧げた。

町に戻ると同時にオデイは姿を消し、真一はすっかり人気の引いた大通りにぼつんと一人立ち尽くしていた。

ひっそりとしている。耳が痛くなるほどの静けさに、人の気配など感じなかった。

とにかく二人と合流しなきゃな。

そう思い、真一は元いた裏路地へと足を進めた。

「……あれ」

暗いながらも、そこは間違いなく元いた裏路地だった。だが、そこに誰もいない。

「おーい？」

声は真っ暗な空間に消えて行く。反応する音もなく、ただ闇が広がる。

「……どこいったんだ」

呆然と立ち尽くす真一。

町の外……か。

ふとそう思い、真一は身支度を始めた。弓巻きを巻き、かけを片づけフードを被る。町は使用者がいる可能性が高い、だから外で待っているのだろう。そんなことを考えていた。

だが 真一は知る由もなかった。ヨウの身に危険が迫っている事実を。

【第五章 城下町オデイ】証と雑（後書き）

これで第五章は終わりです。

次話は幕間を挟み、第六章が始まります。お楽しみに。

牢獄の中で

アラウには、二つの種族が存在している。

一つは人間。もう一方は使魔である。だが、それぞれ独自の世界があった。

人間は使魔の存在さえ知らず、使魔は人間の存在を知りつつも交流を図ろうとはしなかった。同じ土地にいなながらも、それぞれ違う世界に生きていた。

しかし、ある時を境に人間と使魔との交流が始まった。

最初は単なる使魔の気まぐれに過ぎなかった。

全ての魔術を自由に扱え、一人生きる使魔。一方で、限られた魔術しか扱えず一人で生きてはいけない人間。

自由に生きながらも孤独を紛らわせるためだったのか、それは定かではない。だが、使魔は人間というものに興味を持ち交流を図り始める。

それが契約者マスターと使魔の関係の始まりだった。

血の契約を交わし、一部の人間に己の姿を見えるようにしたのだ。次第に心許すようになった使魔は、次第に契約をする数を増やしていく。また人間も、最初は存在に戸惑いを見せたが、それ以上に使魔の無限の魔術に驚きを隠せなかった。

共に生きていける。一人生きてきた使魔たちにとって、人間といる生活は新鮮なものだった。どの使魔も、人間との交流は間違っているのではないと考えていた。

だが、人間は違っていた。

「大昔、誰かが人間に姿を見せなければ、こんなことにはなっていない。なかつたかもしれない」

冷たい空気が肌を刺す牢獄の中、一人の使魔が囁いた。

地下に設けられた牢獄は、太陽の光は届かず、薄暗い火の灯りだけがゆらゆらと揺れている。

集められた使魔は軽く五十を超えていた。使魔たちは、身動きが取れない狭い牢屋に閉じ込められている。まるで柵のように小分けにされた牢獄。腕を回すことすら困難で、寝そべることもできない。食事もほんのわずかしか与えられず、体力が失われ皆口数が減る一方だった。

「……何を今更。にしても、魔術が扱えぬだけで何もできぬとは……。このまま死にゆくだけか？ それとも殺されるか……」

「殺される？ 冗談じゃない。僕らよりも劣る人間に？ ……笑えないね」

言葉の内容こそ強気の発言ではあるが、その声そのものに勢いはなかった。重い空気はさらに濃くなり、吐く息は白くその場に滞る。どの使魔たちも先の見えない行く末に、顔を俯かせ閉口するしかなかった。

「……人間は……僕らと共に生きるより……単に僕らの力がほしかっただけなんだよ……」

その言葉に誰も反応を示さない。否定することも肯定することさえしない。なお使魔は続ける。

「……交わるべきではなかったんだ。……きっと、主も迎えにきやしないさ……」

「僕らはやらねばなしつてこと？ ……何それ、ふざけてるよ……。人間のくせに……僕らより……魔力が劣っているくせに……！」

一瞬、牢獄の空気が揺らいだ。熱気に似た空気の歪みは一気に牢獄内に広がり、それに触発されるように使魔たちが口ぐちに言葉を発し始めた。

「そうだよ……おかしい……」

「僕らが協力すれば……人間なんて……」

「仕返しを……うっん……もっと、それ以上のことを……」

ひそひそと声が木霊す中、一人の使魔が声を張り上げた。

「口を慎め！」

途端、声は止み再びしんと沈黙が流れた。

「……今は……この場をどう乗り切るか……それが問題ではないか……。その先のことを言っても……気休めにもならぬ」

そう言つと、その使魔はぐつと牢獄の扉を力強く握り締めた。びくともしない扉、押しても引いても動かない。特別な場所のようで、魔術さえ使えない。

「……捕まっていない使魔がいれば……きっと助けに来てくれる。今はそれを信じて……待つしかない」

そう言つと使魔はぐつたりと気を失つた。他の使魔も、ぐつたりと気を失ってしまった。しんとする牢獄内に、小さな寝息が小さく木霊す。

使魔たちは解放される時を待っている。薄暗い、牢獄の中で。

牢獄の中で (後書き)

お読みいただきましてありがとうございます。

……更新がいつの間にか一カ月間隔に近い形となっております)；

、A

それでも読んでくださる読者様、本当に感謝しております。

只今、第六章執筆中でございます。

いつ更新できるかわからないですが……それでも待つてくださるの
であれば嬉しいです。

マイペースに、ですが、確実に、話を進めたいと思います。

【第六章 クフィロン山】暗闇に現る青き人

「……やっぱり先に行ったんだらうなあ」

困り顔で真一は目の前にそびえる山を見上げた。

すっかり陽も落ち、暗闇が草原を支配している。風が草を揺らし、さわさわと風が流れる音が静かに響いていた。そんな中、真一は一人、ぼつんと立ちつくしている。

二人を探すため、町の外をぐるりと見て回ったもののそれらしい姿はなかった。ため息をつきながら、仕方なく城下町オデイの近くにそびえる山へと足を進めたのだった。

「確か……この山の上にアラウ城があるんだったっけな」

山の途中には雲がかかり、どれぐらいの高さなのか確認できなかった。暗闇にそびえる黒い山は、高い高い壁のようにも見える。こんな険しい道を進まなければいけない。そう思うと自然とため息が漏れていた。

しかし、二人がいない今、考えられる理由は先に進んでいることぐらいしかなかった。真一は重い足取りで山へと近づいて行った。

町から伸びる道を進んでいく。山に近づいていくが、行きついた場所は大きな口を開けた洞窟だった。中は真っ暗で何も見えない。思わず唾を呑む真一だったが、ふと何かが視界に入り視線を落とすた。

「……文字？」

身体を屈ませ、その看板らしきものをじっと見つめる。蛇のような文字が長文となっていた。じつと眺めても読めるはずもない。首を傾げつつも立ち上がると、真っ暗な洞窟に向かい歩を進める。

しかし。

「つて！」

洞窟に入ろうとした矢先、突然何かにぶつかった。強打した頭を

摩りつつ、再び目の前の洞窟を眺める。だが、目の前には何も
ない。では一体何にぶつかったのか。不審に思い、恐る恐る手を伸
ばしていく。

「な、何だこれ」

手に感触があった。平らな板のようなもの。真一はゆっくりと確
かめるように、手のひらを動かしていく。凹凸のないその壁は、洞
窟の入り口全体を塞いでいるようだった。

試しにその壁を強く叩いてみた。だが、鈍い音だけが響くだけで
それ自体はびくともしない。壊れていくような感触もなく、ただ暗
闇が永遠と続いているだけだった。この暗闇が壁のためなのか、そ
れとも洞窟の中なのか、それさえも判別がつかない。

真一は歯を食いしばりながら、強く頭を掻いた。目の前に入口ら
しきものがある。だが、塞がれている。では、一体どうすればいい
のか。相談しようにも相手がいない。焦る気持ちと募る孤独感に、
頭を掻く手が自然と小さく震えていた。

「……どうすりゃいいんだ。落ち着け……落ち着け……」

手を止め、今までのことを思い出していく。きつとヒントは

今までの中に隠されている、そう真一は直感した。

そして ある話を思い出す。

『城は警備が厳しくて、軍に関わっていない一般人が入るためには、
統治者たちから証をもらわなければいけないのよ。そのまま行つた
としても、追いつ返されるか自衛魔術に阻まれるわ』

目を見開いた。そして、慌てた様子でトートバックの中に手を突
っ込んだ。

「証か……!!」

掴んだのは、水色の証だった。じつと見つめる真一だったが、こ
れをどう活用して良いのかわからない。思案していたが、前にガナ
オンを召喚したことを思い出した。そこで、祈るような形で証をぎ
ゅっと両手に包み込む。そして、シトモンが現れることだけを考え
た。

すると、まもなく証が青色に発光し始めた。暗闇の中、突如青い閃光が四方に放たれる。驚いた真一は思わず証を落としてしまった。

すると、それが何かの合図だったかのように、証から一番激しい青色の光が放たれる。咄嗟に目を手のひらで覆い隠し、光が治まるのを待った。だが突然、声が耳に飛び込む。

「久しぶりだ」

聞き覚えのある声に、真一は手を下ろし真正面を見た。青い光は眩しかったが、段々と弱まって行く。

耐えつつ眺める中姿を現したのは、真紅のローブを着たシトモンだった。黄色の短髪に、おでこには紐に結ばれた水色の宝石が光っている。

「ま、まさか……本当に出てくるなんて」

「……その説明書きを読んで召喚したのではないのか」

その言葉に真一は小さく「えっ」と言葉を漏らし、視線を看板へと下げた。どうやらあの説明書きはそういう内容が書かれていたらしい。

そんな様子にシトモンはため息を漏らしつつも、ふっと表情を和らげ一歩真一に歩み寄った。

「まあいい。いづれ召喚されるだろうとは思っていた。……所で、君一人か？」

びくつとする真一。一方、誰かを探すかのように周りの見渡すシトモン。和らげていた表情は、段々と険しさを増していく。そして眉をしかめ、じろつと真一を見下ろした。

「ライトが来ているだろう？ 私が知らないとも思っているのか。どこだ？」

「その、実は……はぐれてしまって」

シトモンの眉がピクツと動く。

「……はぐれた、だと？」

その言葉と同時に真一の胸倉を乱暴に掴んだ。それに対し、真一

は顔を背けたまま抵抗しない。

「どういうことだ？ あの子が盲目であることは知っているだろう。それを知った上で、放って置いたというのか！」

「ちつ違いますよ！ ライトは使魔と一緒にいたんです！ それが……戻って見たら二人とも姿がなかった。町にもいねえし、先に進んでるんじゃないかと思って、俺一人でここまで来たんです」

険しい表情を崩さぬまま、シトモンゆっくりと掴んでいた手のひらを開放した。何か思案するかのように、視線を下げ黙り込んでいる。真一は着衣の乱れを直しつつ、シトモンの言葉を待った。確かに、二人とはぐれてしまった責任は真一にもある。どんな言葉も真摯に受け止めるつもりでいた。だが、シトモンから出てきた言葉は予想外のものだった。

「……嫌な予感がする。町にもいない……？ 確かにそうならば、先に進んでいる可能性もあるが……。はたして、ライトにこの自衛魔術を解く魔力があるだろうか？」

「……どういうことですか」

真一の眼差しに、シトモンはゆっくりと真つ暗な洞窟を見据えた。何も無い、黒い壁。そつと手を伸ばし触れて見せる。やはり何かあるようで、ぴつたりと手のひらが伸ばされていた。

「これは特別な魔術だ。私たちが保有しているこの石と、特別な詠唱で初めてこの魔術は解かれる。私はライトに石を与えた覚えもないし、詠唱も教えた覚えはない」

「じゃ、じゃあ……」

「さらわれた可能性もある、ということだろう」

思わぬ言葉に、一瞬言葉を失い呆然とする真一だったが、すぐさま苦笑いを浮かべた。

「そ、それはありえないですよ……だって使魔も一緒だったんだ。シトモンさんは見えないからわからねえかもしれないねえ。けど、あいつは俺より魔力も魔術も上なんだ。それに、ライトを放ってどこかへ行くなんて……あいつは絶対そんな奴じゃねえ……！」

真一の言葉と真っ直ぐな目を、シトモンは険しい表情のまま眺めていた。だが、真一の姿に心が折れたのか、長いため息を漏らすとふっと表情を緩めた。

「君がそこまで言うなら……信用できる使魔なのであろう。心配ではあるが……先を急いで方がよさそうだ」

そう言うとシトモンは壁に両手をついた。そして、目を閉じ何かを詠唱し始めた。

ぶつぶつと囁く言葉を真一は聞きとることができなかった。何を言っているのかまったくわからない。呆然と眺めていると、シトモンのおでこにあつた水色の宝石が急に輝き始めたのだ。

暗闇に光る青い光。あまりの眩しさに目を細めながらも、シトモンから目を離さなかった。そしてシトモンは勢いよく目を開いた。

「はあああつ！」

ざあつと山全体が揺れたような気がした。塞いでいた黒い壁はその姿をなくし、現れたのは一定の間隔で灯りがともる通路だった。薄暗いその道は軽い傾斜になっている。

「……私の役目はここまでだ。ライトのこと頼んだぞ。何かあったら……その時はいいな？」

「は、はい……」

顔を引きつらせながら頷く真一。一方でシトモンの身体が白い光に包まれ始める。驚いた真一が近づこうとするが、それを制止された。

「魔術を解くと元の場所へ戻るのだ。心配しなくていい。それより先を急いでくれ。何かあればまた召喚するといい。私も力になる」

その言葉を最後に、シトモンの身体は白い光に包まれてしまい、光が治まったところには姿を消してしまっていた。

残ったのは足元に落ちる青い証。それを拾い上げると、真一は真っ直ぐ通路を睨む。そして、覚悟を決めたようにぎゅっと弓を握り締めると、その通路へと足を踏み入れた。

【第六章 クフィロン山】暗闇に現る青き人（後書き）

長らくお待たせしてしまつて申し訳ございません……。

やっと、第六章を更新することができました。ほんと、冗談抜きで

一カ月更新となつております（；、A

読者の皆さまには心から感謝申し上げますしかありません。

ありがとうございます（ノ T）

次話ですが……またお待ちいただくようになるかもしれませんorz
マイペースに、でも確実に、更新し続けて行こうと思います。
お読みいただきありがとうございます。

【第六章 クフィロン山】暗闇に現る赤き人

地面を蹴る真一の足音だけが、静かに響いている。足元は固い地面で、周りは掘り進めたように土壁が永遠と続いていた。坂の洞窟は、一定の間隔で灯りがともっている。だがそれは弱々しいもので、ほんの先しか照らされず、奥がどうなっているのかは確認できなかった。両手を広げても届かない天井と横幅は、ここが山であることを忘れそうなほどゆとりのある道だった。

黙々と坂を登る。傾斜が緩やかなことも幸いし、そこまで息が切れるということにはならなかった。だが、蓄積された疲れは真一の身体を徐々に重くしていった。ましてや一人である。足を進めるたびに、本当にこの先に二人がいるのかどうか不安が大きくなる。

もし ライトが誘拐されていたなら。ライトはどこへ連れ去られてしまったのか、ヨウは無事なのか。悪い考えが頭の中をぐるぐると回る。

身体の辛さが増していくが、そんな考えが足を止めることを許さなかった。早く二人と合流しなければならぬ。そんなことを考えながら、薄暗い前を見据え歩いている時だった。

「……………ん？」

真一の息遣いと足音しか響かないはずが、何か別の音が耳に届いた。確かめようにも、淡い光はほんの先しか照らされない。

だが、目の前に気配を感じる。

ごくりと唾を飲み込み、じつと闇を見据える。ライトなのか、ヨウなのか、はたまた別の誰かなのか。

「だ、誰かいるのか？」

暗闇に吸い込まれるように消える声。感じる気配は、真一の声に反応するかのように足音を立て近づいている。そして、見えた口―ブの色は 水色だった。

「うわっ！」

目元を覆う白い仮面。間違いなく使者だった。

なぜここに使者がいるのか、ならばヨウたちはどこへ行ったのか
そんな疑問が次々と沸いて出てくるが、考える暇などなかった。

「アビシヤス」

使者は手のひらを真っ直ぐ真一に向け、すぐさま詠唱した。

空間の歪みが向かってくるが、横へ倒れるようになんとか避けた。
すぐに立て膝をし、使者を睨みつける。

「て、てめえいきなり何なんだよ！」

だが、使者は何の言葉も返すことなく、再び手のひらを真一へと
向けた。そして、また詠唱する。

「くそっ！」

すぐさま立ち上がり、間一髪で歪みを避ける。だが、避けるとい
っても場所は狭い。徐々に追いやられ、気づけばすぐ真後ろに壁が
立ち塞いでいた。

唇を噛み締めながら使者を睨みつける真一。一方で、使者は言葉
を発することもなく淡々と移動魔術を詠唱するだけだった。

「……俺を捕まえてどうするつもりなんだよ」

手のひらを向ける使者に問いかえるが、やはり答えはない。

「アビシヤス」

今度は避けることができなかった。空間の歪みが真一を襲う。

言葉を発することもできず、そのまま歪みに覆い尽くされてしま
った。身体全体がしびれるような感覚となり、手足を動かすことや
瞬きでさえもできない。ただ、意識だけははつきりとし、目の前に
立つ使者の姿が見えた。

すると、使者はおもむろに後ろを向き、そのまま歩き始めた。真
一の身体も、引きずられるかのように一緒に移動し始める。空間の
歪みが、綱のような役割となっているようだった。

どうにかしねえと……！

そう思ってみるものの、身体は反応できない。足を踏ん張ること
も、持っている荷物に手を伸ばすこともできなかった。気持ちだけ

が焦って行く。

どうするどうする……どうするんだよ！

少しの間引きずられたと思うと、急に使者は立ち止まり何かぶつぶつと詠唱し始めた。すると、使者の周りから静かな風が舞い上がり始める。

移動魔術か？ くそっ！ どうすりゃいいんだ！

焦る気持ちだけが募っていく。だが、声も出ない。そんな時だった。

「……っ！」

突如、かばんが赤く光りはじめたのだ。強い赤い光はかばんから漏れ、それに気付いた使者は詠唱をやめ振り返る。

真一は全く動いていない。だが、証が勝手に光っている。

「どういうことだ……！」

そう言いながら手を伸ばす使者。だが、かばんに辿りつく前に証は一番強く光り辺りを赤一色に染めた。

次第に光が弱まり、元の薄暗い洞窟へと戻って行く。すると突然、使者が急に身を引いた。じりじりと距離を置いているようにも見える。一方で、真一は後ろを振り向くことができず、一体何が起きたのか理解できなかつた。だが、すぐに真後ろから声がした。

「すぐに解放しろ。無駄口は許さん」

聞き覚えのある声色だった。

真一が記憶を遡っていると、使者は少し間を置いた後、重い口をゆっくりと開いた。

「か……かしこまりました」

使者は悔しそうに唇を噛み締めている。すると、手のひらからゆっくりと空間の歪みが消え去って行き、やがて真一の身体を覆っていた歪みもなくなった。

一方で、真一はふつと身体が軽くなったような感覚になり、すぐに力が入らずそのまま膝から崩れ落ちた。地面に手をつき呼吸を整えていると、先ほどとは違う声が耳に届いた。

「シン、大丈夫か？」

ハッと目を見開く。

「その声は……！」

真一のことを『シン』と呼ぶのは一人しかいない。まさかと思いつつすぐに振り返った。

そこには 槍を地面に突き立てているリオと、使者に鋭い眼差しを送るトトロイの姿があった。

トトロイの髪はターバンで隠され、額には赤い宝石が光っている。また肩にはしがみ付くようにトトがいた。トトロイとリオ、共に真紅のローブの肩と裾の部分が、引き裂かれたように短くなっている。そこから見える腕は太く逞しい。

「シンイチ一人か。使魔はどうしたんだ？」

「ヨウさんはどうしたの？」

真一は啞然とした表情で立ち上がる。まさか三人もいるとは思わなかった。すると三人は、ふつと鼻で笑った。

「……そんなに驚くこともないだろう。証は俺の額の石と繋がっているからな。行こうと思えばいつでもシンイチの元へ行けるのだ。

まあ……まさかこんな状況だとは思わなかったがな」

「ほんとだよ。ヨウさんがいないって……君、契約者としてどうなの？」

「トトロイに頼んで俺も連れてきてもらったんだ。……何か手伝えることがあるんじゃないかと思っただが、さっそく力を発揮できそうだ」

三人の視線が使者へと注がれる。それに釣られ真一も前へ向き直った。

「わりいな。心強いぜ」

立場が逆転したこともあり、思わず真一の口元が緩む。

一方で、使者はその間に少しずつ距離を開け、今にも逃げ出しそうな雰囲気だった。だが、トトロイがそれを見逃すはずはなかった。一歩踏み出すと同時に、大きく足音を立てた。

「おい、逃げるなよ。お前には説明をしてもらわないといけなからな。……トト」

視線をトトへ送る。それを受け、トトは真つ直ぐ手を伸ばした。すると、何かを感じたのか使者は逃げようと詠唱をし始める。周りを丸く風が舞い上がって行くが、トトの詠唱の方が早かった。

「アビシヤス！」

あつという間に空間が使者を捕らえた。綱のように空間の歪みが使者の身体に巻きついていている。必死に抵抗する使者を眺めながら、トトロイが歩み寄って行く。

「……統治者として尋問する。一つ目。城への回廊に、なぜお前のような使者がいる？ 王から警備を頼まれたのか？ ……そんなわけあるまい。ここは証が必須となる道。嫌でも統治者と会わなければ進めんのだからな」

トトロイは目の前まで行くと、太い二の腕を組み使者を見下ろす。「二つ目。なぜシンイチを連れ去ろうとした？ 使者は、使魔掃討作戦の実行人と聞く。それが、使魔のいないシンイチを狙うとはどういう魂胆だ？ お前も見えるだろう？ シンイチには使魔がいらない。それをなぜ狙う？」

鋭い目つきで使者を睨む。使者は言葉を選ぶように口を開き、ゆつくりと言葉を発した。

「と、トトロイ様……こ、これは……任務です」

「任務？ では誰からの指示だ？ 言え」

使者はしばらく黙り込んでいた。だが、トトロイの威圧に耐えきれなくなったのか、小さな声で言葉を吐き出した。

「……じよ、情操部の……命令です」

「情操部？ ……下らん名目ばかりの役所か。では、なぜシンイチなのだ？ 使魔を捕らえるのが、使魔掃討作戦の内容ではないのか？」

「わかりません……。きゅ、急に作戦が変更されたのです。ハギノシンイチを……捕らえよ、と」

その言葉に全員が眉をひそめた。

「何？ どういうことだ！」

トトロイはそう叫ぶと、使者の胸倉を掴んだ。苦しそうに使者は口を歪めるが、トトロイは力を抜こうとはしない。

「俺はそんな内容は聞いてはいない！ 貴様、嘘を言つな！」

「ほ、本当です……嘘ではありません……」

「戯けたことを！ もう良い！ 戻ってこの下らん作戦をやめさせる！ ……トト、やれ！」

険しい表情で振り返った。それを受け、トトは大きく頷いて見せた。

自らの指を切り、血で使者の周りの地面をぐるりと指でなぞる。

そして、目を閉じ集中し始めた。

「と、トトロイ様！ この作戦は絶対です！ 背くことなど……貴方様でも許される所業ではありません！」

叫ぶ使者。だが、トトロイは眉一つ動かさない。

「統治者であるならば、国のために実行すべきです！ それを妨げるなど……このまま私を返すならば、私は貴方様の今の言動を全て報告させていただきます！ ですから、今すぐ……」

言葉を続けようとした使者だったが、それをトトロイが遮る。真っ直ぐと使者を見据え、その顔に迷いはなかった。

「勝手にしろ」

口を半開きにした使者はそのまま言葉を失い、トトの移動魔術によつてふつと姿を消してしまった。

しん、と再び洞窟の中が静寂に支配される。そんな中、トトロイは殺気立ち険しい表情で顔をしかめていた。

「気にくわん。一体、城で何が起こっている」

トトロイは小さく舌打ちをする。組まれた腕をぎゅっと握り締めていた。

「使魔掃討作戦、だよね……？ なんて君が対象になってんだろ？」

肩に乗っているトトも首を傾げ、じつと真一を眺めていた。その真一は、呆然と地面に視線を落としていた。

ライトとヨウがいなくなつて混乱している中、今度は自分が狙われている。そんな状況が信じられなかった。

「俺のところには城からの状など届いていない。……大抵のことは、統治者には必ず周知されるはずなんだがな。それとも、俺に使魔がいるからあえて知らせなかったのか？ ふん、どちらにしる気にくわん」

トトロイは視線をリオへと向け、口を開く。

「……リオ。お前はシンイチと共にいる」

思わぬ言葉に、トトロイを除く全員が驚いた。すぐにトトが眉をしかめ叫ぶ。

「マスター！ 何言つてんの！ こいつがエルモ人だつてこと忘れちゃったの？ 絶対に家から出しちゃダメだよ！」

「……まあ落ち着け。一度、ダック公爵の部下に姿を見られたのだから？ だとしたら、俺がエルモ人を囲っているということを上が知っているもおおかしくはない。遅かれ早かれ、いつかはばれてしまうのだ。それに、シンイチが狙われていると知った以上守るべきだろう？ ……俺が近くにいればいいんだが、町のこともあるんでな。だからリオ……頼んだぞ」

トトはがっくりと肩を落とし、それ以上言葉を言わなかった。

一方で、その言葉にリオは顔をほころばせ大きく頷いて見せた。

「ああ、まかせろ！ あんたの許可さえ下りれば、俺はいつでもシンを守るさ」

真一はその言葉に反応し、ようやく視線を上げた。考えがまとまらない頭ではあったが、リオと一緒に行動する意味だけははっきりとわかった。

リオがアラウの人にはれてしまう可能性が高いのだ。そうなれば、リオはどうなるのか。また、トトロイはどうなるのか。

大きなリスクを伴うことだけはすぐにはわかったが、それを言葉と

して出すことはできなかった。一人きりの真一にとって、誰かの存在があるだけでも大きな心の支えになる。そして何より、真一に対する二人の気持ちは伝わり、止める言葉を出すことができなかった。リオもトトロイも、真一に付いて行くことがどういうことか理解しているはずである。それでも、命がけで自分を守ろうとしてくれている。そんな思いを強く感じ、二人を案ずることが逆に失礼なような気がしたのだ。

「ありがとう」

二人は真一を真つ直ぐ見て微笑んでいた。それに釣られ、真一も表情を和らげた。命を狙われている。そんな事実でさえも、頼もしい二人を目の前にするのと恐怖が自然と消える。

「使者なんかに捕まってたまるか」

トトロイとリオはふつと笑みを見せた。そして、それぞれ真一の肩に手をぽんつと乗せる。

「よし、その意気だ。絶対に屈するんじゃないぞ」

「シンなら大丈夫。きつと平気さ」

微笑みかける二人に、真一は静かに頷いて見せた。

ライトとヨウはどこに行ってしまったのか。使魔掃討作戦とは一体何なのか。考えた所で、今の真一にできることはただ一つ。アラウ城へ行くこと。城へ行けば、ヨウの前マスターのイッチ姫がいるはずである。使魔掃討作戦が何か、それを問い詰める相手にもなり得る人物だった。

「……トトロイさん。ヨウの奴がどこに行ったのか不安だけど……あいつを信じて進んでみようと思います」

「なんだ、はぐれたのか？ まあ、ひよっこり顔を出すだろう。お前とリオなら、使者なんぞぶつとばせるだろうしな。ここまで来たならアラウ城を目指せ」

「はい。……ところで」

そう言うと、真一は視線を前方へと向ける。

「トトロイさんは自衛魔術を解くとか、そういうのはやらないんで

すか？ さつき、シトモンさん呼び出したらすぐにやっつけてくれたんですけど」

すると、トトロイはにやりと口元を緩めた。

「馬鹿者。俺自身が自衛魔術、要するに壁なんだよ。気にいらぬ奴ならば、俺がそいつをぶっ飛ばす」

ははっ、と大声で笑うトトロイに対し、一同は苦笑いを浮かべた。トトロイらしいと言えば、らしい考えである。

「シンイチは俺のお気に入りだからな。これからも何か困ったことがあれば、遠慮せず俺を召喚すればいい」

「あ、ありがとうございます」

トトロイは笑うのをやめると、咳払いをし真剣な表情となった。

「とにかくここを進め。そうすればアラウ城内に入る。移動魔術で送ってやりたいのは山々なんだが、ここは特別な土地でな……。移動魔術の元となる雷魔元素が極端に少ない。いくら使魔のトトと言えど、これ以上の移動魔術をしまえば動けなくなる。……すまんな。俺もさすがに町を捨ててまでお前について行けないのだ」

「いえ、それはいいんです。けど、なんで……。どうして俺なんかのために、ここまで気を遣ってくれるんですか？」

じつとトトロイを見つめる。真一にとって純粹な疑問だった。トトロイは他の統治者と違い、地位を感じさせない親近感がある。

トトロイは一瞬きよとした表情となったが、すぐに口元を緩めた。

「別に気に病むことじゃないだろう。シンイチは気にせず、己の信じることをやり抜けばいいだけのこと。別にお前に気を遣っているわけじゃない」

トトロイは一旦言葉を止め、トトに視線を流した。それを受け取ったトトは、血の指でトトロイの周りに円を描き始める。

「……まあなんだ。シンイチにしろ、リオにしろ、お前ら二人は何かしらの強い意思があるように見える。信念というべきか……。何か他の奴らとは目の輝きが違う」

描き終えたトトが念じ始め、その円に手を触れる。すると、白い光が一気に沸き上がった。

「……とにかく、俺がそうしたいからしているだけだ。ぐだぐだ言わずさっさと行け」

そんなトトロイの声を最後に、トトロイとトトはあっという間に姿を消してしまった。残された二人は呆然とその後を眺める。

すると、先にリオがふつと鼻で笑って見せた。

「……あの人は好き勝手にやっているだけさ。俺はあの人のそういう所は嫌いじゃない。そのおかげで命を助けられたし、付き合ってみると意外と面白いんだ」

「そう、か。……トトロイさん、本当に自分がやりたいからやっているっばいしな。まあ……いっか」

頭を掻きながら真一は顔をリオへと向けた。

「よろしくな、リオ。頼りにしてるぜ」

「ああまかせとけ。では、行こう」

真一とリオは歩み始める。薄暗い洞窟に二人分の足音が響く。二人は真っ直ぐ前を見つめ、見えない道の先にヨウとライトを追う。

【第六章 クフィロン山】暗闇に現る赤き人（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。―――*）<
第六章に入ってから一カ月更新となっておりま……す、すいま
せん。

こんな作品ですが、これからもお読みいただけると嬉しいです。
誤字脱字を発見した場合、お手数ですがお知らせいただけると助か
ります。

また、感想は遠慮なくどうぞ。一言でも飛んで喜びます）*、、（

【第六章 クフィロン山】暗闇に現る 人

真一とリオは肩を並べ洞窟を歩き続けている。道は相変わらず淡い光が照らすだけで、景色が変わることもない。ひたすら土壁が続き、いつになったらつくのかさえわからない。一人だと発狂するかもしれないが、進む二人の表情は明るかった。

「……じゃあシンが戻ったら二人とも姿がなかったのか。そりゃびつくりだな」

「ライトは目が見えねえから、余計不安なんだよ。……もしライトの身に何かあったら、俺、ライトの親父に殺される……」

「はは、そりゃ親ならば子の心配はするさ。……俺もその時は見守るしかないな」

「……おいおい、頼むぜ」

真一はリオに今までの経緯を話した。リオには使魔の存在は見えないにしろ、それが嘘ではなく本当に存在するものだとして理解している。現に、トトロイにもいることもあり、多少なりともその存在には慣れているようだった。

「……しかし、ライトさんの回復魔術といい、使魔といい、このアラウという国は不思議なことだらけだ。エルモと違いすぎる」

「魔術が当たり前だからなあ。……まあ俺もアラウ人じゃねえから最初は戸惑ったけどな。習うより慣れる、だな」

「そうかもしれないな。俺もトトロイの家に住み始めてだいぶ日にちは経ったが、最初よりは慣れてはきたかな。……トトロイの雑用ばかりだけどさ」

リオはふつと鼻で笑い口元を緩める。

「……雑用って何するんだ？」

思わず真一は食いついた。リオの身体付きは真一よりも良い。筋肉質の二の腕は太く、分厚い手のひらはかなりの腕力がありそうである。足も鍛えているのだろう、無駄な肉がない。

「ほんとに雑用さ。掃除とか料理を作るのさ」

「はは、と笑いながら言うリオに対し、真一は目をまるくして驚いた。

「ま、マジかよ！ 想像できねえ……。俺、家の警備とか力仕事してんのかと思っただぜ」

「そういうことは、トト、とか言う使魔がやっているそうなんだ。

……俺には見えないけどさ」

「へえ。リオが掃除に料理ねえ。……ごついメイドだな……」

「何か言っただか？」

「ぼそつと呟いた真一に、リオは不思議そうに首を傾げる。

真一は慌てて頭を横に振り、苦笑いを浮かべた。ごつい男の家事風景 見るに耐えがたい、と言えるはずもなかった。

しばらく歩いていくが、やはり一向に景色は変わらない。景色が変わらないので、一体山のどの辺りに来たのかさえもわからなかった。

「……こんなことならトトロイさんに次の自衛魔術の位置を教えてください。進んではよかったな。進んでは迷ってるのか、それもわからねえよ」

「進んでいればいづれ出口があるさ。他に道などなかったしな」

二人分の足音が息遣いととも洞窟に響く。

その時だった。急に、リオが足を止める。それに釣られ、真一も足を止め振り返った。

「なんだよ、急に止まって」

「……誰がいる」

眉をしかめリオは目の前の暗闇を睨みつけている。真一も視線を前へと戻し、じっと見つめてみるものの何も感じなかった。

いやに静かな空間が重くのしかかる。耳をすまし、目をこらし、暗闇を見つめ続ける。

「……何にもねえじゃねえか」

そう言いながら振り返ってみるが、リオはなお暗闇を睨みつけていた。その様子をしばらく眺めていたが、リオは突然持っていた槍の柄をどんと地面に叩きつけた。

「出てこい！　そこにいるのはわかっている！」

真一はその叫び声にびくつと身体を震わせながらも、再びゆつくりと暗闇に視線を送る。

やはり何も見えない。どこまで続いているのかわからない暗闇。そこから人の気配など感じなかった。

だが、それはほんの一瞬だった。

「エルモ人、貴様よほど目が良いらしいな」

聞き覚えのある声。

その声の主を思い出すのに、それほどの時間はかからなかった。

それはリオも同じだったらしく、声を聞いた途端、槍の先端を暗闇に向ける。

「そ、その声は……！」

なぜここにいるのか　それが頭の中で整理ができなかった。真

一は顔を引きつらせながら、思わず後ずさる。そして、暗闇から姿を現したのは、水色のシャツとズボンを着たマスクだった。

「前に言っただはずだ。……次に会う時は死ぬ時だ、と」

顔半分は白い仮面で隠れているものの、見える片側の口元は釣り上がっている。

「ど、どうして……どうしてマスクがここに」

「何をそんなに驚いている？　俺はダック公爵の部下。この回廊に入ることなど、造作もないこと。……それより、己の身を案じたらどうだ？」

冷たい視線が真一を貫く。びくつと震える真一の前に、すかさずリオが立ち塞ぐ。槍を構え警戒心を露わにする。

その様子にマスクはふつと鼻で笑って見せた。

「……そう慌てるな。次に会うときは死ぬ時　そう言ったのは間違いない。だが、少々事情が変わった。今いるのは　俺一人では

ない」

「何？」

その言葉に真一とリオは眉をしかめた。そして、マスクの隣を凝視する。

暗闇からゆっくりと足音が近づいてくる。一体誰が出てくるのか。ゆっくりと進んでくる足音と共に、見えたローブの色は。

「……な、なんで……」

真っ白のローブ。おかつぱの黄色の髪。閉じた目と不安そうに八の字になった眉。

間違いない。ライトだった。

だが、逃げる素振りもなく、マスクの横へと進み寄った。

「シ、シンイチさん……」

呆然とライトを見る真一だったが、ふと何かが視界に入った。

ライトの腕の中にヨウがいた。だが、寝ているのか目を閉じている。

それを見た瞬間何か嫌な予感がし、思わずマスクを睨み上げる。

「マスク！ てめえ……二人に何しやがった！」

「とんだ言いがかりだ。俺は何もしていない。ここにライト様がいらっしゃるのは、ご自身の意思だ」

「何？」

にやりと口の端を釣り上げるマスク。一方で、真一とリオは言葉を失ったままライトに視線を移した。

ライトは腕の中のヨウを抱きかかえたまま、動こうとはしない。むしろ、真一たちの視線から逃げたいのか顔を俯かせていた。

「……ライト、どういうことだ！ なんでマスクと一緒にいんだよ！ それに、ヨウはどうしちゃったんだ！」

その問いかけに、ライトはなかなか答えようとはしなかった。唇を噛み締めたまま、黙りこんでいる。

沈黙に耐えきれなくなった真一は、近づこうと一歩踏み出した。だが、マスクがライトの前に身を乗り出し、不敵な笑みを浮かべる。

「何があつたのかも何も、ライト様がここにいることが事実だ。そして　ここにヨウがいることもな」

「何が事実だ！　てめえがそののかしたんじゃねえのか！　ライトとヨウをどうする気だ！」

「聞いてどうする？　全く意味のないことだ」

すると、マスクは白い仮面に手を伸ばし、そのまま仮面を取る。

そこから何かが出てきたかと思うと、上空にトグの姿があつた。冷めた目線で真一たちを見下ろしていた。

真一はトグを見上げていたため、見えないリオも釣られて顔を見上げた。

「俺を出してどうするんだ。何がしたい」

「この道を塞げ」

マスクの言葉に、トグを除く全員が眉をひそめた。

「なっなんだと！」

「ハギノ、使魔掃討作戦が変更されたことを知っているだろう？

先ほど、使者の奴が来たと思うが？」

口元を歪めつつ笑みをこぼすマスク。まるで仕向けたような言い方である。

「……やっぱりてめえが仕向けたんだな」

「ダック様から仰せつかっているからな。だが、少し事情が変わった。……もつとも俺とライト様の間でしかないがな」

そう言い終えた途端笑みは消えた。そして、冷たい視線をリオへと向けた。

「ただしエルモ人、貴様は別だ。トグ、奴を捕らえろ」

「了解した」

すぐにリオは槍を突き出し身構えた。だが、視線はトグがいる方向は全く違う方向だった。視線を彷徨わせ気配を探ろうとしている。

トグはそれを鼻で笑い、真っ直ぐリオに向かって腕を伸ばす。

「リオ逃げろ！」

真一はリオに向かって叫ぶが、リオがすぐに反応できるはずはな

かった。

「アビシヤス」

トグから飛ばされた空間の歪みは黒く、それはリオの目にも見え
た。だが、いきなりのことではリオは避けることができなかつた。槍
で防御しようとしたが、それはするりと避け、リオの身体に巻きつ
いてしまった。そのはずみで、槍が落ちてしまう。

「なっなんだこれは！」

「それを解くことはできない。いくら身体を鍛えているエルモ人
であろうとな」

「ぐ……くそっ！」

腕に力を入れ、その歪みを破ろうとしてる。が、リオの腕が震え
るだけでそれはびくともしない。

どうすればいいか。真一は咄嗟にポケットに手を入れ、触媒を握
り締めた。とにかくこの魔術を解かなければならない。そう判断し、
矢を召喚しようとした。　だが。

「無駄だ」

そのマスクの声と同時に、トグが片腕を天井に伸ばした。

「シント」

小さな手のひらから、その何倍もの大きさの衝撃波が天井に放た
れた。勢いそのままに、衝撃波は天井にぶつかる。その瞬間、洞窟
全体が揺れるような地響きとともに、天井から土の塊が落ち始めた。
大きな揺れにバランスを崩しそうになる。だが、目の前に立つマ
スクは余裕とばかりに笑みをこぼしていた。

「……命拾いしたなハギノ。ライト様に感謝するがいい」

ライトはずっと顔を俯かせたままだった。そして、その腕の中に
いるヨウも目を閉じたまま開こうとはしない。一体二人の身に何が
起こったのか、真一は理解できなかった。

そして、リオはトグの魔術に捕まったまま、綱で締めあげられた
ように自由を奪われている。いつの間にか身体を倒され、引きずら
れていた。

「マスク、てめえ何がしてえんだよ！」

駆け寄ろうとした瞬間、目の前に砂や岩が落ちていく。声はそれらにかき消され、マスクたちの姿までも遮って行く。

あつという間に目の前に岩壁が出来上がってしまった。マスクたちの声も届かない。残ったのは灯る淡い光と、再び一人となつてしまった孤独感だった。

「くっそおお！」

「シン、大丈夫か！」

身動きの取れないリオだったが、閉ざされた土壁に向かって叫んだ。だが、真一からの返事は聞こえない。代わりに、隣に立つマスクがふふつと声を漏らした。

「……貴様、人の心配より自分の心配をしたらどうだ？」

キツと睨み上げれば、口の端を持ち上げにやりと笑っていた。

「ハギノは殺さん。それがライト様との約束だからな。……これで満足ですか、ライト様？」

そう問いかけられたライトだったが、唇を噛み締め眉をしかめ俯いている。逃げる素振りがないライトに対し、リオは叫んだ。

「どうして逃げない！ どうしてこんな奴なんかと一緒にいるんだ！ シンがどれだけ心配していたのか知らないだろう！」

その瞬間、ライトの眉がぴくつと動いた。

リオはなんとかライトに近づこうと、動かない身体を必死にねじり近寄って行く。

「早く……逃げるんだ！」

だが、ライトは動かない。近寄ろうとするリオだったが、マスクに頭を踏みつけられてしまう。

「くっ！」

「先ほども言ったと思うが、ここにライト様がいらっしやるのはラ

イト様自身のご意思。口を慎め」

すると、マスクは手のひらを広げそこから黒い渦のようなものを作り上げた。そして、それをリオの背中に思いつき叩きつけた。

背中に触れられた瞬間に異変は起きた。

「かはっ！」

背中から全ての力を吸い取られる感覚。力が入らず目の前が真っ暗になる。思考も途切れ、リオはそのまま気を失ってしまった。

一方で、叫び声を聞いたライトはびくつと顔をしかめた。

「な、何を……」

ヨウを抱く手のひらに力を込める。もう後戻りはできないとわかっていても、心は逃げたいと訴えるように暴れていた。

「うるさいので、少し黙らせてただけですよ。ご心配ありません。それより参りましょう。ライト様も早く手に入れられたいでしょう？」

そう言つて、マスクは力が入っているライトの手のひらにそつと触れた。だが、ライトは触れられた手のひらをびくつと震わせた。そして、片腕で抱くヨウの手のひらを奪われまいと力を込める。その様子にマスクはふつと口元を緩めた。

「大丈夫ですよ。約束は守りますから。現にハギノは逃したでしょう。……そんなに疑っているのは、これから行う治療も不安になると思いますが？」

「……ご、ごめんなさい」

にやりとマスクは笑みをこぼし、そつとライトの手を握り締めた。言葉通りヨウに視線を送るものの奪う気配はない。ライトも、身体を強張らせながらも抵抗はしなかった。

「……トグ、俺の部屋へ移動しろ」

「部屋？　なんだ、先にダツクの所に行くんじゃないのか？」

「先に治療だ。その後エルモ人を連れて行く」

「……まあいい。好きにすればいい」

トグはそういうとマスクたちの周りに円を描き、ぶつぶつと詠唱を始めた。そしてすぐにふつと姿を消した。

【第六章 クフィロン山】暗闇に現る黒き人

ヨウは、ふっと意識を取り戻した。

目を開けると見覚えのない天井が広がっていた。起き上がろうと腕を動かそうとする　だが、動かない。

見ると、身体にぐるぐるすると縄が巻かれていた。

「な、なんじゃこりゃ！」

精一杯腕に力を込めるがほどけない。眉をしかめつつも、ヨウは部屋を見渡した。

殺風景な部屋である。

周りは石材で囲まれ、窓というものはない。ふと、視線を横へ逸らすと檻のような鉄格子が並んでいる。まるで牢獄だった。その隙間からは通路らしき道が見える。だが暗いためか、それ以上はどうなっているのかわからなかった。部屋に物は一切なく、ここまですべて何者かに運ばれたことは間違いないようだった。

「……なぜこんな場所に。確か……ライトを道案内しとったと思っただんじゃが……」

ライトの手を引きながら、クフィロン山の麓まで案内していたはずだった。

暗い夜道、足元に気をつけながらライトと共に進んでいた。真一がいるかもしれない　その可能性を信じ麓まで行っていたのだ。

「ライト……ライトどこじゃー！」

ふと我に返ったヨウは慌てて叫んだ。しかし、虚しく部屋に響くだけで反応する声もない。というよりも、人の気配がまるで感じられなかった。

しんとする牢獄。軽く混乱状態に陥りそうなヨウの耳に、かすかだが声が聞こえた。

「……………か」

遠くから声が聞こえた。何を言っているのかわからなかったが、ヨウ以外の声が聞こえたのだ。

「誰じゃ！ 誰かおるのか？」

必死に耳を凝らす。そして 再びかすかな声が届いた。

「……………誰かいるのか」

はつきりと聞こえたその声に、ヨウは身体をよじりながら鉄格子に近づいた。そして、隙間から見える暗闇に向かって再び声を張り上げる。

「おるぞ！ お主も捕まっておるのか！」

「……………俺一人ではない……………かなりの人数がこの牢獄に閉じ込められている」

「な、なんじゃと？」

暗闇で何も見えなかった目が、だんだんと慣れていき少しだがうつすらと見えていく。

目を凝らし凝視する暗闇に、思いもよらぬ光景が目飛び込んだ。
「こつ……………これは！」

通路を挟んで向こうには、四角く区切られた牢獄が立ちはだかっていた。鉄格子が四角小さな箱のようになり、それが何段と積み重なっているように見える。そして驚くべきは、その中一つ一つに衰弱しきっている使魔たちがいることだった。

皆が狭い牢獄の中にくったりと身体を預け、目を閉じかすかに呼吸をしている。

「……………使魔掃討作戦で集められた使魔たちか！ お主らなぜ逃げださんのじゃ！ しっかりせんか！」

ヨウの叫び声にもほとんど反応しない。ただ一人、上の鉄格子に入れられた使魔が弱々しい眼差しをヨウに送った。

「……………この鉄格子は特別らしい。魔術ができない。皆、食事もまともにも与えられず、餓え死寸前だ……………」
「なんとということじゃ……………」

信じられない様子でヨウは檻を見上げた。

使魔掃討作戦がどのような事態を招くのか、ヨウはそのことを懸念していた。だが、使魔は集団行動をすることがない。もし、契約者と共にいるものならば、常にその契約者と生活を送ることになる。使魔は人間よりも魔力は優れているし、契約者についても身の安全は保障されている。たとえ使者が目の前に現れようとも、簡単には捕まるはずはないと考えていた。

「なぜ……なぜこんなにも捕まっつてもうたんじゃ」

「主に……連れてこられたのだ」

「あ、主に……じゃと！」

困惑するヨウを、その使魔はただ弱々しく眺めている。

「……所詮、人間など……俺たちを利用する道具としか見ていなかったのだ。ここに集まった使魔は、全て主の手により使者に渡された」

視線を流し、どこか遠くを見つめていた。全てを投げ出したような目だった。暗い牢獄の中、光も入らず、ただただ時間が過ぎて行くだけ。集まった使魔たちとの会話もままならず、確実な死がひたひたと近寄る。

「人間など……俺たちよりも劣る者ども。いつか……必ず復讐を……。できずとも……呪いながら死んでやる」

「復讐……呪い……じゃと？」

身動きのない使魔たちを見上げながら、ぐっとヨウは唇を噛み締める。

拳に力が入り自然と身体が震えた。ほどけることがない縄が、みしみしと軋む。

「貴様ら……誇りはないのか！」

ヨウの叫び声は、牢獄の中に響き渡った。目の覚めるような大声は、身動きをしなかった他の使魔たちを刺激した。ぴくつと動き、ゆっくりと顔をヨウへと向けて行く。

「このような場所でお前たちはじっと待っておったのか？ 魔術が

使えんからと諦め、死を選ぶのか？ わしらには魔術がある、人間にも負けん魔力がある、そう思いながらもあがくこともせんかったのか？」

力のなかつた使魔たちの瞳に、徐々に光が戻って行く。皆、ヨウの言葉に耳を傾けていた。

「最後のあがきが、主を恨みながら死んでいくことなのか？ …… わしは、そんなことまっぴらごめんじゃ！ 少なくとも、わしの主は必ず助け出してくれる！ この状況を見れば、きつとお主らも助け出すに違いない。じゃが、主にはわしほどの力はない…… それでも……」

ヨウはふつと視線を地面に落とした。

必死に探す真一の姿が目には浮かんだ。魔力も少なく、魔術もまともに扱えない。それでも愚痴も言わず、ここまで来た。日に日に成長する真一に、ヨウも驚き、これからの成長が楽しみだった。真一といれば再び姫に会える、そんな願いも叶うような気がした。いや、その願いは必ず叶うと信じている。

ヨウは鋭い目つきで牢獄の使魔たちを睨み上げた。

「わしは主を信じとる！ 貴様らのように、ここでのたれ死ぬ気はない！」

そうヨウは叫ぶと、ぐつと手のひらに力を込め始めた。

その様子に気づいた使魔が、声をかけた。

「……無駄だ。召喚魔術はできぬ。何度も俺たちが試したのだ……無駄なことはやめるんだ」

呆れたような声だったが、それを無視しヨウは歯を食いしばり力を貯める。力を込める手のひらは震え、なんとか召喚を試みようとして集中を高める。だが変化は起こらない。

「やめるんだ。力を浪費するだけだ。……ここで黙って待つしかないんだ」

「あなたの言葉は結局は理想論。俺たちのできることは、人間を恨みながら死んでいくだけ」

「……結局駄目……か」

ヨウを見守っていた使魔たちだったが、口ぐちに諦めの言葉を吐くと再び身を檻の中に預け始めた。

再び、牢獄の中に暗い重い空気が支配する。その時だった。

「インディシヨンサモン！」

ヨウの叫び声とともに、激しい光がヨウの檻から発せられたのだ。突然の閃光に、使魔たちは驚くとともに光から目を覆う。光は少しの間続き、やがて光が治まって行く。それを感じ取り、使魔たちはゆっくりとヨウの檻を見下ろした。

そこに広がっていたのは。

「いくぞ……同胞たち！」

鉄格子には穴があき、大きく折れ曲がっていた。牢獄から脱出したヨウの手には短剣が握り締められている。

驚く使魔たちは、ヨウを信じられない様子で眺めるだけだった。

使魔たちの眼差しを受ける中、ヨウの左腕がだらりと力なく垂れ下がっていた。だが顔を歪めることもなく、すぐさま使魔たちの牢獄へと飛んで行った。

真一はただ呆然と、目の前に立ちふさがる土壁を見上げるしかなかった。固く閉ざされたその向こう、マスクとライト、そしてリオとヨウがいたのだ。

手に届く距離だった。あと一歩早く出ていれば 連れ戻すことができていたかもしれない。

だが、今更そんなことを考えても仕方のないことだった。今ある現実、道を塞がれてしまった事実だけである。

「……ちくしょう……ちくしょう……！」

がっくりと膝から崩れ落ち、ただ拳を握り締め悔しさを噛み締める。何度も拳で土壁を殴った。だが、崩れない。びくともしない。

殴るたびに、自分は無力なのだと思い知らされる感覚だった。

しかし、真一は力の入っていた拳をふっと抜き、視線をすっと上げた。

「……俺は……諦めねえぞ……」

独り言を囁くと、立ち上がりトートバックの中に手をつっこみ証を握り締める。それは、ガナオンから貰い受けた黒い証だった。

それを両手でぎゅっと握り締める。真一の目は諦めていなかった。するとまもなく、黒色の閃光が辺りを包んだ。その光は真一目の前に委縮していき、やがてそこから真紅のローブを着たガナオンが姿を現した。

「こんにちは、シンイチくん」

ウェーブのかかった黄色の長い髪。細身の身体でありながら、胸が大きく色香を漂わせる。久しぶりに会う真一の姿に、微笑むガナオンだったがすぐに表情が一変する。

「……こ、これは！」

真一の横を通り過ぎ、岩壁に手を当てる。

「ここは城への回廊でしょ？ 何なのこの壁は！」

ガナオンは険しい表情で振り返った。一方、真一は眉間に皺を寄せつつ、視線を落とし悔しそうな表情をしていた。

「……マスクが道を塞いだんです」

「マスク？ ……ダック公爵の部下ね。でもどうして道を……！ シンイチくん、一体何があったの？」

真一は、城下町オデイから起こったことをガナオンに話した。

パイが死んでしまったこと、オデイの証を手に入れたこと、ライトとヨウの姿が消えてしまったこと、そして、マスクがライトとヨウを連れて目の前の道を塞いでしまったこと。全てを話終えた時、ガナオンは視線を泳がせ驚きを隠せない様子だった。

「ライト……シトモンさんの娘さんがシンイチくんと一緒に旅を……？ そしてダック公爵の部下と一緒にいた……？ なぜ……。ライトはマスクと一緒に……本当に自らの意思で……？」

「違う！ 絶対マスクに弱みを握られてるんだ！ …… ライトが俺たちを見捨てて、マスクの所へ行くわけねえ」

そう信じるように、真一は顔を伏せぎゅっと拳を握った。

とても信じられなかった。なぜライトがマスクと一緒にいるのか。ついさっきまで隣にいたライト。それがなぜ、ヨウとともにマスクの隣に立っているのか。

「……シンイチくん」

ガナオンの声にハツとした真一は再び顔を上げた。

「とにかく……これではアラウ城へ行くことができないわ。……残念だけど、私ではこの岩壁をどうすることもできない。ここは魔元素が少ない場所で、私の召喚魔術ではとても壊せないの」

「そ、そんな！」

だが、ガナオンはふつと表情を緩めると続けた。

「大丈夫。私には無理でも、もう一人の統治者ならばできるわ」

「……誰ですか？」

思わず眉をひそめた。真一は嫌な予感しかしなかった。そんな真一に気づくはずもなく、ガナオンは笑みを崩すことなく言った。

「オデイよ。彼の移動魔術で連れて行ってもらいましょう」

予想通りの人物の名に、思わず真一は視線を逸らした。

「……あら、どうしたの？」

「いえ……なんでも」

「……その様子だと彼と何かあったみたいね。まあ確かに彼は人を逆撫でするような性格だけど、魔術に関しては文句のつけようがないわ。それに、魔元素が少ないこの地であつても彼の移動魔術は関係ない。本当に、移動魔術に長けた人なのよ。……安心してシンイチくん。私もちよつと苦手だから」

「ガナオンさんも……？」

ガナオンは苦笑いを浮かべつつ頷いた。

「ええ。けど、今はそんなこと言ってもらえないわ。ライトと使魔を救いたい……でしょ？」

「そうですね……すいません、子供みたいなこと言って……」
すると、ガナオンはふつと表情を和らげて微笑んだ。

「いいのよ。さあ頼んだわよ、シンイチくん。一緒に彼に頭を下げ
ましょ」

その言葉に思わず真一もふつと表情を和らげた。そして、トート
バックの中から最後の証である、黄色の証を手を取った。

もし、これで手でなければ そんなことが頭に浮かんだ。

「……あいつに殴られたって構わないです。それで策が見いだせる
なら、いくらでも殴られますよ」

そう言つと真一はぎゅつと証を握り締めた。

【第六章 クフィロン山】暗闇に現る黄色き人

真一は証にぐつと力を込める。目の前に立つガナオンも真剣な眼差しで眺めていた。目の前に立ちほだかる岩壁を超えるには、最後の統治者の協力が不可欠だった。

顔も見たくない相手。だが、今はそうも言っていられない。

じつと拳を見下ろしていると、まもなく黄色い閃光が辺りを包んだ。拳から漏れる閃光は、渦を巻きながら上に集まると、そのままガナオンの横へと落ちた。そして。

「……余を呼び寄せるとは良い度胸である」

閃光が治まると同時に、その声が響き渡る。

スキンヘッドの頭には宝石のついた紐を巻き、鋭い目つきで真一を見下ろしていた。統治者オデイである。

「貴様なんぞ見たくもない。さつさと戻りたい気分ではあるが……」
ふつと口元を緩め、オデイはそのままガナオンの方へと向き直った。

「これはこれは、ガナオン殿。久しぶりではないか」

「オデイ、久しぶりね」

にこつと微笑むガナオンだが、どこか作られたような笑顔である。一方で、オデイも緩めた口元を崩さない。

「このような場所で会うとは。町の再建に励んでいると思っただが……それとも、もう諦めたのかね？」

「あら、私は誰かさんと違って簡単に諦めたりしないわ。任された場所は、しっかりと責任を持つつもりよ」

ふん、オデイは鼻で笑うと再び真一の方へ顔を向けた。

「……で、余に何の用事で呼び寄せた？ ……ん」

何かに気づいたようで、オデイは視線をそのまま真一の後ろの岩壁に向けた。途端、目を見開き真一を押しつけ岩壁の前まで歩み寄った。

「なんだこれは！……貴様！ 回廊で何をした！」

「俺じゃねえよ！ この壁のせいで立ち往生食らってんだ！ そのためにあんたを呼び寄せたんだよ！」

「……何があつたのか、余に話せ」

真一は、オデイに送られた後何があつたのかを説明した。リオとヨウのことは一応伏せたまま、目の前にダック公爵の部下であるマスクが来たことだけを話した。顔色一つ変えず聞いていたオデイだったが、ダック公爵という言葉が出ると眉をひそめた。

「ダック公爵。余が唯一、恐れる人間……」

「……シンイチくんが城に行きたくても、その部下が道を塞いでしまったせいで進めないのよ。だからオデイ、貴方の移動魔術でこの壁を壊すか、いつそのこと城の近くまで運んでくれないかしら？」

オデイは地面に視線を落としたまま、しばらくの間沈黙は続いた。何か考え込むようにじつと地面を睨みつけていたが、ようやくオデイは視線を上げた。

「……断る」

思いもよらぬ言葉に、ガナオンはオデイの目の前に迫った。

「どっして！」

「この回廊に壁ができようが関係ないではないか。むしろ、余計な愚民どもが城へ近づけなくなる。良きことだ」

「私たち統治者たちも城に行けなくなるわ！」

「ふん、余は移動魔術で行けるし、移動魔術がなくなるとも直接城からの使者たちが来るではないか。……この岩壁が余たちに与える不利益は全くない」

ふつとガナオンに対し鼻で笑って見せた。一方、ガナオンは唇を噛み締めたまま、言い返せる言葉がなく睨み上げていた。

その時、そつと真一はガナオンの肩を置きその場に進み出た。

「……シ、シンイチくん？」

「おっさん、いいこと教えてやるぜ」

にやりと笑う真一に対し、顔を引きつらせながらオデイが見下ろ

す。

「貴様……余をおつさんだと……！」

「要するに、あなたに利益がありや協力してくれるんだよな？」

「どういうことだ？」

すると、真一は左腕をオデイの前に見せた。

「これ、何かわかるだろ？」

左腕　二の腕辺りに赤い線二本がぐるりと回っている。

「それは……契約者と使魔の証！」

「俺には使魔がいる。で、あなたも知ってると思うけど使魔掃討作戦のせいで使者に追いかけてまわされてたんだ。でも、さっき知ったんだけど、その作戦の内容が俺を捕まえろつてのに変更されたらしいんだよ」

その言葉に、オデイだけではなくガナオンも眉をひそめ驚いた表情を浮かべた。

「な、なんですつて？　どうしてシンイチくんが？」

「わからないです。でも、そう変更した本人はマスク　ダック公爵の部下だ。……で。オデイさん、俺を城まで連れて行ったら、あなたの評価が上がると思うんだけどなあ？」

にやりと笑う真一の横で、発言に驚いたガナオンが真一の肩を掴んだ。

「ちょっと、シンイチくん！　貴方、何を言ってるの！」

ガナオンが止めるのも無理なかった。追いまわされた使者の手を、今自ら進んで行こうとしているのだ。

一人慌てるガナオンに対し、真一とオデイは互いに睨みあったままだった。鋭い視線で見下ろすオデイに対し、真一も負けじと視線を逸らさない。自分の足で進めない今、オデイの移動魔術に頼るしかなかった。

「よかるう。貴様は城へ近づぐことができ、余は評価を上げられる。悪い話ではない」

にやりと笑みを浮かべるオデイに釣られ、真一もにやりと頬を緩

めた。が、ガナオンは違った。

「オデイ！ シンイチくんが何か悪事をしたと言っの？ 何もしてないでしょ！ 無実の人を命令だからと渡すの？」

「……ガナオン殿。間違えておられる。余たちは、国王の手と足となる統治者という立場である。命令に従うのは当たり前であって、命令に対し疑っていいは務まらぬぞ」

「それでも……最近の国王はおかしかった！ それを正しい道へと導くのも統治者の役目ではないの？」

ため息を漏らすオデイの横で、真一は肩に寄せられたガナオンの手を降ろした。

「ガナオンさん大丈夫です。呼び寄せた時から、リスクは伴うって感じてましたから。……この人がどういう人か、町で思い知らされましたからね」

ガナオンは眉をひそめ、悔しそうな表情だった。だが、真一の意思に反論することができないのか、それ以上訴えることはしなかった。すると、タイミングよくガナオンの身体が光始めた。眩しい光はガナオンの身体を包んでいく。

「……シンイチくん、また何かあれば召喚してね。……絶対よ」
そう言葉を残し、ガナオンはあつという間に姿を消した。ふと、その足元に目をやれば、リオが落とした武器が棒の状態で落ちていた。真一はガナオンが消えた足元を見ながら、その武器を拾い上げる。城に行けば必ずリオもいる。

「……頼むぜ」
「ふん、貴様こそ逃げるのではないぞ。余の評判を落とさぬようにな」

「逃げねえよ。城まで送ってくれりゃいいんだ」
オデイは手のひらを真一の肩へ乗せた。すぐに移動魔法をするのかと思いきや、じつと真一の顔を見ていた。

真一はすぐに移動魔法をするものかと思っていたので、じつと真正面を向いてオデイを見ていなかった。

「……なんだよ」

沈黙が続いたので振り向けば、険しい表情でオデイが見ている。

「貴様……なぜ自分に不利益なことばかりをする？ 余の考えでは考えられぬ」

「自分最優先のあんたには、一生わかんねえよ。……地位や金じゃ、手に入らねえもんもあるんだよ」

「……ほう。まあ良い」

そう言うと、ふつと足元が軽くなった。

オデイは間もなく移動魔術をしたらしかった。一瞬にして目の前が暗くなる。この闇が開けた瞬間、自分は捕まる。そう思っても、真一は不思議と恐怖心は沸かなかった。むしろ、城に行けばヨウにもリオにもライトにも会えるかもしれない。そんな希望の方が強かった。何より心強かったのは、トートバックの中にある四つの証のおかげだった。

真一は一人ではない。そんな風に四つの証が真一を影から支えているようだった。

一瞬にして闇は消えさえり、気づけば薄暗い森の中に立っていた。「……ここどこだよ」

見覚えのない光景。鬱そうと茂る森。じめじめと肌に不快感を与え、濃い霧が森の中に張り巡らされている。

「……ここは、クフィロン山である。貴様が歩いていた回廊の地上部分にあたる所である」

「は？ 俺は城に連れていって……」

半ば睨みつけるようにオデイを見上げた。

「やっぱりあんたでも、あの回廊じゃあうまく魔術できなかったのか」

トトロイとガナオンも、満足に魔術ができなかった。二人の様子から、魔元素が少ないというのはやはり城に近いたためだと思っていた。だが、オデイはすぐに反論した。

「余を甘くみるな。余の移動魔術はあのような少ない魔元素の場所であつても、城までぐらい行くことは可能である。自衛魔術ではばかれようとも、我が魔術は屈しない。だが……」

するとオデイは、視線を横へと流しそのまま閉口した。何か言いにくいのか黙り込んだままだった。

突然の沈黙に、真一は眉をひそめ思わず首を傾げる。すると。
「貴様の言う……地位や金では手に入らぬもの。余はそれが気になる。貴様を簡単に使者へ渡してしまうと、余の楽しみも減る。ただそれだけである」

そう言い残すと、すつと姿を消してしまった。

「ちよ、待て！」

思わず手を伸ばすが、すでに遅かった。残されたのは、もやもやした胸とじめじめとする不快な空気だけだった。

【第六章 クフィロン山】再会

矢筒を背負い弓を握り締め、真一は黙々と湿っぽい森を歩き進んでいる。湿った空気は肌にまとわりつき、太陽が届かないせいなのか、森は肌寒く暗い。湿った空気は不快感を与えるだけではなく、熱をもまでも奪っているようだ。

整った道などなく、無造作に生える長い草と細い木々が隙間なく生えている。細い木々に似合わない葉が空を覆い尽くし、そのせいで辺りは昼夜の判別もできない。ただ、薄らと光が漏れていることから、朝になりつつあるのではないかと真一は思った。興奮しているのか眠気も空腹感もない。疲労感だけがずっしりと身体を重くしていた。

肌寒さに耐えながら歩いて行くと、細い木々の間から何かしらの建物が目に入った。とうとうアラウ城へついた、と思いきやそれほど大きな建物でもない。一階建のようで、黒く四角い箱のような建物だった。

「……何だここ」

警備らしき人の影もない。一応、周りを見渡してみたが誰もいない。だが、何か重苦しい雰囲気や建物が建物から感じられた。思わず握る弓に力が入り、ごくりと唾を飲み込む。足音を立てないように、真一はゆっくりと建物へと近づいて行く。

黒いドアの前までやって来た。そこである声が聞こえた。一人ではない、大勢の声らしく複数人の声でした。聞きとれないが、何人かがしゃべり物音を出している。

思わず真一は身を引いた。

このドアの向こうに誰かがいる。ドアノブに伸ばしていた手が思わず止まる。鼓動が早まり、緊張のためか冷や汗が流れ出る。寒さなのか恐怖なのか、自然と身体が震えていた。

「……大丈夫……大丈夫」

目を閉じ、ゆっくりと深呼吸をした。そして、ポケットから触媒を少し握り締めそのまま取り出す。

今更迷ったって仕方ねえんだ……！

目を開けると同時に、握り締めていた触媒が矢へと変化する。銀色の光を放ちながら、横に伸び触媒が矢へと変わった。それを確認した真一は、一旦跪きかけを右手にはめる。

かけをつけた右手に弓と矢を握り締める。そして、左手をゆっくりとドアノブへと近づけていく。

開けなきゃ、前に進めねえんだ。

ぐっとドアノブに力を込める。そして、一気に開け放った。

金属と金属がぶつかる、甲高い音が牢獄に響いている。

脱出したヨウは、閉じ込められている使魔を解放しようとしたものの、鍵がなくなかなか牢獄を開けられないでいた。魔術で壊せば良いのかもしれないが、やはり魔元素がないのか、それともヨウの魔力が少ないのか、それ以上の魔術を唱えられないでいた。そのため、召喚した短剣で鍵の部分を必死に叩き壊そうとしている。

「お、おのれえ！ 壊れんか、この！」

ヨウは右手で握り締めた短剣を、鍵に向かって振り下ろしていた。両手ですれば力が入るのだろうが、左腕はだらりと下がったままだった。

「俺たちはいい……あんただけでも、逃げてくれ」

「そうはいかん！ お前たち、このままじゃと何をされるかわからんぞ！」

そう言いながら必死に振り下ろすが、一向に壊れる気配はない。

「だが……この数を見る。これ全て、あんたが一人で……開けられるのか？」

キン、という音が鳴り響く。と同時に、ヨウは手を止め上を見上

げた。

途方もなく、四角い小さな牢獄が並んでいる。その一つ一つに使魔が入っているのだ。まだ一つも開けられない。満足に魔術もできない。

「……じゃが……わし一人だけ抜け出すなど、できん！」
そう叫んだ直後だった。

突然、廊下の一番奥の扉が開かれた。遠い暗い廊下の奥に、光がぼんやりと浮かんでいる。

「に、逃げる！ 人間どもが戻って来た……」

「早く……あんただけでも……」

「……俺たちは死なない」

次々に使魔たちの声が轟く。焦る使魔たちの中で、ヨウだけは違った。

じつと、その開かれた扉を見る。

「……ま、まさか……」

逆光で影だけが見える。その姿は見慣れた影だった。

ざわつく使魔たちの言葉を振り切り、ヨウはすぐに飛んでいく。

「まさか、まさか……もしや！」

どんと光が大きくなっていく。その影も、予感から確信へと変わって行った。

ドアを開け放ち出てきたものは、暗く長い廊下だった。外見から想像した建物の内部とはかなり違った。廊下は、目の前に広がるこの道一本だった。その両サイドには、何か牢獄のような鉄製らしき棒が、小さく四角に分けられていた。そして、その中には何かが入られている。その小さな四角い牢獄は、天井まで続いていた。

「なっなんだこれ……」

真一の声に反応したのか、牢獄の中に入っているものがかすかに

動いた。

それに気付き、真一は目を凝らして一体何が入っているのかじつと眺める。

「えっ……」

暗さに徐々に慣れて行く目が映し出したもの。それは、がっくり身体を牢獄に預けている使魔の姿だった。

使魔は少し身動きをしたかと思うと、どんよりとした眼差しでじつと真一を見ている。何があったのか、と声を掛けようとした時廊下の奥から何かが近づいてくる。耳にかすかに聞こえた風を切る音に、真一は険しい表情で廊下の奥を睨みつける。どんと近づいてくる気配に緊張が高まって行く。

「……シンイチ！」

その瞬間、真一の強張っていた身体が一気に力が抜けていく。聞き慣れた声だった。

頭が真っ白になる真一の目の前に、息を切らして現れた人物は。

「ヨウ……」

紺色のシャツとズボンを着た金色の髪の使用魔。背中の白い羽根を忙しく動かし、目の前に浮いている。

「シンイチ！ よかった……無事、じゃったんじャの……」

頬をほころばせながら、ヨウの目が段々と涙目になっていく。ヨウは目元を袖で拭い、なんとか涙を堪えているようだった。

一方で、真一はまだ信じられない表情で呆然とヨウを眺めている。

「……本当に、無事でよかった……。わしは、心配で心配で……」

涙を拭っていたヨウだったが、何の反応もない真一に顔を上げた。……シンイチ？ どうしたんじャ？

首を傾げじつと見つめる。真一は目を見開いたまま微動だにしない。

すると、突然真一は弓と矢を手から落とした。そして。

「いたっ！」

いきなり拳をヨウの頭に振り下ろした。力が入っているのか、ヨウは頭を押さえたまましばらくそのまま動かない。

「……シ、シンイチ！ 貴様いきなりなんじゃ！」

「それはこつちの台詞だろうが！」

ヨウは睨み上げたが、真一の表情に言葉が出なかった。

唇を噛み締め、うつすらと涙目になっている。

「心配かけさせやがって……。俺が……。どれだけ心配してたか知らねえだろ！」

「そ、それは……すまんの」

真一は長く息を吐くと、落としていた弓と矢を拾い上げた。

まさかの真一の反応に、ヨウは申し訳なさそうに俯きじわりじわりと肩に近づいて行く。ヨウにとって、そこが真一との場所だった。
が。

「……ちよつと待て」

その言葉にぴたつと動きを止める。真一は顔を段々と険しくさせながら、ヨウをじっと見据えた。

「お前、なんでここにいんだよ。マスクたちに捕まってたんだぞ」

「……何？ わしがか？ ……気づいたらこの牢獄の中におったんじゃが」

真一は目を見開きながら、一気に廊下を走り始めた。すかさずヨウも肩にしがみ付く。

暗い牢獄に、真一の息遣いと足音が響く。左右の牢獄からは、弱々しい使魔たちの息遣いも聞こえた。

「シンイチ！ いきなりどうしたんじゃ！」

だが、真一は走ることはやめなかった。

「……これは」

足が止まった場所は、ヨウが捕まっていた牢獄だった。出入り口は壊されているものの、この牢獄だけが異様に広い。

「本当にお前一人だったのか？」

「ああ。わし一人、縄でぐるぐる巻きにされとったんじゃ」

人間一人が入れそうなほど空間にゆとりがある。
そんな空間を眺めた後、真一は何か気づいたように振り返った。
そこには小さく区切られた小さな牢獄がある。

「おい！ お前ら、こいつがここに連れてきた時何か見てねえのか！」

真一の叫び声が牢獄に響き渡る。だが、使魔たちはぐったりとしたまま、かすかに牢獄の中で動くだけだった。

返事を待っていたが、痺れを切らしたのか真一は牢獄の鉄格子を掴む。

「答えてくれ！ 目の前だぞ？ 何か見てるだろ？」

一つに限らず、いくつかの牢獄に訴えていく。だが、徐々に何か邪悪な雰囲気立ち込めて行く。使魔たちは黙ったまま、目に見えるほどの殺気を出し始めた。それを感じ取ったヨウは、一旦真一の肩から離れる。

「……こやつがわしの主じゃ！ 貴様らを捕まえた人間ではない！」
突然のヨウの叫びに、真一はきよんとした顔を向けた。

「それ以上の殺気は、わしらに対する敵意としてとるぞ。いくら同胞といえど、ただではすまんぞ……！」

「おいおい……何言ってるんだ」

はは、と笑う真一を横目に、ヨウは険しい表情を崩さず牢獄を睨みつける。

すると、殺気立っていた牢獄が段々と治まって行く。真一も、しんとする牢獄の雰囲気に思わず見渡した。

「……男が一人だけ」

静まりかえる牢獄に、ぽつんと言葉が漏れた。

ハツとした表情で真一は声の主を探す。

「他に……他にいなかったか！」

どこから漏れたかわからない声に、再び真一が叫ぶ。

男とは、おそらくマスクのことだろう。となると、もう一人女がいるはずなのだ。

「頼む！ 思い出してくれ！」

だが、それ以上の言葉が出ることはなかった。一瞬だけ感じた邪悪な雰囲気はどこかへ消え、今はどんよりとした暗い空気が立ち込めている。

「……シンイチ」

そう呟いたヨウを見れば、先ほどまでの険しい表情ではなくなっていた。

「一刻も早く……城へ行くことがええ」

ヨウにもわかったのだろう。歯を食いしばり悔しさを噛み締めていた。

「ああ……でも……」

そう言うと、真一は牢獄を見上げた。天井まで四角い牢獄が連なっている。その一つ一つから使魔の弱々しい息遣いが聞こえた。「いいのかよ……このまま放っておいて……」

ヨウも立ちはだかる牢獄を見上げた。恨めしそうに眺めている。「……壊せるものなら、すぐにでも壊したいわい。じゃが……できないのじゃ」

その言葉に、真一はぐつと牢獄を掴み強く引つ張ったり押したりしてみた。だがびくともしない。その様子を、使魔たちはじっと眺めていた。

「くそ、びくともしねえな。……でも、お前そこから出たんだろ？」

「ああ……腕が一本折れたがの」

そう言われ、初めて真一はヨウの左腕に力がないことに気付いた。目を見開き驚く表情に、先にヨウが口を開く。

「そう驚くな。痛みがない、と言えば嘘になるが、おかげで出るこ
とができたんじゃ。……こやつらは、その最後の力さえも残っては
おらん」

真一は視線をヨウの腕から移し、立ちはだかる牢獄に目をやった。先ほどまで何か異様な雰囲気を出していたはずが、どの使魔たちもぐつたりと身体を預けている。ただただ、弱々しい眼差しを二人

に向けているだけだった。

「……こやつら、食事もほとんど与えられておらんようじゃ。体力だけがどんどんなくなりよる。まともな受け答えも難しい。だったら、ここで情報を聞くより早く城へ行くことが先決じゃる。……それに、こやつらのためにも鍵を手に入れ解放させた方がええ」

そう自分に言い聞かせるように目を強く瞑っていた。ぐつと拳を握り締める。そして、ヨウは一気に目を見開くと、強い眼差しで牢獄に向かって叫んだ。

「絶対に諦めるな！ わしら二人を信じろ！ 必ず、必ず戻る！」
すると、目の前の牢獄に入っている使魔が弱々しく微笑んだ。

「……それでいい。俺たちは諦めない。貴方がそう言うなら……俺たちもその人間を信じてみよう」

か細い声だった。それでも声ははつきりと真一とヨウに届いた。

「ありがとう。必ず、必ず戻ってくる。それまで堪えてくれ」

真一はそう言うと、出入口に向かって足を踏み出す。

静まりかえる廊下に、足音だけが静かに響く。見送る使魔たちは、それを見届けつつ、どこか安堵を浮かべた表情で再び眠りにつき始めたのだった。

【第六章 クフィロン山】再会（後書き）

長くお待たせしまして申し訳ないです。

一カ月更新になりつつ本作でありながら、たくさんのお気に入り登録、嬉しく思います。

なんとか、皆さまの期待に応えたい作品にしていけたらと思います。

【第六章 クフィロン山】デアサモン

真一とヨウは使魔たちが捕らえられていた建物を出ると、再び森を歩きはじめていた。進むにつれ、傾斜がだんだんとひどくなっていく。が、景色だけは一向に変わらない。

「おい……本当にこのままで城まで行けるんだろっな」

息を切らし、汗を拭いながら真一が言った。

「木ばっかりじゃねえか。それに、麓から見上げたとき頂上なんて見えなかつたんだぞ」

汗のせいで余計に肌寒く感じていた。立ち止まると、余計に寒さを感じる。見上げても太陽の光など届かず、かすかに葉っぱの隙間から光が漏れているだけだった。

「……おそらく、このまま歩いても着かんじゃろっな」

「……は？」

半ば睨みつけるようにヨウを見た。

「おい。じゃあどうしろってんだよ」

「移動魔術……と言いたいところじゃが、わしに元々雷魔元素は少ないし無理じゃろっ。この土地なら余計じゃ」

クフィロン山は魔元素が少ない場所。それは統治者たちも言っていたことだった。それに、ヨウは移動魔術は得意ではないとなると、魔術に詳しくない真一であろうとわかることだった。

「じゃあどうすんだよ！ いや、まて……。お前……。何か考えがあるんだろ」

焦りの見えないヨウに、真一は何かを感じた。

「もったいぶらずに話せよ。何か方法があるんだろ」

肩にしがみつくヨウをじっと見つめる。だが、ヨウは黙ったまま何かを考えているようだった。

すぐに口を開くことなく、二人の間に沈黙が流れる。だが、真一はヨウが口を開くまで待っていた。

「……あるぞ。一つだけ、な」

「一つ？ なんだよそれは」

「今、わしらは二人だけではない、ということじゃよ」

その言葉に、真一は開いていた口を自然と閉じた。

『わしら二人だけではない』

意味がわからず、思わず周りを見渡す。だが、人の気配などない。使者がいる様子もない。ただ静かに森が広がっている。

「……どういう意味だよ。ちゃんと説明しろ」

風も吹いていないのに、木々の葉がざわざわと揺れていた。

小さなざわめきの中、少し間をおいてヨウがゆっくりと口を開いた。

「……わしらにはずっと一緒に旅をしてきた奴がおったではないか」

「ずっと……一緒に旅を……」

言葉を反芻しながら真一はハツと気付いた。

「ピィ……ピィのことが……！」

「そうじゃよ。前に言っただじやろう。……デアサモンを使う時がきたんじゃ」

冷たい床と、目の前に立ちふさがるのは鉄格子。牢獄の中には何も無い。窓さえもない。真っ暗な牢獄の中、リオは手を手錠で繋かれ、壁に貼り付けの状態で座っている。目こそ暗闇に慣れたものの、動くことができないために周りに何があるのかさえ確認できなかった。

先ほどまで目隠しをされた状態で、この牢獄の中へ連れてこられた。と同時に、今の状態にされ厳しい暴行を受けていた。目を覆われたままの状態の拷問は、無意識に身を固める余裕さえ与えられず、どこから飛んでくるかもわからない拳をただ受け続けた。拳だけではなく、針が刺すような冷たいものを当てられたり、身を焦がすよ

うな火の粉を浴びせられた。今、顔や腕など身体中が怪我だらけである。

「……くそ」

だが、リオの強い精神力でそれを乗り切っている。身体の痛みこそひどいものの、意識を失うほどではなかった。リオの言葉がしんとする牢獄に短く響いた。

口の中に広がる血の味に耐えられず、思わず唾を吐き飛ばす。

「……奴らどこへ行つた……」

先ほどまでいた使者たちがどこかへ行ってしまった。ほんの少しの間だろうと考えていたリオだったが、なかなか戻ってこない様子に疑問を抱く。

「……シン、無事だろうか」

ぐつと拳を握り締めると、鎖が軋む音がした。

リオは歯を食いしばりながら、何もできない歯がゆさと己の力不足に、悔しさをにじませていた。

静かな森の中、真一は信じられない表情でヨウを見つめていた。

「デアサモンって……。ピィを生き返らすってことかよ」

「ああ。そうじゃよ」

真剣な眼差しのヨウに、真一はぐつと唇を噛み締め視線を逸らした。

「……拒む気持ちもわからなくてもない。じゃが、今、頼れるのはそれしかないんじゃない」

デアサモン それは一度きりの魔術である。

真一が素直に頷かないのには理由があった。

「……俺たちのことを忘れてるピィなんて……お前には耐えられるのかよ。それに……ピィは最後の最後まで尽くしてくれた。それを死んでまで頼るなんて、なんか勝手すぎるんじゃないか」

目を伏せたまま真一は静かに言った。

だが、ヨウも引き下がらない。強い眼差しを真一に向けたまま、はつきりとした口調で反論する。

「それはシンイチの勝手な考えじゃろう？ わしは、ひよこがどれだけシンイチに感謝しておったか聞いておる。なのに、勝手にひよこのためだの言って……結局、ひよこから逃げておるのはシンイチの方ではないか！ 主であるなら、しっかりと強い意思を持って！ それがひよこのためでもある！ 主の役に立てて、恨むやつなどおらんわ！」

そういつと、ヨウは指を強く噛み締める。すると、じわっと指先から血が浮かび上がった。

思わぬ行動に、真一も視線を上げその様子をじっと見つめる。その間もヨウは気にする様子もなく、その血が流れる指先を自分の手のひらに一滴落とした。それを確認すると、ぎゅっと両手の手のひらを合わせ、ぶつぶつと詠唱を始めた。

「……何やってんだ」

そんな真一の問いかけにも、集中を切らすことなく詠唱を続ける。少しの間が続いたが、ヨウは詠唱をやめた。ぐっと両手に力を込めたかと思うと、ゆっくりと手のひらを開いていく。

「……え？」

思わず真一は声を漏らした。

手のひらから出てきたのは 見覚えのある色の、一枚の羽根だった。

「これは、ひよこの羽根じゃ。……これを触媒とし、デアサモンを唱えるんじゃない」

小さな手のひらに乗るのは、茶褐色のピィの羽根だった。崩れておらず、そのまま抜き取ったように整っている。

「どうして……ピィの羽根が出てくんだよ」

「……あの日、試合の前に奴から貰い受けたんじゃないよ。死んでもシンイチに尽くしたい その言葉を聞いたからの」

ヨウは羽根を手のひらに乗せたまま、ぐつと真一の前に突き出した。

「さあ。準備は整っておる。あとは、シンイチが魔術を唱えるか唱えんか、ただそれだけじゃ」

じつと真一は羽根を眺めた。

パイを召喚するべきなのか　自問自答してもどつちが正しい答えなのかわからなかった。わかることは、今、この状況を打破するために真一とヨウの力だけでは不可能ということである。ゆつくりと手を伸ばしていく。

召喚されるパイはどんな姿をしているのだろう。本当に、自分たちのことは覚えていないのか。そんな疑念が次々と浮かんでくる。だが、手は止めなかった。

「……やってみる」

そう言いながら、パイの羽根を握り締める。さらさらとした、さわり心地の良い一枚の羽根。

まだ顔色の冴えない真一に、ヨウはふつと微笑んだ。

「大丈夫じゃ。ひよこなら、必ずシンイチに協力する。……それが少しの間であっても、それがひよこの幸せなんじゃ」

そう言つと、まだ血が流れる指先を真一の手のひらにそつと触れた。

赤い斑点が手のひらにできる。突然の行動に、真一は怪訝そうに眺めた。すると、すぐにヨウが口を開く。

「その手のひらで、ひよこの羽根を包み込むんじゃ。そして、生きていたひよこを思い描きつつ叫べ　『デアサモン』とな」

ヨウの真っ直ぐで真剣な眼差しから目を逸らし、手のひらの羽根に目を移す。

茶褐色の羽根から微かに温かさを感じる。まるで今、そこでパイから抜いたようだった。

そんな羽根を両手で優しく包み込む。

すつと目を閉じ、生きていたパイを思い描く。

卵が生る木から生まれた、ピィ。

地球では考えられない大きさの、ひよこの姿をしたピィ。いつもいるのは真一の頭の上だった。

突然の変化。ひよこは鶏にはならず、立派な鷹へと進化した。しかも、言葉を発した。いつも喧嘩をするヨウに対し、真一に対してはいつも味方だった。

試合に参加する時も、文句も言わず一つ返事だった。いつも見守っていてくれた。

真一は目をゆっくりと開いた。そこに迷いの光はなかった。

「デアサモン」

静かな森に心地よく響き渡った。じつとヨウも様子を見守る。すると。

突如、真一の両手の隙間から黒い閃光が発せられた。思わず真一が手を離すと、羽根が黒い光の球の中に包まれたまま浮かび上がっていく。

黒い光の球の周囲には、電流のような白い光がびりびりと走っている。啞然とした表情で真一はその球の様子を見上げた。

「お、おい！ 本当にピィが生き返るのかよ！」

「ええから黙って見とれ」

一方で、ヨウは落ち着いた様子で球を見上げていた。

球は徐々に濃さを増していく。さほど時間が立たないうちに、真っ黒の球体となり、中の羽根は見えなくなってしまった。しかし、以前と球体の周りの小さな稲妻は走っている。

すると、球体は突然拡大していく。と同時に、稲妻もけたたましい音を響かせながら数が増えていく。あまりの爆音に、思わず真一は顔を歪ませながら耳を塞いだ。

だが、ヨウは違った。

稲妻の音にも冷静さを保っていたが、球体の様子に目を見開いていく。

「……………こ、これは……………まさか……………！」

球体は周りに立っている木をも押し倒しつつ、なお拡大を続けていく。稲妻の音に、さらに木が倒れる音が森に響き渡る。

「……嘘じゃ……信じられん……」

そんな騒音の中、ヨウのつぶやく声のはっきりと真一の耳に届いた。

顔を向けてみると、驚いた表情で呆然と球体を見上げていた。問いただそうと真一が口を開けようとした時、さらに球体が大きさを増した。一気に周りの木をなぎ倒す。

と同時に、球体の稲妻が一斉に上空に伸び、一つになった。

そして　一気に球体に向かって落ちる。

バチィツという、まるで雷が落ちたような爆音と衝撃が真一たちを揺らし、と同時に白い閃光が周りに放たれた。予想以上の衝撃に、思わず真一は目をきつく閉じ尻餅をついた。

「こ、こんなことがあり得るのか……！　シンイチ……すごいぞ！　そんなヨウの叫び声が聞こえた。

瞼の向こうから閃光が治まったことがわかった。ゆっくりと目を開いて行く。先ほどとは違い、木の葉が風に揺れる音が聞こえた。

一体何が起こったのか。

ゆっくりと目を開き、飛び込んできたものは　。

【第六章 クフィロン山】最終進化

尻餅をついたまま、真一は動くことができなかった。ただただ、目の前に現れた大きな一角の竜を凝視している。

「……り、竜じゃねえか」

真一の身体の何倍もの大きさ。全身を黒い鱗で覆い尽くし、伸びる手足の爪は鋭く長い。森に伸びる木の間まで高さがあり、竜のおでこの辺りからは円柱の白い角が生えている。後ろには蝙蝠のような、黒い翼が折りたたまれている。

目が赤黒い、だが、そこに生気が宿っているようには見えなかった。

「これが……召喚の雛の……第三段階じゃよ」

「は？ 第三……え？ なんでだよ、俺はパイを召喚しようとしたんだぞ！」

「じゃから……これが……ひよこじゃ」

信じられない表情で見上げるヨウの横顔に、嘘は感じられなかった。真一ももう一度竜を見上げる。

竜は前を呆然と見ている。低い唸り声を上げるが、暴れる様子もない。

「う……嘘だろ。……な、なんでこんな姿になるんだよ！」

「わしも知りたい。じゃが、シンイチが召喚した以上、この雛は間違いないよこなんじゃよ」

そう言われても信じられない。真一は竜に少し警戒しながらも、ゆっくりと立ち上がる。ずっと顔を見上げたままだったが、やはり竜は暴れる様子もない。

「お前本当に……パイ、なのか？」

そう小声で真一が囁いた。すると、竜は遠くへ向けていた視線を突如動かし、真っ直ぐ真一を見下ろした。赤黒い眼差しが真一を捕らえる。が、そこに殺気立ったものを感じられなかった。

真一も、じつと見られることに一瞬ひるみそうになったが、何か違う。

姿かたちはまるで違う。パイと言われても信じがたい姿。だが、この眼差しに、どこか懐かしさを感じた。

「パイ……だよな。……そうだよな。俺はパイの姿を想像しながら召喚したんだ。……どんな姿だろうが、パイなんだよ」

そう言うと、真一はゆっくりと竜に近づいて行く。ヨウはその横でその様子を固唾を呑んで見守る。

「……おかえり、パイ」

そう言い、そつと黒く固い鱗で覆われた皮膚にそつと手を触れた。思った以上に冷たい。だが、真一は手を離さなかった。

竜　パイも触れられたことに暴れる様子もなく、低い唸り声を出し静かに目を閉じている。

「ひよこじゃ……間違いなく、あのひよこじゃ。ではなぜ、第三段階に進化したる！」

呆然とした表情だったがヨウだったが、そう叫ぶと一気にパイの顔元まで舞い上がった。

「おい、ひよこ！ お主、なぜ第三段階になって戻った？ わしの経験上このようなことはない！」

小さな指でパイを指差しつつ迫る。だが、パイはヨウの声に反応することもなく、目を閉じ低い唸り声を上げているだけだった。

「お、おのれ……やはりデアサモンで召喚したものに意識はないか。……シンイチ」

真一は手を離し、ヨウを見上げる。

すると、ヨウはそのまま降りてくると肩へとしがみ付いた。

「早く城へと行かねばならんぞ。デアサモンはそう長く」と、ヨウが言葉を続けようとした時だった。

「いたぞ！」

聞き慣れない突然の叫び声。

真一とヨウが同時に振り返ると、そこに水色のローブに目元を白

い仮面で覆った者　使者がいたのだ。その使者は後方向かって叫んでおり、いかにも複数人の使者がいることを伺わせた。

「いかん！　使者たちじゃ！　はよう逃げるんじゃ！」

「んなこと言われたってどうすりゃいいんだよ！　パイはどうするんだ！」

「じゃから、ひよこを使って移動するんじゃよ！」

そうこう言っている間に、後ろから複数人の足音が聞こえたかと思つと、またすぐに叫び声が聞こえた。

「待て！　ゆっくりとこちらに振り向け」

真一の身体中が一瞬にして冷たくなる。ごくりと唾を飲み込み、言われた通りゆっくりと振り返った。

そこには、同じ格好をした使者が五人ほど、手のひらを二人に向けてたまま立っている。

「黒いローブに……黒髪……間違いない！　貴様、ハギノシンイチだろう！　命により捕らえる！　無駄な抵抗はやめろ」

使者たちは一斉に手のひらを向けたまま、じりじりと真一に近づいてくる。真一は少し後ずさりをしようと試みるものの、身体が動かない。逃げたところで、移動魔術から逃れられないとわかっていった。ヨウも歯を食いしばりながら、必死に考えを巡らす。

そんな時だった。

突然、パイが耳を塞ぎなくなるような雄叫びをあげたのだ。言葉をしゃべっていた時のような、落ち着きのある声ではない。もはや、獣の叫びで静かな森を轟かす。

「な、なんだこいつは！　こんな情報などなかったぞ！」

「とにかく、縛り上げろ！」

使者たちはそう叫ぶと、真一に向けていた手のひらを一斉にパイへと向ける。

「やめろ！」

それを見るや否や、真一は叫びながら使者たちに向かって走って行く。だが、その時だった。

突如として、辺り一帯に黒い閃光が放たれた。思わず真一は足を止めた。

「……なんだこれ」

木漏れ日のように、黒い光が上から降り注いでいる。薄暗い森の中であつても、はつきりと見える黒い筋。真つ黒の光に、何かキラキラと光っているようにも見えた。

「これは……異空間じゃ！ シンイチ、あれを見る！」

そう叫んだヨウは、上空に向かって指を差していた。言われるがまま、その指差す方を見上げた。

パイの一角の角の先端に、黒い球が空中に浮かんでいる。真つ黒の球体でありながら、中はキラキラと星のように光っている。光はそこから伸びていた。

「なんだあれ……。異空間って何だよ」

「言つなれば、異なる空間」

「……そのままじゃねえか」

「じゃから、あの空間に入ってしまうと別の空間に飛ばされてしまふんじゃよ。わしが姫にチキュウへ飛ばされたようにの」

小さく、あつと呟き、再び真一は黒い球体を見上げた。

真つ暗でありながらどこか輝いている空間は、大きくなることもなくパイの角の先に浮いている。黒い閃光は伸び、それを迎れば使者たちが少しずつだが後ずさりをしていた。

「こ、これは……。もしや……。パラッグの雛の第三段階……。！」

「しかも……。滅多にいないという……。召喚の雛……。！」

使者たちも黒い球体に見入っていた。先ほどまで手のひらをパイに向けていたのに、震えを抑えるように握りこぶしを作っている。

「報告では第二段階……。しかも、死亡したはずだ……。！ どういうことだ……。！」

「だ、だが……。今は恐れている場合ではない。このまま見過ごしてしまえば……。俺たちの身も……。！」

その言葉に反応し、使者たちは互いの顔を見合わせ小さく頷いた。

それが何かの合図だったかのように、再び真一たちを見据えた。

「……国王命令は絶対だ。任務を果たすのが、我ら使者の役目。……だ、第三段階の雛など……恐れぬ！」

その言葉を号令に、使者たちが一斉に真一に向かって手のひらを向ける。

「やれ！」

号令と共に、使者たちの手のひらから、雷のような光線が向かってくる。一瞬のことで、真一は一步も動くことができなかつたが、その時だつた。

突如目の前に、黒い何かが現れた。向かっていた光線はそれに阻まれ、どうなつたのか全く見えない。ただ異様なほど静かになっている。

「……な、なんだ」

やつとのこととで声を出した真一に、ヨウがゆっくりと口を開いた。

「これは……異空間じゃよ。見てみい……」

そう言つてヨウは上を指差している。それに釣られ、真一は空を見上げた。

そこには低い唸り声を上げながら、鋭い牙を見せ明らかに殺意を見せているピイの姿だつた。角の先にあつたはずの黒い球体がない。「じゃ、じゃあれつて……ピイのあの黒い球かよ」

「そうじゃ。ひよこが異空間を盾として、シンイチの目の前に投げたんじゃろつ。……それより、早くひよこの背中に移動するんじゃ。今のうちにさつさとこの場から逃げるんじゃ！」

「あ、ああ……」

真一は、すぐにピイの後ろに回り込み背中に飛び移つた。ひんやりと冷たいピイの肌はごつごつとしている。真一が必死にピイの頭までよじ登り、下を見下ろしてみた。

見れば、使者たちは未だに黒い球体に向かって移動魔術をしていた。

「あいつら……俺がいねえつてこと気づいてねえんだな」

「おそらく、あの球が何か知らんのんじゃないやろ。じゃから移動魔術でどうにかしようとする。……まあ馬鹿な使者どもは放っておこう。それより、ひよこを使って一気にアラウ城へと行くんじゃない」
　　ピイは真一が頭の上にいるというのに、嫌がる素振りも見せなかった。むしろ、真一に触れられているせいか、ぐるぐるという気持ちよさそうな鳴き声さえ聞こえる。

「……どうやってだよ」

「シンイチが指示すれば、ひよこは必ず従う。デアサモンで召喚された者は絶対じゃ。……アラウ城は……あの雲の先じゃよ」

そう言つて、ヨウは遠くの雲を指差す。

木々がずっと続く森の向こう、雲がかかっている。そこからはまだまだ山が続いているようだった。

「……随分遠いな。ピイがいなかったら、俺遭難してるぞ」

「……本当じゃよ。ひとまず、急いだ方がええ。デアサモンで召喚された者の時間は長くはないんじゃない」

真一はそつとピイの肌を撫でた。

「じゃあ……ピイよろしくな」

すると、折りたたまれていた黒い翼を広げた。ゆっくりと大きく扇いでいく。

「アラウ城へ……頼んだぞ」

真一の声とともに、ピイは大きく雄叫びを上げると一気に空中に舞い上がった。そして、そのまま大きな翼を羽ばたかせながら一気に森の上空を飛んでいく。

その背中、真一とヨウは必死に背中にしがみ付き、まだ見えないうアラウ城を見据えていた。

【第六章 クフィロン山】最終進化（後書き）

更新が遅れてしまい、申し訳ございません。

おまけにまともな推敲もしておりません……誤字脱字がある可能性
があります……。

教えていただけますと非常に助かります。

二か月放置にしておく、確か、赤字が表示されてしまうので絶対に今日更新しようと思っておりました。

次話の更新予定は未定ですorz

ほんと、すいません……。

狭まる光

黒い雲が空全体を覆っている。夜の暗闇の中、空では時折稲光が走っている。ゴロゴロと音を響かせながら、雨は窓を激しく打ち付けていた。

「……せつかく目が治ったというのに、見える世界が暗くて残念ですか？」

ふつと鼻で笑いながら、男は静かに立ち上がった。

「きつと朝になれば雨も止むでしょう。……まあ確証はありませんが」

ゆっくりと近づいてくる男を、ライトは反射する窓越しから確認できていた。

だが逃げようにも、もう逃げられない。

気づかれない程度に、なんとか震えを抑えている。気を抜いてしまえば、今にも倒れそうなほどだった。

「何かおっしゃたらどうですか」

そう言って、男の手が肩に触れた。思わずびくつと身体を揺らす。……何もしませんよ。ライト様」

そう言って男　マスクは、唇の端をにやりと持ち上げ笑った。

一方で、ライトは顔を俯かせたまま動こうとしない。だが、肩が小さく震えていた。

「何を言っても信じていただけじゃないですね。……とりあえず、こちらに座ってください。立ったままでは疲れますよ」

そう言うとマスクはライトの腕を掴み、そのまま椅子まで連れて行き座らせた。そして、自分も真正面の椅子に腰かけじつとライトを見つめる。

だが、ライトはマスクを見ようとしめない。視線を落したまま、暗い表情のままだった。

「……二人が心配ですか」

思わずライトは眉をひそめた。そして、ゆっくりと視線をマスクへと向ける。

目を潤ませ、何かに怯えるような眼差しだった。

「ほ、本当に……二人は無事なんですか」

マスクはふつと鼻で笑って見せた。

「……ライト様は私を信用する気はないようですね」

「……」

「ハギノは道を塞いだ以降、私が直接手を下したことはありません。エルモ人に関しては、ライト様が口出しすべきことではないでしょう」

「……で、では……ヨウさん……ヨウさんをどこへ連れて行ったのですか」

潤んだ目でじつとマスクを見据えた。片目の冷たい視線に射抜かれそうになるも、ライトは決して目を逸らさなかった。

マスクに目を治療される前、近くにヨウの存在を感じていた。だが、目を開けてみるとそこにヨウの姿はなかった。視力が戻ってから、ずっとこの部屋にいる。ヨウのことを確かめようにも、マスクの監視のため動くことさえもできない。

「ライト様には関係のないことだ」

だが、マスクは冷たく言い放つ。

「貴方は、目の治療と引き換えにあれを私に渡したのです。それから私がどう扱うか　そんなこと、貴方には関係のないことだ。交換条件は成立している、そうでしょうか？」

「そ、それは……」

ふつとマスクが鼻で笑って見せる。

「……貴方の目は治った。それとも、また再び闇の世界へと戻りたい、とでも？」

ライトは思わず眉をひそめ、視線を落とした。その様子に満足でもしたのか、にやりとマスクは笑って見せた。

「ふふ、正直な方だ。……心配されなくとも、私はそのようなこと

はいたしません。ただ、ライト様にはしばらくこの部屋の中においてもらわなくてはならないのです」

そう言うと、マスクは立ち上がり部屋のドアの方へと進んでいく。「ど、どうして?」

「色々と事情があるのです。それに……」

ドアに手をかける。と同時に、白い仮面をライトへと向けた。

「いえ、何でもありません。……ライト様、少しの間ここで待っていてください。また参ります」

微かに口の端を持ち上げにやりと笑って見せた後、マスクはそのまま部屋の外へと出て行った。ドアが閉まると同時に、鍵がかかる音がした。

それを耳で確かめた瞬間、がっくりとライトは机の上にひれ伏した。どつと疲れが身体に重くのしかかる。

「……皆さん……ごめんなさい、ごめんなさい……」

虫の鳴くような声は、窓を叩く雨音にかき消された。瞑る目からは自然と涙が溢れ出ていた。

目を閉じると暗い世界が広がる。誰もいない、何も無い真っ暗闇の世界。

耐えきれず目を開けた。だが、目を開けたところで誰もいない。ただ、打ちつける雨が一定のリズムで窓を揺らしていた。

「……シンイチさんに会いたい」

何も見えない窓の暗闇に、ぼつりと言葉を漏らした。そして再び目を閉じ涙を静かに流した。

マスクは迷っていた。

自分でもどうしてこんな行動をとったのか、整理できないでいた。主への部屋に続く廊下を歩きながら、必死に考えを巡らせていた。

「面倒なことになった」

足元を見ながら歩いていたが、聞き慣れた声に顔を上げた。

「……………どうした」

見れば小さく舌打ちをし、半ば睨みつけているトグがいた。

「ヨウがいない。縄も牢屋もぶち壊されている。他に捕まっている使魔どもに話を聞こうにも、皆意識を失ってしまっている。……………どうする？」

「どうするも何も探すしかないだろう。……………ダック様に報告するか」

「怒り心頭のダックの姿が目に見えかぶ」

ふつと鼻で笑うトグをよそに、マスクは白い仮面を取った。すると黒い穴の中に、トグは入っていった。

「……………だが、トグ。一つこれだけは報告するな」

呆然と床に視線を落としつつ、マスクが言葉を漏らした。

「ライト様がこの城にいる、ということ。これだけはダック様には言っな。いいな？」

「……………えらく気に入っているようだな。まあ別にいい。俺には関係ない」

トグのその言葉を聞き入りながら、ゆっくりと一步を踏み出した。マスク自身、どうしてライトの治療をしたのかわからないでいた。禁術をすればダックの怒りを買ったこともわかっていた。それでも治療をしたのだ。

「気に入っている……………？」

見開いたライトの目。だが、それはマスクの予想とは違うものだった。

「あの方は、俺とは違う。だから俺は知りたいのだ」

「……………意味がわからない。勝手にしろ」

それ以上マスクは口を開くことなく、黙々と主の部屋へと足を進めた。

いつの間にか意識を失っていた。薄らと目を開け、おぼろげに見える風景をぼうつと眺める。

見覚えのない部屋。ずらりと並ぶ書籍。その前にあるのは大きな机と椅子。

目をこすろうと手を動かそうとする　　が、動かない。

見ると、座る椅子に手を縛られていた。ぐっと力を入れようにも、なかなか力が入らず縄が身体に食い込むばかりだった。足も椅子に縛られているようで、身動きがとれない。

「お目覚めですね、イツチ姫」

嫌な声。思わず足掻くのをやめた。声の主など容易に想像できた。

「一体……一体何の真似ですか！ 離しなさい、ダック公爵！」

「そんなに暴れても意味のないことですよ」

嘲笑うかのように、ゆっくりとした足音が聞こえる。イツチ姫は顔を向けようとするものの、なかなか振りむけない。なんとか縄をほどこうと必死に抵抗をする姫に、ダック公爵は続けて言葉を放った。

「無駄なことはおやめなさい」

ダック公爵はイツチ姫の横を通り過ぎ、そのまま机の椅子に腰かけた。

白髪の窪んだ眼。傍らに先端に赤い宝石のついた杖を立て掛けた。真っ黒のローブと薄暗い部屋が一体化しているようにも見えた。

公爵はイツチ姫をじつと見つめる。にやりと口の端を持ち上げる顔に、姫は思わず目を背けた。

「国王は体調を崩され、今やこの国はどうなるかわからない状況だ。導くはずのお方がいなくなれば、まとまるものもまとまらなくなるかもしれません」

「……父上は健在です」

「今、この国が求めているものは新しい指導者ですよ。そこで貴方だ。娘である、イツチ姫。貴方がこの先、この国を導いて行くお人なのですよ」

キツとアラウ国王を睨みつける。

「貴方は何を企んでいるのですか！」

「私が貴方の意思と身体を乗っ取り、この国を手中に収めたいのです」

その言葉に一気に姫の表情が曇る。意味がわからず姫は視線を逸らし、目を泳がせる。

だが、ある考えが頭をよぎり視線が止まった。

「……ま、まさか」

自然と声が震える。これまでの身体の変調と公爵が放った言葉が、否応なく結びついた。

「急に意識が飛んでしまったり……身に覚えのない場所で目覚めていたのは……」

「やっとお気づきになられましたか？ 案外にぶい方なのですねえ」
にやりと公爵は口元を歪める。

「すでに、貴方の身体と意思は私のものになっていくのですよ」
その言葉と同時に、再び姫の意識が遠のいて行った。

狭まる光 (後書き)

おまたせしてしまい、申し訳ございません。

もう読者の方は去ってしまったかもしれませんが、マイペースで更新していきたいと思えます。

というか、話がずれてしまうのではないかと若干心配気味。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9438e/>

サモチェリ

2011年4月30日15時40分発行